

なものだ。姿も誠によい。澤瀉も（高慢な人のやうで）名がおもしろい。みくり。ひるむしろ。苔。こだに。雪間の青草。かたほみ（これは）綾のもやうにしても、外の物より結構だ。あやふ草は、（あぶなつかしい）岸の額に生へたのだが、全く頼りなさうで、あはれだ。いつまで草は、生へる場所が、誠にはかなくあはれだ。これは、岸の額より、頼れ易さうだ。ほんとうの石灰などには、生へないものかしらんと、餘計な心配をする。ことなし草は、思ふ事がないのかと、思はれるのもおもしろい。又わるい事がなくなるのかと、どつちにしても、おもしろい。葱草は、まことに可憐だ、屋根の端だの、さし出た物のはしなどに、無理に生へ

心しけんと思に。三稜草。蛇床子。苔。苦丹。雪間の青草。酸漿、綾の紋にても、他物よりは興し。あやふ草は岸の額に生らんも實に頼し氣なく哀なり。いつまで草は生る處甚儂く哀なり。岸の額よりも是は崩れ易げなり。實の石灰などには得生すやあらんと思ぞ悪き。ことなし草は思ふ事なきにやあらんとおも興し。又悪き事を失ふにやと孰も興し。葱草、甚可憐なり。屋の端、差し出たる物の端などに、強ちに生ひ出たるさま、甚興し。蓬、甚興し。茅花甚興し。濱茅の葉は況て興し。荆三稜。萍。淺茅。青鞭草。木賊といふ物は、風に吹れたらん音こそ、如何ならんと想像れて、興しけれ。薺、ならしは、甚興し。蓮の浮葉の可愛氣に歩く、甚興し。取り上げて、物押し付などして見るも、世に甚う興し。八重葎。麥門冬。山蘭。女羅。濱木綿。葦。葛の風に吹き返されて、裏の甚白く見る興し。

さうが 五月の節句に用うるもの、「あやめ草」。水澤に生す〇こも 「ま」の發語を

た様子が實におもしろい。艾アヰは、アヰにアヰもアヰしろい。茅花もおもしろい。はまぢの葉は、又、一層おもしろい。まろこすげ。うきぐさ。あさぢ。青つぐら。（もおもしろい）。木賊といふものは、風に吹かれた音は、どんなだらうと思ひやられて、おもしろい。薺。ならしはまことにおもしろい。蓮の浮葉が可愛らしげで、ゆつたりと澄んで居る池の面に、大きいのと小さいのが、廣がつて、たゞよい歩くのが、誠におもしろい。取り上げて何か押しつけて見たりするのも、實におもしろい。八重むぐら。山菅。やまゐ。ひかけ。濱ゆふ。葦（もおもしろい）。又葛が風に吹き返されて、裏が眞白く見えるのも、おもしろい。

添へて「まこも」ともいふ、古名「かつみ」、「はながつみ」、水草の名。池澤に多し。春舊根より生じ莖の高さ三四尺、葉は互生して二三尺、菖蒲に似て薄く、邊に双あり、秋、莖の上に二尺ばかりの穂を生じ小花多く綴る、實を結ばず、葉にて席を編む、「こもむしろ」といふ〇神代より 加茂別 雷ワライカクツチの神、昇天の後、託宣ありしによりて、その祭に葵を用うといへり〇おもたか 面高の義、葉の面隆起したり、池澤に生ずる草、葉の形くわゐに同じく瘦せて小さし、夏、莖を出し二三枝を分ちて三瓣の花を開く、一名花ぐわゐ、（花のみを賞し。食ふに堪へればいふ）面高を人の慢じたるにとりて、おもしろしといふなり〇みくり 水澤の地に多し莖、葉、花とも三稜あり、莖は光滑にして三稜なる事、しゆるの葉莖の如し〇ひるむしろ 經蓆の義か、「はま人参」ともいふ 田芹に似て香あり、秋、莖の先に細白の花ひらき實は赤く黄ばみて小さし〇苔 木毛の義かといふ、古き樹幹、陰地のおもて、石上などに生す〇こだに 蒿の類。「いと氣色ある深山木に宿りたる蒿の色ぞ、まだ残りたるこだになど」などあり〇雪間の青草 これは何にても雪の間にもえ出でたる青草なり普通名詞〇かたほみ 地に延び生ずる小草、葉は互生して大き三五分、三瓣にして瓣ごとに一欠ありこの形を紋所とす、春五瓣の黄花を開く大き三分ばかり、「すぐさ」といふ〇あやふ草 崖のやうなる處に生ずる草をすべといひしにもあらんかこの名の草はなし〇いつまで草 壁などを頼みて生ふる故、いつまであらんか意の名〇しのぶ草 土を離れても久しきに堪へ枯れぬ意ともいふ、山谷の土石上に生じ蔓延せるを蔓を採り葉を連ねて人家の簾などにかけ緑葉を賞す、こまに言へるは簾しのぶなるべし、簾又は舊き樹の皮又は枝の間に生じて垂る、葉の巾二三分長さ三五寸、甚だ厚く深綠色なり背に金星あり、兩對して大き一分ばかり、冬を歴て枯れす〇ちばな 茅の花、千の義にて叢生するよりいふかといふ、葉は稻に似て薄く、

高さ三四尺、叢生す、春新芽を出す時、葉の中に花を包む事、細き筒の如し、これを芽花といふ、夏、穂を出して長く白き絮あり火口(燧)に付けて火を出す。又、莖葉にて屋を葺く一名「ちがや」○はまぢ 濱菅なるべし海邊に多し、葉は菅に似て小さく巾一分ばかり長さ六七寸、深緑色にして一根に叢生す、夏一尺ばかりの莖を出し頂に紫黄の碎花簇り生ず○まろこすげ いかなる草か不明、歌には「打ちそばみ君ひとり見よ、まろ小菅、まろは一すげなしといふなり」又「夏草の茂みに生ふるまろ小菅、まろがまろ寝よ幾夜経ぬらん」等あり、菅の一種なるべし○うきぐさ 溜水に生ず、葉の大きき二三分、圓くして光る、面は緑にして裏は紫、三葉の下に多くの鬚根ありて水の上に漂ふ、一名「かつみ」○淺茅 茅の疎らに生ひたるもの○あをつら 「あなかつら」又「つゞら藤」の事なるべし山野に多き草、つる極めて長く延ぶ春夏の交、新葉の間に小花を開く、實圓く大き三分ばかり黒青くして粉を帯ぶ、蔓にて籠を造る○とくさ 砥草の義、山谷水邊に生じ、冬凋ます葉なくして莖のみ一根より叢生す、莖の中空くして徑二分余、直立二三尺、寸余毎に節あり、深緑にしてのぎすち高くさらくなれば、木骨をすりて砥の用をなさしむ、夏莖の梢に花を生ず、土筆の花に同じ○なづな 葉は、たんぼに似て岐あり、春の初め莖を出し四瓣の小白花を開く、穂長し、後に細小なる莖を結ぶ、形、三味線の撥に似たれば「さみせん草、」又「べん／＼草」の名もあり○やへむぐら 薺の繁りたるをいへれど又荒野及び人家にも生ずる草にこの名あるもあり、莖細く長く延び、葉と共に毛あり、葉は「あかれ」に似て小さく七八葉車輪の如く一處につきて八九層をなし、莖もあかれと同じきもの○やますげ 俗に「りうのひげ」葉細く長さ一尺余、一根に叢生して冬枯れず夏、莖を出す事四五寸、細小の花をつく、淡紫色の穂をなす實は南天の如く熟すれば碧にして春に至りてなほあり○やまゐ 山中に自生する一種の藍、葉に皺あり、採りて衣を染む、「やまゐる」なり大嘗會、新嘗會の衣をこれにて染むる慣例あり○ひかけ 「さるをがせ」に同じ、新嘗、大嘗等の神事に冠の笄の左右にかくるもの、もとはこの草を用ゐたり、(後には白青の絹糸にて作り數條に垂れし故、ひかけの組、ひかけの糸ともいふ)○はまゆふ 紀州、勢州の海濱に多き草、莖は芭蕉の如く、皮は幾重にも重なる、葉はおもとに似て長く、花は幣に木綿四手をかけたが如し○あし 水邊に多き草の名、春舊根より生じ、苗の高さ丈余に至る、枝なくして莖の中心空し、葉は竹に似て互生す、秋に至り莖の梢に白穂を成して花を生ず、穂に枝多し一名「よし」○くす 「くすかつら」宿根の蔓草、山野に多し、豆の類なり、葉は藤豆又小豆の葉に似、蔓と共に褐色の毛多し、秋の初め梢の葉の間に花穂を出す、三五寸にして垂れ、豆の花に似て紫赤なり、後に莢を結ぶ、實食ふべからず、蔓甚だ強くふぢ行李又は葛布を製す、又根にて葛粉を製す葉大きにして風をうけて翻り易く裏の白きが見ゆるによりて歌に「秋風の吹きうら返す葛の葉の、うらみてもなほ恨めしき哉」又「葛の葉のうらめ

「うらしく」「うら淋しげに」など、常に「うら」といふ詞にかけて用ゐたり。

(歌)集(でおもしろ)の(は)、

古萬葉集。古今。後撰。

集は、

古萬葉集。古今。後撰。

集」といひし爲、かくいへるなるべし。開卷雄略天皇のは、たゞ御一首なれば別とし、舒明天皇より淳仁天皇の御宇まで百三十余年間の歌集にして、上は天皇公卿より下は樵夫海人に至るまでを網羅し、いはゆる歌の規則に拘束されぬ雄渾なる作品多く尤も貴重すべきものなり。卷數二十、歌數四千四百九十六首、撰者不詳○古今集 醍醐天皇の延喜五年、敕を奉じて、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑四人の撰集せる歌集にて、萬葉集撰定以後百五十年間の歌を撰みのせたるもの、二十卷、千百十一首○後撰 古今、拾遺の兩集とも三集といふ。村上天皇の天曆五年、敕によりて、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等の撰みしもの、二十卷、一千四百二十六首。古今集に漏れたる歌及びその後五十年間の歌を撰み載せたり。

歌の題(でおもしろ)の(は)、

都。葛。三稜草。駒。靱。笹。壺莖。
女羅。菰。たかせ。鴛鴦。淺茅。芝。
青鞭草。梨。棗。朝顔。

歌の題は、

都。葛。三稜草。駒。靱。壺莖。女羅。菰。高瀬。鴛鴦。
淺茅。芝。青葛。梨。棗。朝顔。

集は 歌の題は

つぼすみれ 莖といふに同じ、花、つぼめる如く見ゆる故いふか○たかせ 高瀬を上下する舟、小舟にて縁の深きもの○しは 繁草の義か。藜、莠の類の

雑草の稱なりといふ、「道のしは草踏みわけて」朝顔、この頃は木樨なりともいへれど、源氏物語などには「朝顔の姫君(齋院)」折らで過ぎき今朝の朝顔」など今少し美きもの、やうに書きあり、判じ難し。

草の花(でおもしろいのは、

瞿麥。唐のは勿論、日本のもまことによい。女郎花。桔梗。菊の花のところどころ色がさめたの。刈萱(もおもしろい)。龍どろは、枝ぶりなどが、いやだけれども、外の花が、皆な霜枯れてしまつたのに、大さう花やかな色合で、咲いて居るのが、まことにおもしろい。特別言ひ立て、草の仲間に入るやうなものでもないが、かまつかの花が可愛らしい。名がいやだ。雁の来る花と文字では書いてある。雁緋の花(は)、色は薄いけれども藤の花によく似て、

草の花は、

瞿麥。唐のは勿論なり、倭のも甚愛たし。女郎花。桔梗。菊の處處褪たる。刈萱。龍膽は枝容なども煩し氣なれど、他花皆霜枯れ果たるに、甚華美なる色合にて差し出たる、甚興し。特と取立て人向すべきにもあらぬ容なれど、雁來草の花可愛氣なり。名ぞ憂て氣なる。雁の来る花と文字には書たる。雁皮の花。色は濃からねど藤の花に甚多く似て、春と秋と咲く、愛し氣なり。壺莖。同じやうの物ぞかし。老て往ば同じなど憂し。繡線菊の花。夕顔は朝顔に似て、言ひ續たるも興しかりぬべき花の姿にて、憎き實の形状こそ甚口惜けれ。何て然將た生ひ出けん。額突などいふもの、如にだにあれかし。然ど仍夕顔といふ名ばか

春と秋と咲くのが、おもしろい。壺莖(も)莖(も)同じやうな物だ。花がすぐれると、同じになるのは、情ない。しもつけの花(もよい)。夕顔は、朝顔に似て、並べて言ふと、(名もおもしろく)花の姿もよいが、憎らしい格好の實がなるのが、残念だ。何だつてあんな實なのだらう。せめて、ぬかづき位だと、よいのに。けれど、やつぱり、夕顔といふ名だけは、おもしろい。葦の花は、一向見だてはないけれど、御幣などいはれるだけの、わけがあるのだらうと思ふと、一寸おもしろい。穂の出かゝりも、薄にはかなふまいが、水邊にはおもしろからう。此の中に薄を入れるのは、變だと人が言はう。ほんに秋の野を引くるめた風情は、薄なの

りは興し。葦の花更に見處なけれど、御幣など言れたる、意味あらんと思に虚心ならず。萌しも薄には劣めど、水の面にて興しうこそあらめと覺ゆ。是に薄を入ぬ、甚奇しと人言めり。秋の野の普遍たる興しきは薄にこそあれ。穂先の蘇枋に甚濃きが朝露に濡て打ち靡たるは、然許の物やはある。秋の果ぞ見所なき。色々に亂れ咲たりし花の、形も無く散たる後、冬の末まで頭甚白く散亂たるをも知で、昔思ひ出顔に靡て、か廣き立る人にこそ甚う似たるめれ。擬る事ありて、其をしもこそ憐とも思べけれ。萩は甚色深く枝婀娜に咲たるが、朝露に濡て弱々と廣り臥たる、牡鹿の分て立ち馴すらんも詩趣殊なり。唐葵は取り分て見ねど、日の影に隨て傾くらんぞ、凡の草木の趣とも覺で興しき。花の色は濃からねど、咲く山吹には、岩躑躅も格別なる事なけれど、折り持てぞ見ると詠れたる、有紫に興し。薔薇は近くて枝の體などは煩しけれど興し。雨など晴れ行たる水の面、黒木の階などの傍に亂れ

だ。濃い蘇芳色の穂先が、朝露に濡れて、風に靡いて居るのは、及ぶものがない。處が秋の末になると、ひどく見ともなくなる。色々の色で、澤山咲いて居た花が、すっかり散つたあとで、眞白な頭になつて、ぼやけてしまつたものしらずに、昔を思ひ出し顔に、冬の末までのさばつてゐるのは、人間によく似て居る。その似た處でも、おもしろいと言へば、言はれない事もない。萩は、赤紫の濃い花が、枝もしなふほど咲いたのが、朝露に濡れて、なよ／＼とひろがり臥して居るのに、さをしかが、格別、この花の根元を立ちならすのも、風情がある。唐葵は、(花の形も色合も)別段よいものとも見られないが、日のあたる方へ向いてゆく

のが、外の草木にはない事で、おもしろい。花の色は濃くても、山吹にはかなはない。いはつゝじも大したものではないが、「折りもてぞ見る」と詠まれてゐるのは、さすがにおもしろい。さうびは、傍で見ると、枝の様子などは、氣味がわるいけれども、よい。雨上りの水邊や、黒木の階のわきに、咲き亂れて居るのに、夕日のあつたのがよ

不安心なもの(は)、
十二年の山籠りの法師の女親。知らな
おぼつかなきもの

咲たる夕映。

なてしこ。又常夏といふ。山野に多き草、高さ尺余、莖に節あり、葉は竹の葉に似て小さく深緑にして對生す、夏秋の交に花を開く、瓣の端、細かに分れて糸の如し、淡紅色なり、家に植ゑて花を賞するものは花大きくして一重八重、形も色も種種にして甚だ美なり「韓羅麥」(石竹)に對して「和羅麥」ともいふ○きちかう「桔梗」といふ古くは、これをも朝顔といひしよし、葉深緑にして花は濃紫、ふくよかなる蒼のさま可憐なり「きちかうの花、咲く時ほんといひさうな」の句は、そのありさまをよく盡したり○うつろひ 白き花など霜にあひて、薄紫に處々色づくなどを、この頃は賞美したるらし○刈かや 薄に似て山野に自生するもの、莖細く葉長く、その先尖りて縁に刺あり、糖塗(さらく)なり、花小さくして穂の状をなす○りんどう 龍膽の唐音の訛りなり、莖二三尺、葉は竹の如くにして、短く圓く對生す、故に「笹りんどう」といふ、秋の半に三五花を開く、筒瓣にして末五つに分る、青碧色にして斑點あり、又白花もあり○むつかしげ 氣味わるしとなり○入めかす「草めかす」の意○かまつか 山野に自生する落葉樹にして、高さ三丈に至るものあり、庭樹としても玩賞す、五月頃花開く、小形白色にして簇り咲く、材は鎌の柄とするにき故の名なり、又樹皮をためて牛の鼻木となすを以て「牛殺し」ともいふ○かにひ 「雁皮」なり落葉の灌木、高さ三四尺より丈余に至る、枝の端と南天に似たる葉との間に花を出す、淡黄白の花にして丁子に似たり、瑞香樹の屬なり○つぼすみれ 一本この下にすぐ「かるかや、りんどう」など續きて、「すみれ同じ物なれど」などなし、つぼすみれと董は同じものなれば、なき方よろし、いづれが清少の書きしま、なるかは不明なれども。(はしがき參照)つぼすみれは花

のつぼめる知ればいふか、「山吹の咲きたる野邊のつぼすみれ、この春の雨に盛りなりけり」○しもつけの花「しもつけ草」といふ、高さ一二尺、葉は楕圓にて、花は紅紫なるが簇り咲く、庭園に植ゑて賞す○ぬかづき 酸漿の古名。實の垂れたるさま、額着くやうなればか○みてぐらなど 信濃上諏訪なる御射山神社の祭に、長官五領家等の假屋に薄をもて葺くを、穗屋の神事といふ、これを聞き誤りしか○おとらめど「おとられど」ならでは、次の語勢にかなはず、誤寫なるべし○さぞ鹿「さ」は發語、「牡鹿」なり○から葵 花葵ともいひ、葉は葵より大きく莖の高さ七八尺に至り梅雨前、葉の間毎に、むくげの如き花を生じ、白紅紫等種々に一重と八重あり、幹の下邊より開き梢に至りて終る、されども下文に、日の影にしたがひて傾くとあるによれば日まはり誤りいへるか、日まはりならば菊の屬にて葉は圓く尖りて鋸齒あり、梢に大きき六七寸の菊花に似たる花をひらく、花常に點頭して日脚の移る方に向ふ、別名「ひぐるま」向日葵の字をあて、「ひまはり」といふ、こゝも一本にはなし○岩つゝじ つゝじの一種、花の色赤くしてきりしまつゝじの如きもの○折りもてぞ見る 後拾遺集に和泉式部「岩つゝじ折りもてぞ見る、せこが着し紅染めの色に似たれば」○さうび 薔薇の字音を柔けていふ、この頃すでに、もてはやせりと見え、源氏物語に「階のものとさうび」などあり、裏の色にも表紅、裏紫なるを「しやうび」といへり○黒木 皮をとり去らぬ丸木をいふ。

不安きもの、
十二年の山籠りの法師の女親。知ぬ所に闇なるに行き會たるに、顯

い處に、闇の晩に往つた處が、見える
といけないと、火も灯さないで、誰だ
か分らない人と、ちつと並んで坐つて
居るの。來たての召使で、まだ氣心も
分らないのに、大事なものを持たせ
て、人の處にやつて、いつまでも歸ら
ないの。まだ物の言へない兒が、ひつ
くり返つて、人に抱かれやうともしず
に、ひたなきに泣くの。暗い處でいち
ごをたべたの。誰がするのだか分らず
に、儀式の行列を見るの。

比べやうもないもの(は)、

夏と冬と。夜と晝と。雨ふりと晴れと。
若い者と年よりと。人が笑ふのと怒る
のと。黒いと白いと。思ふのと憎むの
と。藍ときはだと。雨と霧と。同じ人
でも、志がなくなつたのは、ほんとう

露にもぞあるとて火も灯さで、有紫に並み居たる。今參で來る者
の情も知ぬに、貴重物持せて人の許遣たるに遅く歸る。物言
ぬ兒の反り覆りて、人にも抱れず泣たる。暗きに覆孟子食たる。
人の顔見知ぬ物見。

十二年のやまごもり 山とたゞあるは、この頃は皆比叡山なり、同山の延暦寺
にて出家受戒する者、十二年間山を出づるを許されざるなり○知らぬ所に 馴染な
き所にてはいよ／＼顔を見らるゝをいとひて、火をともしりし習慣なり○物見
行列の役人を、誰とも知らず見るは、興なく覺束なきなり。

比較なき物、

夏と冬と。夜と晝と。雨降ると日照ると。若きと老たると。人の
笑ふと腹立つと。黒きと白きと。懐ふと憎むと。藍と黄葉と。雨
と霧と。同じ人ながらも 志 亡ぬるは、實に否ぬ人とぞ覺るか
し。常磐木多る處に、鳥の宿て、夜半ばかりに寢 騒く怖ち迷ひ、

木傳て寢惚れたる聲に鳴たるこそ、晝の見目には遠て興しけれ。

藍 草の名、葉は藍に似て大きく深緑なり、それを刈り乾して黒くなれるに水を
注ぎて、布帛を染む。青の甚だ濃き色○きはだ「黄肌」の義。寒國の深山に生ずる
樹の名、高さ數丈、葉は漆に似て断れば臭氣あり、夏、枝の上に細黄葉を開く、雌樹
にのみ實あり、五味子の如くにして縦に五稜あり、熟すれば色黒く味苦し、薬用と
す。樹の皮、黄なり、薬用、染料とす。黄葉といふ。黄の濃き色に染まれば、藍とは
極端に違へるなり○おちまどひ 他本「おちまろび」とあるは、とらず、何かに驚
くさまなり○晝のみめ 「はし、さうたる晝の様子とはちがひて」なり、「常磐木」
以下一本になし。

忍んで通ふ處は、夏がよい。短夜がち
きに明けて、ちつとも寝ないでしまふ。
何處もかも明け放しなので、涼しく見
渡される。まだ咄し残りがあるので、
何か彼にか言つて居る中に、すぐ前か
ら、鳥が高聲で鳴いてゆくのが、餘り
端近だつたのも、おもしろい。(又)冬
の堪らなく寒い晩に、思ふ人と、夜着

忍びたる處にては、夏こそ興しけれ。甚う短き夜の甚儂く明ぬる
に、露寝す成ぬ。即て、萬の所明ならなれば、涼う見渡された
り。仍今少し言べき事のあれば、互に答どもする程に、唯居たる
前より、鳥の高く鳴て行こそ、甚顯證なる心地して、興しけれ。
冬の甚く寒きに、思ふ人と埋れ臥て聞に、鐘の音の唯、物の底な
るやうに聞るも興し。鳥の聲も初は羽の中に口を籠ながら鳴ば、
甚う物深く遠きが、次々になる隨に、近く聞るも興し。

の中にもぐり込んで居ると、鐘の音

が、まるで何かの底で鳴るやうに聞えるのも、よい。鳥の聲も、初めは、羽の中へ喉を入れたまんま啼くから、ひどく物深く遠くに聞えるのが、二番鶏、三番鶏と、あとから啼くほど近く聞えるのも、おもしろい。

けさう あらばなる事。

懸想人で来るのは、勿論、たゞ用談に來たり、又さほどでなくとも、一寸來た人などが、簾の中で多勢人が居て、咄などする所へ入つて、ゆつくり咄し込んで居ると、供の男や、童などが、これは長くなりさうだと、待遠しさの不平から、「あーあ」など、ため息をするのが、ないしよのつもりだらうけれども、(聞える。そして)「あゝ情ない、煩惱苦惱な事だ。もう夜半だらう」など、言つて居るのは、堪らなく癪に障る。言ふ者の方は、(言つてしまつたあととは)平氣だらうけれども、中に居る

懸想人にて来るは言べきにもあらず、唯打ち談ひ、又然もあらねど自然來などする人の、簾の中にて、數多人々居て、物など言に、入て、疾に歸り氣もなきを、供なる男、童など、斧の柄も朽ぬべきなんめりと、煩しければ長やかに打ち永嘆て、密にと思て言らめども、供、噫困惑し、煩惱苦惱かな。今は夜半には成ぬらん」など言たる、甚う厭悪し。彼の言ふ者は兎角も覺す、此の居たる人こそ、興しう見聞つる事も、忘失る如に覺れ。又、然は色に出ては得言す、「あゝ」と、高やかに打ち言ひ呻吟たるも、「下行く水の」と甚可笑し。立節、透垣の許にて、供「雨降ぬべし」など聞たるも、甚憎し。貴き人、君達などの供なるこそ、然様にはあら

主人の身になると、今まで、おもしろく見たり聞いたりした事も、すつかり消えてしまふ。又これほど露骨ではない、

「あーあ」と高聲で、溜息をするのも、「下ゆく水の」だらうとをかしい。立節や透垣のあたりで、「雨が降り出しさうだ」など、言ふのも、(歸りの催促らしくて)誠に憎らしい。高位の人や、君だちの供などには、そんな不心得の者はない。以下の人に、そんなのがある。多勢居る中で、性質をよく見て、つれてあるべきだ。

滅多とないもの(は)、

男に譽められる聲。又姑に思はれる嫁さん。よくぬける銀の毛抜。主人の惡口を言はない供。一寸の癖も、かたよつた處もなくて、容貌も、性しつもすぐ

有がたきもの

ね。平人など然ぞある。數多あらん中にも、氣質見てぞ率て歩べき。

ながめ 嘆息なり○下ゆく水の 古今集「山高み下ゆく水の下にのみ、流れて戀ひむ戀ひは死ぬとも」下にのみ流るゝの意をとりていへるなり○すいがい「透垣」の音便、竹を並べて結べる籬○蒼蓮 諸王、又は攝家、清華の子息をいふ○たどうと常人、平人、臣下など、處によりて、さまざまの意にいふ、こゝは余り高位の殿上人にはあらぬほどの意なるべし。

有り難きもの、

男に譽らるゝ聲。又姑に思はるゝ婦の君。物能く抜る白銀の毛抜。主誘ぬ人の従者。露の癖偏なくて、容貌性質も勝れて、世に在る間、聊の瓊瑾なき人。同じ處に住む人の、互に羞ぢ交し、

れて、一生の間、少しも言はれる處のない人。始終一緒に住む人が、互ひに遠慮して、少しの油断なく用心をして、しまひまで、生れつきの缺點を隠し了せる事は難かしい。物語や、集など、書き寫すのに、その本に、墨をつけない事(も六かしい)。よい草紙などは、一生懸命氣をつけて書くけれども(それでも)きつとよこす。男でも、女でも、法師でも、仲よくした人と、未まで送けるのは、六かしい。つかひよい召使(といふものも)、搔練を打たせるのに、あゝよく出来たと思はれるやうに、してよこす事(も、滅多とない)。禁中のへやは、細殿が一番よい。上の小部を上げておくと、風がどん／＼吹き込んで、夏も實に涼い。冬は、雪、霰

些の隙なく用意したりと思が、遂に見ぬこそ難けれ。物語、集など書き寫す本に、墨點ぬ事。好き草紙などは、甚く注意して書ども、必こそ汚げになるめれ。男も、女も、法師も、契深く契語ふ人の、未まで交情好き事難し。使ひ好き従者。搔練打せたるに、噫愛たと見て越す。

しろがねの 質、柔かければ鐵には如かざるべし○かいねり打たせ「搔練」の音便、練りたる絹をいふ、生絹に對しての稱。打たせば絹にて打ちて艶を出さするなり。

内裏の局は、廊甚う興し。上の小部上たれば、風甚う吹き入て、夏も甚涼し。冬は雪霰などの風に伴て入たるも、甚興し。狭くて童などの上り居たるも悪ければ、屏風の後などに隠し居たれ

などが、風と一しよに入るのも誠におもしろい。狭くて、童などが傍に居るのも、工合がわるいから、屏風の後に隠して坐らせておくと、外に居る時のやうに、大聲で笑つたりもしないで、誠によい。晝でも、いつ人が来るかと用心するし、夜は又、余計に、些とも油断の出来ないのが誠におもしろい。杵の音が、夜つびて聞えたのが、とまつて(しんとなつてから)指一つで、こつ／＼と叩くのを、あの人だと、すぐ分るのも、おもしろい。いつまで、たいたいても、音もしないで居ると、寢て居るんだらうと、くやしがつて、此方で、ちよいと動いたり、衣すれの音でもすると、あゝ起きて居るのだなと思ふらしく、(外で)扇などつかふ様子

ば、他所の如に聲高く笑ひなどもせで、甚好し。晝なども撓す用意せらる。夜將た況て聊打ち解べくもなきが、甚興しきなり。杵の音の、夜一夜聞るが止りて、唯小指一つして叩くが、其の人なんなりと、直と知こそ興しけれ。甚久く叩くに、音も爲ねば、寢入にけるとや思らん、憾く、少し打ち身動く音、衣の氣色も然なんなりと思らんかし。扇など使ふも著し。冬は、火桶に徐立る火箸の音も、忍たれど聞るを、甚ど叩き増り、聲にても言に、陰ながら寄り寄て聞く時もあり。又數多の聲にて詩を誦し、歌など歌ふには、叩ねど先明たれば、爰へとしも思ぬ人も立ち止りぬ。入べきやうもなくて、立ち明すも興し。御簾の甚青く趣致しげなるに、几帳の帷子甚鮮麗に、裾の端少し打ち重りて見たるに、直衣の後に綻絶す着たる君達、六位の藏人の、青色など着て、受張て、遣戸の許などに傍倚ては得立らず、塀の前などに後押で、袖打ち合せて立たるこそ興しけれ。又、指貫甚濃う、直衣

も、よく分る。冬は、(中で)、火桶に、そろりと立てる火箸の音などが、いくら、そつとしても聞えるので、余計に叩き出したり、聲でも呼ぶので、几帳や、みすのかげながら、傍へよつて、聞く時もあり、又、多勢で、詩を誦じたり、歌など歌つて通るのは、叩かないでも、此方から先にあげると、来る氣でない人まで、一しよに立どまる。でも余り大勢で入れもしないものだから、いつまでも立つて居るのも、おもしろい。御簾が眞青できれいなのに、几帳の帷子が新しくきれいで、(女房のきもの)色々の色の重つた端が、少し見えるのに、直衣の後を年中綻ばして居る六位の藏人が、あを色などを着て、遣戸の處などに、横の方に小さくなつ

の鮮麗にて、色々の衣ども溢し出たる人の、簾を押し入て、半入たる如なるも、外より見るは甚興しからんを、甚美麗なる硯引き寄て、文書き、若は鏡乞て鬢など梳き直したるも、惣て興し。三尺の几帳を立たるに、帽額の下は唯些ぞある。外に立る人、内に居たる人と物言ふ顔の許に、甚憎く當りたるこそ興しけれ。身長の甚高く短からん人などや如何あらん、仍普通のは、然のみぞあらん。況て臨時祭の調樂などは、甚う興し。主殿の官人などの、長き松明を高く燈して、首は引き入て行ば、先は差し付つばかりなるに、巧しう奏び、笛吹き立て通るに、興趣殊に思たるに、君達の晝の装束して立ち止り、物言ひなどするに、殿上人の隨身ども、前を忍やかに短く、己が君達の料に追たるも、管絃に交りて常に似ず興しう聞ゆ。夜更ぬれば、仍啓て歸るを待に、君等の聲にて、「新に生る富草の花」と歌たるも、此の度は今少し興しきに、如何なる實直人にかあらん、直々しう歩み出ぬるもあれば、

笑ふを、「暫時や。何故、然、夜を捨て急ぎ給ふ。暫ありて」など言ど、心地などや悪からん、倒ぬばかり、若し人や追て捕ると見るまで、感ひ出るもあんめり。

て立つたり、屏の前などに、背中をつけて、袖を合せて、(謹直に)立つて居るのがよい。又濃紫の指貫に、きれいな直衣を着た人が、色々の着物を、溢し出して居る女房の、へやの簾を、押し込むやうにして、からだを半分入れて居るのを、外から見たら風情があらう。それが、女房のきれいな硯を引よせて、文を書いたり、又、鏡をかりて、鬢など搔き直して居るのも、すべておもしろい。三尺の几帳を立て、置くと帽額の下は、少し、か、あいて居ないから、外に立つて、中の女と咄して居る人の、顔のところになるのが、都合がよい。丈が極く高いか、又、なみより低いからだつたら、どうか知らないけれども普通の人なら、大ていはさうな

局 「つばね」は穿めること、一區畫することなり、轉じて後には一部屋を持つ奥女房をお局といふ、伊賀局、丹後局等の如し○ほそどの 殿と殿との間にかけてる廊を細殿とも渡殿ともいふ、兩側を板又は壁にて張り、或は上の方に格子を釣りたるあり。柱のみにて勾欄ありて、吹き抜きの廊を透廊といふ、この頃は何處にも屏風几帳などを持ちゆきて住む。これは中宮の初めに住はれし、弘徽殿の細殿なり○晝などもたゆまず、たれか來むと油断せず、心待ちするなり、公卿殿上人の濟涼殿に上る通路なれば、往返に女房の局の前を通るなり○聞ゆるがとまりて、一本、立とまりて」とあり○き帳のかたがら 座の側に立て、内外を遮るもの、(檜の臺に柱ある)に掛くる單のきれ、四巾にて長さ五尺三寸五分、(几帳の高さは通常三尺)表は通例朽木形にて白の生平絹、冬は紫の濃き打物又は黒打にて、巾別に、中紐の如くにしてつく、四尺のには五巾或は六巾にて長は六尺の帛をかく○襪のはし 女房の衣の裾なり○たいまつ 燒松の音便なり、松の脂の多き處を束ね、火を點じて燈となすもの○いとまかしからむを 一本、「いと」なく「なかしからんかし」とありその方よし○いとまよげなる これも一本には「いと」なし、このあたり「いと」「すべて」重なりたり○もかう 「帽額」の約轉、みすの上邊に添へて帛を横に長く引き延ぶるもの、縁に窠の紋を黒く散して染む「御簾の、もかうの上げたる鈎のきはやかなるも、けざやかに見ゆ」などあり○臨時の祭 賀茂のなり○調樂 祭の二日前に清

る。まして、(賀茂の)臨時の祭の調樂などは、實におもしろい。主殿寮の役人などが、長いたい松を高くさし上げて、(寒さに)首は引き込めて往くからたい松の先は、何かにぶつゝかりさうなのに、上手に鳴らしたり吹いたりして浮かれて通るのを、おもしろく見て居ると、君だが、晝の装束で、(へやの前に)立どまつて、何か言ひかけなさる。お供の隨身たちは、いつもとちがつて、小聲で、短く、先を追つて居るのも、なり物の聲に交つて、おもしろく聞える。夜が更けても、戸をあけて、(調樂の)歸りを待つて居ると、君たちの聲で「新に生ふる、とみ草の花」と歌つたのも、前よりは一層おもしろいのに、どんな堅人だか、無愛想に、さつさと退出してゆくのもある。女房が笑ふと、(君達も)、「まあ暫く、まだ宵だのに何だつて、そんなにお急ぎなさる。一寸寄つてお出でなされ」などと言つても、気分でもわるいのか、つまづいて轉びさうに、まるで誰かに追かけられでもするやうに、あわてゝ出てゆくのもある。

涼殿の庭上にて、音樂の下ざらへあるをいふ〇とのもり 主殿寮なり、宮内省の被官にて、供御、輿籠等の事、殿庭の洒掃、燈燭、庭燎等の事を掌る〇ひの装束 帯なり、朝服をいふ「直衣」を「宿直装束」といふに對してこの名あり、着用次第は、先づ赤大口の袴、次に表袴、次に單袴、襦袢を重けて着、次に下襲、次に牛臂、次に袍を着、次に石帯をさし、魚袋をかき、次に帶劍平結を用う〇新に生ふる 風俗歌の一なり、風俗歌は雅樂に用うる歌曲の一種、もと諸國の國風歌なりしを、その中のよき歌曲を朝廷にても雅樂に用ゐられしなり、「荒田に生ふるとみ草の花、手に摘みれて宮へ参らむ」云々。

(宮様が)、職の御曹司に居らつしやる時分、木立など奥深く古びて、家の建て方も高く世間ばなれがして居るけれ

職の御曹司に在す頃、木立など遙に物古り、屋の體も高う氣遠けれど、漫に興趣しう覺ゆ。母屋は鬼ありとて皆隔て出して、南

ども、何となく雅致がある。母屋には鬼が居ると言て、皆ながその方をよけて、南の廂に、御几張を立て、女房は孫廂に詰めて居る。近衛の御門から、左衛門の陣にお入りになる上達部の、さきおふのに比べて、殿上人のは短いから、大前驅だ、小前驅だと、聞きわけては騒ぐ。幾度にもなると、聲なども、すつかり覺え込んで、誰だ、彼だといふと、又、さうではないなどと言つて、人をやつて見させたりするのに、當つた方の者は、「そらら」などいふのも、可笑い。有明月に霧の立ちこめた庭を、下りて歩いて居たら、宮様(中)もおきゝつけになつて、お起きになつた。お傍につめて居た人も、皆なお庭に出て遊ぶ中に、段々明るくなる。左衛門

職の御曹司におはします頃木立など

の廂に御几帳立て、又廂に女房は侍ふ。近衛の御門より左衛門の陣に入り給ふ上達部の前驅ども、殿上人のは短ければ、大前驅、小前驅と聞き付て騒ぐ。數多度になれば、其の聲ども、皆聞き知れて、其ぞ彼ぞと言に、又あらずなど、言ば、人しで見せなどするに、言ひ中たるは「然ばこそ」など言も興し。有明の甚う霧渡りたる庭に下て歩くを聞き召て、御前(中)にも起させ給り。上なる人は、皆下などして遊に、漸々明もて往く。左衛門の陣に罷りて見んとて往ば、我もくくと追ひ次て往に殿上人數多聲して、「なにがし一聲の秋」と誦して入る音すれば、遁げ入て物など言ふ。月を見給けるなど愛て歌詠むもあり。夜も晝も殿上人の絶る時なし。上達部罷出参り給には、格別に急ぐ事なき人は必ず参り給ふ。

職の御曹司 左近衛府の西にあり、もとは大臣の職曹なれども、この頃は天皇、皇后の臨時の御在所にあられたり〇へだて出だして、そこを除外してなり〇又下さし 孫廂〇ありあけ ありながら、夜明る、廿日以後の月〇上なる人 中宮のおそばに當直の女房〇まかり この詞を後世「参り」の意に用うれども退出する事な

の陣に往て見やうと、往くと、私も私もと皆なが、あとから来るのに、殿上人の多勢の聲で、「何とやら一聲の秋」と、吟しながら、此方へ来る様子なので、逃げ込んで、その人たちと、咄をする。「月を御覽になつたのですか」などと、感心して、歌を詠む殿上人もあり、(すべて)夜も晝も、殿上人の絶間がない。上達部が、主上の方への往き返りに、余つほどの急用でもない限りは、きつと、こちらにお出でになる。

つまらないものは、

折角思ひ立つて、宮仕に出かけた人が、何だかいやに成て、面倒臭く思つて居る(處へ、宮仕など、つまらない)と人に言はれたり、又うるさい事も出て来るので、何とかかこつけて御所を出て見ると、今度は、親(の傍)が氣にくはなくて、又宮仕したいといふの。(自分の生んだのなら、しかたがないが)養子の顔の憎らしげなのは、つまらない。しぶつて居た人を、やつと、こつそり

リ〇なにがし一聲の秋 和漢朗詠集に源英明の「夏日閑遊」といふ題にて「池冷 水無三伏 夏 松高 風有一聲秋」とある詩。なにがしは俗に、「何とか」にて、わざと上の詞を忘れしやうにいへるなり〇参り給ふ「参り」は「詣り」にて、社、寺、貴人の許にゆく事にのみいふ。こゝは職の御曹司なる中宮の方に参るをいふなり。

味氣なきもの、

特と思ひ立て、宮仕に出で立たる人の、物憂がりて煩氣に思たる、人にも言れ、煩しき事もあれば、如何でか罷出なんといふ言種をして出て、親を恨しければ、又参りなんと言ふ。養子の顔憎さ氣なる。流々に思たる人を、忍て聲に取て、思ふ如ならずと嘆く人。

聲にとつて、思つたほどでもない、こぼす人も(さぞ)

氣の毒なの(は)、

人に代作してやつた歌が譽められるのは、(代作主から見ると)氣の毒だ。けれどこれはまだよい。遠國へ旅立つ人が、それからそれと縁をもとめて、添書をもらひたいと、人に頼ませてよこすので、(先方の國司か何か)知人の處へ、よいかげんにかいてやると、先方の人が、不親切で、かまつてもくれないと腹を立て、(添書の)禮手紙もよこさず、(折角頼んでも)何にもならないと、わるく言て居るもの(少し氣の毒だ)。

よい心持さうなもの(は)、

卯杖の祝言。神樂の人長。(炎天に曝された)池の蓮が、ばらくと村雨にうたれて居るの。御靈會の馬長。又御靈會の振幡。

いとをしげなるもの

心地よげなるもの

最惜げなるもの、

人に詠て取せたる歌の、譽らるゝ。然ど、其は好し。遠き旅行する人の、次々縁探で、文得んと言すれば、知たる人の許、等閑に書て遣たるに、不深切なりとて腹立て、返事も取せで、無徳に言ひ做たる。

心地快げなるもの、

卯杖の祝言。神樂の人長。池の蓮の村雨に遭たる。御靈會の馬長。又、御靈會の振幡。

卯づゑのことぶき 正月上の卯の日に、兵衛府より五尺三寸の杖を切りて、五色の

糸に巻きて奉りしもの。邪氣を掃ふといふ、それを奉る時にのぶる祝言なり、勢ひよく、はれなく言ふなるべし○神樂の人長
神樂は天の岩戸の故事をもと、せる神事の音楽。人長は「かむわざの人のなま」といひて神樂の舞人の稱なり、巻糸(冠の頂きより
下に垂れたる纏を内側に巻きあるをいふ)老(武官の冠の兩耳の上に着くる飾り物、毛にて作り菊の花を半折したるもの、如し)
摺衣(山藍、月草等にて、種々の象を衣服に染めつけたるもの)にて神を持つ○御饗會 山城國愛宕郡八阪神社の齋會をいふ、
毎年六月十四日に行ふ、京中の大祭なり、素盞雄尊を祀る。十四日に神輿三基、旅所に神幸あり、同日還幸。この日馬長及び山鉦等
の盛儀ありて上皇、后宮の御覽あり、主上も紫宸殿に御して御覽ありし事あり○馬長 映えんくしき役なりしなるべし、禁中よりつ
かはされし由見ゆ○ふりはた これも威儀を整ふる役なりしなるべし、祭の幡を持ちてゆく者。

もてはやされるもの(は)、

人形つかひの座頭。除目に、一番上國の司となつた人。

とりもてるもの、

傀儡の事取。除目に第一の國得たる人。

くどつ 人形なり、歌に合せて舞はず、此の頃は男子なり(後には専ら婦女の業となり、終に舞妓となる)○第一の國 この頃は全國を廣狹貧富によりて、差等をつけ、大國、上國、中國、下國といひたり、その中の第一のよき國なり。

御佛名(廿一日)の翌朝、地獄繪の御屏風を建て渡して、主上が宮様に御見せになる。何とも言へず恐しい。宮様が「御覽」と被仰つても」とても」と御辭退して、上屋に隠れて寝てしまつた。ど

御佛名の翌朝、地獄繪の御屏風取り渡して、宮(中)に御覽せさせ奉り給ふ。甚う忌々しき事限なし、宮「これ見よかし」と仰らるれど、清「更に見侍じ」とて、忌々しさに上屋に隠れ臥ぬ。雨甚く降て徒然なりとて、殿上人生上の御局に召て御管絃あり。道方の

しやぶりの御退屈凌ぎに、殿上人を上
の御局へお召しになつて御あそびが始
まつた。道方の小納言の琵琶が大さう
よい。濟政さんは、箏の琴。行成の笛。
經房の少將の笙の笛など、まことにお
もしろく、一巡すんで、琵琶のきれ間
に、大納言さん(周)が、「琵琶の聲は、
やんで物語する事遅し」といふ詩を御
誦じになつたので、隠れて寝て居たの
も起き出してしまつて、清「佛罰は怖く
ても、おもしろい事には、隠れては居
られない」と(言つて)笑はれる。別段
美しいお聲といふでもなけれど、(その
場合)丁度おあつらへの文句だつた。

少納言琵琶甚愛たし。濟政の君、箏の琴。行成の笛。經房の中納言
笙の笛など甚面白う一回奏て、琵琶弾き止たる程に、大納言殿
の、伊、琵琶の聲は止て、物語する事遅し」といふ事を誦し給しに、
隠れ臥たりしも起き出で、清「罪は怖しけれど、仍物の愛たきは得
止まじ」とて笑る。御聲などの勝れたるにはあらねど、折の殊更
に作り出たるやうなりしなり。

御佛名 禁中の公事なり、陰曆十二月十九日より三日間、清涼殿にて僧に佛名經を
誦み、三世の諸佛の名號を唱へしめらる、六根(眼、耳、鼻、舌、身、意)の罪を
滅すといふ○地獄繪の御屏風 地獄は地下の獄の義なり、阿鼻、叫喚、焦熱等の八
大地獄にて亡者の苛責を受くる處を畫きたる御屏風七帖を御佛名の間、七ヶの間に
立てらるゝなり、この時は畫家巨勢氏(五世弘高)にして、名畫の間えありし人な
り、初め僧なりしを還俗したりしかば、罪障を悔い、地獄變相圖、及び不動尊千體
圖等を畫きしといふ、著聞集に「弘高地獄繪の屏風をかけるに、樓の上より鐘をさ
し下して、人を刺したる鬼をかきたりけるが、殊に魂入りて見えけるを、自ら言ひ
けるは、『恐くは我が運命盡きぬ』と、果して幾程なくて失せにけり」とあればこと
に入神の作なりしと見ゆ、赤染衛門(この屏風に畫ける業の稱を詠みて、「罪はよに重き物ぞときしかと、いとかばかりは思はず
りしを)○取りわたして 御佛名の間、仁壽殿より清涼殿に移したりしを中宮の方に渡して御覽せさせらるゝなり、新調の物なれ
ばなるべし○うへや 中宮の方へ出仕の間、の女房の休息室なるべし、他の二書(前田家本近衛侯爵所藏本)には「こへや」とあり○

御佛名のあした

遣方 右大臣源重信の子、後、正二位權中納言に至り、七十六歳薨○翌、四柱四柱、抱きて撥にて彈するもの、五十四代仁明天皇の朝、藤原貞敏入唐して傳習し歸り、名手として重んぜられ、その頃より盛んになりたり、源氏物語に、明石上をこれが名手となしあり○濟政 權中納言源時中の子、後、從四位下右中將に至る○さうの琴 雅樂に用うるによりて樂琴といふ、桐胴十三絃○行成 大臣高明の四男。後、權中納言となり、太宰權帥を兼ね、五十五歳薨○さうの笛 篳篥なり、雅樂に用う腕を切りて上に十七の管を環に立て並べ管毎に簧(吹けば鼓して音を起す)あり○翌の聲はやめて 唐の李太白の白氏文集をこの頃の人は男女ともに愛誦したるらしく、源氏物語などにも多く引用しあり、この句は同文集中の「琵琶行」にあり、その序に「元和十年、予左遷九江司馬、明年秋送客湓浦、口、聞船中夜彈琵琶者、聽其音、錚錚然、有京都聲、問其人、本長安倡女」云々とありて、詩は「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟、主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫茫江浸月、忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、云々、とあるを言へるなり○罪は怖ろしけれど「地獄繪を見るは恐ろしけれど」なり。

頭中將(信)が、つまらないうそ咄を眞にうけて、ひどく私をこきおろし、齊「あんな者を、何だつて、今まで相手にしたらう」などと、殿上でもひどく悪口を言ひなさるさうで、恥しいけれども、清「ありもしない事だから、その中にお分りにならう」などと、笑つて

頭中將(信)の漫なる讒言を聞いて、甚う言ひ貶し、齊「何しに人と思けん」などと、殿上にも甚くなん宣ふと聞に、恥しけれど實ならばこそあらめ、自然聞き正し給てんなど笑てあるに、黒戸の傍など渡るにも、聲などする時は、袖を塞て露見越せず、甚う憎み給を、兎角も言す見も入で過す。二月晦日方、雨甚う降て徒然なるに、御物忌に籠りて有繫に淋々しくこそあれ、物や言に遣まし

居ると、(中將は)、黒戸の方へなどゆく時でも、(私の)聲がすると、袖で顔を隠して、見向きもせず、やたらとお憎みなさるのを、言ひわけもしず、知らん顔をして過して居ると、二月の末頃、大雨でうつとうしいのに(中將も)御物忌に籠つて、清「憎らしいけれども、どうもつまらない。使をやつて何とか言て見やうか」と被仰つたと、皆なが咄したけれども、清「そんなわけはない」などと、言て居る中、ある日、へやで一日暮して、(宮様の御前へ)出たら、もう御寢所へお入りになつたあとだつた。長押の處で、灯を手近に寄せて、かたまつて偏をつけて居た(人たちが、見つけて)「あ、うれしい、早く居らつしやい」など、言ふけれども、つ

となん宣ふと人々語れど、豈夫有じなど答てあるに、一日局に暮して参りたれば、夜の御殿に入せ給にけり。長押の下に、火近く取り寄て、差集て、偏をぞ附く。噫嬉や、疾く在せ」など見付ていど、無興き心地して、何しに上りつらんと覺て、炭櫃の許に居たれば、又其處に集り居て物など言に、主「某侍ふ」と甚大聲に言ふ。清「奇く何時の間に何事のあるぞ」と問すれば、主殿司なり。主「唯爰に、人傳ならで申べき事なん」と言は、差出て問に、主「これ頭中將殿(信)の奉せ給ふ。御返事疾く」と言に甚く憎み給を、如何なる御文ならんと思と、只今急ぎ見べきにもあらねば、清「去ね、今聞ん」とて、懷中に引き入て入ぬ。仍人の物言ふ聴などするに、即ち立ち歸て、主「然ば、其の往つる文を賜りて來」となん仰られつる。疾くく」と言に、清「奇く伊勢の物語なるや」とて見れば、青き薄様に、甚清げに書き給るを、心動きしつるさまにもあらざりけり。齊「蘭省花時錦帳下」と

まらない気がして、出なければよかつた、炭櫃の處に居ると、又皆なが、そこへよつて来て、咄しかけたりする處に、「誰それで御座いますか、清少納言様に一寸申上げたい事が」と大聲で言ふ。今来たばかりなのに、いつのまに聞きつけて来たのか、何事だらうと、人にきかせると、主殿司だつた。

主「一寸こゝで、ちかに申上げたい事が」と言ふから、出てきくと、主「これを、頭中將様がお上げになります。御返事を早く」と言ふ。ひどくお憎みなさるといふから、どんなお手紙だらうと思つたけれども、すぐに見るのも變だから、「お歸り。あとでお返事するから」と、懷ろに押込んで、入つた。

そして、又、皆なの咄しをきいて居る

書で、齊「末は如何に〜」とあるを、如何はすべからん。御前(中)の在さば御覽せさすべきを。是が末知り顔に、迪々しき眞字に書たらんも見苦しなどと思ひ廻す程もなく、促め感せば、唯其の奥に、炭櫃の消たる炭のあるして、清草の廬を誰か尋ん」と書き付て取せつれど、返事も言で、皆寝て、翌旦甚疾く局に下たれば、源少將(房)の聲して、源草の廬やある。草の廬やある」と、騒しう問ば、清「何とか、然、人氣なきものはあらん。玉の臺探め給ましかば、率聞てまし」と言ふ。輕「噫嬉し局に在けるよ。上まで尋んと爲つるものを」とて、昨夜有し様、輕「頭中將の宿直所にて、少し人々しき限、六位まで集りて、萬の人の上、昔今と語りて言し序に、齊「仍、彼の者、無下に絶え果て後こそ、有繋に得あらね。若し言ひ出る事もやと待ど、些「何とも思たらず、平然が甚憾きを、今宵悪しとも善しとも、定め切て止なんかし」と、皆言ひ合せたりし事を、清「只今は見まじき」とて、入り給ぬとて

と、主殿司が、ちきに又来て、主「お返事が頂けずば、先ほどの手紙を頂いて來いと被仰ります。どうぞお早くお返事を」と言ふ。清「まあ随分、伊勢の物語だ」とあけて見ると、青い薄様に大さうきれいにお書きになつたのが、心配したこはい事でもなかつた。蘭省の花の時、錦帳の下」と書いて、齊「このあとは、何と、何と」とあるのを、どうしたらよからう。宮様が居らつしやれば、お眼にかけやうもの。あとの句を知つた顔に、拙な眞字で書くのも見ともなしなど、考へて居る暇もくれずに、主「お早く〜」と催促するので、手紙の奥に、あり合せの消炭で、清草の廬を誰か尋ねん」と書きつけてやつたけれど、向うからの返事もないから、皆

主殿司來りしを、又追ひ歸して、人々「只、袖を捉て、東西をさせず、請ひ取り持て來ずば、文を返し取れ」と誡めて、然ばかり降る雨の盛りに遣たるに、甚疾く歸り來たり。主「是」とて差し出たるが、有つる文なれば、返してけるかと打ち見るに、合せて喚けば、「奇し、如何なる事ぞ」と、皆寄て見るに、齊「甚き盗人かな。仍得こそ捨まじけれ」と見騒て、齊「是が上句付て遣ん。源少將(房)付よ」など言ふ。夜更るまで、付け煩てなん止にし。此の事必ず語り傳べき事なりとなん評し」と、甚く片腹痛きまで言ひ聞せて、輕「御名は今草の廬となん命たる」とて急ぎ立ち給ぬれば、清「甚醜き名の、末まであらんこそ、口惜かるべけれ」と言ふ程に、修理亮則光「則甚き慶申しに、上にやとて參りたりつる」と言ば、清「何ぞ司召ありとも聞ぬに、何に成り給るぞ」と言ば、則率、實に嬉き事の昨夜侍しを、待遠く思ひ明してなん。斯ばかり面目ある事なかりき」とて、最初ありける事ども、中將

と上屋に寝てしまつて、翌朝早くへやに下つたら、源少將(房)の聲で、經草の蘆は、居るか〜と大聲できくので、清そんなつまらない者は居りません。玉の臺とでも被仰るなら、すぐお返事しますが」と言ふ。經「やれ〜嬉しや。下に居なかつた。上までもさがさうとした處」と(言つ)て、昨夜の様子をお咄しになる。經「頭中將(信)の宿直所で咄せる人ばかり、六位まで集つて、昔から今までの女の評を、あれこれとする序に、(頭中將さんが)「やつぱり、あれは、絶交してふと淋しい。何とか言つて来るかと待つて居るけれども、知らん顔をして居るから仕方がない。このまゝ絶交してしまふとも、仲なほりするとも、今夜極めてしまはう

と思ふ」と、皆なに相談して、およこしになつた文を、「あとでと言つて、入つておしまひなかつた」と、主殿司が歸つて来たので、又追ひ歸して、「袖をつかまへ〜とも、四の五の言はせず、返事をかゝせて来い。でなければ、あの文をとり返して来い」と、(皆なで)嚴重に言ひ渡して、あの大雨の最中によこしたらば、ちきに歸つて来て、「これを」とさし出したのが、前にやつた文なので、返してよこしたのかと見て居ると(のぞいた人たちが)、一度にあつと叫ぶので、「何だ〜、どうしたのだ」と、皆なが寄つて見て、「えらい盗賊だ。やつぱり、打ちやり放しに出来まい」と、わい〜言つて、「この上の句をつけてやらう。源少將

の語りつる同じ事どもを言て、則此の返事に隨て、然る者ありとだに思じと、頭中將(信)宣ひしに、徒に來りしは却々好きさ、持て來りし度は、如何ならんと胸潰れて、實正に拙からんは、兄の爲も悪かるべしと思しに、普通にだにあらす、許多の人の譽め感じて、「兄こそ聞け」と宣しかば、下心には甚嬉しけれど、則「然様の方には、更に得侍ふまじき身になん侍る」と申しかば、人々「言加へ聞き知れとはあらず。唯人に語れとて聞するぞ」と宣しなん。少し口惜き兄の評價に侍しかど、是が上附句け試るに、言べきやうなし。殊に又、是が返歌をや爲べきなど言ひ合せ、拙き事言ては、却々憾かるべしとて、夜半までなん在せし。是は、身の爲にも、人の爲にも、然て甚き悦には侍すや。司召に少々官得侍んは、何とも思まじくなん」と言ば、實に數多して然る事あらんとも知で、憾くもありけるかな。是になん胸潰れて覺る。この妹兄と言ふ事をば、帝まで皆知し召し、殿上

にも官名をば言で、「兄」とぞ命たる。物語などして居たる程に、宮「先」と召たれば、參たるに、此の事仰られんとなりけり。帝の渡せ給て、語り聞えさせ給て、帝「をのことも皆扇に書て持る」と仰せらるゝにこそ、驚嘆う、何の言せける事にかと覺しか。然て後に、袖几帳など取り除て、思ひ直り給めりし。

頭中將 近衛中將にて藏人頭を兼ねたるをいふ、この時は太政大臣爲光の二男、藤原齊信なり、後、正二位大納言に至り、六十九歳薨。才學優秀にて公任、俊賢、行成と共に當時の四納言と稱せらる。殿上 清涼殿の南廂にある間なり、廣さ六間、奥に壁に添へて御椅子を建つ、その傍に關白着坐す、その前の縁を小板敷といひて紫ベリの疊を敷き、職事の藏人候ふ。こゝに備へ置くは和琴、臺盤二脚(主上殿上にて食召す時の用)火櫃二、圍碁碁碁、盤、筒(袋)に入りあり日給簡とて、殿上人の名を記したるもの。朱辛櫃等のよし禁秘抄にあり。春冬は幕を垂れ、夕陽の時約 蓆を下す、横敷 坤の角の柱に蘇芳の綱をつけ鈴を付く、小舎人を召すの時、藏人之を引く。黒戸 清涼殿の北の瀧口の戸の西にありといふ。御物忌に天皇御物忌の時は侍臣等、殿上に候して共に引籠るなり。〇偏をぞつく 詩句などの中の字の偏を隠して、旁のみを見せ何偏かと問ひて申てさする遊びなり。〇伊勢の物語なるや 伊勢物語は、實事をあらぬ事のやうに書きひがめて(二條後の事など)「ひが事の物語」と恐らくは筆者(業平)の記しそへたりけむ、古くは「ひが事物語」といひたりとて、さればこゝは「随分變な」位の意にていへるなり(まちがつた咄の意)

（房）「つけないさい」など、言つたけれど、夜が更けても、とう／＼つげられませんでした。これはきつと、一つ咄にならうといふ評定です」と、はたに氣の毒な位言つて、源「そこで、今は、お名前を、草の蘆とつけました」と言て、そのまんま立ちなされた。清「いやな名を、いつまでも言はれては堪らない」と言つて居る處へ、修理亮則光が、則「餘まりうれしさに、およろこびを申しに、上屋にお出でかと思ひながら参りました」といふから、清「司召があつたとも聞かないのに、何におなりなされた」ときくと、則「いや、どうも、たまらなく嬉しい事が、昨夜御座いましたから、早く夜が明ければよいと、待ち明しました。あれ位、面目を施した事は、御座いませんでした」と、最初からの事、中將の言つた通

○薄やう 鳥の子紙の薄く流きたるもの ○蘭雀、花、時三々、これも唐の白樂天（居易）の詩の句なり、白氏文集に、樂天、廬山の草堂に雨夜獨宿して、友人なる三人に寄せる詩に「丹霄携手三君子、白髮垂頭一病翁、蘭雀花、時錦帳下、廬山雨夜草庵中、終身膠漆心應在、半路雲泥迹不同、唯有三昧觀、榮枯一照兩成空」とある、その第三句なり ○消たる炭のあるして、嬌飾多き當時なれども、さすがに昔は簡易なる事の交れり、伊勢物語にも續松（たいまつ）の炭して歌をかきつけたる事見ゆ。美き手蹟ならば、さる事しても、なかくに風情あるべし（「まんな」は假字に對していふ、漢字の事なり） ○草のいほりを 即妙に、自身を草のいほりに比し、この頃齋信の疎々しきを「誰か尋れむ」と詩の意を轉じて言へり、（詩句の意は、境遇は、かはりても膠漆の交りは同じとあるなり） ○玉の臺「錦帳の下」の下の句をとはれて「草の蘆」と答へしにより、「草のいほり」と異名に呼ばれたりしかば、この度は又打返して俗に「何です『草のいほり』なんて『錦帳の下』でもお呼びなさい」の心を錦帳と同じき「玉のうてな」といひしなるべし、舌の戦ひなり ○このもの「彼のもの」なり、この頃は「この」と「かの」を共通に用ゐたり、清少を指す○すりのすけ 宮城を造作修理する職。大夫、權大夫、亮、大少進、等の官あり ○則光 駿河守敏政の子、後、左衛門尉檢非違使となる、武勇の人と見えたり、盜を捉へし事など見ゆ ○司召ありとも 褒めの、しられたらんと知りながら、おぼめく處、慢じたるさま、子供らしき幼稚なる性質よく見ゆ ○いで發語なり俗に「いやもう」○少々のつかさ「よいかげんの官」なり「少々の人」（よいかげんの人）「少々の事」（よいかげんの事）など多く言へり。

りを咄して、則「この返事次第で、もう思ひ出しもしまいと頭中將が被仰つたのに、初めに、使が、たゞ歸つて來たのは、却つてよかつた。文を持つて來た時は、どうだらうと胸がどき／＼して、返事が、へただつたら、（この）兄さん（則）も困ると思つた處が、一通り以上によく出來て居たから、皆なが感服してしまつて、「兄さんお聞きなさい、こんな秀句を」と言ひなされたから、内々たまらなく嬉しいながら、「私などは、さういふ方には、一向お仲間に入れませんもので」と言つたら「上の句を考へよと、いふではない。たゞ、人への自慢咄をさせやうと思つて、聞かせたのだ」と被仰つたのは、少し侮辱された形だつたが、皆なも、「全くこれに上の句を、つけやうとしても、とても出來ない」。返歌處ではない、」など、相談して、「へたな事を言ては、餘計見つともないから」と、（そんな事で）、とう／＼夜半まで居なされた。何とまあ、お互ひ實に嬉しい事ではありませんか。これに比べれば、司召に少し位の官を得る位、何でもないと言ふので、多勢で、そんな相談があつたのもしらず、炭などで書いて、いけない事をしたと、それが恥しくて、胸がどき／＼する。この、妹だの、兄だのといふ事は、上様まで御存じで、殿上でも、この人の官名は言はず、「兄さん」といふあだ名をつけて居る。咄して居る處へ、（宮様から）「一寸來よ」とお召しがあるので參ると、此の事を被仰る爲だつた。その中、上様（帝一條）が、宮様（中）の方へお出でになつて、又その事を被仰り、童男達は、皆な其の歌を、扇に書きつけて、持つて居る」と被仰るので、驚いてしまつて、何だつて、あんな事を言はせたらうと後悔だけでも、この事があつてから、（やつと）頭中將（信齊）が、袖几帳などは取のけて、心持をなほして下さつたらしかつた。

あくる年の二月廿五日に、宮様が、職の御曹司にお出でになつたお供をしないで、(宮様のおへやの)梅壺におるす居をして居た。その又あくる日、頭中將の手紙だと言つて、(持つて来た)「昨日の晩、鞍馬寺に参詣したが、今夜は方角が塞がるから、ちがへに(そちらへ)ゆく。そして暗い中に歸るが、一寸咄したい事があるのだから、餘り叩かせないで、待つて居てくれ」とあつたけれども、「ひとり、局になんか居ないで、爰へ来てお寢」と御匣殿がお呼びになつたから、往つた。寢坊をして、へやに下つたら、(るすの者が)「夜大へんにお叩きになつたから、やつと眼がさめて起きましたら、齊、上でお咄して居るなら、私が来たと知らせ

返る年の二月廿五日に、宮(中)職の御曹司に出させ給し御供に参らで、梅壺に残り居たりし、翌日、頭中將(齊)の消息とて、頭中將の夜、鞍馬へ詣たりしに、今宵方の塞れば遠になん往く。未だ明ざらんに歸ぬべし。必言べき事あり。甚く叩せで待て」と宣りしかど、「局に一人は何て在ぞ。爰に寢よ」とて、御匣殿召たれば、参りぬ。久く寢起て下たれば、留守ノ女、夜甚う人の叩せ給し。辛うじて起て侍しかば、客人「上に語らば、斯なむ」と宣ひしかども、豈夫肯せ給じとて、臥し侍りにき」と語る。不安の事やとて聞く程に、主殿司来て、主頭殿の聞させ給なり。只今罷り出るを、聞べき事なんある」と言ば、清「見るべき事ありて、上になん上り侍る。其處にて」と言て、局は引もや啓け給んと、心動きて煩しければ、梅壺の東面の半蔀明て、清「此處に」と言ば、爰たくぞ歩み出で給る。櫻の直衣甚く花々と、裏の色澤など得も言す清らに、蒲菊染の甚濃き指貫に、藤の折枝夥しく折

てくれ」との事でしたが、申し上げてもおきくにはなるまいと、そのまゝ寢てしまひました」といふ。きつと、立腹なさつたらうと心配して居ると、主殿司が来て、主「頭殿(齊)が被仰いました。『今退出するが少し咄がある』との事なので、清、拜見するものがあつて、上につて居りますから、そちらで(おめにかゝります)」と言つて、へやは、おあけになるといけないと用心して、梅壺の東向の半蔀をあけて、清、どうぞこちらへ」と言つたら、美しい御様子でお出でになつた。花やかな櫻の直衣のうらの色やつやが、又、實に美しく、(それに)えび染の濃い地に、藤の折枝が一ぱい、あざやかに織り出されて居る指貫で、直衣の下のお召の、紅の色

り亂りて、紅の色、打目など輝くばかりぞ見る。次第に白き薄色など數多重りたる、狭き隨に、片つ方は下ながら、少し簾の許近く寄り居給るぞ、實に繪に書き、物語の愛たき事に言たる、是にこそはと見たる。御前の梅は西は白く、東は紅梅にて、少し落ち方に成たれど、仍興しきに、朗々と日の景色長閑にて、人に見せま欲し。簾の内に、況て、若やかなる女房などの、髪美しく長く溢れかゝりてなど添ひ居たんめる、今少し見所あり興しかりぬべきに、甚盛過ぎ古々しき人の、髪なども我にはあらねばや、處々亂れ散亂て、大方色殊なる頃なれば、有か無かなる薄鈍ども、間も見ぬ衣などもなれば、露の光も見ぬに、在さねば、裳も着ず、袿姿にて居たるこそ、物損ひに口惜けれ。頭「職へなん参る。傳言やある。何日か参る」など宣ふ。扱も昨夜明しも果で、然とも豫て然言てしかば待らんとて、月の甚う明きに、西の京より來る隨に、局を叩し

や、打目が、輝くやうに見える。一番下の白まで、段々に薄色に澤山重つて居るのを、場所が狭いので、片方の足は下に置いたまゝ、少し簾のそばへお寄りになつた様子は、かういふのを、繪に書いたり、物語に美く言つて居るのだなと思つた。

お庭の梅は西の方のは白く、東の方のは紅梅で、少し散り際ではあるが、まだ美しいのに、うら／＼と日の光はのどかで、人に見せたい景色だ。(かういふ處で) 御簾の中に、若い女房などが、美しい長い髪で、少し顔にかゝつたりして居たら、(景色も) 余計に引立つだらうのに、盛りを越してしまつた年よりの、髪なども余りかまふ氣もないから、あちこちそ／＼け、もじや／＼になつ

程、辛じて、寝惚れて起き出たりし氣色、答の不合せなど語りて、笑ひ給ふ。齊「無下にこそ思ひ倦じにしか。何と然る者をば置たる」など、實に然ぞありけんと思惜くも、可笑くもあり。暫時ありて出で給ぬ。外より見ん人は、興趣しう、内に如何なる人のあらんと思ぬべし。奥の方より見出されたらん後こそ、外に然る人やとも得思まじけれ。

暮ぬれば参りぬ。御前に人々多く集ひ居て、物語の巧き拙き、憎き所などをぞ判め言ひ合ひ、涼、仲忠が事など、御前(中)にも、劣り優りたる事など仰られける。女房「先づ、是は如何にと判定れ。仲忠が童生の奇蹟さを、切に仰らるゝぞ」など言ば、清「何かは、琴なども、天人下るばかり彈て、甚劣き人なり。帝の御女やは何得たる」と言ば、仲忠が方人と心得て、女房「然ばよ」など言に、中宮「此の事どもよりは、晝、齊信が参りたりつるを見ましかば、如何に愛で感ましとこそ覺れ」と仰らるゝに、人々女房「扱實に

たりして、それに皆な、服の時だから、きものゝ色も、あるかないか分らない薄鈍などで、重なりめも一向眼立たないなりをして居るのだから、てんで見立てがないのに、(宮様が) おるすの時とて裳もつけず、桂姿で居たのは、ぶちこはしだつた。齊「職へ参上するが、言傳があるなら被仰い。あなたは一たい何時参られる。」などお尋ねになつて齊「今朝は明け切らない中に、でも前にさう云つて置いたから、待つてくれたらうと思つて、月の恐しく明るい路を、西の京から來ると、すぐ、へやをたゝいたら、散々叩かせて、やつと寢ぼけて起きて來た」と、その様子や、返事の不束さを咄して、お笑ひになる。齊「腹が立つて堪らなかつた。何だつてあんな

常よりも有ま欲う」など言ふ。清「先づ其の事こそ啓せんとと思て参り侍りつるに、物語の事に紛て」とて有つる事を語り聞かすれば女房「誰も誰も見つれど、甚斯く縫たる糸、針目までやは見透しつる」とて笑ふ。西の京といふ所の荒たりつる事、諸共に見る人あらましかばとなん覺つる。垣ども皆破れて、若生てげりなど語りつれば、宰相の君の、幸、瓦の松はありつや」と答たりつるを、甚う愛て、清「西の方都門を去る事幾許の地ぞ」と口吟つる事など、喧しきまで言しこそ興しかりしか。

かへる年 長徳二年、一條天皇十七歳、定子中宮廿一歳〇うめ壺 中宮は初め弘徽殿なりしが後には梅壺に移られたり〇鞍馬 京都より北に三里、鞍馬山なり。毘沙門天を祀る〇かへりぬべし「鞍馬へ」なり〇御くしげ殿 禁中貞觀殿の中にありて、天皇の御衣を掌る所、その別當(長官)を御座殿といふ、(それより女御に進む事もあり) この時は定子中宮の妹(道隆の四女)にて、後に中宮の出、敦康親王の母代となりし人なり〇からうじて起きてはべりしかば「ひどく叩かれたから、やつと起きた」とは、主人に對していふべからぬ事なり、後に頭中將のいふ如く、不束なる、るすゐなり〇上に語らば や、生硬なる詞なり、助けて解すれば「清少に斯く取り次げ」にて召使にいふなれば、「上」は清少をさせるなるべし〇まかり

氣の利かない者に留守をさせたのだ」と被仰る。さぞさうであつたらうと、お氣毒にもあり、をかしくもある。やがてお歸りなされた。外から見たら風情があつて、どんなにか美しい人が中に居さうだらう(けれども)、奥から私(わたし)のうしろつきを見られたら、外に、あんな美しいお人がとは、とても想はれまい。暮れてから宮様の御前へ出た。御前に(女房が)多勢居て、物語のよしあし、憎らしい所などを批評し合つたり、その處をそらでよみ上げたり、仲忠の事などを、宮様も「涼と、どちらが、えらいか」など、いろ／＼御批評になる。女房「早速ながら(あなたは)何うお考へになるの。仲忠の子供時分の不思議さを、宮様が御熱心におほめになつて

出づる 昨夜宿したる殿上より、退出して鞍馬へ歸るなり○めてたくぞ歩み出て給へる 齊信は法住寺太政大臣藤原師輔の孫にして爲光の子。同母妹祇子は花山天皇の女御にて殊寵あり、女御の薨後、天皇出家されし等に徴しても、美人系の家なるべし○打目 打ちてつやを出したるなり○添ひ 物に寄りかゝり居るなり、「なれ來つる横の柱」などいひて、この頃は余り正座はせず、物に寄りかゝる風習なりしやうなり○いとさだ過ぎ 清少この時三十歳か、もしくは三十一歳なり○色ことなる 前年(長徳元年)四月、中宮の父道隆薨去なれば、今二月はまだ一年を経ぬ思服中なるなり○うすにび 鈍色は薄黒き色、その又薄きなり、死者との親疎によりて色の淺深あるなり○あはひも見えぬ いろ／＼の色を重ねるとちがひ、幾枚着ても間のはつきりせぬなり○つゆのひかりも 「少しの美しき處も」なり○裳 貴人の前なる時は着くるなり○うちき姿 小注を着たるなるべし、上に打着る故「打着」なり、唐衣は禮服、これは暑服なり○暮ぬれば 「ぬれば」にては、暮れたから」なれど、「暮れてから」の意にて記せるなるべし○涼 空穂物語中の人物。父は嵯峨天皇、母は紀伊の人の女にて女藏人。才學優秀にして仲忠と甲乙なし、神泉苑の紅葉の賀の時、仲忠と共に琴をかなで、神異あり、帝の歡感により、侍從に任ぜられ、正四位左近中将に補せらる、左大臣源雅頼の第十女を室とす○仲忠 父は右大臣兼雅、母は清原俊隆の女、初め三條京極の第にあり、ある夜兼雅にあひて、仲忠を生む、家貧なり、仲忠四歳の時魚を釣り、果實を拾ひて母に供ふ、人あはれみて業を扶け、仙童あらはれて物を與ふ、一日山に入る、熊その至孝に感じ、老杉のうつろを仲忠に與へ群を伴ひ去る、仲忠母を伴ひてその洞に住む、父兼雅たま／＼山に入り、母子に會ひ、携へて家に歸る、仲忠京に出て、三年諸藝に通曉す、十八歳侍從となり、廿一歳にして左近中将となる、神泉苑の紅葉賀に涼と共に妙技を奏す、

居らつしやる」などいふので、清(涼)は(涼などは)知れたものです、高が仙人が下りて來ただけのもので、帝の御娘を頂いたわけではなし」といふと、仲忠びおきの人が、私も味方だと思つて、女房「ほんとうに」などいふ。宮様は「それよりも、晝間、齊信が参つたのを見たらば、どんなに、(清少が)、大さわざして褒めたらう」と被仰る。皆なも「ほんとうに、いつもより、又余計にお立派でした」など言ふ。清、それを申上げるつもりで参りましたのに、物語の事でおそくなりました」と、あつた通りを申上げると、宮、誰も皆な見たには見たけれども、そんなに、縫つた糸や、針目までは見通さなかつた」とお笑ひになる。女房「その時に、頭中將さん(信)

神異あり、觀感の余り女一の宮を賜ふ、累進して大納言に至る○あやしきを切に 仲忠の至孝に感じて、さま／＼の天助ありし事を舉げて、中宮が熱心に仲忠をたへらるゝとなり○天人下るばかり 涼をおとして言へるなり、涼が琴を弾ぜし時は仙人下りて舞ひしのみなり、仲忠の方は風雲動き、月星騒ぎ、屏風のやうなる火降り雷鳴りたり、雲は余のやうに凝りて降りたれば、此の方勝るといふなり○みかどの御娘やは しかも又仲忠の如く、帝の御娘は賜はらぬと、涼を抑へたるなり○さればよ 「それ、やつぱり清少さんも、仲忠の方がえらいと被仰る」の意○この事どもよりは 中宮が女房達を御するに心を用ゐらるゝさまは、何處にも見えたり、涼を揚ぐる女房に不快あらせじとて、話頭を轉せらるゝなり、や、悍馬の如き、清少をも心服せしめらるゝほどありて、この中宮は父兄に超えたる才幹者におはしたるやうなり○まづその事こそ 中宮がおるされたる御に清少は、すぐかゝりたり才走りて負けぬ氣は強けれども、幼き處のあるさまは隨處に見ゆ○西の京の 鞍馬にゆきし途すがらの感想を清少に語りしに、下女の取次ぐ事をせざりしかば、宮のお前にゆきて女房たちに語りしなるべし、女房たちが、それを清少に語るなり、西の京は山城葛野郡なり、右京、又長安といふ、桓武天皇寛都より六七十年を経て藤原氏の攝關時代となり、社寺第宅の造營華麗を極むるに反し、王室はやうやう式微の状態となり、東西兩京に左京職(東)右京職(西)ありて、東西ともに九條の大路、二十六の小路、南北は朱雀大路を中心としたりし大内裡には費用の點より住はれずなり、村上天皇の天徳四年、内裏焼亡の時、冷泉院に幸されしを初めとし、圓融天皇の貞元元年の火災の時、太政大臣公季の堀川第に一年間居住されし如き、多くは里内裏に居住さるゝ事となりしかば、壯大なる皇城の地は漸次衰頹し西の京は内裏のあとを大内野と稱ふるやうになりたり、新六帖に爲家「いかにせん

が、「西の京といふ所の荒れて居た事。一緒に往く人があつたらと思ふ。垣なども皆こはれて、苔が生えて」など咄された時に、宰相さんが、「瓦の松は御座いましたか」と、きよなさつたら、頭中將さんが、大さうおもしろがつて、「西の方都門を去れる事幾許の地ぞ」と、吟じなさつた」など、やかましい位に褒めちぎるのが、おもしろかつた。

里にさがつて居ると、殿上人などが来るのをも、何か事ありさうに、皆なが言たりする。別に大して人を好きになつた事もないから、言はれても腹も立たない。又夜晝來る人に、るすを使つ

内野の芝生年をへて、あらぬつくりにせばくなる世を」圓融天皇の頃の池亭記に「西京人家漸稀、殆幾幽墟、突人者有、去無來、屋有壞、無造、其無處移徙、無二賤貧、者是居」とあるは頭中將の感慨に裏書せるものなり
○瓦の松は 白氏文集「麗宮高」の句に「高々 麗山上有宮、朱樓紫殿三四重、運
迎、今春日、玉登樓、今温泉浴、弱々、今秋風、山輝鳴、宮樹紅、翠華不來歲
月久、牆有衣兮瓦有松、吾君在位已五載、何一不幸乎其中、西方去三都
門、幾許地、吾君不遊、有深意」とあるをいへり○瓦の松 詩には「瓦に松」と
いふ「瓦に松生ひ、垣に萬茂れり」などいひて、苔の敷寸なるものなり。京の狭ま
り衰へたるは、やがて王室の衰へたるなるを、宮中に奉仕する侍女等、慨く心はな
くて博學を術ふさまなり○西の方都門を 感慨談に耽る處に、俄に問を出された
るなれども、齊信はこの時代の才學の代表者たる四納言の一人なり、同じき句の中
にて鮮かに直ちに、西の京の近きによせて答へたるなり○宰相中將 宰相は參議の
唐名なり、參議にて右近衛中將を兼ねたれば、いふ。

里に退出たるに、殿上人などの來るも安からずぞ、人々言ひ做なる。甚余り心に引き入たる感、將たなければ、然言んにも憎からず。又夜も晝も來る人をば、何かは不在なども赫き歸さん。實際に睦くなどあらぬも、然こそは來めれ。余り煩くも、實にあれ

て、恥をかゝせるにも及ばない。(が)大して親しくもない人までが來る(のは)、實際余りうるさくもあるから、今度は、何處へ出たとも、一般には知らせず、經房さんや濟政さん位が知つて居なさる。左衛門尉則光が來て、咄をする序に、則「昨日も、宰相中將(信)さんが、妹の居場所を知らないはずはない」と、余まってお聞きになるから、「些とも存じません」と申たらば、意地悪く堀てお尋ねになつた」などと言つて、則「知つて居る事を、知らない振をするのは、實に六かしい。危く吹き出しさうになつたのを、左中將(房)さんが大まじめで、知らない振をして居なさるので、顔を合せたら吹き出しさうで困つたから、ごまかす爲に、)豪盤

ば、此の度出たる所をば、何處とも尋常にては知せず。經房、濟政の君などばかりぞ知り給る。左衛門尉則光が來て、物語などする序に、則「昨日も宰相中將殿の『妹の在處然とも知ぬやうはあらじ』と甚う問ひ給しに、更に知ぬ由申しに、生憎に強ひ給し事など言て、ある事争ふは、甚忙しうこそありけれ。殆ど笑ぬべかりしに、左中將(房)の、甚冷靜く不知貌にて居給りしを、彼の君に見だに合せば、笑ぬべかりしに困惑で、豪盤の上に汚き和布のありしを、唯取に取て食ひ紛し、かば、中間に奇しの食物やと、人も見けんかし。然ど巧う其にてなん申すなりにし。笑なましかば不用ぞかし。實に知ぬなんめりと思したりしも可笑う」など語れば、濟「更に勿聞え給そ」など甚と言て、日來久く成ぬ。夜甚く更て、門騒しく叩ば、何の斯く不安く遠からぬ距離を叩くらんと聞て、問すれば、瀧口なりけり。左衛門(光)の文とて文を持て來たり。皆寢たるに、灯近く取り寄て見れば、文「明日御讀經の

の上にあつた、小汚い和布を、めちやくちやに取つては食べ、とつては食べて居た。時でもないのに、へんなものを、やたらと食べると、人が見たらう。けれども、おかげで笑はずにすんだ。笑つたらもう駄目なのだから。實際知らないのだらうと、お思ひになつたのが、をかしかつた」など、咄すので、清「決して被仰らないでね」と、又、頼んで幾日か、たつた。夜中に門をやたらに叩くので、何者が、遠くもない門を、こんなに叩くのだからうと、人を出してきかせると、瀧口だつた。瀧「左衛門さん(光)のお手紙」と文をさし出す。皆んな、もう寝たのを起して、灯を近くに取寄せよせて見ると、文「明日、御讀經の結願で、宰相中將

結願にて宰相中將(齊)の御物忌に籠り給るに、妹の在處申せと責らるゝに、術なし。更に得隠し申まじき。其處とや聞せ奉るべき。如何に。仰に隨ふ」と言たる。返事も書で、和布を一寸許、紙に包て遣つ。然て後に來て、則「一夜切て問れて、漫なる所に率て歩き奉りて、切に苛責に、甚辛し。然て兎角も御返事の無て、漫なる和布の端を裹て給りしかば、取り違たるにや」と言に、奇しの違へ物や。人の許に然る物包て贈る人やはある。些も心得ざりけると見るが憎ければ、物も言で、硯のある紙の端に、清「被する海士の住家は其處なりと、努言などやめを食せけん」と書て出したれば、則「歌詠せ給つるか更に見侍じ」とて扇ぎ返して逃て去ぬ。斯う互に、後見談合などする中に、何事ともなく、少し仲悪くなりたる頃、文「越せたり。文」便なき事侍るとも、契り聞し事は捨て給て、他にても然ぞなどは見給へ」と言たり。常に言ふ事は、則「己を思さん人は、歌など詠て得さすまじき。惣

(齊)さんが、御物忌に籠りなされるといふので、「妹の居場所を申せ」と責められるから、よん處ない。かうなつては隠し切れないから、そこを申ませうか。どうしませう。おさしづを待つ」と書いてあるので、返事も書かずに、和布を一寸ばかり、紙にくるんでやつた。その後來て、則「あの晩、夜中責められて、よん處なく、あてどもなしに、あちこちつれ歩いて、苦し紛れに手紙で伺つたら、お返事は何ともなくて、へんてこな和布のはしつぽを、くるんで下さつたから、困つてしまつた。何か

の間違へでせう」と言ふ。間ちがへやうもある、そんなものを、たゞ、人の處へやる筈がないのに、些とも分らないのだと、くやくして何にも言はずに、硯の載せてある紙の端をちぎつて、

「かづきするあまの住家はそとなりと、ゆめいふなとやめを食はせむ。」

(かづきする、あまの家は何處だと決して言ひなされるなど、眼くばせをしたのだらうに)

里にまかてたるに

て怨敵となん思べき。今は限ありて絶なんと思ん時、然る事は言へ」と言たりしかば、此の返歌に、

清「崩れ寄る妹脊の山の中なれば、更に吉野の川とだに見じ」と言ひ遣たりしも、實に見ずやなりにけん、返事もせず。然て叙爵

得て遠江介など言しかば、憎くしてこそ止にしか。

かの君 經房をいふ○台盤 食器を載するもの、形、机の横長き如し○め 海藻の食ふべきもの、すべてをいふ、芽の義か藻の轉か、「あらめ」「わかめ」「昆布」等。○申さず 清少の居所をなり○讀經の結願 日數を定めたる修法讀經などの果てたること○さらに「とても」なり○そぞろなる所に 用でもなき處になり○まめやか に、この上に「そのあひだ」の意こもりたり○そぞろなるめ、これも「用でもない、つまらない」意○然ぞ「あれは兄弟だ」とだけ思つて居て下され」なり○いもせ女を妹、男を背といふ、夫婦ならずともなり、則光と清少とは單に兄妹の約束せしに止まり、それ以上の氣色は何處にも見えず。

と、書いて出したら、「又歌ですか、歌は見ません」と(手にもとらず)扇であふぎ返して、遁げて往つた。かうお互ひに、世話をしたり、相談相手になつたりして居る中に、何といふ原因はなく、少し仲が悪くなつた時分に、手紙をよこした。文「お氣に入らない事はあらうとも、兄弟分の約束はやめないで、よそながらも、やはり兄弟と思つて下さい」と言つてあつた。いつも口ぐせに、「私を思つてくれるなら、歌などは決してよこさないでくれ。歌をよこしたりするなら、敵と思ふ。もう是限りつきあふまいと思ふ時に、歌はよこさない」と言て居たから、この手紙の返事に、清「くづれよる妹背の山の中なれば、さらによし野の川とだに見じ」

(岸から川にくづれて落ち合ふ妹背の山の中(男と女)だから、もう是からは決して仲のよい、よし野の川(彼は兄)とだけも、見るのをやめやう)

と、言つてやつたけれども、(前に言つた通り)ほんとうに(歌は)見なかつたと見えて、返事もしない。その中に叙爵されて、遠江介などになつたから、それきりに、仲なほりもしずじまつた。

あはれつぼく思はせるもの(は)

物の哀しらせ貌なるもの、

鼻垂る間もなく拭て、物言ふ聲。眉抜く。

引切なしに鼻を拭み拭み物を言ふ聲。眉毛を抜く時の眼。

眉抜く、この時代は、女、成人すれば眉毛を抜きて、その上に黛にて書きしなり、痛げなる眼つきなるべし

さてその左衛門の陣に往つてから、暫らく里にさがつて居たら、早く参れなど被仰るお文の端に、宮、皆なで左衛門の陣へ往つた朝ぼらけが、いつも思ひ出される。どうしてそんなに素氣なく、捨て置くのか。あの時の事が余り氣に入らなかつたか」など、被仰つた御返事に、清「畏み承りました」と申上げて、御使に、清「あの時の事をどうして忘れませう。宮様もきつともつと引きとめて置きたいと思召して下された事と存じます」と申上げると、御使が、すぐ又歸つて来て、使「いみじく思ふべかんめるなり、誰がおもておせなる事をばいかでか啓したるぞ、唯今宵の中に、よろづの事を捨てて参れ。さらすば憎ませ給はん」とな

さてその左衛門の陣に

然て其の左衛門の陣に往て後、里に出て暫時在るに、宮、疾く参れ」など仰事の端に、宮、左衛門の陣に往し朝朗なん、常に思し出らる。如何で、然、平然打ち振て在るならん。甚く愛たからんとこそ思たりしか」など、仰られたる御返事に、恐縮の由申て、私には清「如何でか愛たしと思ひ侍ざらん。御前にも、然とも、中なる處女とは思召し御覽じけんとなん、思ひ給し」と聞させられたれば、立歸り、使「甚く思ふべかんめるなり。誰が面伏なる事をば、如何でか啓したるぞ。唯今宵の中に、万の事を捨て参れ。然すば甚く憎せ給ん」となん仰事ある」とあれば、清「尋常からんにてだに由し。況て甚くとある文字には、命も全然捨てなん」とて参りに

さてその「職の御曹司におはします頃木立など」の條をいへり、思ひ出すまゝに書きつけしが、散佚せるものを、後人の綴る時、牛をこゝに入れしかなるべし○さりとて「さうはありとも」「もし何か思召にそはぬ事はありとも」なり○中なるをとめ 空穂物語に「仲忠琴に合せてひく『朝ぼらけほのかに見ればあかねかな、中

ん仰言ある」「ほんとうに、私は非常になつかしく思ふ。そちらの不面目になるやうな事を誰が私に申さうぞ。何でもよいから今夜の中に、万事をすて、來なさい。でなければ承知しない」と被仰つた」との事なので、「尋常のお便りでも恐多いのに、まして「いみじく思ふ」とある御文には、命もいりませぬ」と申上げて出仕した。

職の御曹司にお出の時分、西の廂に不斷の御讀經があつた。御本尊の御姿などかけ申し、法師の居るのも(例の事ながら)尊。二日程して、縁の處に變な聲で、「いつもの通り、佛供のお下りをどうか」といふと、「今つから、まだ早」と言つて居る。何者が言ふんだらうと、出て見ると、年とつた尼が、ひどく汚れた狩袴の、筒のやうに細くて短いの上に、帯の下五寸位しかない衣と、かいふ短いやつぱり汚れたのを着て、

職の御曹司に在す頃、西の廂に不斷の御讀經あるに、佛など掛け奉り、法師の居たるこそ、勿論なる事なれ。二日ばかりありて、縁の許に、奇きもの、聲にて、「仍、其の佛供の下しは侍な」と言ば、「如何で尙早には」と答るを、何の言にかあらんと立ち出て見れば、老たる女の法師の、甚く煤たる狩袴の、筒とかやの如に細く短きを、帯より下五寸許なる、衣とかや言べからん、同じやうに煤けたるを着て、猿の形にて言なりけり。遣彼は何事言ぞ」と言ば、聲引き繕て、尼「佛の御弟子に候へば、佛の下し賜べと申すを、此の御坊達の惜み給ふ」と高聲に都雅なり。女房

猿のやうな格好で言つて居る。遣何言つて居るの」ときくと、聲をつくるつて、尼「佛の御弟子ですから、佛のお下りを下さいと申すのを、此の坊様たちが惜みなさるんです」といふ聲が、はき／＼と氣がきいて居る。かういふ下賤の者は、情れて居るのが、あはれつぼいものなのに、いやに元氣だと思つて、遣外のは食べないで佛のお下りばかり食へるとは、大さう貴い事だ」といふ様子を見て、尼「ナニ他のものを食べないわけでは御座いませぬ。それがありませぬから、據どころなくお下りを頂きますんで」と言ふ。菓子だの、のし餅などを器に入れてやつたら、無上に仰よしに成て、いろんな咄をする。若い人(女)たちが出て來て、女房亭主

職の御曹司におはします頃西の廂に

斯る者は、打ち屈したるこそ憐なれ。憂ても活潑なるかな」とて、女房「他物は食で、佛の御下しをのみ食が、甚貴き事かな」と言ふ氣色を見て、尼「何か他物も食ざらん。其が候ねばこそ、取り申し侍れ」と言ば、菓子、廣き餅などを、物に取り入て取せたるに、無下に仲好くなりて、万の事を語る。若き人々出て來て、女「夫やある。」女「何處にか住む」など口々に間に、興しき事、添へ事などすれば、女房「歌は歌ふや。女房「舞などするか」と問も終ぬに、尼「夜誰とか寝ん。常陸介と寝ん。寝たる肌も好し。」是が末甚多り。又、「男山の峯の紅葉、嘸名は立つ立つ」と頭を轉し振る。甚く憎ければ、笑ひ憎て、女房「去ね。去ね」と言も甚可笑し。女房「是に、何取せん」と言を聞せ給て、宮「甚う、何故斯く、片腹痛き事は爲させつる。得こそ聞で、耳を塞てありつれ。其の衣一枚與せて、疾く遣てよ」と仰言あれば、取て、遣其賜らするぞ。衣煤たり。白くて着よ」とて投げ與せれば、伏し拜て、肩にぞ

はあるの。「家は何處？」など口々にきくと、おもしろい入れ事などして、返事をするので、女房「歌は歌ふか」女房「舞などもするか」ときくのを、半分言はせず、尼「夜は誰とか寝ん、常陸介と寝ん。寝たる肌も好し」など、まだ、あとを澤山唄つた。それから尼「男山の峯の紅葉、さぞ名は立つ立つ」と、頭で圓を畫いて振る。余り見ともないので、笑ひ憎んで女房「もうお歸り〜」といふのも、ほんとはをかしい(唄つた質に)女房「何をやらう」と相談して居ると、宮様がおきくに成て、「なぜそんな苦々しい事はさせたぞ。よう聞かずに耳をふさいで居た。その衣一つやつて、早くお歸し」と被仰る。衣をとつて、清「それ下されたよ。眞黒に汚れて

打ち掛て舞ふものか。實に憎くて、皆入にし。後には慣たるにや、常に見しらかひて、歩く。即て常陸介と命名たり。衣も白向す、同じ煤にてあれば、女房「何處遣けん」など憎むに、右近内侍の参りたるに、宮「斯る者なん、語ひ付て置たんめる。斯して常に来る事」と有し様など、小兵衛といふ女房して、眞似ばせて聞せ給ば、右「彼、如何で見侍ん。必ず見せさせ給へ。御得意なんなり。更に豈夫語ひ奪じ」など笑ふ。其の後、又、尼なる不具者の、甚貴やかなるがいで來たるを、又呼び出で、物など間に、是は憚し氣に思て、憐なれば、衣一枚賜せたるを、伏し拜むは然ど好し。然て打ち泣き悦て出ぬるを、疾、彼の常陸介往き會て見てげり。其の後甚久く見ねど、誰かは思ひ出ん。然て十二月の十余日の程に、雪甚高う降たるを、女房どもなどして、物の蓋に入つ、甚多く置くを、女房「同くは、庭に、眞の山を作せ侍ん」とて、侍召て、仰言にて言ば、集りて作るに、主

居るきものを、白いのお着換へ」と投げてやると、伏し拜んで、肩にかけて又しても舞ふ。ほんとうに憎らしくて、皆な入つてしまつた。それから、よい事を覺えたと思つて、しよつちう入り込んで來る。歌の通り常陸介と名をつけてやつた。きものも一向白くならず、相變らず煤ぼけて居るので、何處にやつてしまつたらうと憎らしがつて居る處へ、右近内侍が参つたので、宮様が、「かういふものを、皆なが仲よしにしたやうだ。かうく〜していつも來る」と、小兵衛といふ女房に、眞似をさせてお咄しになる。右是非拜見いたしたう御座います。どうかお見せ下さいまし。折角の皆さんのお仲よしを、決して横どりは

殿司の人にて、御掃除に参りたるなども、皆寄て、甚高く作り成す。宮司など参り集りて、言加へ殊に作れば、所の衆三四人参りたる、主殿司の人も、二十人許になりけり。里なる侍、召に遣しなとす。「今日此の山作る人には祿賜すべし。雪山に参ざらん人には、同からず、止ん」など言ば、聞き付たるは、惑ひ参るもあり。里遠きは、得告やらず。作り終つれば、宮司召て、絹二結與せて、縁に投げ出るを、一づ、取に寄て、拜つ、腰に挿て、皆罷出ぬ。袍など着たるは、傍去で、狩衣にてぞある。宮「是、何時までありなん」と人々に宣するに、「十日は、ありなむ」「十日は有なん」など唯此の頃の程を在る限申ば、宮「如何に」と問せ給ば、清「正月の十五日まで侍ひなん」と申すを、御前にも得然は有じと思すめり。女房などは、一同、年の内、晦日までは有じとのみ申に、余り遠くも申てけるかな、實に得しも然は有ざらん。朔日などぞ申べかりけると、心中には思ど、然ばれ然までな

致しませんから」など、笑ふ。その後又、乞食尼の大さう、きれいなのが来たので、又、呼び込んで、何かきいたりとすると、是は耻しさうにして、しをらしいので、お召を一つお興へになると、だまつて伏し拜むだけなのは、前のよりよい。そして、悦び泣きをしながら出てゆく時に、折あしく、あの常陸介が、出くはして見つけた。それから、大分しばらくの間来なかつたけれど、誰も思ひ出しもしない。すると、十二月の十幾日かに、雪がたくさん降つたので、女房達が、いろんなもの、蓋に入れて、あちこちに置き並べて居たが、女房、いつそ、庭にほんとうの山を作らせませう」と侍を呼出して、宮様の御申付けだといふ

くと、言ひ初てん事はとて、固う争ひつ。二十日の程に、雨など降ど、消べくもなし。長ぞ少し劣りもて往く。白山の観音、これ消させ給なと祈るも、物狂し。然て、其の山作りたる日、式部丞忠隆、御使にて参たれば、褥差し出し、物など言に、忠、今日の雪、山作せ給ぬ所なん無き。御前の壺にも、作せ給り。東宮、弘徽殿にも作せ給り。京極殿にも作せ給り」など言は、

清「此處にのみ珍しと見る雪の山、所々に降にけるかな。」と傍な人して言すれば、度々傾きて、忠、返歌は得仕う奉り汚じ。戯れたり。御簾の前にて人にを語り侍ん」とて立にき。歌は甚く好むと聞しに、奇し。御前に聞し召て、宮、甚く巧くとぞ、思つらん」とぞ宣はする。晦日方に少し小くなるやうなれど、仍甚高くてあるに、晝つ方、縁に人々出で居などしたるに、常陸介出で来たり。清「何故久く見ざりつる」と言は、宮「何か、甚心憂き事の侍しか

と、皆な寄つて来て作る。主殿司の人で、御掃除に来た者なども、手傳つて、恐ろしく高く積み上げた。宮様附の役人たちも寄つて来て、又その上に積み上げるので、宮司、侍所の衆が三四人来たのが、主殿司の人も二十人位来てしまつた。里に居る侍まで呼びにやつたりする。そして、「今日この山を作る人には、祿を下さる。お手傳に来ない者には、下さらない」など、言つたので、聞き付けた者は、あわて、出かけて来る。遠方に住んで居る者には、言つてやれなかつた。出来上つたから、宮司を呼んで、絹を二結わたして、縁に投げ出させるのを、一つづつとりに寄つて、拜んでは腰にさして皆な出て往つた。袍など着た人はまだどかないで、

ば」と言に、女房「如何に、何事ぞ」と問に、宮「仍斯く思ひ侍しなり」とて、永やかに詠み出づ

尾「羨し足も曳れず渡つ海の、如何なる蟹に物賜らん。となん思ひ侍し」と言を、憎み笑て、人の目も見入ねば、雪の山に上り漂泊ひ歩き去る後に、右近内侍に、斯なんと言ひ遣たれば、右、何か、人添て、此處には賜せざりし。彼が、羞くて、雪の山まで登り傳けんこそ、甚悲しけれ」とあるを、又笑ふ。雪山は無異て年も復りぬ。朔日の日、又雪多く降たるを、嬉くも降り積たるかなと思に、宮「是は効なし。初のをば措て、今のをば掻き棄よ」と仰らる。上にて、局へ甚疾う下れば、侍の長なる者、袖の葉の如くなる宿直衣の袖の上に、青き紙の、松に付たるを置て、戦き出たり。清「其は何處のぞ」と問ば、侍「齋院より」と言に、偶と愛たく覺て、取て参りぬ。未だ大殿籠たれば、母屋に當りたる御格子開など、掻き寄て、一人念じて聞る甚重し。片方なれば聳く

狩衣に着かへて詰めて居る。宮「これ、いつまであるだらう」と、宮様がおき、になると、「十日余りは御座りませう」と、銘々それに近い日敷を言ふ。宮「どうだらう」と私におたづねになるから、清「お正月の十五日まで御座いませう」と申上げると、宮様もそんなにはと思召すらしい。女房たちは、女房「まあ年内で御座りませう。それも晦日まではどう御座りませうか」とばかり申上げるので、余り遠い事を申上げた。ほんとはさう永くは持つまい。朔日位に申上げればよかつたと、内心思ふけれども、まゝよ、それまでなくとも、言つてしまつた事はしかたがないと、十五日説を通してしまつた。二十日時分に、雨が降つたけれども、消えさうにもな

に、覺睡せ給て、宮何故、然は爲る」と宣すれば、清「齋院より御文の候んには、如何でか急ぎ開け侍ざらん」と申に、宮「實に甚疾かりけり」とて起させ給り。御文啓させ給れば、五寸許なる卯槌二を、卯杖の如に頭包みなどして、山橋、女羅、麥門冬など美しげに飾りて、御文は無し。徒なるやうあらんやとはとて、御覽すれば、卯槌の頭包たる小き紙に、
「山響動む斧の響を尋れば、祝の杖の音にぞありける。」御返歌書せ給ふ程も、甚愛たし。齋院には、是より聞させ給ふ御返歌も、仍、特殊に書き汚し多く、御用意見たる。御使に白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降り敷たるに、被きて參るも雅しう見ゆ。此の度の御返事を、知す成にしこそ口惜かりしか。雪の山は、眞に越のにやあらんと見て、消え氣もなし。黒く成て、見る効もなき體ぞしたる。勝ぬる心地して、如何で十五日待ち付させんと念すれど、人々「七日をだに得過ぎじ」と仍言ば、如何でこ

い。高さが少しへつて来た。清「白山の觀音様、どうか、これを消さないで下さい」と拜むのも氣狂じみて居る。丁度その山を作つた日に、式部丞忠隆が、上様の御使で參つたから褥をさし出してお咄などして居たらば、愚「今日の雪は、どちらでも山にお作らせになつた。(上様の)御庭にもお作らせになつたし、春宮や、弘徽殿でも、お作らせになつた。京極殿でもお作らせになつた」などいふので、
清「こゝのみ珍しと見る雪の山、ところんゝに降りけるかな。」
(こゝにだけ珍く降つたと思つて眺めて居た雪の山は、方々に降つたのだつた。)

と、傍の人に言はせると、幾度も首を

職の御曹司におはします頃西の廂に
れ見果んと皆人思ふ程に、俄に三日内裏へ入せ給へし。甚う口惜く、此の山の終末を知らず成なん事を切に思ふ程に、人も女房實に欲見かりつるものを「など言ふ。御前(中)にも仰らる。同くは言ひ中で御覽せさせんとする効なければ、御物の具運び、甚う騒ぎに合せて、木守といふ者の、築土の程に廂作て居たるを、縁の許近く呼び寄て、清「此の雪の山、甚く監視て、童などに踏み散させ毀せで、十五日まで候せ、善く善く監視て、其の日に當ば、愛たき祿賜せんとす。私にも甚き謝禮言ん」など、談ひて、常に臺盤所の人、下司などに乞て與る菓子や何やと、甚多く與せれば、打ち笑て、木「甚易き事。確實に守り侍ん。童などを登り侍ん」と言ば、清「其を制して、聞ざらんものは、事の由を申せ」など言ひ聞せて、入せ給ぬれば、七日まで侍ひて出ぬ。其の間も、是が不安き隨に、官人、樋洗、長女などして、絶す監督に遣り、七日の御節供の下しなどを遣たれば、拜つる事など、

傾げて、忠、下手な御返歌をして、汚すやうな、ふざけたまねは致しますまい。御簾の前で皆なに咄ませう」と言つて立つた。歌は非常に好きだときいたのに返歌もしないのは、不思議だ。宮様がお聞きに成て、宮、素晴らしい返歌をしやうと思つたのだらう」と被仰る。晦日頃には、少し小さくなつたやうだけれども、まだ大分高い。晝頃、縁に、皆なで出て居ると、常陸介がひよつこり來た。清、随分永い事、どうして來なかつた」ときくと、當、いえもう、たまらない、いやな事が御座いまして」と言ふ。「どんな事」ときくと、當、こんな事を存じました」と、聲を引張つて詠んだ。當、うらやまし足もひかれずわだつみの、いかなるあまに物たまふら

歸ては笑ひ合ひ。里にても明る即刻是を大事にして見せに遣る。十日の程には、五六尺許ありと言は、嬉しく思に、十三日の夜、雨甚く降ば、是にぞ消ぬらんと其う口惜し。今一日二日も待ち付でと、夜も起き居て歎ば、聞く人も物狂しと笑ふ。人の起て往に、即て起き居て、下司起さするに、更に起ねば、憎み腹立て、起き出たるを遣て見すれば、使、圓坐ばかりに成て侍る。木守甚嚴う、童も寄で守りて、木、明日明後日までも候ひぬべし。祿賜らんと申す」と言は甚く嬉しく、疾か明日にならば、甚疾う歌詠て、物に入て參せんと思も、甚待遠う佗しう、未だ聞きに、大なる折櫃など持せて、清、是に白からん所、一向入て持て來。穢げならん處は掻き捨て」など、言ひ合て遣たれば、甚疾く、持せて遣つる物引き提て、使、疾う亡せ侍にけり」と言に、甚驚歎し。興しう詠み出て、人にも語り傳させんと、呻き誦じつる歌も、甚惘しく効なく、清、如何に爲つるならん。昨日然許有けんものを、夜の

ん(どうして足もひけない、びつこの尼に、澤山の下され物があつたのだらう美ましい)と思ひました」と言ふんで、憎らしがつて笑つた。誰も知らん顔をして居ると、雪の山に上つたり、そこらまごついたりして、往つてしまつた。あとで、右近内侍に、清、斯うく、だつた」と咄すと、右、なぜ誰かつけて、此方へはおよこしなさらなかつた。氣まり悪さに、雪の山まで、まごついたのが、ふびんだ」と言つてよこしたので、又笑つた。雪山は、ちゃんとしたまんま、年もかはつた。元日に、又澤山降つたので、よくまあ降つてくれたと嬉しがつたら、宮、これは役に立たない。初めのだけおいて、今度のは掻いて捨てよ」と被仰る。上に宿直して局

間に消ぬらん事」と、言ひ屈すれば、使、木守が申つるは、木、昨日甚暗うなるまで侍き。祿を賜んと思つるものを、賜すなりぬる事」と手を拍て申し侍つる」と言ひ騒ぐに、内裏より仰事ありて、宮、然て雪は今日まで有つや」と宣せられたれば、甚憾く口惜けれど、清、年の内、朔日までだにあらじと、人々啓し給し。昨日の夕暮まで侍しを、甚偉しとなん思ひ給る。今日までは余りの事になん。夜の間に、人の憎がりて、取り捨て侍にやとなん、推し量り侍る、と啓せさせ給へ」と聞させつ。然て廿日に參りたるにも、先づ此の事を御前にても言ふ。皆消つとて、蓋の限引き提て持て來りつる、帽子の如にて、即刻參で來つるが驚嘆かりし事。物の蓋に小山美う作りて、白き紙に歌甚く書て參せんと爲し事など啓すれば、甚く笑せ給ふ。御前なる人々も笑に、宮、斯う心に入て思ける事を、違たれば罪得らん。實には、四日の夕さり、侍們遣て、取り捨させてぞ。返事に言ひ中たりしこそ、興しかりし

へ朝早く下りると、侍の長が、柚葉のやうな宿直衣の袖の上に、青い紙を松につけたのをのせて、ぶる／＼ふるへながら、さし出した。「何處から」ときくと、「齋院から」と言ふので、清「まあお珍しい」と、受とつて、宮様へ持参した。まだ御寝なつて居らつしやるから、母屋の前の御格子をあけやうと、そこらの物をかき集め寄せて、踏臺にして、一人で一生懸命あけるが、大へんに重い。一人で一方ばかり上げるのだから、ぎし／＼音がするので、お眼覺になつて、宮「なぜ、戸などあけるのか」と彼仰る。清「齋院から、御文が参りましたのですもの、どうしてゆつくり致して居れませう」と申すと、宮「道理で、余り疾いと思つた」と、お起

か。其の翁(守)出で来て、甚う手を摺て言けれど、仰言ぞ。彼のより來ん人に、斯う聞すな。然ば打ち毀せんとて、左近の府の南の築土の外に、皆取り捨てけり。「甚高くて、多くなむありつる」と言ふなりしかば、げに二十日まで待ち付て、好せずば今年の初雪にも降り添なまし。帝にも聞き召て、「甚思ひ寄り難く諍ひたり」と、殿上人などにも仰られけり。「扱も彼の歌を語れ。今は斯く言ひ顯しつれば、同じ事勝たり。語れ」など、御前にも宣はせ、人々も宣ど、清「何せんにか、然許の事を承りながら、啓し侍ん」など、切に心憂がれば、帝も渡せ給て、帝「實に、年來は尋常の人なんめりと見つるを、是にぞ奇く思し」など仰らるるに、甚ど憂く、打も泣ぬべき心地ぞする。清「率、噫、甚き世の中ぞかし。後に降り積たりし雪を、嬉しと思しを、其は効なしとて掻き捨て仰言侍しか」と申は、帝「實に勝せじと思しけるならん」と帝も笑せ在す。

きに成た。御文をおあけになると、五寸位の卵植二つを、卵杖のやうに、先の方を包んだりして、山橋だの、ひかげだの、やますげなどをきれいに飾つて、(あるだけで)別に御文はついて居ない。御文のないわけはないと、御覽になると、卵植の先を包んだ小さい紙に、
齋山とよむ斧のひびきをたづぬれば、いはひの杖の音にぞありける(山にこだまする斧のひびきを、何だと思つてたづねたら、祝ひの杖をつく音だつた)とあつた。御返しをお書きになる御様子も、誠によい。齋院にお上げになるのは、やはり格別、お書き直しが多く、御注意深くなさる。御使に白い織物の單衣と蘇枋色のは梅だらう。雪の

不斷の御讀經 晝夜不斷の御讀經の義なり、一晝夜を十二時とし、十二人の僧を招じ置きて、大般若經、最勝王經、法華經等を毎時輪番に間斷なく、讀經せしめらるるなり○佛など 本尊の幅などかくるなり○狩袴 狩衣の袴にて布袴なり○筒とかや 筒のやうに細く見立なきをいふ○みじかきを この下に「つけて」の意あり、紫式部日記に、十二月晦日の夜、禁中に追別入りて靱負、小兵部といふ女房二人、はだかにて居たる條あり、「なをさめ殿にある御ぞ、とり出でさせてこの人々に給ふ。中畧はだか姿は忘れず恐しきものから、なかしうとも言はず」などあり、正暦五年二月には、賊、禁中の後涼殿に放火したる等、この頃は朝家の威衰へ、里内裏に門衛もおろそかにておはしませば、かゝる卑賤の者も入り来て、宮女が清閑の弄びとなれるなるべし○まことのやま 雪の山の事。禁秘抄に「年内、雪、蒙、催、所、衆、瀧口參、春、雪、春、鼻、隱、必、可、參、大内、藤、壺、弘、殿、也、里内、依、二、便、宜、藏人、下、知、修理、職、備、屋、具、雪、不足、時、被、召、諸、御、願、寺、二、執行、奉、之、中、畧、知、此、事、上、古、不、見、自、二、中、古、事、也、事、始、大、畧、一、條、院、御、時、以、後、也」云々その時の賜は「女房、藏人以上、絹一疋、主殿、掃部、女官、信乃、布四、端下、各二端」以下「依、差、給、之」とあり、この時も諸所に作られたる事、下文にあれば今少し前よりの事か、されど「まことの山を作らせ」などあるを見れば、この時が始めのやうにも見ゆ(里内は里内裏なり、臣下の家などに住はるゝ時にいふ)○さととなるさぶらひ 家に居る非番の侍なり○二ゆひ この頃は、くる／＼と押まきあるなり「巻絹」○うへのきぬなど 宮司などなり○狩服 畧服の狩衣にてなり○十日余りはありなん この下に「とて」の字落ちたるか、(他本「十日はありなむ」「十日余りはありなむ」などあり)○この頃のほど 十日近所の日数を、なり○二十日 十二月廿日なり○しらやま 加賀國にあるなれども、彼のあたりをすべて「越」といへり、「この白根」、又「雪のしら山」など。

どん／＼降る中を、被^かいて歸るのもおもしろい。何といふ御返事か、承らずにしまつたのが惜い。雪の山は全く越の白山のやうで消えさうもない。黒くなつて見ともなかつた。勝つたやうなので、どうか十五日までもたせたいと祈るけれども、七日までも、もつまいと人がいふので、いつまでだか見果てやうと皆なが思ふ中に、急に三日に内裏へ居らつしやることになつた。たまたまなく残念で、此の山の終りを見ずにお供をする事としみ／＼思ふ處に、皆なも、「ほんとうにいつまであるか見たかつたのに」など言ふ。宮様も、さう被仰る。しかたのない事だけれど、折角言ひあて、お眼にかけやうと思つて居た効がないので、御道具を運んだ

古今集に躬恒「よそにのみこひやわたらんしら山の、ゆき見るべくもあらぬわが身は」十一面觀音ありといふ○春宮 春を東とし、万物の成長は東よりするを以て、東宮とも春宮ともかき、春の字を東の音と通じて讀む、この時の東宮は、一條天皇の御伯父、冷泉院の御子居貞。御即位の後、三條天皇と申す○弘徽殿 清涼殿の北、七間四面、皇后女御の御座所。當時は女御義子(閑院太政大臣公季の女)住はれたり○京極殿 藤原道長の邸、京極土御門殿なり、南北二町東西一町、壯麗秀美なりといふ、後一條、後朱雀、後冷泉の三天皇及び道長の女なる、四皇后の誕生所なり、長久元年に焼く○人にを 「を」は余情を含め又意味を強むる助辭、「人に」を強くいふなり○常陸介 「常陸介と寝む」と歌ひしかば、あだ名せるにて、物乞の尼なり○なにか 「どうも」位の意○承やかに 朗詠するなり○人の眼も 誰も横を向きて相手にならぬなり○右近内侍 清少は折々この人の事を擧げたり(翁丸の時にも)異彩ある人なるさまは、處々の詞にもあらはれ、多くの女房の中に、清少も人がましく相手にしたるらし、榮花物語浦々のわかれの巻に、中宮の御見伊周は播磨に、陸家は但馬に流されなど、まことに悲しき折から、中宮の御産あり(脩子内親王)その條に「御湯殿には、内よりの御御事にて、右近の内侍を參りたる」かくて右近の内侍、七日がほど過ぎて内に參れば」などあり、この姫宮三歳の時、敦康親王御誕生の時にも「御湯殿に右近の内侍、例の參る」とあり、中宮に心よせの、まめやかに才氣ある人に見えたり○松につけたる 草木に文をつくる事、この頃の風習なり○さい院 齋王ともいふ、未婚の内親王にして賀茂明神に仕へ奉らるゝもの、御一代に一人立つ、この時は村上天皇第十の皇女、選子内親王(安子皇后)の姫宮を生みおきて崩せられたり)にて圓融、花山、一條、三條、後一條の五朝に破格を以て重任されたり、世に大齋院と號す、在職五十七年、後一條天皇の長元四年辭し

りして、大ごた／＼の中で、木守といふものが、築土の處に廂をかけて居るのを、御縁近くに呼んで、清この雪の山を、嚴重に番をして、子供などに踏み散させず、十五日まで置くやうに、よく／＼氣をつけて、十五日になつたら、宮様から結構な下され物があるさうだし、私からも、しつかりお禮をするから」など頼んで、いつも、豪盤所の人や、下司などによこさせては皆なに遣る、くだものや何かを澤山にやると、にこ／＼して、本、お易い御用で御座います。たしかに番を致します。でも子供などが上りませう」といふ。清、そしたら、とめて、もし、きかなかつたら、此方へ言つて来るやうに」など、言ひ聞せておいて、宮様のお供をして、

て尼となり、同八年薨す七十二歳。才智のいみじかりしさまは大鏡に「今の關白殿(道長の息、頼通)兵衛佐にて御禊の御前驅せさせ給へりしに、いと効くおはしませば、例は本院にかへらせ給ひて人々に難などは給はするを、これは河原より出ださせ給ひしかば、思ひがけぬ御事にて、さる御こゝろまうけも、なかりければ、お前に召ありて御對面などさせ給ひて奉り給へる(着用せる)御小袿をぞかづけ奉らせ給ひける、入道殿(道長)きかせ給ひて、「いとをかしく給へるかな、難なからんも便なく、取りにやり給はんも程へぬべければ、取り分きたるさまを見せ給ふなめり、えせ者(平凡人)は得思ひよらじかし」とぞ申させ給ひける」又、同じ書に「當代(後一條)や東宮(後朱雀)などの、また宮達にておはしし、時、祭(賀茂)見せ奉らせ給ひし、御さじきの前過ぎさせ給ふほど、殿(道長)の御膝に、二所(後一條後朱雀、いづれも上東門院の出なれば道長の孫なり)ながら据ゑ參らせ給ひて、「この宮たち見奉らせ給へ」と申させ給へば、御輿の帷子より、赤色の御扇のつま(端)をさし出ださせ給へりけり、殿を初め奉りて、「なほ、こゝろばせ(才智)めでたく在する院なりや、かゝる、しるしを見せ給はずば、いかでか見奉らせ給はむとも、知らまし」とこそは、感じ奉らせ給ひける」などあり、機を見るに敏に、世と共に推し移りて、誰にも敬愛されし人と見えたり○あたりたる 母屋(中央の間の前、即ち中宮の寢所の前の格子なり)○かきよせて あたりにあるものを足つきにしてなり、一本この上に「基盤など」の字あれども、なくてもありぬべし○念じて 重きをこらへてなり○片方なれば 兩端を二人して持ちてあくれば、たやすきなり○やま橋 菘柑子なり、高さ四五寸の小木○をの 「祝ひ」といふ詞あれば「よき」横切の意にて芥の小さきもの」と、よむべしの説もあれど「よむ」とあるには、此の方、合ひたるやうなり○繻物 絹に文あるもの、「綾」○梅 襲の名、表白く裏濃き蘇芳

七日までお付き申て、里に下つた。その間も、これが心配になつて、御所の役人や、すまじだの、をさめなどを、しじうやつて、木守に氣をつけ、(頂いた)七日の御節供のお下りなどをやつたらば、拜んだ事などを、歸つて来た者が、笑ひ合つた。里でも、夜があげると、すぐ一番に(山を)見せにやる。十日頃に、五六尺位あると言ふので、嬉しく思つた處が、十三日の晩に、雨がひどく降つたので、これで消えてしまふだらうと、たまらなく残念だ。清も一日二日待つてくれればよいのに」と、夜中、寝もしないで嘆息するのを、どうかして居ると、聞く人が笑ふ。人が起き出したので、起き上つて下司を起させると、一向起きない。

(暗赤色)とも、表裏ともに蘇芳ともいへり、こは下の方ならんか〇雪のふりしきたるに、あたりは雪にて白きに蘇芳色の衣かづきたる美さ思ひやるべし〇かづき、衣を與へて被かしむるより轉じて纏頭(俗に祝儀)といふ〇御返りをしらすなりにし、中宮の御返事の内容を承らざりしが残念となり〇このやま、いにしへは三越(越前、越中、越後)を古志の國といひたり、夫木集に右大臣家佐「この山たておくさなのかひぞなき、日なふる雪にしるし見えれば」〇木守、植木師〇居たるを、そこに居て樹木の事をなし居るなり〇台盤所の人、中宮の臺ばん所の役人〇童などぞ、この上に「されど」の意あり〇おほやけ人、禁中の下級の仕人〇すまし、御湯殿の掃除などする女官(女官といふは女房より下輩なり)〇をさめ、下司の老女〇笑ひ合へり、木守の處に使ひにゆきし下級の人たちなり〇おき出でたるを「たる」の下「者」の意あり〇わらうだ「圓坐」ともいふ、藁、又は蒲、菅等にて渦の如く平たく組みたる褥〇折櫃、薄板を折り曲げて作れる櫃、今菓子など入る、箱は、その遺風なるべし〇ついたち、一月のついたちなれば、こにては元日の事、(ついたちは月立の音便)月立ちし初めの日なふなり〇しろき紙、物のふたに雪の山を作りて、白き紙に歌をかきてつけんとせると、上文に青き紙を松につけたると、いづれも同色なるは、當時色彩の趣味の發達せるさま見ゆ〇夕さり「夕しあり」の約〇左近のつかさの、左近衛府は上東門の西南、弓場殿の北にあり〇ついたち、築土の約轉、土屏なり〇いと高くて、禁秘抄に「修理職儲、屋具(屋根の雪をかき落すなり)雪不足時、被召、御願寺」とあれば、大きに高きなるべし、第七十六代近衛天皇の久安二年の雪の山は、東西一丈五尺、南北一丈二尺、高さ一丈八尺七寸とあり〇打も泣きぬべき、いかばかり笑止なる顔したりけん、有様思ひやられて、ひとり笑ひせらる。この詞は、いとよく用ゐられたり。

憎らしくて腹が立つて、起き出した方の者をやつて、見せると、使、圓坐位になつて居ります。木守が一生懸命で子供も寄せつけずに番を致しまして、「(この分では)明日明後日までありさうだ、祿が頂ける」と申て居ります」といふので堪らなく嬉しく、早く明日になつたら、早朝に歌を詠んで、(雪を)何かに入れて、さし上げやうと、思ふのも、待遠で堪らない、間い中から、大きな折櫃など持たせて、清、これに、白い所を、一杯入れて持つて来るやうに。汚い處は掻き捨て、「」など言ひ含めて遣つたら、間もなく持たせてやつた物をぶらさげて、「もう、なくなつてしまひました」と言ふので、あきれてしまつた。上手に詠んで、人にも咄し傳へさせやうと、一人で誦んで見たりして居た歌も、まるで役に立たない。清、どうしたといふのだらう。昨日、圓坐位あつたといふのに、一晚の中に消えてしまつたのかしらん」と、こぼして居ると、使、木守が申しましたに、「昨日眞暗になる時分までは、(たしかに)御坐りました。祿を頂き損ねてしまひました」と残念がつて手を打て居りました」と、咄し騒ぐ處に、宮様からお使で、宮、さて、雪は今日まであつたか」とお尋ねがあつた。残念で堪らないけれども、清、年内だけだらう、元日までは持つまいと、皆さんが申上げなかつたのが、昨日の夕方まで御坐いましたから、よく申てた分だと存じます。今日までは、余まり無理で御坐いました。(もつとも)夜の中に、誰か私を憎らしがつて、打捨つたのかと存じます」と申上げて下さい」と言つた。

さて、廿日に上つた時にも、先づ、この事を、宮様の御前でも言ひ出した。清、皆んな消えてしまつたと、蓋だけぶら提げて、(身を)帽子のやうに(かぶつて)、すぐ歸つて参りました時の情なさ。實の處は、物の蓋に(眞白な)小山を美しく作りまして、白い紙に歌を立派に書いて差上げる、つもりで御坐いましたのに」など、申上げると、大さうお笑ひになる。お側の人たちも笑ふ。宮、そんなに一生懸命の事を、ちがへたのは、罰が當りさうだ。ほんとうは、四日の夕方、侍達をやつて、打捨らしたのだ。返事に言ひあてたのが、よかつた。その翁が出て来て、大さう手を摺つて、頼んださう

だけれども、「宮様の仰せだ、取りに来た者に、きつと言ふな。言ふと（この家を）毀させるぞ」とおどかして、持つて来て、左近の役人に、南の築土の外へ、皆な捨てさせた。中々高くて、澤山あつたといふから、ほんに、廿日までもあつたらう。ひよつとすると、今年の初雪が又その上に積るかも知れなかつた。上様（帝）もお聞きに成て、「うまく考へあてたものだ」と、殿上人などにも、褒めてお咄しに成た。その歌は、何と言つたぞ、もう斯う白状したからは、勝つたのも同じだ。聞かせて」と被仰るけれども、清「さういふ事を承りながら、何だつて申上げられませう」と、口惜くて居ると、上様もお出でに成て、帝「全く今迄は、一通りの女と思つて居たが、今度の事には感心した」と被仰るので、（今日まであつたら、さぞ面目を施す事と）、余計に残念に成て、泣き出したいやうな氣がする。清「もうほんとうに、いやな世の中で御坐います。あのあとで、又降りました時に、あゝ嬉しいと存じましたらば、それをまぜてはいけないから、掻き捨てよと被仰つたり遊ばして」と申上げると、帝「勝たせまいと思ひになつたのだね」と、上様も笑つて居らつしやつた。

立派に見えるもの（は）、

唐錦。饒太刀。作佛の木目。色あひ美く花の房の長い藤が、松にかゝつて居るの。（そして）六位の藏人が、やはり立派だ。高位の若殿でも、滅多とお着にならない、綾織物をやたらと着て、

愛たきもの、

唐錦。饒太刀。作佛の木理。色合好く、花房長く咲たる藤の、松に掛りたる。六位藏人こそ仍愛たけれ。甚き君達なれども、得しも着給ぬ綾、織物を、心に任せて着たる、麴塵色姿など、甚愛たきなり。所衆、雑色、地下の人の子供などにて、殿們的四位

麴塵姿などが恐ろしく立派だ。所の衆や、雑色や、地下の息子などでは、四位、五位、六位の殿たちの下に使はれて、（一向）眼立たなかつたのが、藏人になると急に、びつくりする程、立派に見える。宣旨を持つて来たり、大饗の甘栗の御使などにゆくと、先方で御馳走する様子などは、今まで、何處に居た天人なのだらうと思はれる。女御や后になつて居らつしやる方が、まだ姫君など申上げた時分、お召のお使でゆくと、上様の御文を頂きなさる御様子から、立派な衣装をした女房が、御褥を持つて出る袖口の美事さなど、今まで、朝晩見なれた人のやうにもない。下襲の裾を長く引張り散して、衛府の役を兼ねて居るのは、又一層立派だ。（姫君

五位六位も、官あるが下に打ち居て、何と見ざりしも、藏人に成ぬれば、得も言すぞ驚しく愛たきや。宣旨持て参り、大饗の甘栗使などに参りたるを、扱し饗應し給ふ様、何處なりし天降人ならんこそ覺れ。御女の女御后に在す、未だ姫君など聞るも、御使にて参りたるに、御文取り入るより打ち初め、褥差し出る袖口など、明暮見しものとも覺す、下襲の裾引き散して、衛府なるは今少し美う見ゆ。自身盃献しなどし給を、我が心にも覺らん、甚う畏り、別に居し家の君達ども、氣色ばかり畏敬たれ、同じやうに打ち連れ歩く。帝の近く使せ給ふ様など見るは、憾くさへ覺れ。御文書せ給は、御硯の墨摺り、御團扇など使用給は、我仕う奉るに、三年四年計の程を、衣裳悪く物の色拙うて交んは、言ふ効なきものなり。冠得て下ん事近くならんだに、命よりは勝りて惜かるべき事を、其の御給りなど申て、感けこそ口惜けれ。昔の藏人は、今年の春よりこそ泣き立けれ。今

の親御の、大臣や關白様が、御直に御盃を下さるのも、自分ながら（名譽な事と）思ふだらう。今まではすつかり恐入つて、同席の出来なかつた、その若君達にも、少し畏つた様子はするけれども、並んで歩いたりする。上様が、御身近くお召使ひになる様子などを見ると、憎らしい位だ。御文をお書きになるときは、御硯の墨を指り、御團扇を召されれば、お扇ぎ申上げる。その三四年間を、みなりわるく、よい加減の格好で奉仕するのは、つまらない。叙爵されて、殿上から下りる時が近づくだけでも、死ぬ程つらいわけなのに、そのねぎらひに給はる官職に、奔走するのは、見ともない。昔の藏人は、その年の春から、泣きさわいだ。今は

の世には競走をなん爲る。

博士の才あるは、甚愛たしといふも愚なり。顔も甚憎げに、下臈なれども世に貴き者に思れ、畏き御前に近付き参り、然べき事など問せ給ふ御文の師にて侍ふは、愛たくこそ覺れ。願文も、然べきもの、序作り出して、譽らるゝ、甚愛たし。

法師の學識ある、惣て言べきにあらず。持經者の一人して讀よりも、數多が中にて、時など定りたる御讀經などに、仍、甚愛たきなり。開うなりて「孰、御讀經燈油、遅し」など言て讀み止たる時、忍やかに續げ居たるよ。

後の晝の行啓。御産屋。立後の作法。獅子、狛犬、犬床子など持て参りて、御帳の前に装置ひ据ゑ、内膳御竈渡し奉りなどしたる、姫君など聞し臣下とこそ、露見させ給ね。一の人の御外出。春日詣。蒲萄染の織物。すべて紫なるは何も何も愛たくこそあれ。花も、糸も、紙も、紫の花の中には杜若ぞ少し憎き。色は

官職を得る方に、馳けつこをする。

博士の學殖のあるのは、ほんとうに結構なものだ。類つきも随分悪く、身分も低いけれども、大したものには思はれ、恐れ多い御前にも、お近づき申し、然るべき事などお尋ねになる御學問の先生として、お傍に侍るのは結構な事だ。願文や、詩文などの序を書いて譽められるのがまことに結構だ。

法師の學識のあるのは、無論結構だ。持經者は、一人で讀むよりも、多勢一緒の、時を定めた御讀經などの時が、余計に結構だ。暗くなつて「誰ぞ御讀經油を早く」などと、皆んなが讀み已めた時分にも、口の中で小聲で讀み續けて居るんだもの。

愛たし。六位の宿直姿の雅しきも、紫の故なめり。廣き庭に雪の降り敷たる。今上一の宮(兼敦)未だ童にて在すが、御叔父に、上達部などの若やかに清げなるに抱れさせ給て、殿上人召し使ひ、御馬引せて御覽じ遊せ給る、思ふ事在じと覺る。

からにしき 支那より來る錦、今いふ舶來なり、これに對して日本にて、昔韓國の職工來りて教へし方法によりて織るを、大和錦といふ、共に五彩にて花鳥などを織り出だせるもの○かざり太刀 裝飾を施したる太刀なり、金 作(大臣)銀作(大納言)螺鈿劍(行幸に公卿以下)○つくり佛 佛像なり、箔置き、漆にて塗るが多かりし時代に、名工の木彫の木理の見ゆるは殊に貴く珍く見えたるべし○あや織物 五位以上の朝服なれども、藏人は六位にても着用を許さるゝなり○あせ色姿 あな色は「麴塵」なり、天皇の常の御服、黄にして青みあり、御紋(織たる模様)は桐、竹、鳳凰、又は唐草と鳥。藏人はこれの御下りを拜領し着するなり○所のしう 藏人所に屬して、雜事を辨する六位の稱、「藏人所の衆」を略したるなり○雜色 藏人所に屬して雜役に供する者の稱、良家の子弟之に補す○つかさあるが下に 官職ある人の下に使はれてなり○大きやう 二宮のは禁中正月二日の公事なり、群臣、中宮、東宮に拜禮して後に、玄輝門の西廊にて中宮の饗に就き、次に東廊にて東宮の饗に就く。又大臣の大饗は大臣に任ぜられたる人、翌年の正月、諸大臣以下殿上人を招きて饗宴を張るなり○甘栗の使 大臣大饗の時、天皇より栗の實を大臣に賜はるに、六位の藏人を御使とさるゝをいふ○女御 天皇侍妾の官名。皇后(中宮)の

な御作法。獅子狛犬。大床子など持つて
いつて、御帳の前に飾り据ゑ、内膳が御
籠を(御膳屋に)渡し奉つたりする(御
有様は、今まで)姫君など申した臣下
とはまるでちがふ。

一の人の御外出。わけて春日詣(がお
立派だ)。蒲葡染の織物がよい。すべて
紫色のものは、何でもよい。花でも糸
でも紙でも。紫の花の中では杜若が少
しいやだ、色はよいけれども。六位の
宿直姿の風情のあるのも、紫のせいだ
らう。廣い庭に雪が一杯に降たの(も
よい)。今上の一の宮様、まだ童で居ら
つしやるのが、御叔父の上達部などの
お若い美しい方に、お抱かれになつて、
殿上人などに御馬を引かせて、御覽じ
お遊びになつて居らつしやるのは、何

次○后 侍妾の惣稱○袖口 姫君方の女房も晴の装束したれば、袖口の美しきさま
なり○引きちらして 大きくなり居るさまなり○衞府なるは 衞府なる藏人はの意
(衞府は近衛、兵衛、衞門の三府をいふ)六位の藏人の兼任は式部丞(式部省の三
等官)及び三府の中の三等官(左衞門尉の如し)なり○別に居し家の君達 今まで
同席せざりし、その家の君達なり○よろしう よいかげんの意に用うる「よろし
う」なり、三四年間(六年なれども、大よそにいふ)の在任中を、家計豊ならぬ藏
人の、服装悪しくて動むるをいふ○かうぶり 叙爵なり 五位に叙せらるゝ事○下
りん事 殿上を下るゝ事なり、昇殿を許さるゝは四位以上の殿上人と、六位の藏人
なれば○御給はり 藏人在任の六年の勞により五位に叙せられ、殿上を下りて受領
に補せられ、地下人となる事○にく氣に 公卿と比べて品なき顔なるべし○下らふ
官位卑きなり○博士 文章博士なり○願文 神佛に祈願する時、願意をしたゝむ
る文なり、この下に「又」の意あり○ついで 序文なり、紀貫之の古今集、大井
河行幸の類○持經者 他の修行はせず、特に法華經を不斷に誦む僧○時など定ま
りたる 晝夜六時の佛道の勤行なり、晨朝、日中、日没、初夜、(夕より夜半まで)
後夜(夜半より朝まで)○晝の行啓 行啓とは、三宮(太皇太后宮、皇太后宮、皇
后宮)皇太子のお出ましをいふ、后の、わけて、絲毛の御車(牛車の車蓋に、提
りたる絹糸を篋の如く垂れたるもの)女房の、出衣(車の簾の下にいろり重りた
る袖口などを故らに出すなり)等の美しきが眼立つなるべし(省略の爲か多くは夜
の如し)○御産屋 後宮の例として、懷孕三四ヶ月の後には奏して里亭に退出し、つ
いで着帯の儀あり、産期には陰陽師、もしくは僧侶を召して破ひ、祈禱等の事を行
はしむ、御産室のありさま、御疊十二疊、いづれも白べり、御屏風、松竹梅の白繪
にて深縁(まはりに張る紙)なし、御産後、近衛大將をして御劍を御誕生の皇子に

の御屈托もおありになるまいと拜見す
る。

犬 この「獅子」を他本「しく」又は「し」として作法の下に續けたるあり、誤寫なるべし、狛犬は高麗犬の義。初め高麗より渡
せる獸、狼に似て羊を驅るといふ。獅子の像と共に木石にて作り御帳臺の前に向はしめて置く、鬼魅を避くといふ(左、獅子)獅子
は黄色にて口を開き、狛犬は白色にて口を閉ぢ頭に一角をそなふ。神社にもあり、誤りて「あま犬」といふ○大床子 机の形したる
食臺なり、上に打臺をつけたる高麗を敷きあり○内膳 天皇の御膳の事を司る○御へつひ 靈神なり、天皇他所に行幸の時、中納
言以下それに供奉す、立后の時皇后の方にも分祀するなり○一人 攝政關白の異稱(攝關の人は必ず一座の宣旨を蒙り、官の次第
によらず、一座の上に居ればいふ)○春日詣 大鏡に「鎌足の大臣生れ給へるは、常陸國なれば、かしの鹿嶋といふ所に此の御神
を住ましめ奉り給ひて、その御世より、今に至るまで新き帝、后、大臣立ち給ふ折は御幣使必ず立つ、帝、奈長におはしまし、
時、鹿しま遠しとて大和國三笠山に振り奉りて、春日明神と名づけ奉りて、今に藤氏の御氏神にて、おほやけ、男、女、使に立てさ
せ給ひ、后の宮、此のおとゞ、公卿皆この明神に仕うまつり給ひて、二月、十一月上の申の日、御祭にてなん」云々とあり○えびぞ
めの織物 單に「えびぞめ」といふは滄紫の染色なり、その織物といふは、經紅に滄紫なる糸にて織れるもの、即ち蒲葡色なり○
六位の藏人のとのみ姿 深紅、深紫は紫色にて敷許なくしては着られぬなれども、六位の藏人は麴塵色の袍に紫の指貫なりしなり○
ふりしきたる この下に「めでたし」の意あり○一の宮 今上(一條帝)の第一の皇子、御母は中宮定子○御をち 中宮の御兄、准
大臣伊周、御弟、兵部卿隆家をいふか、大鏡に「この帥殿(隆家)は御はらからといふ君達數あまたおはすべし、頼親の内藏頭、周
頼の木工頭などいひし人、片はしよりなくなり給ひて、今はたゞ兵部大輔周家の、君ばかりはのめき給ふめり」とあり、若き御をち
とあるは、それらの人の、世に在りし時をいふか、敦康親王は二歳の時に、御母皇后崩御、十歳の時、道長の女、中宮彰子御弟敦成
を生み、翌年敦良を生む、その翌年御をち伊周薨、次の年御父一條天皇、三條天皇に讓位、その月(六月)崩御、十八歳の時、御弟後
一條(敦成)即位、翌年二月敦良親王皇太弟となる、その年十二月十七日廿歳にして薨せられたり、大鏡に「世を思しくづなれて、月
ごろ御病もつかせ給ひて」云々とあり。

優美なもの

細やかに美しい君達の直衣姿。可愛らしい童女が別に表の袴などは、つけず、綻ばし勝な汗衫だけ着て、薬玉など、糸を長くして袖につけたのが、勾欄の處に、扇で顔を隠して居る様子。若くて美しい人が、夏の几帳の裾を(上へ)引懸けて、白い綾に二藍などを引きかさねて(着て)、手習をして居るの。薄様の草紙を、村濃の糸で、しやれて綴ぢてあるの。柳の(芽の青々と)萌え出たのに、青い薄様に書いた文を着けたの。鬚籠を美しく染めたのを、五葉の枝に付けたの。三重襲の扇(が優美だ)。五重となると余り厚ぼつたくて、持つ處などが憎らしい。上手に出来た檜破子。白い組(糸)の細いの。新しくもなく、ひ

優婉きもの

細やかに清げなる君達の直衣姿。愛し氣なる童女の表の袴など、特にはあらで、綻び勝なる汗衫ばかり着て、薬玉など長く付て、勾欄の許に扇差し翳して居たる。若き人の美しげなるが、夏の几帳の下打ち掛て、白き綾、二藍引き襲て、手習したる。薄様の草紙、村濃の糸して雅しく綴たる。柳の萌たるに、青き薄様に書たる文付たる。鬚籠の雅しう染たる五葉の枝に付たる。三重襲の扇、五重は余り厚くなりて、手許など憎げなり。巧く爲たる檜割籠、白き組の細き。新しくもなく甚く古てもなき檜皮屋に、菖蒲美しく葎き渡したる。青やかなる御簾の下より、朽木形の鮮麗に、紐甚艶やかにて掛りたる、紐の吹き靡されたるも雅致し。夏の帽額の鮮麗なる、簾の外の勾欄の邊に、甚愛し氣なる猫の赤き首綱に、白き札付て、碇の猪食ひ付て、引き歩くも嬌治たり。五月の節の菖蒲の藏人、菖蒲の鬘、赤紐の色にはあらぬ領巾、裙帯の舞人、五節の童、雅優し。

どく古くもない檜皮屋に、菖蒲を美しく葎き並べてあるの。青やかな御簾の下から、朽木形の(几帳のかたびら)が鮮かに艶々として懸つて居るの。その紐が、(風に)吹き靡かされて居るのも、優美だ。夏の帽額の鮮かなの、御簾の外の勾欄の近くに、可愛らしい猫が、赤い首綱に、白い札がついて居て、碇の緒に食い付いて、引張つて歩くのも、優雅だ。五月の節の菖蒲の藏人が、菖蒲の鬘や、赤紐でない、領巾や、裙帯などして、薬玉を皇子たち、上達部などの、立ち並んで居らつしやるのに、奉るのも、誠に優美だ。受取つて腰に引きつけて、舞踏し拜をなさるのもの、誠によい。火取の童も、小忌の君達も、大さう優美だ。六位の青色の宿直姿。

うへの袴などわざとにはあらで「表の袴など正式に着ないで」なり、童女の服装は汗衫も常の装ひにはあらず。(後一丈五尺、前一丈二尺の長きもの。袖は一巾半の廣きものなれば、立居に不便にて常用せぬものらし)上の袴はたけ四尺三寸、ひろさ一尺三寸。かさねの袴は長さ九尺五寸とあり、いづれも暗の料なり○ほころびがちなる。汗衫は縫ひ合せたる所の少きものなればいふ○薬たまなど長くつけて、種々の薬(麝香、沈香、丁子、甘松、龍腦)を玉にして、錦の袋に入れ、つじ、菖蒲、よもぎ等を結び、五色の組糸を八尺より一丈ほど垂れ下げたる薬玉を、群臣に賜はるを臂にかけ又は腰に帯び、幼者は襟にかくといふ、こゝは袖脇などに垂れたるなるべし○をかしげなる。この下に「が」の字含まれたり○二あひ引かさねて「白き綾の上に二藍の、羅をかされて」なり○手習 手すさびに書く事をいへり、宇治十帖の浮舟の君が入水の後、救はれて尼君のもとにある條に「かき暮す野山の雪をながめても、ふりにし事ぞ今日も悲き」など例の慰めの手習をおこなひのひまにはせさせ給ふ」とありて、その巻を手習と名づけたり○うす様の草紙、薄様の紙をとらなるなり○もえたるに 芽の萌え出でたるなり○ひげこ 竹にて編みたる籠の編み余りを残して、鬚のやうに立てたるをいふ○をかしう染めたる 青色に

臨時の祭の舞人。五節の童なども優美だ。

糸、板地に繪をかく。婦人のは三十九枚にて綴糸の余りを兩端に、あはび結びにして長く垂る。の上下の骨の三枚重なりたるもの。もと持一處〇ひわりご。檜にて作りたる中仕切ある食器なり〇檜はだ屋。檜の薄くへぎたるにて屋根を葺きたる家〇朽木形。朽ちたる板目の形なり、白き几帳の帷に濃き紫にて染め出す形。冬の用なり、夏は生絹に菫雀を胡粉にて畫くといふ〇いかりの緒。船をとむるに碇を下すと同じく、猫の走り去るを止むる爲に、綱の端につけたる鐘なるべし、それに、くひつきては狂ひ戯る、さまなり〇あやめの藏人。菫雀を配る女藏人なり〇かづら。五月五日の節に、菫雀を男は冠に、女は髪につくるをいふ〇色にはあらぬ。小忌衣(トヨノアカリ) 明(トヨノアカリ) 節會に着る衣)の肩に二條の赤紐をつくる、「それとはちがひたる」の意〇ひれ。項にかけて飾りとする巾、もとは塵を拂ひ、虫を逐ふなどの爲に男女とも用ゐたりしを、轉じて女服のみの飾りとなりたるらし、綾、羅、錦などを用う〇襷帯。もと裳の帯の余りを左右によせて、さまよく長く引きて飾りとせしものなるべし、紫と緑とを表裏にせず、縫ひめを表裏の中にして、紫と緑を左右になす〇火取のわらべ。火取は薫物をたく香爐、(銀にて作り銀の蓋を覆ふ、又は木製に蒔繪し、内に銅陶器を入れて、金の蓋をなす)なり、その事かなす童の服装の愛らしきなるべし〇をみの君たち。大嘗會、新嘗會の時、職員に卜定され、小忌衣(白布を形木に張り、その上を山藍の葉にて摺りて、もやうをつく。もやうは、小草、柳、水、炭、蝶、小鳥等にて、襟に二條の赤紐を垂れたる袍)をつけて神膳に奉仕する若き殿上人をいふ〇臨時祭。十一月下の酉の日の賀茂祭と、三月八日の石清水八幡宮の祭(朱雀天皇の朝に、平將門の亂平定の時、報賽せられしに始まる)といふ〇五節のわらべ。舞姫一人に二人づ、附く。

宮様が五節をお出しになるのに、かしづきが十二人(だ)。外では、御息所(づき)の人を出すのを、よくない事にするのに、何と思召てか、宮の女房を

美しく染めたるなり、すべて共色にするやうなれば、こゝも五葉の松の枝につくるには、青く染めたるなるべし〇三えがさねの扇。楡扇(楡の薄板を骨として作りたる扇。公卿は廿五枚、殿上人は廿三枚を合す、六位以下は十二枚。綴糸は白の絹を、あはび結びにして長く垂る)の上下の骨の三枚重なりたるもの。〇朽木形。朽ちたる板目の形なり、白き几帳の帷に濃き紫にて染め出す形。冬の用なり、夏は生絹に菫雀を胡粉にて畫くといふ〇いかりの緒。船をとむるに碇を下すと同じく、猫の走り去るを止むる爲に、綱の端につけたる鐘なるべし、それに、くひつきては狂ひ戯る、さまなり〇あやめの藏人。菫雀を配る女藏人なり〇かづら。五月五日の節に、菫雀を男は冠に、女は髪につくるをいふ〇色にはあらぬ。小忌衣(トヨノアカリ) 明(トヨノアカリ) 節會に着る衣)の肩に二條の赤紐をつくる、「それとはちがひたる」の意〇ひれ。項にかけて飾りとする巾、もとは塵を拂ひ、虫を逐ふなどの爲に男女とも用ゐたりしを、轉じて女服のみの飾りとなりたるらし、綾、羅、錦などを用う〇襷帯。もと裳の帯の余りを左右によせて、さまよく長く引きて飾りとせしものなるべし、紫と緑とを表裏にせず、縫ひめを表裏の中にして、紫と緑を左右になす〇火取のわらべ。火取は薫物をたく香爐、(銀にて作り銀の蓋を覆ふ、又は木製に蒔繪し、内に銅陶器を入れて、金の蓋をなす)なり、その事かなす童の服装の愛らしきなるべし〇をみの君たち。大嘗會、新嘗會の時、職員に卜定され、小忌衣(白布を形木に張り、その上を山藍の葉にて摺りて、もやうをつく。もやうは、小草、柳、水、炭、蝶、小鳥等にて、襟に二條の赤紐を垂れたる袍)をつけて神膳に奉仕する若き殿上人をいふ〇臨時祭。十一月下の酉の日の賀茂祭と、三月八日の石清水八幡宮の祭(朱雀天皇の朝に、平將門の亂平定の時、報賽せられしに始まる)といふ〇五節のわらべ。舞姫一人に二人づ、附く。

十人お出しになつた。あとの二人は、女院と淑景舎の人で、それは、兄弟であつた。辰の日の晩に、青摺の唐衣と、汗衫をお着せになつた。女房にすら、豫てはさうもお知らせにならず、殿上人にはまして非常に隠して、装束をすつかりこしらへて暗くなつた時分に、持つて来て着せた。赤紐を美しく結び下げて、上手に光澤を出した白い衣に、形木のかたを模様にしたのを、織物の唐衣の上に着たのは、ほんとうに珍しい中に、童は又一段優美だ。下仕まで立ち並んで居るので、上達部や殿上人がびつくりして、面白がつて「小忌の女房」と名をつけて、小忌の君達は(簾の外に居て、何か言つたりする。宮様が「五節の(居る)へやを皆な片付

宮の五節いださせ給ふに

辰の日の青摺の唐衣、汗衫を着せ給り。女房にだに豫て然も知らせず、殿上人には況て甚う隠て皆装束し立て、暗う成たる程に持ち来て着す。赤紐甚う結び下て、甚く耀したる白き衣に、形木の繪に書たる織物の唐衣の上に着たるは、實に珍き中に、童は今少し優雅たり。下仕まで續き立て居たる上達部、殿上人驚き興じて、小忌の女房と命名で、小忌の君達は、外に居て物言ひなどす。五節の局を皆毀ち透して、甚醜くてあらする、甚異様なり。其の夜までは仍麗しくこそあらめと宣せて、然も感さず。几帳どもの綻結つ、溢れ出たり。小兵衛といふが、赤紐の解たるを、是を結ばやと言はば、實方の中將寄て繕ふに、虚心ならず。實足引の山井の水は氷るを、如何なる紐の解るなるらん」と言ひ掛く。年若き人の、然る顯證の程なれば言ひ難きにやあらん、返歌も爲す。其の傍なる老女達も打ち捨つ、兎も角も言ぬを、宮司などは耳留てけるに、久く成にける片腹痛さに、他

けて、見通しにして、居場所に困らせるのは、氣の毒だ。その夜までは、やはり、部屋をちやんと置いて置いてやらう」と被仰つて、いつものやうには、まごつかせず、几帳などの裾を結び上げて、袖口など外へ溢し出して居る。小兵衛といふのが赤紐の解けたのを、「これを結びたい」と言ふと、實方の中將が、寄つて、結んでやりながら、虚心では居られず。

寛あし引の山井の水は氷れるを、いかなる紐のとくるなるらん。(わたしの心は戀に結ばれて居るのに、解いてもくれないその人の紐が、どうして解けるのだらう)と言ひかけた。(小兵衛の方は、)年が若いのに、そんな晴がましい場所では、余計言ひにくいと見

方より入て、女房の許に寄て、宮司「何か斯は在す」などぞ密語なるに、四人ばかりを隔て居たれば、能く思ひ得たらんだに言ひ難し。況て歌詠むと知たらん人の、尋常ならざらんは、何如でかと憚しきこそは悪けれ。宮司「詠む人は然やはある。甚愛たからねど、直とこそは言へ」と、爪弾をして歩くが、最惜ければ、清薄氷淡に結る紐なれば、翳す目かげに緩ぶばかりを」と辨の御許といふに傳さすれば、消え入つ、得も言やらず。實何とか、何とか」と耳を傾けて間に、少し訥りする人の、甚う繕ひ、愛たしと聞せんと思ければ、得も言ひ續す成にしこそ、却々耻隠す心地して好りしか。下り上る折などに、惱しとて往ぬをも、宣せしかば、有る限群れ立て、事にも似ず、余こそ煩氣なめりしか。舞姫は、相尹馬頭の女、染殿式部卿宮の上の御妹の、四の君の御腹の、十二にて甚愛し氣なりき。終の夜も、負ひ抱きても騒ず、即て仁壽殿より通て、清涼殿の御前の東の簀子より、舞

姫を先にて、上御局へ参し程も美しかりき。

えて、返歌もしない。傍に居る老女たちも、知らん顔をして、代りに詠んでもやらない。宮司たちは初めから注意して聞いて居たのに、いつまでも誰も返歌をしない氣の毒さに、脇の方から入つて来て、女房の傍に寄つて「なぜ皆さんは返歌もなさらない」とささやく。(私は)、四人ばかり間を置いて居たから、よく分つて居るけれども、代りには詠みにくい。まして歌よみの名人が晴の場で詠んだのには、よほど立派な返歌でもなければと、遠慮したのが悪かつた。(宮司は)「詠んだお人は、さうは思はぬ。下手にしろ、返歌のないのは、氣持がわるいと被仰らう」と、爪弾きをして歩くのが氣の毒さに、清薄氷あはに結べる紐なれば、かざ

五節出ださせ給ふ 「正暦四年十一月十二日中宮定子獻五節給」と古本傍註にあり、おんもとより五節の舞姫を出されしなり、通例、大嘗會に五人、新嘗會に四人、その中二人は國司の女、他の二三人は公卿の女、いづれも未婚の女子をえらぶ、此の時、中宮より奉られしは違例なり○かしづき 舞姫のせる役なり○御息所 皇女を生み奉らせたる女御、更衣の尊稱、又東宮、親王の妃の尊稱、一本には「女御、御息所」とあり○女おん 一條帝の御母女御、詮子をいふ、道隆、道兼の妹にして道長の姉なり、正暦二年院號を得、女院號の始祖。長保三年閏十一月崩す、弟道長を愛し、道長も女院の御葬送に御骨をかけ(肩に)たる事見ゆ○淑景さ 内裏五舍(聚芳舍、凝花舍、飛香舍、淑景舍、昭陽舍)の一にして桐壺といふ、この時は道隆の二女にして、定子の妹なる原子。長徳元年東宮(三條帝)に入りて尙侍となり、尋いで女御となり、淑景舍に住みたり、(定子皇后崩御の翌、長保四年八月、鼻口より血あえて頓かに卒す)榮花物語に「中姫君(原子)十四五ばかりにならせ給ひぬ。春宮に奉らせ給ふあり様、花々とめでたし」○やがてはらから 女院より出だされしかしづきと、淑景舍より出だされし、かしづきとは丁度姉妹なりしとなり○辰の日 通例は十一月中の丑の日なれど、この年はこの日にされしなるべし○やうしたる 張りたる絹を具にて磨りて光を出すをいふ○形木のかた 青摺の繪なり續飯を布につゝみて形木の上を叩き、布の面を上を押つけて、物をおほふて之をふむその後、形の上を山藍の葉のみにて摺りて、もやうを出すなり○かきたる この下に「を」の意あり○居たる これも下に「を」の意あり○をみの女房 小忌の君達といふに准じて新に名づけたるなり○つけて 他本「つけたり」○いとをしければ 他本

す日かげにゆるふばかりを（薄氷のやうにほんのざつと結んだ紐ですから、さす日のかげに緩んで、解けただけの事で、何の仔細も御座いませんのですわ）と詠んで、辨のおとどといふ（女房）に傳へさせると、（小兵衛は）、極り悪がつて、小さくなつて、何にも言へない。（實方は）、「何とですか何とですか」と顔をかしげてきくけれども、少しもる人が、うまく、すら／＼と詠まうと思ふので、（余計にどもつて）とうとう、しまひまで、言へなかつたのも恥隠しで、かへつてよかつた。舞姫の送り迎へに、氣分が悪いなど、往かなかつた人も、（出よと）仰せになつた爲、あるたけの女房が、がや／＼と大勢かたまり立つて、他から出す五節とちがひ、余り仰々し過ぎる位だつた。舞姫はすけまさの馬頭の女で、染殿の式部卿宮の奥方の御妹の、四の君の御腹で、十二歳で大さう可愛らしかつた。しまひの晩も負つたり抱いたりさわぎもなく、仁壽殿から、直に、清涼殿の御前の東の簀子を通り、舞姫を先に立て、上の局へ参つた様子が美しかつた。

「いとをかしければ」とあり、「いとをなし」は氣の毒の意、をかしは笑ふ意にて、非常の差なり、「をし」の方をとる〇成にし 他本「成ぬる」過去なれば「にし」の方よし
〇折などに 他本「送り」などに〇なやましとていかぬ 他本「なやましと言ひ入れぬる人」〇お前 他本「前」とあれど、御椅子の前なれば、この方よし〇ほども 他本「も」の字なし、ある方よろし。

細太刀に平緒をつけたのを、小さつぱりした男が持つて通るのも、まことに優美だ。紫の紙を包んで封じて、房の長い藤に付けたのも、誠に風情がある。

細太刀に平緒付て、清げなる男の持つて渡るも甚優雅し。紫の紙を包て封じて、房長き藤に付たるも甚美し。

〇細太刀 裝束に用うる儀刀にて實用のものにあらず、螺鈿、蒔繪、蒔繪等ありて皆飾太刀なり〇平緒 平組の緒にて花鳥などの模様あり、束帯の時、腰より袴の上に

垂るゝもの〇封じて 手紙なり。

内裏は五節の時が、何だか、ふだんとちがつて、出あふ人もよく見える。主殿司などが色々の色の小切を物忌のふだのやうに釵子につけたのなども、珍く見える。清涼殿の反橋に、元結の村濃が美しく眼立つて出て居るなども、風情がある。上雜仕や童などが、面白い晴な時と、思つて居るのも、もつともだ。山藍や日かけなどを柳宮に入れて、叙符された男達が、持ち歩くのもおもしろい。殿上人が直衣をぬぎたれて、扇や何かで拍子をとつて、「つかかさ増れと、しきなみぞ立つ」と歌ひながら、局などの前を通る時、簾の蔭などに立つて居る女房の心は、浮かれ立つたら

内裏は、五節の程こそ、漫に只ならで、見る人も美う覺れ。主殿司などの、色々の帛片を、物忌の如にて、釵子に付たるなども、珍く見ゆ。清涼殿の反橋に、元結の村濃、甚顯著にて出で居たるも、種々に就て美うのみ。上雜仕、童ども、甚き色節と思たる甚道理なり。山藍、日蔭など柳宮に入れて、冠したる男持つて歩甚興しう見ゆ。殿上人の直衣脱ぎ垂て、扇や何やと拍子にして「官位増れと重波を立つ」といふ歌を歌て、局どもの前渡る程甚く、添ひ立たらん人の心騒ぬべしかし。況て颯と一度に笑などしたる、甚怖し。行事の藏人の撥練重、他より殊に美麗に見ゆ。褥など敷たれど、却々得も上り居ず。女房の出たる衣裳褒め誹り、此の頃は他事は無んめり。帳臺の夜、行事の藏人甚嚴う舉動で、搔繕二人、童より外は入まじと押で、面憎きまで言

う。ましてわつと一度に笑つて通つたりされると、びつくりしてしまふ。行事の藏人の搔練襲が格別美しい。褥など敷いてあつても、些とも、のつては居ず、几帳や御簾の下から見える女房の装束を批評したりするのが、その頃の仕事だ。帳臺の夜は、行事の藏人が、非常に威張り返つて、かいつくろひ二人と童の外は、入つてはいけないと制して、つら憎いほどきめつけるので、殿上人などは、「私一人だけ」など頼みたさる。「不公平になります。いけません」など頑固に言ひ張るのに、宮様付の女房が二十人ばかりかたまつて、威張り臭つた藏人を何とも思はず、戸を押あけて、わい／＼と入つてゆくので、「これはまあ仕方がない」と、惘れ

ば、殿上人など、殿「仍一人ばかりは」などと宣ふ。蔵「美あり。如何でか」などと固く言に、宮の御方の女房二十人ばかり押し凝て、事々しう言たる藏人、何とも爲す、戸を押し啓て騒き入ば、惘で、「甚此は術なき世かな」とて立るも可笑し。其に蹤てぞ、傳女們も皆入る氣色、甚憾げなり。帝も在して、甚可笑と御覽じ在すらんかし。童舞の夜は甚興し。燈臺に對たる顔ども、甚可愛氣に美しかりき。

とのもり司 舞姫の列り舞ふ時、燭を乗る女端なり○さいで 布帛の裁ち片なり「裾邊のさいでにつ、みて」「鈍色のさいでに書きて」など○さいし 婦人正装の時、頭髮に飾るもの、銀にて作る、それを附くるには垂髮の頭の中央に小枕を入れて瘤の如きものを作り、それに、さいしを結びつく、その瘤の如きを寶髻といふ○反はし 五節の爲に臨時に架くる長橋なり、清涼殿の東の廂の北の階の下より承香殿の 坤の角に到るもの○もとゆひ 垂髮のもとを結ぶに、薄葉紙を紫にてぼかし染にせるもの○上難仕 雑役に驅使する女官の名にて、女御入内、五節等の時、臨時に置く、雅高装束抄に「上難仕は五つ衣に打衣、單衣、張袴」云々と見ゆ○やまあゐ 五節の時の衣を染むる料○日かけ 日かけを避け隔つる故の名といふ新嘗、大嘗等の神事に冠の笄の左右にかくるもの、もとは日蔭葛(さるをがせ)を用ゐたりしな、この頃は白青の絹糸にて造り、數條に垂る、されば日かげの粗、又

て立つて居るのも可笑い。そのあとから、かしづき達も皆な入るので、非常に迷惑さうだ。上様もお出でになつて、可笑い事と御覽遊ばしたらう。童舞の晩は、誠におもしろい。燈台に對つて居るどの童の顔も、堪らなく可愛らしく美しかった。

無名といふ琵琶の御琴を、上様が宮様の處へお持ちになつたのを、(女房達が)拜見して、掻き鳴らしたりする。もつとも弾くのではなく、緒などをお

はひかけの絲ともいふ○やない箱 柳の木を廣さ五分ほどに三角に削り、糸にて編みたる箱○つかさ増れと 官位昇進の御使が波のあとより／＼よせ来る如く、しきりに來るといふ意なり、祝儀の謠物なるべし、今傳はらすといふ○行事 一萬の藏人行事となり、上官の命をうけて、奉行す、故障ある時は二萬三萬代りて勤むといふ○帳臺の夜 十一月中の丑の日、主上常寧殿に出御ありて舞を御覽あるをいふ、五節の當日は辰の日なるを豫め試むるなれば、試樂又は調樂といふ、五節舞姫五人の内、一兩人参り、他は曉参とて、内々に参る、殿上人脂燭に侍らふ、主上御直衣御指貫にて御香を召さる、帳臺に在す間亂舞あり、又大歌小歌などあり、寅の日は殿上酒醉あり、その後殿上人等五節所に至り、又后宮女院等所々に推参す、五節所に賜はる爲、使を河内國交野に出して兼れて雉を召し置くことあり、狩の使といふ○かしづきども、五節一人に女二人(火取及齒を持つ)下仕二人(几張を持つ)陪從十二人、極洗二人、上雜仕一人、上童一人、送迎の女房二十人等のかしづきなり○わらは舞の夜 卯の日の童御覽の夜をいふ、舞姫の介錯をなす、童女を主上の御前に召して御覽あるなり、舞姫一人に童女二人なれば、例年は舞姫四人なれば童女は八人なるなり。

「無名」といふ琵琶の御琴を、帝の持て渡せ給るを見などして、掻き鳴しなどと言はば、弾にはあらず、緒などを手弄にして、清「是が名よ如何にとかや」などと聞きするに、宮「唯甚些く名も無

もちやにいちくるだけだけれど。
(私が)「これは何といふ名で御座いますか」とお尋ね申上げたたら、宮様が、
宮「一向つまらぬもので、名もない」と被仰たのは、いつもながら、まことに結構な御返事だつた。

淑景舎などがお出でになつて、御咄の序に、淑「私の處に、大さう、きれいな笙の笛が御座います。お父様が下さいました」と被仰るのを僧都さんが「それは私に下さい。私の處によい琴が御座います。それとおとり替へ下さい」と幾度も被仰るのに、お耳にも入れないで、外の事ばかり言つて居らつしやるのを、どうかしてお返事をさせやうと、幾度も言ひなされるのに、それでもお返

し」と宣せたるは、仍、甚愛たくこそ覺しか。
見などしてかきならしなどすといへば、強くにはあらず。意義の通ぜぬ書きざまなり、このまゝにて助けて解すれば、口譯の如くなれども、「ならしなどすと云へば」を「言へど」とあらば、意通じて、その必要はなし、一字の寫し誤りか。

淑景舎(原)など渡り給て、御物語の序に、淑「鷹が許に、甚美しげなる笙の笛こそあれ。故殿(隆)の得させ給り」と宣ふを、僧都の君(隆)の「其は隆圓に給べ。己が許に愛たき琴侍り。其に換させ給へ」と申し給を、聽も入れ給て、仍他事を宣ふに、答させ奉らんと、數度聞え給に、仍物宣ねば、宮の御前(中)の「否換じと覺たるものを」と宣せけるが、甚う興しき事ぞ限なき。此の御笛の名を、僧都の君も得知り給ざりければ、唯恨しとぞ思したんぬる。是は職の御曹司に在し、時の事なり。帝の御前に、

事がないので、宮様が、宮「否不替」とお思ひになるのに、と被仰つたのは、實に御傑作だつた。この御笛の名を、僧都さんは、御存知がなかつたから、唯恨めしいとだけお思ひになつたらしい。これは職の御曹司に居らつしやつた時の事だ。上様の御前に「いなかへじ」といふ御笛がある。御前にあるものは、琴も、笛も、皆な珍しい名がついて居る。琵琶は玄上。牧馬。井手。渭橋。無名など。又、和琴なども、朽目。鹽竈。二貫など。いふ。水龍。小水龍。宇多の法師。釘打。葉二つ。まだ何とかいろくあつたが忘れた。「宜陽殿の一の棚に」といふ流行詞は頭中將が言ひ出したのだ。

「否不替」といふ御笛の候ふなり。御前に侍ふ者どもは、琴も笛も皆珍き名付てこそあれ。琵琶は玄上。牧馬。井手。渭橋。無名など。又和琴なども、朽目。鹽竈。二貫などぞ聞る。水龍。小水龍。宇多法師。釘打。葉二。何彼と多く聞しかど忘にけり。宜陽殿の一の棚にと言ふ言種は、頭中將(齊)こそ爲給しか。
鹽竈 道隆の四男にて中宮の御弟なり、十余歳にて出家し、三十七歳權大僧都にて寂す。代へさせ給へ。笙は女には不用なるべし、琴と代へむと笙を所望せるなり。いなかへじ「否不替」といふ御物の笛あるにより、しやれて仰せられしなり、この笛の名は、昔唐土の賈人この器を持ち來し時、米千石を以て購はんとせる者に「否我不易」といひしよるといふ。玄上 玄象とも書く、禁秘抄に「玄上累代寶物也、置中殿御厨子。中略。凡此琵琶云體云聲不可說未曾有物也。中略或云玄象吞音鉢水。所謂謂玄象又玄上宰相獻延喜帝。仍號玄上二兩說也」云々(撥の面に玄き葉の音き鉢の水を呑む圖ありといふ)。○牧馬 拾芥抄に「與玄上一双名物也」とあり。○井出 延喜帝の御孫、愛宮の持たれしものといふ。○み橋 拾芥抄に「渭橋、又高名、琵琶也」。○和琴 六絃にて、十三絃のより小なり、大なるは六尺二寸、中六尺、小五尺、横六寸。大和琴とも、東琴ともいふ。○朽目 江談抄にその名出でたり。○しほがま 拾芥抄には箏の名物となりあり。○二貫 未詳。○水龍小水龍 江談抄に「横笛者、大水龍、小水龍、天曆御時御物也」。○宇多法師 江談抄に「宇多法師、寛平法皇御和琴也、御遊之時先、御多良志止召」云々(先づ水を命ぜられて

御手を洗スさるゝなるべし。○釘打 未詳○葉二 江談抄に「葉二者、高名、横笛也、號ニ朱雀門之鬼笛一是也」淨藏聖人吹フ笛、深更朱雀門、鬼大聲感ス之自爾此笛乎、給フ三件聖人云々。十訓抄に「この笛には葉二つありて、一は赤く一は青く、朝ごとに露置く」云々○宣陽殿 大内裡紫宸殿の東にあり、廣さ七間二面、殿中に納殿ありて累代の御物を納むる所とす○一の棚 第一の棚の品と尊重せる詞なり。

上の御局の御簾の前で、殿上人が、一日琴と笛を合せて遊び暮して別れる時、まだ格子をしめないのに、大殿油を出したから、戸があいて居てむき出しなので、宮様は、琵琶の御琴を、豎にして、お持なされた。紅の御召の、美いなど、通り一遍の詞では言ひ足りない。打つたのや、張つたのを澤山に召て眞黒に艶々した御琵琶に、御召の袖をかけてお持ちになつたのが、お美いの、そのわかから、御緋のあたりのかつきりと白いのが、一寸お見えになつて居るお美しさは、言ひやうもな

上の御局の御簾の前にて、殿上人、日一日、琴笛吹き合せ遊び暮して、罷出別る程、未だ格子を閉らぬに、大殿油を差し出たれば、戸の開たるが露なれば、琵琶の御琴を立様に持せ給り。紅の御衣の、言も、よのつねなる、打も又、張たるも數多奉りて、いと黒く艶やかなる御琵琶に、御衣の袖を打かけて、執へさせ給る愛たきに、側より御額の邊白く顯著にて、僅に見させ給るは、譬べき方なく愛たし。近く居給る人に差し寄て、清半隠したりけんも、得斯はあらざりけんかし。其は平人にこそありけめ」といふを聞て、途もなきを、理なく分け入て啓すれば、笑せ給て、女房「我は知たりや」となん仰らるゝ」と傳るも興し。

上の御局 清涼殿中の弘徽殿の上の御局なり○まあらぬ「あくる」をも「しむる」

い。お傍近く居る女房のそばに寄つて、清半隠したのも、このお美しさには、かなはなかつたらう。(おまけに)それは平人だつたから」といふのをきいて、(その人が)狭い處を無理に通つて、(宮様に)申上げると、お笑ひになつて、「あゝ、あの事」と被仰つたと、その人が又私に傳へるのもおもしろい。

をも、まあるといふ、この「まあらぬ」は閉る方なり○たまさま 立てざまを轉じいへるにて、御顔のあらはならぬ爲に立て、持たる、さまなり○なかば隠したりけむ 白樂天の琵琶行に「移船相近、相見、添酒、燈重、開宴、千呼萬喚、始出來、猶抱琵琶半遮面」○たゞ人「おまけにあれば賤しい娼婦だつた」なり○われは「お前は」といふ説あれども、「お前」といふ處に「われ」といふは賤しき階級なり、これは「あゝ、あの事」とお分りになつた意とする方よろしかるべし。

御乳母の大輔が、今日、日向へ下るのに、錢別におやりになる扇などの中に、一方には日が大きう花やかにさし出でて、旅人の居る所や、井出の中將の館などを、おもしろく書いて、今一つの方は京の方に雨が大きりに降つて居る空を、人が、ながめて居る處など書いたのに、

御乳母の大輔の、今日日向へ下るに、賜する扇どもの中に、片つ方には、日甚燁に差し出で、旅人のある所、井出の中將の館などいふさま、いとをかしう書て、今一面は、京のさるべき所に、雨甚う降たるに、眺たる人など書たるに、「茜さす日に向ても思ひ出よ、都は晴ぬ眺すらん」と、詞に手づから書せ給し、あはれなりき。然る君を置き奉りて、遠くこそ得往まじけれ。

「茜さす日に向ひても思ひ出でよ、
都は晴れぬながめすらんと。」

（茜がさす日に向つても思ひ出しなさい、都では晴れない眺めをして居るだらうと）

繪詞に御自身でお書きになつたのは、
お可哀想であつた。かういふお方を置き申して、遠方へは往けない事だ。

残念なものは。

此方からやつた歌でも、人からよこした歌の返事でも、書いてやつた後に、文字を一つ二つ、かうすればよかつたと考へ直したの。いそぎの縫物に、縫ひ了つて針を抜くと、最初に糸尻が結んでなかつたの。又間ちがへて、うら返りに縫つたのも、堪らなく、くやし。

日向へ下る 夫の任地に共に下るなるべし○扇 鏡別には必ず派へしものらし、「逢ふ」といふ詞の縁起をとりしなるべし○井出の中將 出所不明なり、この所、一本には「片つ方は、日いと、うらゝかに、さしたる田舎の、館など多くして、今、片つ方は、京のさるべき所にて、雨いみじう降りたるに」とあり、これも「田舎の館」など當らぬ詞あり、いづれも誤寫あるべし○詞に 賛なり、繪の上にその心を書く詞○遠くこそ 大輔の薄情をにくむ口氣あり、道隆薨去、伊周左遷のこの頃、いさゝか見捨てまつりし氣味もあるか。

憾きもの、

此より遣るも、人の言たる返歌も、書て遣つる後、文字一、二など思ひ正したる。頼の物、縫に、縫ひ終つと思つて、針を引き抜たれば、はやう末を結ざりけり。又反さまに縫たるも甚憾し。

南の院にお出でになつた頃、西の對の殿(隆)の御住居の方に宮様もおはしますから、寢殿にかたまつて、退屈なので、皆な戯れ遊びをしたり、渡殿に集つたりして居ると、宮これ急にいるから、皆なで一緒に早く縫つて」と、平絹の御召をお下げになつたから、南面に集つて、お召を片身づゝ、早く縫はうと競争して、てんでに傍にも居ず、遠くにはなれて夢中に成て縫ふ。命婦の乳母が、一番早く縫ひ了へて、さし置いたが、左の方の御身ころが、反對に右になつて居るのに氣がつかず、とちもしないであわてゝ置いて立つたのを、他の人が御背を合せる段になつて見つけた。皆なでわつくと笑つて、人

縫ひ直しなさい」といふと命婦誰

南の院に在す頃、西の對の殿(隆)の在す方に、宮も在せば、寢殿に集り居て淋々しければ、戯れ遊をし、渡殿に集り居などしてあるに、「これ只今頼の物なり。誰も誰も集りて、時變さず縫て參せよ」とて、平絹の御衣を給せられたれば、南面に集り居て、御衣片身づゝ、誰か疾く縫ひ出ると挑つゝ、近くも對す縫ふ様も甚物狂し。命婦乳母、甚疾く縫ひ終て打ち置つる、弓長の方の御身を縫つるが、背向なるを見付す、結も爲敢ず感ひ置て立ぬるに、御背合せんとすれば、既う違にけり。笑ひ騒りて、人々「これ縫ひ直せ」と言を、命「誰が惡う縫たりと知てか正さん。綾などならばこそ、裏を見ざらん縫ひ違の人の、實に正さめ。無紋の御衣なり。何ぞ證にしてか正す人誰かあらん。唯未だ縫ひ給ざらん人に正させよ」とて聞も入ねば、「然言てあらんや」とて、源少納言、新中納言など、縫ひ直し給し顔、見遣て居たりしこそ、興しかりしか。是は夜さり上せ給んとて、宮疾く縫たらん人を思ふと知ん」と仰

が、間ちがひましたと、正直に直すも
んですか。綾か何かなら、裏を見ずに
間ちがへた者が直さうけれども、無文
のお召だもの、何を證據に直さずとも
の事だ。どうでも直すのなら、まだち
つとも縫はない人に、直させたがよい」
と承知をしないので、人々「そんな事を
言て居たつて仕方がない」と、源少納
言や、新中納言などが縫ひ直して居る
顔を、ちつと見て居たのが、おもしろ
かつた。これは今夜おのほりになるの
で、宮早く縫つてくれた人を、深切な
人と思はう」と被仰つたからのさわぎ
だつた。

見せたくない人の處へ、他にやつた文
を間ちがへて持つて往つたのは、いや
に成てしまふ。それを「まことにすみ

られしかばとぞ。

見すまじき人に、他に遣たる文取り違て持て往たる。憾し。實に
過ちてげりとは言で、口賢う諍たる、人目をだに思はず、走り
も打つべし。興趣き萩、薄などを植て見る程に、長櫃持る者、鋤
など提げて、只堀に掘て去ぬること佗しう憾かりけれ。貴き人な
どの在る折は、然も爲ぬものを、甚う制すれど、「唯些」など言て
去ぬる、言ふ効なく憾し。受領などの來て、無禮に物言ひ、然と
て我をば如何と思たる氣色に言ひ出たる、甚憾げなり。見すまじ
き人の文を引き取て、庭に下て見立る甚佗しう憾く、追て往ど、
簾の許に止りて見るこそ、飛も出ぬべき心地すれ。

漫なる事腹立て同じ所にも寝す身動り出るを、忍て引き寄せ、
理なく心異なれば、余になりて、男も、男「然ば好んなり」と怨じ
て搔屈て臥ぬる後、甚寒き折などに、唯單衣ばかりにて生憎がり
て、大方皆人も寝たるに、有繫に起き居たらん醜くて、夜の更る

隨に、憾く、起てぞ去べかりけるなど思ひ臥たるに、奥にも外に
も物打ち鳴などして恐しければ、徐、轉び寄て、衣引き上るに、
虚寝したるこそ甚憾けれ。男「仍こそ強がり給め」など打ち言たる
よ。

南のめん 道隆の東三條の第にあり○たはぶれ遊び 一本による、流布本ふれ遊び
○ゆだけ 弓を持つ方(左)の手を、ゆんでといふに同じく左の方をいふ○あやな
どならばこそ 「裏表のよく分るを不注意に見ずして誤り縫ひたらば」なり、拙きか
きさまなり、一本にはたゞ「縫ひたらん人のげになほさめ」とあり、錯誤ある所ら
し○無文 織り出しの、もやうなき平絹なり、裏表の目立たねばよしといふなり○
源少納言、新中納言 いづれも禁中の女房なり、源氏にて少納言の人の近親なる女
房と、今一人は他に中納言といふ女房のあるに、あとよりやはり中納言の娘か妹の
出仕したれば、紛れぬやうに新の字をつけて呼名とせるなるべし○仰せられしかば
とぞ 流布本「ばとぞ」の三字なし、一本のあるをとる。
○長びつ 櫃の形長きもの○すき 地を掘る具。幅廣き刃に、すぐに柄をつけて地
につき入れて用う。

ません」とは言はないで、強情を張つ
て「間ちがへはしません」といふ、外
聞を思はなければ、つかまへて打つて
もやりたい。風情ある萩や薄を植ゑ
て、折角眺めて居る處に、長櫃を持つ
た者が、鋤などさげて來て、滅茶苦茶
に掘り取つて往くのが、口惜い。ちや
んとした男でも居れば、そんな事もし
ないけれど、女ばかりの時などは、
「一寸少し」など言つて、持つて往つて
しまふから、實に口惜い。受領などが
來て失敬な物の言ひ方をし、腹が立つ
ても何とも出來まいといふ様子をする
のは、随分口惜い。見せたくない手紙
をひつたくつて庭に下りて見て居るの
は、ほんとに腹が立つて、追つかけた
くても、簾の處より外に出られないの

は、(くやしくて)飛び出したくなる。一寸した事に、女が腹を立て、ひとつにも寝ず、からだを退つて出るのを、男が、そつと引き寄せても、つん／＼して居るので、余りになつて、そんなら勝手にしろと、男の方でも腹を立て、夜着をくる／＼と身にまいて、寝てしまつてから、寒い時分に單衣一つで、夜更けに、坐つて居るのも難儀なので、さつきに起きて往つてしまへば、よかつたと後悔して居ると、奥でも表でも、何だか變な音などして、氣味がわるくて堪らなくなり、そつと轉がり寄つて、夜着を引きあげると、(男は)空寝をして居たのが、憎らしい。そして「もつと強情を張つて居ればよいのに」など、言つて居る。

にが／＼しいものは、

客など、咄をして居る時に、奥の方で、無遠慮にしゃべつて居るのを、とめずに聞いて居る心持。思ふ人が、ひどく酔つて、管を巻いて居るの。聞いているも知らずに、此方の悪口を言つて居るのは、どれほどでもない召使が言つて居るのでも、氣持が悪るい。旅先の手狭な所や、居間の近くで、下種たち

片腹痛きもの、

客人などに逢て物言に、奥の方の打ち解言人の言を、制せて聞く心地。思ふ人の甚く酔つて、同じ事したる。聞き居たるをも知で、人の上言たる、それ何許ならぬ使用人なれど、片腹痛し。旅立ちの所近き所などにて、下種どもの戯れ交したる。憎げなる兒を、自己が心地に可愛と思ふ隨に、愛み遊し、是が聲の眞似にて、言ける事など語りたる、學識ある人の前にて、學識なき人の博識

がふさげて騒いで居るの。いやな子を、自分が可愛く思ふまゝに、さも可愛らしさうに相手をし、その子の聲色をつかつて言つた事を人に咄したり。學者の前で、無學の者が、えらさうに、古人の名などを言ふのや、別段よくもない自分の歌を、人に咄してきかして、

貌に人の名など言たる。殊に巧とも覺ぬ我が歌を、人に語り聞せて、人の譽し事など言も片腹痛し。人の起て物語などする傍に、惘しう打ち解て寝たる人。未だ音も弾き調ぬ琴を、心一つ適て然様の方知つる人の前にて弾く。甚どしう住ぬ聲の、然べき所に男に逢たる。

誰れそれが譽めたなどいふのも、苦々しい。人が起きて咄などして居る傍で、ぐう／＼いびきをかいて、寝て居る人だの。まだ調子も合はない琴を、自慢さうに、上手の人の前で弾くのだの。氣に入らないで一向妻の所に通はない聲が、何かの時に男に出くはした(など、いづれもにが／＼しい)。

はつとするものは、

挿櫛を磨く時に、何かに障つて折れたの。車の引くりかへつたの、そんな大きなものは、何かにつかへて引くりかへるにしても、ゆつくりとのろ／＼して居るだらうと思つたのに、びつくり

惘しきもの、

挿櫛磨く程に、物に障て折れたる。車の打ち覆されたる、然る寛廣なるものは、所狭く久くなどやあらんとこそ思しか。唯夢の心地して惘しう理なし。人の爲に耻き事忌憚もなく、兒も大人も言たる。必ず來なんと思ふ人を待ち明して、曉方に、唯些忘れ

して惘れてしまつた。人の恥になる事を、遠慮もなく、子供でも大人でも、言つて居るの。きつと來るといふ約束の人を待ち明して、曉方とろりとする、鳥がすぐ傍で、かあと鳴くから、ひよいと見ると、晝間になつて居るのは、情なくなつてしまふ。雙六に、筒を(續けて)とられるの。まるで見も知りもしない事を、人が面と向つて、「斯うでせう」と極めつけて、言ひわけもさせないの。何かを毀したのも、はつとする。賭弓に、散々ねらひを定めて放した矢が、飛んでもない處へ、飛んで往つたのも。

残念なものは、

五節や、佛名に、雪ならばよけれど、雨がざあ／＼と降つて居たり。節會が

て寝入たるに、鳥の甚近くかうと啼に、打ち見上たれば、晝に成たる甚惘し。丁半に筒取れたる。無下に知す見ず聞ぬ事を、人の差し對て、抗議すべくもなく言たる。物打ち覆したるも惘し。賭弓に、戦々競々久うありて外したる矢の、距れて他方へ往たる。

さしぐし 梳るには用ゐず、飾りにさす。象牙、角など。木賊にて磨く○車の打ちかへされたる 道路あしく車體も不完全なれば、間々ありし事なるべし○筒 双六に賽を入れる、筒、竹にて製したり○筒とられたる 敵の方に揃目(丁)のみ出で、筒を續けてとらるゝことなり○のりゆみ 正月十八日の公事にて、主上弓場殿に臨ませられ、左右の近衛府兵衛府の舍人、弓を射て勝負を試むるを御覽あり、勝方の大將射手に 還 慶あり、又臨時に殿上の侍臣の射るを御覽あるを殿上の、のり弓といふ。

口惜きもの、

五節、佛名に、雪降で、雨の掻き暮し降たる。節會、然べき折の御物忌に當りたる。用意疾と念たる事の、障る事出で來て、俄に

宮中の御物忌にかちあつたり。折角いろ／＼支度をして樂みにした事が、何か差支が出來て、急にお止めになつたり、寵愛する人が、永年子も産まずに、運れ添て居たり。音楽もし、見せたい物もあるから、きつと來るだらうと思つて、呼びにやるのに、差支があるからなど、言て、來ないのも、残念だ。男でも、女でも、宮仕所などで、同じ位な友だちと一緒に、寺へ參詣したり、遊山にも出た時、余り氣張つたよそ行のでもなく、と言て余り見苦しくもない、しやれた着物を車からこぼし出して往くのに、然るべき人が馬か車で行き會つて、見ずに往て、しまつたのは張合がない。余り残念さに、下種でも氣が利いて居て、(此方の様子を)人に咄すやうなのにでも逢へばよい、と思ふのも、少し不良かしらん。

停りたる。甚うする人の、子産で年來具したる。管絃をも爲し、見すべき事もあるに、必來なんと思て呼に遣つる人の「障る事ありて」など言て、來ぬ、口惜し。男も女も宮仕所より、同じやうなる人、諸共に、寺へ詣で、他へも往に、好しう溢れ出て用意甚しからず、余り見苦しとも見つべくはあらぬに、然べき人の馬にても車にても往き會ひ、見す成ぬる、甚口惜し。厭倦ては好色しからん下種などにも、人に語つべからんにてもがなと思も、怪しからぬなめりかし。

五月の御精進時分、職にお出でになつて居ると、塗籠の前の二間の所を、格

五月の御さうじの程

五月の御精進の程、職に在すに、塗籠の前二間なる所を、殊に装置たれば、常態ならぬも興し。朔日より、雨勝にて曇り暮す。

別に御へや飾りをしたのがおもしろい。朝日から雨勝で曇り暮す。「あゝ退屈だ、杜鵑の聲をきいて歩かう」といふと、私もくくと多勢で出掛かけた。賀茂の奥に、何とかいふ、七夕の渡り橋ではないが、しやれた名の橋がある、その邊には毎日鳴くといふ人があると、それは、ひぐらしだと言ふ人もある。そこへ往かうと五日の朝、職の役人に、車の事を言ひ付けて北の陣から、五月雨だからお咎めはないと、階の傍まで車を差し寄せて、四人ばかり乗つてゆく。美しがつて、女房も一つ車を拜借して、私たちも「など、言ふが、宮様が「いけない」と被仰るから、聞かない振をして、すげなく出かけると、馬場といふ所で、人が多勢騒いで居る。

清「徒然なるを、杜鵑の聲尋ね歩ばや」と言を聞て、我も我もと出で立つ。賀茂の奥に、某とかや七夕の渡る橋にはあらで、憎き名ぞ聞し。其の邊になん日毎に啼と人の言ば、其は茅鯛なりと答る人もあり。其處へとて五日の朝、宮司、車の事言て、北の陣より、「五月雨は答なきものぞ」とて、差し寄て、四人ばかりぞ乗て往く。美しがりて、女房「今一輛して同くは」など言ば、宮「否」と仰らるれば、聞も入ず、情なき體にて往に、馬場といふ所にて人多く騒ぐ。「何事するぞ」と問ば、車副「手結にて真弓射るなり。暫時御覽じて在せ」とて、車停たり。左近中少將皆着席給る」と言ど、然る人も見ず。六位などの立ち來往ば、「懐しからぬ事ぞ、疾く過よ」とて、往もて往ば、道も祭の頃思ひ出られて興し。斯う往く所には、明順朝臣の家あり。「其處も即て見ん」と言て、車寄て下ぬ。田舎たち事簡約て、馬の繪書たる障子、網代屏風、三稜草簾など、殊更に昔の事を寫し出たり。屋の

何をして居るのかときくと、車副「手番で、真弓を射るのです。少し御覽になりませ」と言て、車をとめた。「左近の中將や、少將が、皆な着座して居らつしやる」と言ふけれども、そんな人は見えない。六位などが立ちさまよつて居るだけなので、遙見たくもない、早く車をやれ」と、さつさと往くと、道も、祭時分を思ひ出されておもしろい。途中に、明順朝臣の家がある。清「序に見やう」と、車を近づけて下りた。田舎風に簡素で、馬の繪をかけた御立だの、網代の屏風だの、みくりの簾だのと、わざと古風にしてある。家も小さくて、奥深くはないが、風雅に出來て居るのに、成程、やかましい位、彼方にも此方にも、時鳥が鳴き合つて居る。

體も微たちて、端近く淺はかなれど趣致きに、實にぞ喧しと思ふ許に啼き合たる杜鵑の聲を、口惜う御前に聞し召す、然ばかり慕つる人々にもなど思ふ。明「所に就ては斯る事をなん見るべき」とて、稻といふ物多く取り出で、若き女たちの汚げならぬ、其の邊の家の下種女など率て來て、五六人して扱せ、見も知ぬ廻べき物二人して引せて、歌歌せなどするを、珍くて笑に、杜鵑の歌詠などしつる忘ぬべし。唐繪にある如なる懸盤などして、物食せたるを、見入る人なければ、家主「明「甚悪く鄙びたり。斯る所に來ぬる人は、好せずば仍もなど責め出してこそ食るべけれ。無下に、斯ては其の人ならず」など言て欺待し、明「此の下殿は、手から摘つる」など言ば、清「如何で女官などの如に、着き並てはあらん」など言ば、明「取り下して。例の這臥に習せ給る御前達なれば」とて、取り下し扱ひ騒ぐ程に、車副「兩降ぬべし」と言ば、急て車に乗る、清「然て彼の歌は、此處にてこそ詠め」と言

宮様は勿論、あれほど、来たがつた人達にも、聞かせたいと残念に思ふ。明「居らした効には、かういふ事も御覽なされ」と言つて、稻といふものを澤山持ち出して、醜くない、こゝの若い女たちと、近所からつれて来た田舎女と五六人に、扱かせたり、見た事もない、くるく廻るものを、二人に挽かせて、歌を唄はせたりするのが、珍しくて笑つて見て居て、時鳥の歌を詠む事も忘れてしまつた。唐繪にあるやうな珍しい懸盤などで、食事を出したけれども、誰も手をつけさうにもしないので、亭主(明)が「とんと田舎者で居らつしやる。都からかやうな處へお出でになると、もつと澤山くれくれ」と御所望なさつて召上るものですが、さう召

ば、女「然れば途にても」など言て、卯の花甚く咲たるを折つ、車の簾、側などに長き枝を葺き挿たれば、只卯花襲を腰に被たる如にぞ見ける。供なる男們も、甚う笑つ、網代をさへ突き穿つ、一爰、未し未し」と挿し集なり。人も逢なんと思に、更に汚き法師、賤の言ふ効なき者のみ、稀に見る甚口惜し。近う來ぬれば、清然とも甚斯て止んかは。此の車の體をだに人に語せてこそ止め」とて一條殿の許に停車で、清侍從殿や在す。杜鵑の聲聞て今なん歸り侍る」と言せたる。使使「只今參る、吾が君、吾が君」となん宣る。侍に間擴て指貫奉りつ」と言に、待べきにもあらずとて、走せて、土御門方向へ遣するに、何時の間にか装束しつらん、帯は道の隨に結て、公「暫々」と追ひ來る。供に侍、雑色、物履で走るめる。渣疾く遣れ」と甚ど急して、土御門に着ぬるにぞ、喘ぎ惑て在して、先づ此の車の體を甚く笑ひ給ふ。公「現の人の乗るとなん、更に見ぬ。仍下車て見よ」な

上らなくては、都の御客様らしく御座いません」など戯言を言つて興をそへ、明「その蕨は私が摘みましたのですから、どうぞ」などと勸めるので、「だつて、女官さん達のやうに、並んで食べるのは」といふと、明「ではおろして召上れ。常任這伏には馴れた方たちだから」と、懸盤から食物を下したりして、大さわぎで食べさせやうとする中に、車副が、「雨が降り出しさうで御座います」といふから、いそいで車に乗って「さあ、こゝで歌を詠まなくては」と言ふと、(友だちの)女房が、女「爰でなくとも、途中でも」と言つて、卯の花の一杯咲いた枝を折つては、車の簾や車のまはりにさすので、まるで卯の花襲ねの衣裳を、腰にかけたやうだ。供の男

ど笑ひ給は、供なりつる人們も、興じ笑ふ。公「歌は如何にか、其れ聞ん」と宣ば、清、今、御前に御覽せさせてこそは」など言ふ程に、雨實に降ぬ。公「何か他御門の如にあらで、此の土御門しも、屋も無く作り初けむと、今日こそ甚憎けれ」など言て、公「如何で歸んすらん。此方々は、只後じと思つるに、人目も知す走れつるを、あゝ往んこそ其無興けれ」と宣ば、清、率給かし、内裏へ」など言ふ。公「其も、烏帽子にては、如何でか」。清、取に遣り給へ」など言に、まめやかに降ば、笠なき男們、唯引に引き入つ。一條より笠を持って來たるを翳せて、打ち見返り打ち見返り、此の度は徐々と物憂氣にて、卯の花ばかりを取り在するも興し。然て參りたれば、有様など問せ給ふ、怨つる人々怨じ心憂がりながら、藤侍從(公)一條の大路走りつる程語るにぞ、皆笑ぬる。公「然て孰、歌は」と問せ給ふ。斯々と啓すれば、宮口惜の事や、殿上人などの聞んに、如何でか巧しきなくてあらん。其の聞つら

達も大笑ひしながら、網代をまで、がたくと衝き動かして、「爰にも挿せる。爰にも挿せると、一杯にさし込んだ。誰かに見せたいと思ふのに、たまに行き會ふ者も、ねつから、つまらない法師や、相手になれない下賤ばかりで残念だ。

その中にもう御所が近くなつた、これきりではつまらない。車の様子だけでも、人に見せて、評判にしたいものだ、一條殿の傍で、車をとめて、清侍從(公)さんはお出ですか。時鳥の聲を聞きに参つて、唯今もどりです」と言ひ込ませると、使が出て来て、使「唯今参ります。よろこそ」と被仰つて、侍で召物を一杯とり散して、指貫を召して居らつしやいます」といふ。待

ん所にて、直とこそ詠ましか。余り儀式興醒つらんぞ奇きや。此處にても詠め。言ふ効なし」など宣すれば、實にと思に、甚困惑きを言ひ合せなどする程に、藤侍從(公)の、往つる卯の花に付て、卯の花の薄様に、

公「杜鵑啼く音探ねに君往と、聞ば心を添もしてまし。」返歌し奉らんなど、局へ硯取に遣ば、宮「唯此處して疾く言へ」とて、御硯の蓋に、紙など入て賜せれば、清宰相の君書き給へ」と言を、幸「仍其許に」など言ふ程に、搔き暮し雨降て、雷も劇烈しく鳴たれば、物も覺ず唯下しに下す。職の御曹子は、蓆をぞ御格子に閉り渡し感し程に、歌の返事も忘ぬ。甚久く鳴て少し止む程は、聞く成ぬ。只今、仍、其の御返歌奉んとて取りかゝる程に、人々上達部など、雷の事申しに参り給つれば、西面に出て、物など聞る程に紛ぬ。人將た、指得たらん人こそ知めとて止ぬ。大方此の事に宿世なき日なり。倦じて、清「今は如何で、然な

つて居るでもない、土御門の方へ走らせるのを、いつの間に支度をなさつたのか、歩きながら帯をしめ、公「一寸、一寸と追かけてお出になる。お供には、侍と、雑色が、跣足で馳けてついて来る。清疾くお遣り」と余計急がせて、土御門に往きついた時に、せい〜と息をはづませながら、追ひつぐが早い、車のあり様を大笑ひなさる。公「とても正氣の人が乗つて居さうにない。まあ下りてお見せなされ」などお笑ひになるので、お供の人達もきやつ〜と笑ふ。「お歌はどういふのですか承りませう」と被仰る。清「宮様にお眼にかけましてから」などごまかす中に、雨がほんとうに降つて来た。公「何だつてこの土御門に限つて屋

ん往たりしとだに、人に聞せじ」などぞ笑を、宮「今も何と、其、往たりし人々の言ざらん。然ども、然せじ」思にこそあらめと、不興し氣に思し召たるも、甚興し。清「然ど今は無興く成にて侍るなり」と申す。宮「無興かるべき事かは」など宣せしかど止にき。二日許ありて、其の日の事など言ひ出るに、宰相の君、幸「如何にぞ、手から折たると言し下殿は」と宣ふを聞せ給て、宮「思ひ出る事の體よ」と笑せ給て、紙の散たるに、宮「下殿こそ戀しかりけれ。」と書せ給て、宮「上句言へ」と仰らるゝも興し。清「時鳥 探て 聞し聲よりも、」と書て參せられたれば、宮「甚う承張たりや。斯までだに、如何で時鳥の事を思つらん」と笑せ給も恥しながら、清「何か此の歌、惣て詠み侍じとなん思ひ侍るものを。物の折など、人の詠み侍にも、詠め」など仰らるれば、得侍まじき心地なん爲侍る。如何で

根がないのでせう。今日はほんとうに憎らしい」などと被仰つて、公「あゝつまらない。追かけるに夢中になつて、人眼も思はず馳けて来たのに、又すぐ引返すとは」と被仰るので、清「あなたも居らつしやいよ、御所へ」などいふ。公「それにしては烏帽子では」清「お装束を、とりにおやりなさいよ」などいふ中、大ぶりになつて来たので笠のない男たちは、やたらに車を門の中へ引き込んでしまつた。侍従さんは、一條のお邸から持つて来た笠をお供にさしかけて、私たちの方を見返り見返り、今度はのろ／＼とつまらなうに、卵の花だけを持つて、おかへりになるのをかしい。さて御前へ出ると、様子をおたづねに

かは文字の數も知す、春は冬の歌を詠み、秋に春のを詠み、梅の時は菊などを詠む事は侍ん。然ど歌詠むと言れ侍りし後裔は、少し人に勝りて、其の折の歌は是こそありけれ。然は言ど其が子なればなど言れたらんこそ、効ある心地し侍め。露取り分たる方もなくて、有繫に歌がましく我はと思る體に、最初に詠み出で侍んなん、亡き人の爲最惜く侍る」など切實に啓すれば、笑せ給て、宮「然ば唯心に任す。我は詠めとも言じ」と宣すれば、甚心安くなりぬ。清「今は歌の事思ひ懸け侍じ」など言てある頃、庚申せさせ給て、内大臣殿(伊)甚う準備し給り。夜打ち更る程に、題出して、女房に歌詠せ給ば、皆氣色立ち動し出すに、宮の御前に近く侍ひて、物啓しなど、他事をのみ言を、大臣(伊)御覽じて伊「何か歌は詠で、離れ居たる。題取れ」と宣ふを、清「然る事承りて、歌詠まじくなりて侍れば、思ひ懸け侍らす。」伊「異様なる事、實に然る事やは侍る。何かは許させ給ふ。甚有まじき事

なる。置いてきぼりになつた人達が、怨めしく不快に思つて居たらしかつたが、藤侍従さんが一條の大路を馳け出した事を咄したら、皆な笑つてしまつた。宮「さて、歌は何と」とおたづねになる。清「かやう／＼で、まだ詠みません」と申上げると、宮「まあ残念な。殿上人などが尋ねた時、何といふつもりぞ。時鳥を聞いたその所で、すぐ詠めばよかつた。余り堅くなり過ぎて、興がのらなかつたのだらう。爰でも詠んだらどう？何といふ事だらう」など被仰るので、ほんとうにさうだつたと、面目なさを、言ひ合つて居る所へ、藤侍従が、先刻の卵の花につけて、卵の花色の薄様に、公「時鳥啼く音たづねに君ゆくと、

なり。縦し他時は知す、今宵は詠め」など責させ給ど、氣清う聞も入で侍ふに、他人們詠み出して、巧拙など判定らるゝ程に、些なる御文を書て賜せたり。披て見ば、宮「元輔が後と言るゝ君しもや、今宵の歌に外れては居る」とあるを見るに、可笑しき事を類なきや。甚く笑は、伊「何事ぞ、何事ぞ」と大臣(周)も宣ふ。清「其の人の後裔と言れぬ身なりせば、今宵の歌は先ぞ詠まし。憚む事候ずば、千歌なりとも此方よりぞ出で參で來まし」と啓しつ。五月の御精進 長徳元年五月の中宮の御精進なり、前月十日御父道隆公路去あり、さらでも三齋月とて、正五九の三月に精進。佛教にて天帝といふ帝釋天、南閻浮提に向ひて、衆生の善惡を勘ふる月なれば、戒を保ち潔齋すといふ○塗籠 寢殿の奥の方に土にて厚く塗り籠めたる室。寢所に用ゐ、又衣服調度など入るゝ所ともす○二間なる所 宅神を祀り佛像などかけ置く間。但し時に臨みて、しつらふなり○ことにしつらひ 平日とかはりて、佛像などかけおくをいふ○にくき名 「しやれた名」なり、桐機わたるにはあられど、それに似たるしやれた名の橋の意。聞きにくき名

聞かば心を添へもしてまし。」
(時鳥の聲をききにお出かけになると知つたら、心だけでも御供をすべきだつた) 清「お返事を致しませう」と、局へ硯をとりやると、宮「早い方がよい、これで」と、御硯の蓋に紙など入れて下さつた。清「宰相さん、お書きなさい」といふと、幸「まあ、あなたからなど、言つて居る中に、眞暗になつて大降りになり、雷もひどくするので、夢中でどん／＼御格子をおろした。(この)職の御曹司は、部を御格子にしてある。それをおろす騒ぎで、歌のお返事も忘れてしまつた。永い事鳴つて、少し静まつた時分には、もう昏くなつた。お返事を今の中にしやうと取りかゝらうとすると、又、女房達や、

といふ説は當らず、「鶴の橋」といふは橋の處にもありたり、そのわたりに往きたるなるべし○宮司 職の役人になり、この下に「に」の意あり○五月雨はとがなき平常はさしよせては乗るべからぬなり「四位已下及び内侍者聽入」土門「但不得至三陣下」と延喜式にあり、されど女房は装束の濡る、恐れあれば、默許あるなるべし○うま場 右近の馬場は一條大宮、左近のは一條西ノ洞院にあり、左近の方、賀茂へゆく途なり○眞ゆみ 「ま」は美稱なり○手つがひ 賭弓などの前に行ふ演習なり、それに荒手つがひ、眞手つがひの二あり、粗、ろみ、本、ろみの意なり○左近中少將 左近衛府の中將と少將なり、三日は左近の荒手つがひ、同四日は右近の荒手つがひ、五日は左近の眞手つがひ、六日は右近の眞手結なれば、こゝは五日のなるべし○道も 賀茂の祭の時を思ひ出づるなり○明順 高階成忠の三男にて、中宮の御母貴子の兄なり、從四位上、左中辨○障子 衝立障子なるべし、馬がたの障子(衝立)は禁中にもあり○あじろ屏風 竹又は繪にて朝代に編みたる屏風○みくりのすだれ 三稜草は、莖、光滑にして三稜、櫻欄の莖と同じ、その中の白きしべを剖きて編みて、簾としたるもの、柔にして藤の如しといふ○こかせ 稻を束のまゝかこひ置く、この頃の風習なれば、五月にても、出して、こくなる○くるべきもの 一本「くるめくもの」とあり、くる／＼廻るものにて、石臼なるべし○見える、人なれば 人の前にて食事など、むざとせぬまなり○家あるじいとわろく 一本「家のあるじ逃げぬばかり責め出だしたとして、こゝまゐるべし」とあり、もつとくれ／＼と所望して、あるじが逃げ出すほど多く食すなり○女官 女房よりは下級の禁中奉仕の婦人なり、女藏人、女端、刀白、得選など、それらの人は一つの横長き膳に着き並みて食するなるべし○這ひ伏し 女房は常に兩陛下の御前に在るもの故、體を前風に、肘は坐におろし、衣裳に埋もれて、横びる

上達部などが、雷の御見舞に參上したので、西面に出て御挨拶などして居る中に、又紛れてしまつた。他の人は又名指で詠みかけられた私が、お返事をするだらうと、そのまゝにして居る。大たい歌の詠めない日なのだと、ほつこりしてしまつて、清「もう決して、時鳥聞きに往たなど、人に咄しますまゝ」と笑つたら、宮様が宮「今だつて、聞きに往つた人達が咄さずには居まい。詠まないつもりなのだらう」と御不興の御様子が、をかしい。清「でも、もう何だか、いやになつてしまひましたから」と申上げる。宮「いやになるといふ事があるものか、(お詠み)。」などと被仰つたけれども、そのまゝにしてしまつた。二日ばかりして、その日の

く坐する形をいふ○まかなひさわぐほどに 省筆しあれど、食したるは、後に下殿の事をいへるにて明かなり○このうた 時鳥の歌なり○卯花がさね 表白、裏背○こしにかけ 「こゝにかけ」とある書もあり○あはなむ なむは希望の助動詞○一條殿 藤原公信にて、齊信の弟なり○侍從殿 公信を指す○さぶらひ 親王大臣以下、諸家格勳の者の稱○雑色 禁中の藏人所に屬せるは良家の子弟なれども、こゝは公信の家の下輩にて、後世の中間足輕の如きものなり○歌はいかにか 何事かあれば、まづ歌を詠むは、この頃の風習なれば先づ問ふなり○お前に 「宮様にお眼にかけてから」と訓辭なり○雨まことに 前に、「雨ふりぬべし」といへば」とありし照應なり○土御かど 陽明門の北にある上東門の一名。正門にはあらず、外郭十二門(朱雀、美福、皇嘉、陽明、待賢、郁芳、殷富、藻壁、談天、達智、安嘉)の他にある脇門なり、北端の第一門にして、左衛門府衛護す○あ、ゆかんこそ 一本「あ」とあり、何かの誤寫にもや、「あ、」を嘆息の辭として「歸り往かむこそ」と解せる説もあれども、さる意味の處は必ず「あはれ」といふが、この頃の詞なれば、「あ、はれ」といふ嘆息の辭「こゝのみ「あ、」とあるは心得ず、一本又「あふ」とあり、さらば「逢ふとそのまゝ往つてしまふは無興」といふ意ともとるべし、それもや、言ひ足りぬ詞なり、誤寫多き書なれば、強て牽強せずともなれど、「すさまじ」といふ詞によりて、以上二つに近き意と見てよろしなるべし、「あ、このまゝ、別れゆかむはすさまじ」とも「あふてすぐ別れゆかむは、すさまじ」とも、つまりは同じ意味となる○うけはりたりや 「無遠慮に言つたものだ」の意なり、下わらびの好味なりし事を骨に言ふよと評されしなり○かうまでだに この上に「されども」の意あり、「下殿こそ」と椰揄されしに對して、すぐに「時鳥たづねてきしこゝより」と又、時鳥の事を言ひ出だせるを「それほどまで、どうして時鳥の事ばかりを

事など言ひ出したら、宰相さんが、寧ろどうでした。あの、「自分で折りました」といつた下敷は」といふのをお聞きになつて、宮、意地の汚い事を思ひ出して居る」とお笑ひになつて、そこらにあつた紙に、

心にかけるのか」と笑はる、なり○元輔 清少納言の父なり、村上天皇の天曆中、大中臣能宣等と、和歌所の寄人となり、萬葉集に調點し、又後撰和歌集を撰す、冷泉天皇の安和中、從五位下を授けらる、河内權守となり、周防守に遷り、鑄錢長官を兼ね、圓融天皇の天元中、從五位上に進み、花山天皇の寛和中、肥後守に任ぜられ、一條天皇の正暦元年卒す、年八十三。清少納言は晩年(五十余歳)の子といふ。

宮「下敷こそこひしかりけれ」(あのわらびがおいしかつた)とお書きになり、「もとをつけよ」と被仰るもおもしろい。

清「時鳥尋ねて聞きし聲よりも」(時鳥を尋ねて聞き得た聲よりも)

と書いてさし上げたならば、宮「大層御馳走だ事。(でも)そんなにまで、どうして時鳥の事を氣にするのだらう」と、お笑ひになるのも氣まりが悪くて、清「いえ、もう歌といふものは一切詠むまいと存じて居ります。何かで、皆さんが詠む時、私にも、詠めと被仰られると、もうお傍を退らうかとさへ存じます。文字の數ぐらゐは知つて居りますし、まさか春、冬の歌を詠んだり、秋、春の歌を詠んだり、梅の時に菊などは詠みませんが、でも歌詠みと言はれた者の子孫と生れましたからには、少しは人に勝れて、「何の時に斯ういふ歌を詠んだ、誰々の子孫だけの事はある」と言はれたらこそ、詠む効も御座いませう。格段の事もない歌を、高慢に、人より先に詠み出したり致しますのは、先祖にも氣の毒で御座います」など、眞剣に申上げると、お笑ひになつて、宮「では、氣任せにおし、私は詠めとも言ふまい」と被仰つたから、やつと安心した。

清「もう歌といふ事は忘れませう」など、言つて居る時分、お庚申をなさつて、内大臣様(周伊)が、大層御馳走の用意をなさつた。夜が更けてから題をお出しになつて、女房に歌をお詠ませになると、皆な一生懸命で、ひねり出して居る。私は(宮様の)お傍近く居て、お咄など申上げて居たら、大臣(周伊)が御覽になつて、伊「なぜ歌を詠まないで、遠くに居るのか。来て題を取れ」と被仰る。清「詠めとも言ふまいと宮様が被仰いましたから、もう詠むまいと存じまして」伊「飛でもない事。そんな事が御座いましたのか。なぜお許しになりました。いけません。外の時はとにかく、今夜は是非詠め」などお責めになるけれども、てんで耳にも入れずに居ると、外の人達が詠み出したのを、よい、わるいと評定する時に一寸した御文を書いて下さつた。あけて見ると、

宮「元輔が後と言はるゝ君しもや、今宵の歌にはづれては居る。」

(元輔の子孫と言はれるあなたが、まあ今夜の歌の仲間を外れて居る)

とあるのを、拜見したから、堪らなく面白くなつて、くつ／＼と笑ふと、伊「何だ／＼」と被仰る。

清「その人の後といはれぬ身なりせば、こよひの歌は先づぞ詠まゝし。」

(元輔の子孫だなど、言はれない身なら、今夜の歌は一番がけによみませうもの)

その心配さへ御座いませなければ、御催促がなくとも、千首でも詠んでさし出します」と申上げた。

(御親戚の方々や、(若い)君達や、殿上人など、御前に多勢居らつしやるから、廂の柱に倚り懸つて、友達の女房と咄して居ると、何か投げて下さつた。披けて見ると、宮、思ふべしや否や、第一ならずばいかゞ(あなたを好きにならうか、なるまいか、もつとも第一番の好きでなくてはいけないか)とお書きになつてある。いつも御前でお咄など申上げる序にも、清、すべて、人には、一番好きに思はれない位なら、いつそぐつと憎まれ、ぶあしらひをされて居た方がよい。二番目三番目位に思つてもらふ位なら、死んだ方がましだ。どうか一番に思はれたいものだ、」など、言つたら、「まるで「乗の法だ」と皆なが笑つた、その事を被仰るのだらう。

御方々、君達、殿上人など御前に人多く侍へば、廂の柱に倚りて、女房と物語して居たるに、物を投げ賜せたる。披て見れば、宮「思ふべしや否や。第一ならずば如何」と問せ給り。御前にて物語などする序にも、清、惣て人には一に思れずば、更に何か爲む。唯甚う憎れ悪う爲られてあらん。二三にては死とも在じ。一にてを在ん」など言ば、「一乗の法なり」と人々笑ふ事の條なんめり。筆紙賜りたれば、清「九品蓮臺の中には、下品といふとも」と書て參せられたれば、宮、無下に思ひ屈じにけり。甚悪し。言ひ初つる事は然てこそ在め」と宣すれば、清、人に隨てこそ」と申す。宮、其が悪きぞかし。第一の人に、又一に思れんとこそ思め」と仰らるるも可笑し。

一にてを「な」は強めの助辭○九品蓮臺 無量壽經に三等生とあるを、觀無量壽經に九品に分つ、即ち彌陀の淨土に往生するに、行業の優劣によりて、九等の階級ありとなり、一に上品、上生、二に上品中生、三に下品下生、その三つに又三等づあり、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生の如し、

筆や紙を下さつたから、清、九品蓮

臺の中なら、下品でも」と書いてさし上げたならば宮、大さう、しよげたものだ。いけない。一度言つた事はちがへない方がよい」と被仰るので、清、先様によります」と申上げる。宮「それがいけない。一番の人に一番に好かれやうと思ふがよい」と被仰るのも、誠におもしろい。

「九品の淨利」「九品の安養」といふ。

中納言さん(藤原)がお出でになつて、御扇をお上げなさるのに、隆、私は大した骨を手に入れました。それを張らせてさし上げやうと存じますが、よい加減の紙では釣合ひませんから、唯今探して居ります」と被仰る。宮、どんな骨です」とお尋ねになると、隆、大したもので御座います「見た事がない」と皆なが申す。實際あの位のは御座いません」と自慢をなさるから、清、では、扇の骨ではなくて、海月の骨でせう」と申上げると、隆「おもしろい。それは

中納言殿參らせ給ひて

中納言殿(藤原)參せ給て、御扇奉せ給に、隆、隆家こそ甚き骨を得て侍れ。其を張せて献せんとするを、尋常の紙は張まじければ、探め侍るなり」と申し給ふ。宮、如何様なるにかある」と問ひ聞させ給ば、隆、惣て甚く侍る。更に未だ見ぬ骨の様なりとなん人申す。實に斯許のは侍ざりつ」と言高く申し給ば、清、然ては、扇にはあらで、海月のなり」と聞れば、隆、是は隆家が言に爲てん」とて笑ひ給ふ。斯様の事こそ片腹痛きもの、中に入つべけれど、人毎「勿落しそ」と侍は如何は爲む。

扇、これに趣向を凝して風流を競ふ具にしたる事は、大鏡に、行成の才をほむる處に、「殿上人扇どもして參らするに、この人々は骨に藤繪をなし、或は白かれ黄が

私の言つた事にしやう」とお笑ひになる。こんな事は、傍痛いものゝ中に入れるべきだけれども、何でもそのまゝお書きつけなさいと、皆がいふから、入て置いた。

毎日びしょ／＼と降る時分、その日も降るのに、御使で、式部丞信經が参上した。いつもの通りに褥を上げたらば、いつもより遠くへ押しやつて、敷かずに居るから、清「あれは、どなたのですか」と言つたら、笑つて、信「かやうな

れ、沈、紫煙の骨になむ、筋を入れ彫物をし、得もいばぬ紙どもに、人のなべてしらぬ詩や歌や又六十余國の歌枕に、名あがりたる處々などを、かきつゝ、参らするに、例のこの殿(行成)は骨の漆ばかりを、なかしげにぬりて、黄なる唐紙の下繪、ほのかにをかしきほどなるに、表の方に樂府をうるはしう眞(漢字)にかき、裏には御筆とめて(熱心に)草にめでたく書き奉り給へりければ、打ち返し／＼帝御覽じて、御手宮に入れさせ給ひて、いみじき御寶と思召したりければ」とあり○實高く隆家は素様に勇猛なりしかば、華奢風流のみめづるこの頃の人には「さがな者」と評せられたるさま、大鏡に見えたり、されども、やまとだましひ強くて、筑紫に大貳たりし頃、刀伊國より冠し來りしを、平げなどもしたりき。言高く「強く言ふなり、自然音聲も高かるべし○くらげの骨、鹽に漬けたるをこの頃食用としたれば、骨のなき事は知りたるを、余りに「まだ見ぬ骨のさま」と慢じいふを冷嘲したるなり○人ごとな落しそ 他本「一事な落しそ」として註しあるはいかゞ。

雨の打ち延へ降る頃、今日も降に、御使にて式部丞信經参りたり。例の褥差し出したるを、常よりも遠く押し遣て居たれば、清「彼は誰が料ぞ」と言ば、笑て、信「斯る雨に上り侍ば、足形着て、甚不便に、汚氣になり侍りなん」と言ば、清「何ど。洗足料にこそはならぬ」と言を、信「是は、御前に、偉う仰らるゝにはあらず、

雨天に敷物にのりましたら、足のあとがついて、汚くなりませう」清「(なぜそんなに御遠慮なさる)お洗足料に丁度よいでは、ありませんか」といふと、信「それは、あなたが、えらくて被仰つた秀句ではありませんよ。私が足あとの事を申さずば、お思ひつきにならぬのだから」と幾度も幾度も言つたのが、をかしかつた。余り自慢過ぎると、傍痛くて、清「以前、太后(藤原安子)の御所に、ゑぬたきといふ評判の下仕が居ました。美濃守で亡つた藤原時柄が藏人だつた時、下仕たちの居る所に立寄つて「これが評判のゑぬたきか、評判ほどにも見えない」と言つた返事に、ゑぬ「時がらによつて、見えます」と言つたのが、相手をわざ／＼選んで出し

信經が足形の事を申さたましければ、得宣「さらまし」とて返々言しこそ可笑かりしか。分外なる御身譽かなと片腹痛し。清「以前、皇太后宮(村上后)に、ゑぬたきと言て、名高き下仕なんありける。美濃守にて亡にける藤原時柄、藏人なりける時、下仕們、在る處に立ち寄て、時「是や彼の高名のゑぬたき、何ど然も見ぬ」と言ける返事に、信「其は時柄に、然も見る名なり」と言たりけるなん、敵に撰ても、如何でか然る事はあらんと、殿上人上達部までも興ある事に宣ひける。又然けるなんめり、今まで斯く言ひ傳るは」と聞たり。信「其れ又時柄が言せたるなり。惣て題出しがらなん、詩も歌も偉き」と言ば、清「實に然る事なる事なり。然ば題出さん、歌詠み給へ」と言に、信「甚好き事。一は何爲ん。同うは數多を仕う奉ん」など言ふ程に、御返書出ぬれば、信「噫恐し。罷り出ぬ」とて立ぬ。人々「手も甚う、眞字も假字も拙う書を、人も笑などすれば、斯してなんある」と言も可笑し。

ても、さう、まきは言へないものだ、殿上人や上達部まで、おもしろい事に被仰つた。又たしかに秀句でせう。今まで咄し傳へる位ですから」と言つたら、信「それも時柄が言はせたのです。すべて題の出し方一つで、詩でも、歌でも、うまく出来るものだ」と言ふ。清「成程。では題を出しますから、歌をお詠みなさい」と言ふと、信「よろしいとも、しかし一首ばかりではつまらない、澤山詠ませう」などいふ中に、御返事が出たら、信「やれ恐ろしい。もう退ります」と立つてしまつた。人々「手もわるくて、眞字も、假名も、

作物所の別當する頃、誰が許に遣にけるにかあらん、物の繪様遣るとて、「是が如に仕るべし」と書たる眞字の様、文字の、世に知す拙きを見付て、其が傍に、清是が隨に仕らば、異様にこそあるべけれ」とて、殿上に遣たれば、人々取て見て、甚う笑けるに、大腹立てこそ恨しか。

信經 藤原爲長の子。後、從五位越後守に至る。○せんぞく料 猫の皮にて作りたる席を氈褥といふ、それに洗足をかけて、「それにおのりになつたら洗足器になりませう」となり(その褥が氈褥なりしか、毛席の名をおしひるめて褥の名となしたるかなるべし)。○下づかへ 雜仕の女。○おんかへり出てぬれば 一本「御題は出でぬれば」とあり、さらば中宮より歌の題を出されし事になりて「あな恐ろし」と逃げ出だすには合へども、主上への御返書が出来たなしにして、題を出されの先にと、逃げゆきしと見てもよろし。○かくして「斯く紛らして逃げた」となり。○つくも所 禁中月華門の外にありて製造彫刻、鍛冶など、種々の細工をする所。長官を別當といひ、その下に預、史生あり。

へただから、皆なが笑ふと思つて、逃げ出したのだ」といふのも可笑い。(その信經が)作物所の別當だつた時分に、誰の處へ遣たんだつたか、細工場の繪圖面をやるのに、(繪の傍に)「これがやうに仕らまつるべし」(この通りにせよ)と書いた漢字が、減多とない拙なのを見つけて、その字のそばに、清「これがまゝに仕らまつらば、異様にこそあるべけれ」(こ

の通りにしたら、へんてこでせう)と書いてやつたら、皆なが取つて見て、大笑ひをしたので、大怒りに怒つて、恨んだ(事があつた)。

淑景舍(女御)が、東宮(三條)にお上りになる御様子など、誠にお立派だ。正月十日にお上りになつて、宮様(中宮)の處に、御文だけはせつ／＼通ふけれども、御對面などはなかつたが、二月十日、宮様の處へお出でになるといふお手紙があつたので、ふだんよりも御へやを特別に磨きつくろひ、女房なども皆その支度で居た。夜中頃お出でになつたから、間もなく夜が明けた。登華殿の東の二間に、御へやを裝飾をした。翌る朝早くと御格子をすつかりあけて、曉方、殿(隆)と上(高内)と、御同車でお上りになつた。宮様は御曹子の南に、四尺の屏風を西東に仕切つて、

淑景舍(原)春宮に參り給ふ程の事なると、如何は愛たからぬ事なし。正月十日に參り給て、宮(定)の御方に御文などは繁う通ど、御對面などはなきを、二月十日、宮(定)の御方に渡り給べき御消息あれば、常よりも、御裝飾特殊に磨き粧ひ、女房なども皆用意したり。夜半ばかりに渡せ給しかば、幾許もなく明ぬ。登華殿の東の二間に御装置は爲たり。翌日甚疾く御格子開り渡して、曉、殿(隆)上(貴)同御車にて參り給にけり。宮(中)は、御曹子の南に、四尺の屏風西東に隔て、北向に立て、御疊褥打ち置で、御火桶ばかり奉りたり。御屏風の南御帳の前に、女房甚多く侍ふ。此方にて御髪など奉る程、宮淑景舍(原)は見奉りしや」と問せ給は、清「未だ如何でか。積善寺供養の日、御背後を僅に」と聞れば、后「其の柱と屏風との許に寄て、我が後より見

北向きに立て、御疊や御褥を置いて、御火桶だけをさし上げた。御屏風の南御帳の前に、女房が一杯居る。此方で御髪など遊ばす間に、宮淑景舎はお見上げ申たか」とおたづねになるから、濱「いえまだ。積善寺修養の日に、御後姿を一寸拜見致しましたとけ」と申上げると宮「その柱と、屏風の傍へよつて、私の後ろから御覽。大へんにお美しい方よ」と被仰るので、嬉しく、余計御ゆかしくなつて、早く拜見したいと思ふ。(宮様は)紅梅の固紋や、浮紋の表着を、紅の御打衣三重の上に、無難作に重ねて、お出でになる宮「紅梅には、濃い衣がよいものだ。それにもう、紅梅でもない時節だけでも、萌黄などがいやだから。でも紅では少

よ。甚美き君ぞ」と宣すれば、嬉しく床しき勝りて、疾と思ふ。紅梅の固紋浮紋の御衣ども、紅の打たる御衣三重が上に、唯引き重て奉りたるに、宮「紅梅には濃き衣こそ美しけれ。今は紅梅は着でもありぬべし。然ど萌黄などの憎ければ。紅には合ぬなり」と宣すれど、唯甚愛たく見させ給ふ。奉りたる御衣に、即て御容貌の艶美合せ給ふ、仍一方美き人も斯や在すらんとぞ床しき。然て膝行出させ給ぬれば、即て、御屏風に添ひ付て覗くを、女房「悪かんめり。不良き業」と聞えごつ人々も、甚可笑し。御障子の廣う開たれば、甚熱く見ゆ。上(貴)は白き御衣ども、紅の張たる二ばかり、女房の裳なんめり、引き被て奥に寄て、東面に在すれば、只御衣などぞ見る。淑景舎は、北に少し寄て、南向に在す。紅梅ども数多濃く淡くて、濃き綾の御衣、少し紅き蘇枋の織物の袷、萌黄の固紋の若やかなる御衣奉りて、扇を直と翳し隠し給り。最甚く實に愛たく美しと見え給ふ。殿(隆道)

し合はない」と被仰るけれども、大さうお美しい。お召と御容貌とが照り映えて、お美しいので、お美しいと評判のお一方も斯うで居らつしやうとゆかしい。お設けの席にお出ましのあとで、すぐ御屏風にびつたりからだをつけて覗いて居ると「わるい事、失禮でせう」と世話をやく人たちもをかしい。御障子があけ拂つてあるので、すつかり見える。上(高内)は白のお召など、紅の張つたのを二枚位に、女房の裳だらう、引きかけて、奥によつて、東向にして居らつしやるから、お召だけしか見えない。淑景舎は、北に、少し寄つて、南を向いてお出でになる。紅梅などを澤山、濃いのと薄いのとの上に、(紅の)濃い綾のお召、少し赤味のある蘇枋の織物

は薄色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども、御紐貫て、廂の柱に後を中て、此方々に向て在す。愛たき御有様どもを打ち笑て、例の戯言を爲させ給ふ。淑景舎(原)の繪に書たる如に美し氣にて居させ給るに、宮(中)甚安易に、今少し成人びさせ給る御氣色の、紅の御衣に匂ひ合せ給て、仍儔は如何でかと思させ給ふ。御手水奉る。彼の御方(淑景舎)は、宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人して、持て参るめり、唐廂の此方の廊にぞ、女房六人ばかり侍ふ。狭しとて、一半は御送して、皆歸にけり。櫻の汗衫、萌黄、紅梅など甚く汗衫長く裾引で、取り次ぎ参す、甚優雅し。織物の唐衣ども溢れ出で、相尹の馬頭の女少將の君、北野三位の女宰相の君などぞ、近くはある。噫美しと見る程に、此の御方の御手水番の采女、青末濃の唐衣、裙帯、領巾などして、面など甚白くて、下仕など取り次て奉る程、是れ將た公儀しう唐向て興し。御膳の時に成て、御髪上参りて、藏人

の桂、萌黄の固紋の派手な御召を召して、扇でびつたりとお顔を隠してお出でになる。なるほど大へんにお美しさうだ。殿(隆)は薄色(紫)の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣などで御紐(直衣の)を結んで、廊の柱にお背中をあて、此方(左)を向いて居らつしやる。御二方の御立派な御様子、にこくと御覽になつて、例の御戯言を被仰る。淑景舎が繪のやうにお美しく居らつしやるのに、宮様はおつとりと少し大人びて居らつしやる御様子、紅の御衣によく映つて、やつぱりすぐれてお美しいと思ふ。朝の御手水をさし上げる。彼方(右)へは、宣耀殿、貞觀殿を通つて、童二人と下仕四人で持つて上がる。唐庇のこちらの廊に女房が六人ばかり居

們、陪膳の髪上げて奉する程に、隔たりつる屏風も押し啓つれば、垣間見の人、隠蓑奪れたる心地して、飽す困惑しければ、御簾と几帳との間に、柱の許よりぞ見奉る。衣の裾、裳など、唐衣は皆御簾の外に押し出されたれば、殿(隆)の、端の方より御覽じ出して、唯ぞや、霞の間より見るは」と咎させ給に、宮少納言が、物床しがかりて侍るならん」と申せ給は、壁、噫耻し。彼は古き得意を、甚醜氣なる女ども持たりともこそ見侍れ」など宣ふ、御氣色、甚得意顔なり。彼方(淑景)にも、御膳奉る。甚美しく、方々の皆奉りぬめり。疾く食し召て翁媪に殘余をだに賜へ」など唯日一日猿樂言をし給ふ程に、大納言殿(伊)、三位中將(隆)、松君も率て参り給り。殿(隆)早速と抱き取り給て、膝に据る給る、甚愛し。狭き縁に、所狭き晝の御装束の下襲など引き散されたり。大納言殿(伊)は莊重しう清げに、中將殿(隆)は臍々しう、靴も愛たきを見奉るに、殿(隆)をば勿論にて、上(子)の御宿世

る。狭いからとて半分は御送り申上げただけで、歸つた。櫻の汗衫に、萌黄や紅梅の衣ものなど美しく、汗衫を長く引いて取次いでさし上げるのが、誠に優美だ。織物の唐衣などが、御簾の下から見えて、すけまさの馬頭の娘の少将さんや、北野三位の娘の宰相さんなどがお傍近く居る。あゝ美しいと見て居る中に、此方(中)の御手水を、當番の采女が、青裾濃の裳、唐衣、裾帯、領巾などで真白にお化粧をして、下仕などから取り次いでさし上げる様子が、これは又、儀式立ち、唐めいておもしろい。御膳の時になつて、御髪上げが参つて、藏人(女)も、配膳も、髪を上げて参る時に、しきりの御屏風も、とりのけたので覗いて居た私は隠れ蓑

こそ愛たけれ。殿「御圓座を」など聞え給へど、大納言「陣に着き侍ん」とて急ぎ立ち給ぬ。暫時ありて、式部丞某とかや御使に参りたれば、御膳舎の北に寄たる間に、褥差し出て据たり。御返事は今日は疾く出させ給つ。未だ褥も取り入ぬ程に、東宮の御使に、周頼少將参りたり。渡殿は細き縁なれば、此方の縁に褥差し出たり。御文取り入て、殿(隆)上(子)宮(子)定など御覽じ渡す。道「御返事、疾」などあれど、頓にも聞え給ぬを、道「私が見侍れば、出で給ぬなんめり。然ぬ折は、間も無く、此よりぞ聞え給なる」など申し給は、御面は少し根みながら、少し打ち微笑み給る、甚愛たし。貴「疾く」など上(子)貴も聞え給は、奥方に向て書せ給ふ。上(子)貴「近く寄り給て、諸共に書せ奉り給は、甚ど憚し氣なり。宮(中)の御方より、萌黄の織物の小桂、袴、押し出されたれば、三位中將(隆)被け給ふ。苦し氣に持て立ぬ。松君の愛しう物宜ふを、誰も誰も愛しがり聞え給ふ。道(宮)の御子達とて、

を取られたやうで、困つてしまつて、御簾と几帳の間の柱の處から拜見する。衣の裾や裳などは皆な御簾の外に出て居るから、殿(隆)が端の方からお見つけになつて、道、誰だ、霞の間から見えるのは」と被仰ると宮、少納言が覗いて居るので御座いませう」と被仰る。道、あゝ恥かしい。あれは古いなじみだ。いやな娘ばかり持つて居ると思ふだらう」などと被仰る御様子、誠に御満足らしい。彼方(子)にも御膳をさし上げた。道、美ましい、皆さんにはもう御膳が出た。早くおすましになつて、爺(婆)にお残りでも下さい」など一日中御戯言を言つて居らつしやる中に、大納言(周)が三位中將(家)と、松君もお伴れになつた。殿(隆)が待ちか

引き出たらんに、劣くは侍じかし」など宣はするを、實に何故か今まで然る事のご心もとなき。未の時ばかりに、菴道奉ると言ふ程もなく、打ち颯き入せ給ば、宮(中)も此方に寄せ給ぬ。即ち御帳に入せ給ぬれば、女房南面に戦向き出ぬめり。廊に殿上人甚多り。殿(隆)御前に宮司召て、菓子肴召す。道人々酔せ」など仰らる。實に皆酔て、女房と物言ひ交す程、互に興しと思たり。日の入る程に起させ給て、山井大納言(頼)召し入て、御桂奉せ給て、歸せ給ふ。櫻の御直衣に紅の御衣の夕映なども、畏ければ止つ。山井大納言(頼)は、入り立ぬ御兄にても、甚好く在すかし。艶麗なる方は此の大納言(周)にも優り給るものを、世の人は切に言ひ恥し聞るこそ、最惜けれ。殿(隆)、大納言(周)、山井大納言(頼)、三位中將(家)、内藏頭(親)など、皆侍ひ給ふ。宮(中)上せ給べき御使にて、馬典侍参り給り、宮、今宵は得」など溢らせ給を、殿(隆)聞せ給て、道、甚有まじき事、疾上せ

ね、お抱き取りになつて、御膝にお据ゑになつた。まことにお美しい。狭い御縁に、窮屈さうに、日の御装束の下襲などが一杯になつて居る。大納言様(周)はおつとりと、お美しく、中將様は、はき／＼と、どちらもお立派なのを拜見するにつけて、殿(隆)は勿論、上の御果報がめでたい。殿が「御圓座を」など被仰つたけれども、(お二方とも)「陣に着きませう」と、急いでお立ちになつた。暫くして式部丞の何とかいふ人が、お使に参つたから、御膳宿の北寄りの所に、御褥をさし上げた。御返事は、今日は早速にお出しになつた。まだその御褥も取り入れない中に、東宮のお使に、周頼の少將が、お出でになつた。渡殿は細いお縁だから、此方の

給へ」と申せ給に、又春宮(三)の御使類にある程甚騒し。御迎に女房、春宮のなども参りて、「疾く」と勸し聞ゆ。宮、先づ然ば、彼の君(子)渡し聞え給てよ」と宣すれば、淑然とも如何でか」とあるを、宮、仍見送り聞ん」などと宣はするほど、甚をかしく愛たし。「さらば遠きを先に」とて、先づ淑景舍(原)渡し給て、殿(隆)など歸せ給てぞ、上せ給ふ。途の間も、殿の御猿樂言に甚く笑て、殆打階よりも落ぬべし。

し量さ東宮に 長徳元年一月十九日關白道隆の二女原子、春宮に入りて女御となれるをいふ、春宮は冷泉院の御子居、真、後に三條天皇。淑景舍は禁中五舍の一にて桐壺ともいふ。十日に 小右紀、日本紀畧に十九日とあり。登壇殿 後宮(常樂殿)を中央にして、麗景、宣耀、弘徽、貞觀、登華の六殿の一殿にして七間四面なり。反橋の渡殿によりて、貞觀殿に通じ、弘徽殿に隣る。〇ひんがしの二間 一本「ひんがしの廂の二間」とあり、二間は廂にあるなり。〇上 北の方の稱なり、こゝは道隆の妻貴子といふ、貴子は大和守(後に從二位して高二位といふ)高階成忠の女、初め掌(侍)なりし故、高内侍といふ、大鏡に「それは實しき文者にて、御前の作文には詩文奉られし」とあり、儀同三司伊周、中納言隆家、中宮定子、淑景舍原子などの母なり、儀同三司の母として「忘れじの行末まではかたければ、今日を

お縁に褥をさし出した。御文を取り入れて、殿、上、宮様などが、順々に御覽になる。殿、御返事を、はやく「など被仰るけれども、すぐにもなさらないのを、殿」私わたくしが見て居りますから、お書きにならないのでせう。居ない時にはすぐお書きになるでせうが「など被仰ると、御顔を少しあからめながら、微笑んでお出でになるのが、まことに美しい。上」早く遊ばせ侍など上高内も被仰ると、奥の方に向けてお書きになる。上侍が、近くお寄り添ひになつて、お書かせになるので、余計お恥しさうだ。宮様から、萌黄の織物の小桂と、袴をお出しになつたから、三位中将がお與へになる。重さうに持つて歸つた。松君が、愛らしく何か被仰るの

限りの命とがな」の歌、外に數首、選集中にあり、(儀同三司とは准大臣をいふ、儀は三司(三公)に同じの義なり、大臣の下、納言の上)○御曹司「お部屋」なり、常居らるゝ所をいふ○おんた、みしとね云々、一本「御しとればかり置きて御火桶まゐれり」この方よろし○み帳 一本「御几帳」これもこの方よろし○さぶらふ 一本「さぶらひ給ふ」これはこの本文の方にて、よろしかるべし○積善寺供養 正暦五年二月廿日關白道隆積善寺を供養せる事、日本紀畧、百練抄等にあり、この時(長徳元年)の前年なり、その前十七日の條に「關白道隆奏請して積善寺を以て御願所となす」といふ事あり、道隆の主催なれば家族は總て參詣し盛儀なりしなるべし○いつしか「早く拜見したしと思ふ」なり○かた被浮紋 綾の文を洗めて固く織りたるを固紋、糸を浮めて織りたるを浮紋といふとぞ○三へが上 紅の打衣三重の上と固紋浮紋の衣を襲はれしとなり○紅袴 古くは桃色の濃きもの、この頃は赤と紫と混じたるもの、十一月より二月までの衣○濃き 紅の濃きをいふ、すべてたゞ濃きうすきといへるは紫と紅とに限り○今は 二月十日なれば、そろく紅梅の時季ならずとなり○ことよき 他によつ方なり淑景舍をさす○女房の裳 裳をつくるは禮なれば、女房のを假に着けしなるべし○濃き蘇芳 蘇芳は暗赤色なり、その時十四五歳なれば、花々と装はれたるべし○紅き蘇芳 蘇芳は暗赤色なり、その赤味の勝ちたるをいふ○若やかなる御衣 表着なり○つとさしかくし 婦人が人にあふ時の、この頃の儀容なり○紅の御衣 直衣の下になり○おん紐さして 直衣のえりの雄紐を雌紐にさすをいふ、打とけたる時には「御紐ときて」などあり、御娘なれども中宮と女御の御前なれば、いさか禮あるさまなり○今少しおとなび 中宮はこの時廿歳なり、やすらかに高位に馴れ給へるさまなり○からびさし 屋根を反らせたる唐風の庇。登花殿東面の貞觀殿に通ずる反渡殿ソリワタノの中央の屋根なり○さく

を、皆さんでお可愛がりになる。殿、宮様中の御子達だと申て、人中へ出しましたも、わるくは御座いますまい」など被仰るのを、ほんに、どうして今まで、おめでたがないのだらうと、待遠しい。未の時頃に、「進道をいたします」といふ間もなく、お召すれの音がして、入御になつたので、宮様もそちらにお寄りになる。すぐ御帳にお入りになつたから、女房は南面にそろく退るらしい。廊に殿上人が一抔居る。殿道の御前に、宮様付の役人呼んで、果物や肴をお與へになる。殿「皆なをも酔はせよ」など被仰る。實際皆な酔つて、女房と戯言を言ひ合つて、てんで面白がつて居る。日の入る頃お起きになつて、山

らのかざみ 表白く裏は濃き蘇芳色のかざみなり○もえぎ、紅梅など 衣の色なり○いみじく この下に「美く」の意あり○馬頭のむすめ少將の君云々 右馬頭相尹の女にて少將といふ女房と、北野三位の女にて宰相といふ女房なり、北野の三位は菅原輔正といひ、菅公の曾孫にて文章博士なり、圓融華山兩朝に侍讀となり、長徳二年參議(唐名宰相)となり、八十五才にて寛弘六年薨す、(馬頭の娘にて少將といへるは宮仕に上りし頃の父の官か、夫の官を呼名にされたるなり)○采女 後宮にて御膳の事を司るもの、郡の少領以上の姉、妹、娘等の形容端正なる者を撰ぶ、すべての御給仕をなすなるべし○くん帯 もと裳の帯の余りを左右によせて體好く長く引きて飾りせしものなるべし。正装の時の用なり、その製「紫緑半合、如三帳紐ツバ端縮形」とあり、後世の引腰といふもの、○ひれ 頸より肩にかけて裝飾としたる中。錦、羅、紗等にて作る○上げて 陪膳の時必ず垂髪スベウカシを結び上げて櫛をもさす事あり、御膳のものに髪カミの毛の觸るゝを憚りてなり○隠れみの 鬼の身を隠す爲の具、隠れ葦籬アシノといへり○霞の間より 古今集に「山櫻霞の間よりほのかにも、見てし人こそ戀しかりけれ」とあるをとりて言はれしなり○おきなおんな 道隆自身と北の方とをいふ○大納言殿 この頃すでに准大臣なれども、清少が後に書く時に思ひちがへたるなるべし、この時二十二歳○三位中將 隆家、十七歳○松君 伊周の子、道隆の孫なり、大鏡に「生れ給ひしよりおほざ大臣大臣(道隆)いみじきものに思して、迎へ奉り給ふ度ごとに、贈りものをせさせ給ひ、乳母も養應し給ひし君ぞかし」とあり、されども父伊周に後れし後、東宮亮より普通なるべき藏人頭にも外れ「三位ばかりし給ひて、中將をだに得兼け給はずなりにしこそいとかなしかりしか」とあり、この人の妻は、帥中納言惟仲の女なりしが、男子一人生みて後、ひそかに逃れて三條帝の皇后妍子(道長の女)のもとに大和の宣旨とて奉仕し

井大納言(道)をお召し入れになり、御桂をお召しになつておかへりになる。櫻の御直衣に、紅の御召の襲つたのが、夕日に照り映えた御美しさなども、恐れ多いから、お褒め申上げない。山井大納言(道)はお親しくない御兄様だけれども、誠にお立派な方だ、お美しい方では、大納言様(伊)にも勝つて居らつしやるのに、世間では無やみに見下げ申すのが、お氣の毒だ。殿(隆)大納言(伊)、山井大納言(道)、三位中将(隆)、内藏頭(親)など、皆お供する。宮様を宮中へお召の御使に、馬(典侍)が参つた。宮「今夜はよう上らぬ」など、お澁りになるのを、殿(隆)がお聞きになつて、道「それはいけません。早くお上りなされ」と被仰る中

たり〇ものくしう 伊周の時廿二歳なれば壯りに、とのほりたるさまなるべし〇ひの御裝束 東帯なり「直衣」を「宿衣」といへるに對して晝の裝束といふ〇らふくじう 功者らしきさまをいふ、ませたるさまなり、道長もこの人には終りまで揮りて好意をよせしませば、大鏡に「入道殿(道長)なほこの殿(隆家)を捨てぬものに思ひ聞えさせ給へるなり、さればにや、世にもいと古り難きおぼえ(聲望)にてこそおはすなれ、御門にはいつかは馬、車の三つ四つたゆる時ある、又道もさり(避り)あへず立つ折もあるぞかし」とあり〇上の御すくせ 貴子は儒家高階氏の女なり、關白の北方となり、中宮東宮妃ならびに儀同三司の母となれるは、たぐひ少き立身なるべし〇わらうだ 「圓座」といふ「藁蓋」の音便かといふ、藁をあみたるを平たく巻きたるもの〇陣に着き 二人とも、役所の席につかむと言ふなり、中將には近衛の陣ノ座あり、大納言には太政官の伏座あり〇おもはやどり 御膳を納め置く所〇まだしとねも 帝よりの御使はこれにて歸りし事見ゆ〇周頼 道隆の六男。母誰ともなし、從四位下にて歿す〇こなたの縁 登華殿の東面の簀子なり〇御覽じわたす この頃はかやうの御文を少しも隠さず、父母兄弟などして見るならひなり〇げになどか 中宮入内より今年は六年めなり、(主上十六歳、中宮二十歳)〇未の時 今の午後二時、〇蘆道 蘆を敷きて往來の路とするもの。貴人の履物直ちに地に着くを避くる爲なり〇こなたに 帝の方になり〇御帳に 御帳臺の中に帝、中宮入らせらるゝなり〇宮司 中宮職の役人〇山井大納言 道頼。道隆の長男にて幼名大千代君、山井殿といふ、母は伊豫守、守仁の女、これに對して次男の伊周を小千代君といふ)この時廿五歳〇入りた、ぬ 貴子の出なれば、中宮とは伊周隆家等の如く親しからぬをいふ〇内藏頭 頼親。道隆の五男、母誰ともなし〇うまの内侍のすけ 左右馬寮の中の官吏を親か夫に持てる内侍の

に、又、春宮の御使もあとから來るの、大へんなさわぎだ。御迎へに、主上の女房や、春宮の女房なども來て、宮「お早く」と、御催促申上げる。宮ではまあ先に、彼方(子)をお送り申て」と被仰ると、原「でもあなたが先きへ」と被仰る 宮「いえ、やつぱりお見送り申てから」など被仰る御様子合が、まことによい。「ではまあ御遠方の方から」と、淑景舎(原)をお先にお送りになつて、殿(道)などお歸りになつたあとで、宮様(中)はお上りになつた。殿(隆)の御歸りがけなどにも、面白い事ばかり被仰るので、皆なが、打橋からころげ落ちさうに、きやつくと大笑ひした。

すけ(尙侍、典侍、掌侍)なり〇今宵は得「今夜は得上りませぬ」なり、父母兄弟の團樂をなつかしまるゝなるべし〇又東宮の御使 主上の方より后町の中宮を訪はせられ、その夜又お召の御使あり、引つゞきて、こゝに來居らるゝ、淑景舎原に東宮よりお召の御使あるなり、道隆の榮花の頂上なるべし(これより六年の後(長保二年)道長の女彰子十三歳にて入内、中宮となり、同年十二月定子皇后崩御す(入内より十一年))〇さらば遠きを先に これは道隆等の説なり〇御さるがうごと道隆は大酒なり、大鏡に「鳥の突い居たる形に瓶を遣らせ給ひて興あるものと思して、ともすれば大御酒入れて召す」「物も覺えず御裝束も引き亂りて御車さしよせつゝ人に倚りて乗り給ふなぞ、いと興ある事にさせ給ひける、但しこの殿(道隆)御酔ひの程よりは疾く醒むる事をぞさせ給ひし、御賀茂詣の日は社頭にて三度の御土器定まりて参らするわざなるを、その御時には禰宜、神主も心得て大土器をぞ参らせしに、三度は然る事にて七八度などめして、上の御社に参り給ふ道にては、やがてのけざまに後の方を御枕にて、不覺に大殿籠りぬ。中界。入道殿(道長)下りさせ給へるに、さてあるべき事なられば、職の外ながら高やかに「や、」と御扇を鳴しなどせさせ給へど、おどろき給はれば近く居より、表の御袴の裾を荒らかにひかせ給ふ折をおどろかせ給ひて、さて御用意はならはせ給へれば、御御筭具し給へりけるとり出で、つくりひなどして下りさせ給ひけるに、いさゝか然り氣なく清げにおはしければ、さばかり酔ひなん人の、その夜は起きあがるべきかは、それぞこの殿(道隆)の御上戸はよくおはしましける」とあり、さるがう言(散樂)の轉。音楽、舞曲、備はるにあらで、一時の戯れに演ずるもの。後には音楽歌舞備はりて職業とする者出でたり)は、戯言、輕口といふに同じ、酔ひに乗じて常に戯れ言をいひしなるべし「途のほど」は淑景舎御見送りの時をいふなるべし〇打橋 かり

殿上から梅の花のすつかり散つてしま
た枝を「これはどうです」と言つたか
ら只、清「早く落ちにけり」と返事をし
たらば、黒戸に殿上人が一杯、その詩
を誦して居たのを、上様(帝一條)がお聞
きになつて、帝「上手な歌を詠んだより
も、この方がよい。うまく答へた」と
おほめになつた。

二月の晦日に、風がひどく吹いて空が
眞黒だのに、雪がはら／＼と散る時、
黒戸に主殿司が来て、「参りました」と
いふから、傍へ寄つたら、「公任の宰相
殿からの(お手紙で)」とさし出したの
を見ると、懐紙にたゞ、

に打わたす橋、何處にも移し用う、源氏に「打橋渡殿」かしこの道に。

殿上より、梅の花の皆散たる枝を、殿上人「是は如何に」と言たる
に、清「唯疾く落にけり」と答たれば、其の詩を誦して、黒戸に殿
上人甚多く居たるを、帝の御前聞せ在して、帝「巧き歌など詠た
らんよりも、斯る事は勝りたりかし。巧う答たり」と仰らる。

はやく落ちにけり 紀長谷雄の「停盃看柳色」の詩の序に「大庚嶺之梅早落、
誰問粉粧」とあるを以て答へたるなり、大庚嶺は、支那の江西、湖南の二省に跨
れる嶺、梅多ければ梅嶺といふ。「落ちぬ」は散る事なり。

二月の晦日、風甚く吹て、空甚く黒きに、雪少し打ち降たる程黒
戸に主殿司来て、去候して候ふ」と言ば、寄たるに、去公任の宰
相殿の、とあるを見れば、懐紙に、たゞ、

公「少し春ある心地こそすれ」

とあるは、實に今日の景色に甚恰く合たるを、是が上句は如何付

公「すこし春ある心地こそすれ。」

とあるのは、成程今日の景色に、びつ
たりと、よく合つて居る。上の句を何
とつけやうと迷つた。清「どなたと、
どなた？」ときくと、主殿司が、何様
と、何様と何様といふ。どれも氣のおけ
る方達ばかりなのに、宰相(任公)への御
返事を、余りつまらない事を申上げて
もと、内々心配だから、宮様におめに
かけて、思召を伺はうと思ふけれども、
上様がお出でになつて、お寝みになつ
て居らつしやる。主殿司は疾く／＼と
催促する。拙(た)の上に遅くては、取り所
がないから、まゝよと、

清「空寒み花に紛へて散る雪に」

べからんと思ひ煩ぬ。清「誰々か」と問ば、去某々」と言に、皆
畏しき中に、宰相(任公)の御答をば、如何事無風に言ひ出むと、心
一つに苦きを、御前(中宮)に御覽せさせむとすれども、帝の在し
て大殿籠たり。主殿司は、「疾々」と言ふ。實に遅くさへあらむ
は、取り處なければ、縦令とて、

清「空寒み花に紛へて散る雪に」

と戦栗く戦栗く書て取せて、如何見給らんとおも佗し。是が事を
聞ばやと思に、誘れたらば聞じと覺るを、俊賢宰相など、仍内
侍に推薦て爲むと評め給しとばかりぞ、左兵衛督(實成)の、中將に
て在せしが語り給し。

こうして候ふ「参りました」なり「斯うして」と註せるはいかゞ○事なしび
「何でもなさうに」俗に「無難作に」○空寒み 清少の歌集に、よき歌は稀なれ
ども、頓才ある人なればか、このうたはわり合によく出来たり○俊賢 左大臣高
明の三男なり、大鏡にこの人、花山院を評して「冷泉院の狂ひよりは、花山院の狂
氣こそ衝なきものなれ」といひしを道長きゝて「いと不便なる事をも申さるゝかな」
といひながらいみじう笑ひたりとあり○左兵衛のかみ 太政大臣公季の長男、母は

(空の寒さに、雪が花に似て散る處だ
けが)

有明親王の女。

と、ふるへながら書いて渡して、何と御覽になるだらうと思ふのも、頼りない。評判をききたいと思ふけれども、悪く言はれるなら聞きたくないのに、實俊賢宰相などが「どうでも内侍に推舉しやう」と評定なされた」とだけを、(今の)左兵衛督(成實)が、(その時分)中將で居らして、お咄しになつた。

待ち遠しいもの(は)。

遙なるもの、

千日の精進を初める日。半臂の緒を捻り初める日。陸奥までゆく人が、やつと逢阪の關を越した時。生れ兒が大人になる時。大般若の御讀經を一人で讀み初めるの。十二年の山籠りが始めて山へ登る日。

千日の精進初る日。半臂の緒捻り初る日。陸奥國へ行く人の逢阪關越る程。生れたる兒の大人になる程。大般若經御讀經一人して讀み始る。十二年の山籠りの、始めて登る日。

千日のさうじ 御嶽詣の爲に千日間精進潔齋して、修行するなり○半臂 兩袖なき短き衣にて、束帯の時に袖と下襲との間に用ゐるもの○緒 うすものをひねり合せて作る。いはゆる附紐なり、巾二寸五分、長さ一丈二尺。長ければ、遙には思ふべけれども、幾日もかかるほどのものにはあらねばか、一本には「ひねり初むる」の下に「日」の字なし○みちの國 「みちの奥」をつめて「みちのく」といふ、それを又つめてかくいへるなり○あふ飯の關 美濃の不破、越前の愛發と共に三關の稱あり、近江、山城の國境にて東國出入の咽喉なり○十二年のやまごもり 傳教大師が新發意僧に對して、規定されたる制にて、禁足範圍の狭きものなり、圓融天皇の天祿元年、慈覺大師(良源)の起請文に、「籠山僧、不可出内界、地際事、而近代或赴大原、或向小野、東西南北出入往來、無忘憚之類、是即不守大

師制裁之所致也、自今以後殊立禁制、若有慣常出内界者、將以擯出、不加僧衆云々とあり、十二年間の山ごもりの初めの日は、いかばかり、遙なるものと思はれしか、想ひやらる○大般若波羅蜜多經 大唐の玄奘三藏の譯せるものにて、六百卷あり、「般若」は「智慧」の義。「波羅蜜」は「度彼岸」又「到彼岸」の義。菩薩智慧を以て衆生を生死の此岸より、禪定の舟航に乗じ、涅槃の彼岸に到らしむる事を説きし經。大部なれば、法會には毎卷の初、中、終を數人づゝ分擔して誦するほどなるを一人にて讀み初むるは遙なる心地すべし。

方弘は何だつてあんなに人に笑はれるのか、親たちは情なからう。供して歩く氣の利いた男を呼びよせて、人々「何だつてあんな人に使はれて居るのだ。了簡が分らない」など、笑ふ。巧者な家で、下襲の色や袍なども、人よりは立派にして居るのを、人々「あんな者には惜い、誰か氣の利いた人に着せたい」など、言ふんだもの。なるほど物の言ひ方などは變だ。家へ宿直物をとりにやるに、「家來二人で往け」といふので、家來が「一人で取つて參れます

方弘は

方弘は甚く人に笑はるゝものかな。親など如何に聞らん。供に歩く者們甚人々しきを呼び寄せて、人々「何しに斯る者には使はるゝぞ。如何覺る」など笑ふ。物甚巧く爲る邊にて、下襲の色、袍なども人よりは美て着たるを、人々「是は他人に着せばや」など言ひ、實にぞ用語語などの拙き。里に宿直物取に遣に、方「男二人罷れ」と言ひ、男一人して取に罷なんもの」と言ひ、方「奇の男や。一人して、二人の物をば如何で持べきぞ。一升瓶に二升は入や」と言ひ、何條事と知る人はなけれど、甚う笑ふ。人の使者の來て、使「御返事疾く」と言を、方「噫憎の男や。竈に豆や焼たる。此の殿上の墨筆は、何者の盗み隠したるぞ。飯、酒ならばこそ欲うして人の盗

が」といふと方、何を言ふんだ。一人で二人分をどうして持つか。一升瓶に二升は入るまいが」といふので、わけは分らないけれども、皆なが大笑ひした。又よそから使が来て、「御返事をおはやく願ひます」といふと、方「性かちな奴ぢや。かまどで豆でも、いつて居るのか。一たいこの殿上の墨や筆は、何者が、とつて隠したぞ。飯や酒でもあつたら、欲しがつて盗む者もあらうが」といふのを、又皆なが笑ふ。女院が御病氣なので、主上からの御見舞の御使に参上して、歸つて来た時、「院の殿上人は誰と誰が居た」と人がきいたら、方「たれ、それ」と四五人の名をいふので、「その外には」ときいたら方「その他には、退出る人たちが居た」

め」と言を、又笑ふ。女院(東三條院)惱せ給とて、御使に参りて歸たるに、人院の殿上人は、誰々か存する」と人の問は、其彼など四人ばかり言に、人「又は」と言ば、方「然ては、去る人どもぞありつる」と言を、又笑も、又奇き事にこそはあらめ。人間に寄り來て、方「吾が君こそ先物聞ん。先々人の宣る事ぞ」と言ば、清何事にかしてて、几帳の許に寄たれば、「體籠に寄り給へ」と言を、「五體籠に」となん言つるとて又笑ふ。除目の中の夜、注油するに、燈臺の打敷を踏で立るに、新き油單なれば、強う捉られにけり、差し歩て歸ば、即て燈臺は倒ぬ。機は打敷に付て往に、實に道こそ震動したりしか。頭着き給ぬ程は、殿上の臺盤に人も着ず、其に方弘は豆一盛を取て、小障子の後方にて、徐食ければ、引き顯して笑るゝ事ぞ限なきや。

除目の中の夜 除目は正月九日より十一日までの三日間なれば、十日の夜を中の夜といふ○油單 布に油を引きたるきれ。

といふのを、又笑ふ方も變だ。人の多勢居ない時に、傍へ来て方「一寸、あなたにお話がある。あるお人が被仰つた事ですけれども」といふから、清「どんな事？」と、几帳の際に寄つたら、「體籠にもつと傍へ」といふのを「五體ごめに」と言つたとて又皆なが笑ふ。除目の中の晩に、さし油をするとして、燈台の打敷を踏まへて立つたら、新い油單だから、足にへばりついて居たのを、ぐんぐん歩いて居るので、燈台はばたんと倒れた。襪は打敷に、くつゝいたまんま歩いてゆくの、ほんとうに。通る路は、ばたんぐんと大騒動だつた。頭がお着席にならない間は、殿上の台盤に、誰も着席ないものだけに、方弘は、豆を一盛とつて、小障子の後ろで、そつと食て居たので、小障子をあけて、むき出しにして、皆ながきやつきやつと笑つた。

關(の名でおもしろいと思ふの)は、

逢阪の關。須磨の關。鈴鹿の關。くきだの關。白川の關。衣の關(だ)。たゞ越の關は、「はゞかりの關」とは、大へんなちがひだ。横走りの關。清見が關。みるめの關もおもしろい。よしなよしなの關は、又何と思ひ返したのかときゝたい。それで、勿來の關といふ

關は、

逢阪の關。須磨の關。鈴鹿の關。くきだの關。白川の關。衣の關。たゞこえの關は、憚の關と比類なくこそ覺れ。横走の關。清見が關。みるめの關。よしなよしなの關こそ、如何に思ひ返したるならんと甚知ま欲けれ。其を勿來の關とは言にやあらん。逢阪などまで思ひ返したらば、佗しからんかし。足柄の關。

あふ阪の關 近江にあり、山城との流分の處なり、逢阪山の峠より、少し東に舊蹟あり、第五十五代文徳天皇の天安元年はじめて建てらる關守十二人、又寺門より、双

のかしらん。逢阪などまで思ひ返した
ら、味氣ないだらう。足柄の關もおも
しろ。

きだの關 伊勢一志郡川口にありしもの。源氏藤の葉の巻に「守りけるくき田の關を川口の、淺きにのみはおほせざらむ」○し
ら川の關 岩代國西白川郡關山。拾遺集に兼盛「たよりあらばいかで都へ告げやらむ、今日白川の關は越えぬと」○衣の關 陸中磐
井郡關山、一名衣川の關。詞花集に和泉式部「もるともに立たましものをみちのくの、衣の關をよそにきくかな」○たゞこえの關
たゞは虛心(平氣)の事にいへり、平氣にて越すといふ意にとりて憚り(遠慮)の關の名とは大へんなるちがひといふなり、大和より河
内へこゆる境にて、奈良への通路なる、くらがりに置かれたる關所らし、古事記に、そのあたりの事を書きたる所に「白目下、
直越、道」とあり○はゞかりの關 陸前柴田郡槻木村に古跡あり「後拾遺集に實方「やすらはで思ひ立ちにし東路に、ありけるも
のをはゞかりの關」○横走りの關 駿河國、富士と足柄との間にあり、富士の「すばしり」は「直走り」の異訓にて「横走り」はこれ
に對したる名なるべしといふ、夫木集に源仲正「いかにせん直路はゆかて足柄や、横走りする人の心を」○清見が關 今の駿河國庵
原郡清見寺の門前あたりにありしといふ、新救撰に前大納言爲氏「清見薄打出で、見れば庵原の、三保のおきつは浪靜かなり」○
みるめの關 所在不明○よしなく、よしなくは「由なし」にて俗に「つまらぬ」なり「勿來」は「來る勿れ」なれば「つまらぬ」なり
來るな」にて勿來の一名なりしにもあるべし、勿來の關は磐城國磐城郡にありしもの。後拾遺集に師賢「あづま路はなこそ關もあ
るものを、いかでか春のこえて來つらん」○あふ阪などをきて「迷ひたる事までを由なしとして思ひ返したらば困つたものだ」と
なり○足柄の關 相模國足柄郡足柄峠にありしもの。後撰集に「あしがらの關の山路をゆく人は、知るも知らぬもつとからぬかな」。

森(の名でおもしろい)は、

森は、

大荒木の森。しのびの森。こゞひの森。

大荒木の森。こゞひの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うつ

木枯の森。信太の森。生田の森。うつ
きの森。きくたの森。岩瀬の森。立聞
の森。常磐の森。くろつきの森。神な
びの森。うたゝねの森。浮田の森。う
へきの森。石田の森。それから、かう
たての森といふのに耳とまるのが妙
だ。たつた、一本しか木がないのに、
何だつて森なんていふのだらう。こひ
の森。こばたの森(もおもしろい)。

きの森。きくたの森。岩瀬の森。立聞の森。常磐の森。くろつき
の森。神南備の森。假寝の森。浮田の森。うへつきの森。石田の
森。かうたての森といふが、耳留るこそ奇けれ。森など言べくもあ
らず、只一木あるを、何に命名たるぞ。こひの森。木枯の森。

染衛門「移るはでしはし信太の森を見よ、返りもぞする葛のうらかせ」○生田森 攝津武庫郡生田神社々頭の森をいふ、續古今集に
順徳院「秋風に又こそはめ津の國の、生田の森の春の曙」○うつきの森 未詳○きくたの森 未詳○岩瀬の森 大和國神南の東、
車瀬村にあり、後撰集に元方「立田川立ちなば君が名を惜め、いはせの杜の言はじとぞ思ふ」○立聞の森 未詳○常磐森 山城北嵯
峨、常磐の里にあり、夫木集に家隆「この里はときばの杜の藤の花、咲きかゝりてや春をしろらん」○くろつきの森 一本「くるべ
きの森」未詳○神なびの森 攝津國神内村にあり、新救撰に權大納言爲家「神なびののりのあたりに宿かれば、暮れゆく秋もさぞ
とまるらん」○うたゝねの森 岩代國西白河郡にありといふ「みちのくのうたゝねの森の橋たえて、稻負せ鳥も通はざりけり」○浮
田の森 大あらしの森の、近くにありしと見えたり、續古今集に丸丸の「斯くしつゝさてや、みんな大荒木の、浮田の森の注連なら
なくに」の證歌あり○うへつきの森 「うゑつき」か、さらば大和の郡山にあり、萬葉集挽歌「春されば植槻が岳の遠つ人、松の下道」
云々、後には植槻八幡宮その傍に觀音堂等あり○いはたの森 山城醍醐の南にあり、續古今集に中務卿親王「杵散る石田の小野の

森は

木枯に、山路しぐれてかゝるらむ雲」○かうたての森 一本「世うたて」耳とゞまるとあれば、その方かとも思はる○こひの森 未詳○こはたの森 山城木幡の里にある森なるべし、拾遺集に人丸「山しなの木幡の里に馬はあれど、かちよりぞゆく君を思へば」。

卯月(四)の晦日に、初瀬寺にお詣りしやうと、淀の渡を渡つた時、船に車をのせて往くと、菖蒲や菰などの末が、短く見えるのを、取らせたら、大へんに長かつた。菰を積んだ舟が、あるいて居たのが、大へんにおもしろかつた。「高瀬の淀に」は、これを詠んだのだらうと思つた。(五月の)三日に歸つたら、雨がざあ／＼降つて居るので、菖蒲を刈る男が、小さな笠を被て、脛が馬鹿に長かつたり、子供などが居るのも、屏風の繪に、そつくりだつた。

卯月の晦日に、長谷寺に詣つとて、淀の渡といふものを爲しかば、船に車を掻き据て往に、菖蒲、菰などの末短く見しを取せたらば、甚長かりけり。菰積たる船の歩しこそ、甚う興しかりしか。「高瀬の淀に」は、是を詠けるなんめりと見し。三日といふに歸るに、雨の甚う降しかば、菖蒲刈とて、笠の甚小きを着て、脛甚高き男、童などのあるも、屏風の繪に甚酷く似たり。淀のわたり 山城久世郡淀町邊りの渡し船なり○物せしかば「通りたらば」なり○末みじかくみえしを 水の満々とあるさま見ゆ、草の末少し水に出でたるを、抜きとればいと長きなり、禁中に在る人の眼に、さこそは珍しく興あるありきなりしなるべし○高瀬の淀に 神樂歌なり「鷹枕高瀬の淀に刈るこもの、離るともわれは知らで頼まむ」河内茨田郡高瀬郷に屬する淀川を古は高瀬川といひたり、淀は水の流れす停滯せるないふ、京より大和の初瀬へゆくに、伏見宇治を經るは今もなす道なり、これは鳥羽より淀に出で木津川の西岸を南に下る道なり、水郷の氣分を味はんとて迂回せるなるべし。

湯(の)名の、おもしろいのは、

な／＼くりの湯。有馬の湯。玉造の湯(だ)。

湯は、

七久里の湯。有馬の湯。玉造の湯。

湯 出で湯、走り湯などいふ、温泉の事なり○な／＼くりの湯 伊勢一志郡柳原にある温泉、夫木集に「一志なるな／＼くりの湯も君が爲、戀しやますときくはものうし」○有馬の湯 攝津有馬郡湯山にあり、京都より十四里、味ひしほからくして潮水の如しといふ、第三十四代舒明天皇、第三十六代孝徳天皇なども幸せられたり夫木集に倭成「有馬山雲間も見えぬ五月雨に、いで湯の末も水まさりけり」効驗ある湯のよしは俗語などにもいへり○たま造の湯 陸中國玉造郡にありしものなり、以上いづれも例の古歌により、又は名のおもしろきを擧げたるなるべし。もし湯の名高きなはいゞ伊豫の湯などもあり、(源氏物語に源氏が空蟬の夫伊豫介に「湯柝はいくつと問はまはしかりしも」云々なども見ゆ)。

ふだんより格別に聞える

もの(は)、

元日の車の音。同じく元旦の鶏の聲。あけ方の咳ばらひ。同じくあけ方の樂の音(だ)。

常よりも殊に聞えるもの、

元三の車の音。鳥の聲。曉の咳。物の音は勿論なり。

元三 年の元、月の元、日の元、なればいふとぞ、元日の事○とりの聲 初日の出と、もに鶏の聲の、勇ましく花やかに聞ゆるは今も同じ○曉のしはぶき 活動的なるなり、氣魄失せては、せきばらひはせぬものなり○物の音 曉の神樂の音など誠に莊嚴の氣に打たるべし。

湯は 常よりも殊に聞ゆるもの

繪に書きて劣るもの 書き勝りするもの

あはれなるもの

繪にかいて、實物にかなは

ないのは、

撫子と櫻と山吹と、物語に美しいと言つてある男や女のきりやう(だ)。

繪の方が、實物よりよいのは、

松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。(それと)、冬の恐しい寒さの様子と、夏のたまらなく暑い様子(だ)。

繪に書て劣るもの、

撫子。櫻。山吹。物語に愛たしと言たる男女の容貌。

繪にかきて劣る 天與の美そのまゝに寫し得ぬは今も同じ、花ならば色とつや、人のおもてならば表情の變化、愛嬌など。

書き勝りするもの、

松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬は甚く寒さ。夏は世に知す暑さ。

かきまさりするもの いづれも理想化し、美化し得るものにて、むさき處を省くに よるべし、夏冬の暑寒のさまも繪にすれば實際のやうに苦しくは見えす

身に染みるもの(は)、

孝行な人。鹿の音。きれいな若い男が、御嶽精進して居るの。(千日も)家族とはなれて、曉方の念佛や、禮拜の

可憐なるもの、

孝ある人の子。鹿の音。美き男の若きが、御嶽精進したる。隔て居て打ち誦經たる 曉の額など、甚う多感なり。睦き女などの、

様子など、堪らなく身に染みる。妻な

どが眼を覺して、きいて居る心持が察しられる。(余り疲れて)參詣の時は、どうかと心配して居ると、無事に御社へ往き着いたのは、よかつた。烏帽子のあり様などが少し見ともない。どんな貴い人でも、ひどく寒れて御詣りするものと思つて居た處が、右衛門佐宣孝は「つまらない事だ。小ざつぱりしたなりをして參詣してわるいわけはない。何でもかんでも汚れた、きたないなりで来いと、御嶽(藏王)が被仰りもすまい」と言て、二月の晦日に、紫の極く濃い指貫に、白と青山吹のけばけばしいのを襲ねたのを着て、主殿亮だつた息子の隆光は、青色と紅の衣ものに、金銀で一杯措箔した水干袴で、一し

あはれなるもの

眼覺して聞らん想やらる。詣る程の有様、如何ならんと慎みたるに、平安に詣で著たるこそ、甚愛たけれ。烏帽子の容などぞ、

少し醜き。仍甚き人と聞れど、此上なく寒れて詣つところは知たるに、右衛門佐宣孝は、宣味氣なき事なり。只淨き衣を着て詣んに、何條事かあらん。必豈夫汚くてよと御嶽宣じ」とて、三月晦日に、紫の甚濃き指貫、白きあを山吹の甚く誇張しきなどにて、隆光が主殿亮なるは、青色の紅の衣、摺り戻かしたる水干袴にて、打ち續き詣たりけるに、歸る人も、詣る人も、珍く奇き事に、惣て、此の山道に斯る姿の人見ざりつと、驚しがりしを、四月晦日に歸て、六月十余日の程に、筑前守亡にし代に成にしこそ、實に言けんに違すもと聞しか。是は憐なる事にはあらねど、御嶽の序なり。

よに参詣したので、歸る人も、参詣の人も、珍く不思議な事に思つて、今まで、この山道に、こんななりの人は見かけなかつたと、驚いて居たが、四月の晦日に歸つて、六月の十日に、筑前守がなくなつた代りに（宣孝が）なつたのは、成程言つた通り、罰が當る處ではなかつたと、皆が評判した。これは身にしてみるといふ事ではなけれど、御嶽のついでに書いておいた。

九月の三十日、十月の一日頃に、聞えるか聞えない位の聲で、啼いて居るきりぎりす（だの）、鶏が子を抱いて、うづくまつて居る（んだの）、秋たけた庭の淺茅に、露がいろ／＼な色に、玉のやうに光つて居る（のだの、又）川竹が風に吹かれて居る夕暮（だの）、曉方

て光たる。川竹の風に吹れたる夕暮。曉に眼覺したる。夜なども、惣て。思ひ交したる若き人の中に、涙く方ありて心にも任せぬ。山里の雪。男も女も美麗氣なるが、黒き衣着たる。二十七日ばかりの曉に、物語して居明して見れば、有か無かに心細げなる月の、山の端近く見たること、甚多感なれ。秋の野。年打ち過したる僧達の、誦經したる。荒たる家に葎生ひ被り、蓬など高く生たる庭に、月の隅なく明き。甚荒うはあらぬ風の吹たる。

のぶたか 紫式部の夫なり、藤原氏にて正暦二年八月筑前守となり、長保三年卒す、但し他本宣方とあり、又一本「まうづと、こそ知りたるに」にて終り、以下の文なし
○御繼精進 御嶽の金剛藏王は、役行者が金峯山にて修行中に體得したる釋迦如来の變身なりとて、忿怒の相を現じたる恐しき菩薩なれば、参詣の前には、いづれも千日の精進をなすほど敬虔なりしなり○あま山吹 「青山吹」と思へど「稗山吹」といふ説もあり、もとは假字なれば紛らはしき事なり、青山吹ならば、表青く裏黄なるをいふなれば、白き衣とそれをかされて華やかなる支度なるべく、稗ならば白き稗（兩脇あきて後布の長き衣にて衛府の官人儀仗の日に着するもの）に山吹（表朽葉、裏青）の衣を着たる事となる、又隆光の衣も、その説のは、青色の襖、紅の衣とありあやしき點は、襖を着るといふ事、の二人のみにて他に見えず又著聞集に「和泉式

に眼がさめてきくのも、夜などきくのも、すべてあはれだ。思ひ合つた若い男女の中に、邪魔があつて、心のまゝに逢へないのも。山里の雪も。男でも、女でも、美しい人が黒い着物を着て居るのも。二十六七日頃の曉方に、物語をして夜中起きて居て見ると、あるかないかの心細い月が、山の端近く見えたのも、堪らなくあはれだ。秋の野も。又年とつた僧たちがお勤行をして居るのも。荒れた家に葎が這ひかゝり、蓬などが高く生えて居る庭に、月が一杯に明るいのも。大してひどくはない風が、吹いて居るのも（皆な）あはれだ。

正月に寺に籠つて居るのは、堪らなく寒くて、雪がちに氷つて居るのが、お

む月に寺に

部忍びて稻荷へ参りけるに、田中明神のほとりにて時雨のしけるに、いかゞすべきと思ひけるに、田刈ける童の、あをといふものを借りて着て参りにけり云々とあれば合羽のやうなりし如し、盛装にはいかゞと思はる○青色の紅の、これは青色（麴塵色）の袍に、紅の衣なる事、明らかし「青色の」の「の」は「に」の誤りなるべし○隆光 宣孝の長男、長保三年藏人、年廿九と勘物に見ゆれば、此の時（正暦二年）は十九歳なるべし、紫式部の繼子なり○すりもどろかし 摺り戻るかして一度摺りし上を又摺るにて俗に八重十文字に摺りあるなり○水干袴 水干（狩衣の小變せるもの）をきる時の袴○筑前守うせにし代り 筑前守が亡せしその後任に宣孝がなりしなり○いひけむにたがはず 宣孝のいひけん詞にたがはずもあるかなと人がいひしとなり、よき衣裝して詣りても咎なく、かへりて、よき事ありしの意○あさぢ 茅のまばらに生ひたるをいふ○かはたけ 常に皮あれば「皮竹」の義か、苦竹をいふ「木枯に圓のかば竹かたよりに、なびけど色はかはらざりけり」などあり○むぐら 蕨草にて唐胡麻の葉の如く花は穂に小花數百をつく、實も麻の如し、「かなむぐら」といふ○よもぎ 艾は俗に餅草にて、干して「もぐさ」とするものなれども、蓬は「うたよもぎ」として「蓬生」「蓬が門」などいひ、すべて草のしげりたるをいへるやうなり。

正月に寺に籠たるは甚く寒く、雪勝に氷たるこそ興しけれ。雨などの降ぬべき氣色なるは、甚厭し。初瀬などに詣て、局などする

もしろい。雨などの降りさうな様子なのはいけな。初潮などに詣つて、部屋を用意などする間、樽階のもとに車を引よせて立て、置くと、帯だけした若い法師たちが、足駄といふものを穿いて、危なつてもなく(くれ橋を)下り上りするの、何と極らない經の端を誦んだり、俱舎の頌を少し言ひ續けたりしながら歩くのが、所からおもしろい。私などが上るのは、危なくて恐くて、端の方を勾欄につかまつて、やつとゆくのに、板敷などのやうに、平氣なのがおもしろい。法師「お部屋は出来ました。さあ」など、言つて履など持つて来て穿かせる。(參詣人の様子を)見て居ると、きものを裏返しに着て居るのもあり、裳だの唐衣など角ばつて

程は、樽階の許に車引き寄せて立たるに、帯ばかりしたる若き法師們的、履といふ物を穿て、聊恐怖も無く下り上るとて、何ともなき經の端打ち誦み、俱舎の頌を些言ひ續け歩くこそ、所に付て興しけれ。我が上るは、甚危く、傍に倚て勾欄押して往くものを、唯板敷などの如に思たるも興し。「御局して侍り。はや」など言て、履ども持て来て下す。衣反様に引き返しなどしたるもあり、裳唐衣など、硬々しく裝束たるもあり。深履、半靴など穿て、廊の程など履摺り入は、内裏邊向て又興し。内外など許されたる若き男們、家隸など又立ち續て、「其處許は陥たる處に侍るゆり。上りたる」など、教へ往く。何者にかあらん、甚近く差し歩み、先立つ者などを供の人「暫時。人の在すに、斯は交ぬ事なり」などいふを、實にとて少し立ち後るもあり。又、聞も入す、我先づ疾く佛の御前にと往もあり。局に往く間も、犬防の中を見入たる心地、甚く尊く、何て月頃も詣す過しつらんと、先づ道心も發さる。燈

支度して居るのもあり、深履や、半靴などを穿いて廊の處など履を引すつて入るのは、禁中のやうで、これも、おもしろい。内外など許された若い男たちや、家來などが、引ついで、「その處は、へこんで居ります。そこは高う御座います」など、教へてゆく。何者だか、すぐ傍を歩いたり、追ひ越して往つたりする者を、供、一寸お待ち、お通りだから、御遠慮申せ」など注意すると、ほんにと、少しあとになるもあり、又平氣で一先きに佛の御前にと急ぐのもある。部屋へ往く間も、多勢並んで居る前を通るのが、いやだけれども、犬防の中を覗くと、堪らなく有難くなつて、何だつて今まで、幾月もお詣りをしないで居たらうと、先づ信

明常燈にはあらで、内陣に又人の献りたる、怖きまで燃たるに、佛の晃々と見給る、甚く尊氣に、手毎に書を捧て、禮盤に居代り居代り誓も、然ばかり動り満て、是はと取り放て聞き分べくもあらぬに、切て絞り出したる聲々の、有繫に又紛す、法師「千燈の御志は、某の御爲」と僅に聞ゆ。帶打ち掛て拜み奉るに、法師「此處に斯う侍ふ」と言て、櫛の枝を折て持て來るなどの尊きなども、仍興し。犬防の方より、法師寄り來て、法、甚悉く申し侍りぬ。幾日ばかり籠せ給べきなど問ふ。法師「云々の人籠せ給り」など言ひ聞せて、去る即ち、火桶、菓子など持て來つ、貸す。半挿に手水など入て、盥の手も無きなどあり。法「御供の人は、彼の坊に」など言て、呼もて往ば、代り代りぞ往く。誦經の鐘の音、我なんなりと聞ば、頼しく聞ゆ。傍に貴き男の、甚忍やかに、額など突く。起居の程も趣致あらんと聞たるが、甚く思ひ入たる氣色にて、寝も寝ず行ふこそ、甚多感なれ。打ち休む程は經高く

心氣が出る。みあかしは常燈の外に、奥に又、誰か々奉つたのが、恐しいほど、熾んに燃えて居るので、佛がきらきらと輝いて居らつしやるのが、堪らなく尊げで、(法師が)手ん手に頤文を捧げて、禮整に居代り居代り誓ふのも、御堂をゆするほど、わや／＼と聞えて、誰が何を願つて居るのか分らない中で、一生懸命振りしぼる聲々は、さすがに他のに消されず、法千燈の御志は、どなたの御爲」と聞きとれる。(裳の)帯を打かけて拜み奉つて居ると、(法師が)「爰に参つて居ります」と言つて、櫛の枝を折つて持つて來るなどの尊さも、おもしろい。犬防の方から、(又)法師が傍へ來て法師「御立願の事は)よろしく(佛に)申上げました。

は聞えぬ程に誦たるも尊げなり。高く打ち出させま欲きに、況て、鼻汁などを、明瞭に聞き醜くはあらで、些忍て拭たるは、何事を思らん。彼を叶ばやとこそ覺れ。日來籠たるに、晝は些長閑にぞ、最初はありし。法師の坊に、男ども童など往て徒然なるに、唯傍に具を甚高く、俄に吹き出したるこそ驚かるれ。美麗氣なる堅文など持せたる男の、誦經の物打ち置で、堂童子など呼ぶ聲は、山響き合て明瞭しう聞ゆ。鐘の聲響き増りて、何處ならんと聞く程に、高貴き所の名打ち言て、「御産平安に」など、教化などしたる、漫に如何ならんと覺束なく念ぜらるゝ、是は平常なる折の事なんめり。正月などには、唯甚物騒しく、欲求などする人の隙なく詣る、見る程に誦經も爲やられず。日の打ち暮るに詣るは、籠る人なんめり。小法師們的、擡ぐべくもあらぬ屏風などの高き、甚巧く進退し、疊などほうと立て置と見ば、唯局に出て、犬防に簾をさら／＼と掛る體などぞ、

幾日位お籠りで御座いますか」など、大きく。法師「かう／＼のお方がお籠りになつた」など、前に來た法師に咄しかけて往くと、すぐ火桶や菓物など持つて來て貸せる。半挿に手水など入れて、盥の手のとれたのなどがある。法師「御供の人は、彼の坊に」など、呼びながら往くから、供の者は、代る代る往く。誦經の鐘の音が、自分の爲のだと聞けば、頼もしい。傍に品のよい男が、目立たぬやうに頷づいて居る。立ち居の氣息も上品らしいが、思ひ詰めた様子で、眠りもしないで勤めをするのが、誠にあはれだ。休息の間も、お經を聞えない位の小聲で誦んで居るのも、尊げだ。高い聲で誦ませたいのに、まして鼻などを、聞き苦しい音な

甚く爲馴たるは易氣なり。そよ／＼と數多下で、大人立たる人の、賤からず忍やかなる御氣色にて、歸る人にやあらん「其の内危し。火の事制せよ」などいふもあり。七八歳ばかりなる男子の、愛嬌付き傲たる聲にて、侍の人呼び付け、物など言たる氣色も甚愛し。又三歳ばかりなる兒の、寢恍れて、打ち咳きたる氣色も愛し。乳母の名、母など打ち出たらんも、誰ならんと甚知ま欲し。夜一夜甚う騒り、誦經ひ明す。寢も入ざりつるを、後夜など果て、些打ち休み寝ぬる耳に、其の寺の佛經を、甚荒々しう高く打ち出で誦たるに、特と尊しともあらず、修行者立たる法師の誦むなんめりと、偶と打ち驚れて多感に聞ゆ。又夜などは籠らで、人々しき人の誦經たるが、青鈍の指貫の機張たる、白き衣ども數多着て、子們なんめりと見る若き男の、美う打ち装たる童などして、侍の者們數多畏り圍繞したるも興し。假初に屏風立て、額など些突めり。顔知ぬは誰ならんと甚欲見し。知たる

どはさせずに、こつそりかんで居るのは、何を念じて居るのだらう。叶へさせてやりたいものだと思ふ。

五六日お籠りをして居ると、初めの中は晝間は少し閑だつた。法師の坊に、男たちや子供などが往つてしまつて、退屈して居ると、直ぐ傍で、貝を急に大聲に吹き出したのは、驚いた。美しい文などを持たせて来る男が、お布施を置いて、堂童子など呼ぶ聲は、山のこだまに響き合つて耳立つ。鉦の聲が澤山になつて、何處から上げるのだらうと聞いて居ると、やんごとない所の名を言つて、「御産が平かに」と、教化などして居る。何となく心配になつて、平産のやうにと拜まれる。これらはふだんの日の事だらう。正月などには、

は然なんめりと見るも興し。若き人どもは、兎角局どもなどの邊に遊行で、佛の御方に眼見遣り奉ず、別當など呼て、打ち密語き物語して出ぬる、似非信者とは見すかし。

二月晦日、三月朔日頃、花盛に籠たるも興し。美げなる男ども、忍と見る二三、櫻、青柳など趣致うて、括り上たる指貫の裾も艶麗に見なざる、似合しき男に、装束美うしたる御袋抱せて、小舎人、童ども、紅梅、萌黄の狩衣に、色々の衣、摺り振かしたる袴など着せたり、花など折せて、侍めきて細やかなる者など具して、金鼓打こそ興しけれ。然ぞかしと見る人あれど、如何でかは知ん、打ち過て往ぬるこそ、有繋に淋々しけれ。景色を見せましもものをなど言も可笑し。

斯様にて、寺籠、惣て例ならぬ所に、使ふ人の限してあるは、効なくこそ覺れ。仍、同じ分際にて、同心に、興趣き事も、種々言ひ合せつべき人、必一人二人、數多も誘まほし。其の有る人

やたらとやかましく、怒張つた願をかけて詣る人が多いから、お勤めも出来ない。暮れ方參詣するのは、お籠りの人だらう。小法師達が、持ち上げられ

さうにもない、高い屏風などを、あちこちへやり、疊など樂々と、ばたんと立て、置くかと思ふと、すぐに局に出て、犬防に簾をさら／＼とかける様子などが、はしこくて、馴れた事は樂々と見えるものだ。衣摺の音がさら／＼と、大勢下りて来て、中に、年とつた上品なのが、こつそり歸るらしく、「部屋の中の火を、氣をつけないと危う御座んすよ」など、言ふのもあり、七つ八つ位の男の子が、可愛らしい高慢な聲で、家來を呼びつけ、何か言ひつける様子も、おもしろい。又三才位な子

の中にも、口惜からぬもあれども、眼馴たるなるべし。男なども、然思にこそあれ。特と尋ね呼もて歩くめるは、甚じ。

くれはし 荒木の材にて作りたる階、本堂へゆく道なり○帯ばかり 法衣を着ぬなり○俱しやのじゆ 阿毘達磨俱舍論の本願一巻唐の玄奘の譯、世親初めにこの頌文を作りしが、文義幽深にして淺智の人解し難きを以て、後に論文を作りて解せしを俱舍論といふ○深靴 革製にして深し、雨に用うるもの○半靴 桐の木を彫りて淺く作り、漆にて黒く塗たりる沓、摺りて歩むなり○内外 中に入るを許されたる若き男、(信用あるなり)○犬防 佛堂の内陣と外陣とを仕切る結界をいふ、遣り付けの格子なり、殿舎などの階下に立て、犬などの入らぬやうにしたる駒寄(埒)なるを佛堂などにては、堂内に移して内外陣の界とせるなり、正面にあると左右に曲げて置けるとあり、犬防の中といへば即ち内陣にて本尊のまします所なり○千燈「千燈お上げになつた志のお人は、たれそれで御座ります」と佛に申すなり○帯打かけて裳の掛帯を肩に打かけてなり○犬防の方より「本尊の處から」なり○半挿 今の湯桶に似たるもの、湯水を盛りて他に注ぐ器○かの坊に 坊は「まち」なり、僧舎の連り居るをいふ、參籠する婦人の供人を案内し、つれゆくなり○教化 崇りをする物怪などを教化導するなり○犬防 内陣の横手なり、それにそひてお籠りする人の局をつくる故に、見え透かぬやうに簾をかくるなり○ぬかなど少し 貴人のさまなり、常習的に、佛に對しても、額をすり付くるばかりにはせぬさまなり○別當 延喜式に「凡諸寺以別當爲長官」とあれど、こゝのは堂内の庶務をなす僧をいひたるらし○青柳 表裏ともに濃き青○餌袋 もとは鷹の餌を入れる、袋をいひしが、轉じて人の食物を入れる、袋をいひたり、今昔物語に「餌袋に干飯を入れて、

供が、寝ぼけて咳をして居る様子も、可愛らしい。乳母の名を言ったり、母を尋ねて居るのも、誰だか聞いて見たい。夜中がや／＼と、皆ながお勤めを

堅き鹽、和布など持ち来て「云々とあり〇こんぐ、堂の前にかけたる鰯口をいふ「令打百箇寺金鼓、依夢不吉」などもありて、今の人の習慣的に打つとはたがへり〇さぞかし云々、お籠りなし居る者が、堂前にわに口をならし拜み居る人を、あれは誰と見居るを、先方にては心づかず往き過ぐるなり。

するので、眠る事も出来なかつたから、後夜のすんだあとで、少し寝入つた耳に、その寺の本尊のお経を、がさつな大聲で誦み出すのは、一向尊くも聞えず、修行者のやうな法師が讀むのだらうと、眼がさめて聞き入る。又夜のお籠りはしないで、身がらのよい人が、晝のお勤めをして居るのが、青鈍の指貫のしやんとしたのに、白い着物などを澤山着て、息子らしい若い男のしやれた装束をしたのが、童などをつれ、家來が多勢恭しく取圍んで居るのも、風情がある。小さな屏風をたて、少し額突いたりするらしい。顔を知らないと、誰だらうとゆかしいし、知つて居るのは、あゝ、あの人だとおもしろい。若い人たちは、とかくよその部屋などの近所にまご／＼して、本尊の方には見向きもせず、別當などを呼んで、こそ／＼と何か囁いて出て往くのも、一寸風情があつて、不埒者とも思へない。

二月の月末や、三月の月末頃の花盛りに、お籠りしたのもおもしろい。もの清げな微行らしい二三人の男が、櫻や青柳のしやれた着物で、く／＼り上げた指貫の裾も上品に見えるのが、似合の家來に、美く飾つた餌袋を持たせ、小舎人や童などには、紅梅だの萌黄だの、狩衣に、いろ／＼の色の衣服や、べつたり摺箔した袴などを着せ、花など折らせて、きやしやな侍らしい者など供につれて、金鼓を拍つのがおもしろい。此方では見知りの人もあるけれども、向うでは、知らずに通り過ぎて往くのが、何だかつまらない。「居ると知らせたい」などいふのもおもしろい。かういふ寺籠りだの、すべてよそに泊つたりするのに、召使だけなのはつまらない。やつぱり同等で氣の合つた、おも

しらく話しのあふ人を、きつと二人、いやもつと、多勢でも誘つて往きたい。召使の中にも、氣の利いたのもあるけれども、見馴れてしまつて居るから、(つまらない)。男などでも、さう思ふと見えて、わざわざ遠方まで、誘ひ合せて歩くらしい。

難儀さうに見えるもの(は)、

六七月頃の正午から、午後の二時頃に、汚ならしい車にへば牛をかけて、のそのを往くのと、天氣の日に、張筵をした車。(又)降るのに、張むしろをしないのも。年とつた乞食。(これは)ひどく寒い時も、暑い時も、(難儀さうだ)汚いなりをした下賤女が、子を背負つて居るの。小さな板屋の眞黒に汚れたのが、雨に濡れて居るの。雨のひどく降る日、小さい馬に乗つて、先立ちする人が、冠もひしやげ、袍も下襲も、まだよいけれども。

わびしげに見ゆるもの

佗しげに見るもの、

六七月の午末の時ばかりに、穢氣なる車に醜牛繫て動し往く者。雨降ぬ日張筵したる車。降る日張筵せぬも。年老たる乞兒、甚寒き折も、暑きにも。下種女の服装悪きが、子を負たる、小き板屋の黒う汚げなるが、雨に濡たる。雨の甚く降る日、小き馬に乗て前驅したる人の、冠も挫げ、袍も下襲も一に成たる、如何に困惑からんと見たり。夏は然ど好し。はりむしろ 雨覆の具。

一しよくたに、濡れついて、しまつたのも、どんなに難儀だらうと見える、夏は

暑さうなもの(は)。

隨身の長の狩衣。衿の袈裟。出居の少將。肥つちようの髪の毛の澤山あるの。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨が、日中のお勤めをするの。又同じ時分の銅の鍛冶(も暑さうだ)。

る布帛のきれを補ひ綴りて裏をつけて法衣とせしものなれば、賤しきなれども、頭陀行する高德の僧の衣なれば、終には諸種の金襴を裁ち雑へ、重き法會の用とし、又、上臈の僧の着るものとなりたり、されば重くて暑げなるなり○出居の少將 朝廷にて射儀又は相撲などの儀式の時、庭上に臨時に設くる座を出居といひ、その座につきて、威儀を立つる近衛の少將を出居の少將といふ○琴の袋 錦、金襴などの厚織物にてつくる例なり○修法のあざり 加持祈禱をなす阿闍梨(軌範の義にて僧の師となるべき者)にて、本堂の前に壇を構へ、口に眞言を唱へ、手に印契を結び、心に佛菩薩の相を觀じて行ふ。息災、延命、降伏等の種々あり○日中の時 六時の勤めの中、正午の勤行をいふ○銅のかぢ 暑き日中に火を熾んにして赤きかね(銅)を打ちて鍛ふるは、見る眼も暑き業なり(かぢは金打の義)

氣の置けるもの(は)。

男の心の中。眼敏い夜居の僧。こそこそ泥棒が、何處かの隅に隠れて居るとも知らず、暗まぎれに、ちよいと人の

暑げなるもの、

隨身の長の狩衣。衿の袈裟。出居の少將。甚く肥たる人の髪多る。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨。日中の時など行ふ。又同じ頃の銅の鍛冶。

耻しきもの、

男の心の中。寝敏き夜居の僧。密盗人の、然べき限に隠れ居て、如何に見るらんを誰かは知ん。暗き紛に懐中に物引き入る人もあ

物を懐中に入れたりする者があつたら、(泥棒は自分と)同じ心持を、嚙可笑く思つて見て居るだらう。夜居の僧は、全く氣が置ける。若い人(房)が寄り合ふと、人の噂をして、笑つたり悪口を言つたりするのを、だまつて聞き溜めて居る心の中が憚しい。あゝいやだ、やかましい」など、御前近い人たちが、腹立氣味でいふのもかまはず、散々噂のあとは、ぐつすり寝入たあとも耻かしい。男は、余り自分の氣にも入らず、欠點ばかり見える厭な女でも、逢つた時はうまい事を言つて、頼らせるのが、氣味がわるい。まして人情味の深い、女好きのする男などは、氣に入らない素振などは、決して見せない。それも心の中だけで、あら

耻しきもの

らんかし。其は同じ心に興しと思らん。夜居の僧は甚憚きものなり。若き人の集りては人の上を言ひ笑ひ、謗り憎みもするを、熟々と聞き集る心の中も耻し。「噫憂て、喧し」など、御前近き人々の、物氣色ばみ言を聞き入す、言ひ言ては打ち解て寝ぬる後も耻し。男は憂て思ふ如ならず、誹しう 厭き事ありと見れど、當面たる人を嗤し頼るこそ耻しけれ。況て情あり好しき人に知れたるなどは、疎なりと思へくも扱さずかし。心の中にのみもあらず。又皆此が事は彼に語り、彼が事は此に言ひ聞すべからぬるを、我が事をば知で、斯く語るをば、此上なきなんめりと、思もすらんと思こそ耻しけれ。率、噫、又逢じと思ふ人に逢ば、心も無きものなんめりと見て、耻くもあらぬものぞかし。甚く哀に心苦しげに見捨て難き事などを、些何事とも思ぬも、如何なる心ぞとこそ淺ましけれ。有繋に人の上をば誹き、物を甚巧く言ふ事よ。殊に頼しき人も無き宮仕の人などを語ひて、只に

を見て居るのでなく、此方の女の事は向うの女に咄し、彼方の女の事は此方に咄すのを、自分の言はれて居る事は知らずに、こんなに向うの女の事を咄すのは、自分を一番よいと思ふのだからと思ふのが、極りがわるい。けれども、向氣も置けない。非常に氣の毒な、見捨てにくい事情などを、些とも考へてやらす、別れてしまふ男も、どういふ氣がするのかとあきれれる。そのくせ、人の事を批難し、自分はえらさうな事をいふのだもの。一向頼りのない宮女などを誘惑して、懐妊したのも知らず、捨てしまつたりする。

見られないもの(は)、

潮の干た處にある大きな船。髪の毛の短い人が、髻を取りのけて、髪を揃いて居る。大木が、風に吹き倒されて、大きな根が丸出しになつて横たはつて居る。相撲が負けて引込む後つき。つまらない役人が、家來を叱つて居る

もあらず成たる有様などをも知で止ぬるよ。

夜居のそう 禁中にて清涼殿の二間に修し、聖體を護持する故に、護持僧ともいふ禁秘抄に「御持僧事、於三僧侶無双精撰也、東寺一長者、多候ニ夜居、又山寺各一人必可候」○御前近き人々 老女格の女房なり○もの氣しきばみ 俗に「癩に障り」て不快氣なるさまをいふ。

無徳なるもの、

潮干の瀉なる大なる船。髪短き人の、鬘取り下して、髪梳るほど。大なる木の風に吹き倒されて、根を捧げて横はれ臥る。相撲の負て入る後手。似非者の、従者勘る。翁の鬘放たる。人の妻などの、漫なる者怨じ、隠たるを、必尋ね騒んものをと思

たるに、然しも思たらず、憾げに扱したるに、然ても得旅立ち居たらねば、心と出で來たる。狛犬しく舞ふ者の、面白がり燥り出て躍る足音。

すまひ 毎年七月七日朝廷にてある御前相撲なり、その年の二三月頃、左右近衛府より、各相撲使を諸國に遣はし、相撲人を徴し來らしむ、これを部領使といふ、左府にて領せるを左方とし、右府のを右方とし節會の二日前に先づ、左方のみにて相撲せしめ、次に右方のみにてなさしめて御覽に供す、これを御前内取といふ、節會の當日に召合あり、左右の相撲人を分ちて、互に勝負を決せしむ、もし決し難きものあれば天判を以て定む○もとゞりはなち 髪のもとゞり(根をしぼりたる處)を冠の巾子に結びつくるなれば、冠をとれば、もとゞりは放たる、なり、若きはされどよし、老いたるは禿頭など出で、見にくかるべし○こま犬しく云々 「しくは「女らしく」を「女しく」といふに同じ、獅子舞をする者、初めは高麗樂の狛犬の舞のやうにしづかに舞ひしもの、調子に乗りて前足と後足のもの、足ぶみ荒く卑しく舞ひ狂ふさまをいふ。

修法は、佛眼眞言など誦み奉りたる、優雅しう尊し。

修法 佛に對して祈る儀式○佛眼眞言 佛眼尊(佛母尊ともいひ大日如來の化身)が眞實を以て説き給ふ語、即ち陀羅尼(譯して總持、能持等といふ、善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用を名づく)なり

修法は、佛眼眞言など讀み申したのが、優雅で尊い。

修法は

極りのわるいもの(は)。

他人を呼んだのに、自分を呼んだのかと間ちがへて、顔を出した時、物をくれる時は、なほの事。何かの拍子に人の悪口など一寸言つたのを、子供が聞いて居て、その人の前で言ひ出したの。悲しい事などを、人が言つて泣くのを、ほんとに可哀想にと、同情はしながら、その心持の通りに涙がひよいと出て来ないのは、誠に半端なものだ。泣顔をしたり、様子をちがへたりするけれども、根つから涙が出ない、工合のわるさつたら。めでたい事を聞く時は、又何だか、やたらに涙が出たりす

依違きもの、

他人を呼に我かとして差し出たるもの。況て物與する折は甚ど。自然人の上など打ち言ひ、誘りなどもしたるを、幼き人の聞き取て、其の人の在る前に言ひ出たる。哀なる事など、人の言て打ち泣に、實にいと哀とは聞ながら、涙の直と出で来ぬ。甚依違し。泣顔作り、氣色殊に爲せど、甚効なし。愛たき事を聞には、又漫に唯出で来にこそ出で来れ。八幡の行幸の歸せ給に、女院(東三條院)の御棧敷の彼方に、御輿を停て、御消息申せ給しなど、甚く愛たく、然ばかりの御有様にて畏り申せ給が、世に知す甚きに、實に溢れば、化粧したる顔も皆洗れて、如何に見苦しからん。宣旨の御使にて、齊信宰相中將の、御棧敷に參り給しこそ、甚雅し

るのに。

八幡の行幸のお歸りに、女院の御棧敷の手前で、御輿をとめて、御挨拶の御文を奉られたなどは、誠に結構な事、至尊の御身で禮を遊ばすが、何とも言へず尊くて、ほんとうに涙が溢れるから、化粧したのも皆な割けて、どんなに見ともなかつたらう。その時の宣旨の御使に、齊信の宰相中將が、(女院の)御棧敷にお出になつたのが、誠に優雅に見えた。只、隨身が四人着飾つたのと、馬副の男の瀟洒とした扮装だけ、二條の大路の廣い美しい通りを、馬をあふり立て、急ぎ參上して、少し遠くから下りて、御傍の御簾の前に伺候なさつた。女院の別當が御取次申上げた御返事を承つて、又走り歸りな

はしたなきもの

う見しか、唯隨身四人甚う裝束たる、馬副の細う仕立たるばかりして、二條大路、廣う美麗に愛たきに、馬を打ち囃して、急ぎ參りて、少し遠くより下て、傍の御簾の前に侍ひ給し。院の別當ぞ申し給し御返事承りて、又走せ歸り參り給て、御輿の許にて奏し給し程、言も愚なりや。然て打ち渡せ給を、見奉せ給らん女院の御心、思ひ遣り參するは、飛び立ぬべくこそ覺しか。其には長泣をして笑るゝぞかし。尋常き際の人だに、仍此の世には愛たきものを、斯だに思ひ參するも畏しや。

八幡の行幸 長徳元年十月廿一日、一條天皇山城男山石清水八幡宮の祭禮に行幸ありしをいふ(廿二日還幸)○女ぬん 藤原兼家の女にして、圓融天皇の女御。一條天皇即位の後、御生母たるを以て皇太后となり、正暦二年九月尼となりて、東三條院の號をうく、女院號の初めなり、長徳四年閏十二月崩す、御年四十、御弟道長を殊に寵して引立てられしさま、大鏡に見えたり○宣言 帝の御言をいふ、女院に申上げらる、御言を、齊信が御使して傳へ上げたるなり○別當 女院廳の長官○それには、前に、人の悲しみに同情する時には、あやにく涙出でずして、うれしき時に出づるとありしをうけて、「その時は」なり、帝御年十六、女院三十四、齊信廿九歳。

さつて、御輿のもとに奏上なされた御様子は、言ひやうもなくよかつた。さて（御棧敷の前を）お渡りになるのを、御覽になつた女院の御心を、お察し申上げると、嬉しさに、からだか飛び上るやうだ。その爲に長泣をして笑はれてしまつた。世間普通の人でも、よい子を持つのは、めでたいのになど、お察し申上げるのも、勿躰ない。

關白様が、黒戸からお退出にならうとして、女房が、ぎつしり詰めて居るのを、**殿**、あゝ御立派な方々ばかりぢや。どんなに私を馬鹿爺だと笑つてお出でなさるかしのれない」と多勢の中を分けてお通りになると、戸口に皆なが、いろいろの袖口で御簾を引上げ申し、権大納言様（伊）が御沓を取つてお穿かせ申上げなさる。大柄な美しいお立派な方で、下襲の裾長く、あたり狭しと居らつしやる。先づまあ何といふ結構な御事だらう。大納言ほどの方に、お沓をお取らせになると思ふ。山井の大納言（頼）

關白殿（道）の、黒戸より出させ給とて、女房の廊に隙なく侍ふを、道、噫、甚じの御許達や。翁をば如何に愚なりと笑ひ給らん」と、分け出させ給ば、戸口に人々の色々の袖口して、御簾を引き上たるに、権大納言殿（伊）、御沓取て、履せ奉せ給ふ。甚物々しう美麗げに莊しげに、下襲の裾長く、所狭く侍ひ給ふ。先づ噫愛た、大納言ばかりの人に、沓を取せ給よと見ゆ。山井大納言（頼）、其の次々、然ぬ人々、黒きものを引き散したる如に、藤壺の堀の許より、登華殿の前まで居並たるに、甚細やかに甚う優雅しうて、御佩刀など引き粧ひ、休息せ給に、宮大夫殿（長）の、清涼殿の前に立せ給れば、其は居させ給まじきなんめりと思見る程に、些

その御弟たち、又その他の人たちが、黒い物を袴いたやうに、藤壺の堀の邊から、登華殿の前までぎつしり並んで居らつしやる中に、（關白様は、）ほつそりと優雅な御様子で、御佩刀など取り直して、立ち止つてお出でになると、宮の太夫さん（道）が、清涼殿の前にお立ちになつて居る。まさかにあの方まで、下座はなさるまいと見て居ると、關白様（道）が少しお歩きになつたら、ひよいと下座をなさつたのは、やつぱり、よく／＼前の世に佛へのお勤めをなさつたのだらうと感心してしまつた。中納言さん（和泉守）が、忌の日だとして、殊勝氣にお勤めをなさつて居たらば、女房、一寸その珠數を拜借よ。そんなにお勤めをして、（關白様のやう

歩み出させ給ば、直と居させ給しこそ、仍如何ばかりの昔の御勤行の程ならんと、見奉りしこそ甚じかりしか。中納言（和泉守）の君の、忌の日とて、奇特がり誦經給しを、女房給べ。其の珠數暫時。誦經て愛たき身にならんとか」とて、集りて笑ど、仍甚こそ愛たけれ。御前（中）に聞き召て、宮佛に成たらんこそ、是よりは勝らめ」とて打ち笑せ給るに、又愛たく成てぞ、見參する。大夫殿（長）の座させ給るを、返す返す聞れば、宮例の思ふ人」と笑せ給ふ。況て此の後の御有様見奉せ給ましかば、道理と思し召れなまし。

黒戸 清涼殿の北廊の西側にあり后宮、弘徽殿の上の御局に住はる、時は、女房達の詰所となる○御くつ 道隆公のなり○藤壺の堀 飛香舎（藤壺）の東面をかざる堀 ○はかし 「佩し」にて太刀の敬語、○みやの大夫 中宮大夫道長なり、（道隆の弟） ○それは居させ給ふまじき 道長の氣を負ひたるさまは、誰も知る處なるさま見ゆ、中宮大夫になりしも不平なりしなり、「奉りだにかせ給はぬほどの御心さまも猛しかし」と榮花物語にあり、甥の伊周よりも官位卑きは、いかばかり不興なりけん、後に女彰子を中宮に納れてよりは、道隆薨後の子孫の霜にあひたる草の如きに比し

な)御果報にならうと思つて」など、皆なして笑つたけれども、何と言つても大層な御威勢だ。宮様がお聞きになつて、宮(修行して)佛になれば、その方が、いくらよいか」と、にこ／＼遊ばして居らつしやるのが、又よくて、御顔を見て居る。大夫(道)さんが下座なされた事を、幾度も／＼申上げると、宮、又好きな人の事を」とお笑ひになる。大夫(道)さんの、この後の御様子を御覧になつたら、なほ、「私が關白様を果報な方と申上げたのを、)もつとも思し召さう。

て、道長の方は暁々たる春日に咲き盛る榮花のさまとなりたり○ましてこの後のこの詞によりて、この草紙は中宮の崩後に思ひ出で、さまざま書きつけしものなる事明かなり「この世をば我が世と思ふ望月の欠けたる事もなしと思へば」と歌ふほどの果報ある道長に下座させし道隆を、宿世めでたしといふなり。

九月頃、夜中降つた雨が、朝はやんで、朝日が花やかに射したのに、栽込の菊の露が、溢れるほどに、びつしよりかかつて居るのも、誠にもしろい。透垣や、羅文などの上にかけた蜘蛛の巣が、こはれ残つて、所々に、巢の糸がきれさうに雨のかゝつたのが、白い珠を通したやうで、何とも言へず、風情が美しい。日中になると重たさうに見

九月ばかり夜一夜降り明したる雨の、今朝は歇で、朝日の暁に射たるに、前栽の菊の露溢るばかり濡れ注りたるも、甚興し。透垣、羅文などの上にかけた蜘蛛の巣の、毀れ残りて、所々に、糸も絶ぎまに雨の注りたるが、白き玉を貫たる如なるこそ、甚う哀に興しけれ。少し日開ぬれば、萩などの甚重げなりつるに、露の落るに、枝の打ち動きて、人も手觸ぬに、偶と上方へ上りたる、甚う甚興しと言たる、他人の心地には露興しからじと思こそ、又

興しけれ。

前栽 庭前の植込み○すいがい「透垣」の音便、板又は竹などにて間を透して造れる垣○らもん 細き木を、羅、綺の文に多き菱形に組みて造る。

えた萩などの露が、落ちる度に枝が動いて、誰もさほりもしないのに、びよんとはね上がるのが、まことにもしろいけれども、人はさうも感じないかしらんと思ふのが、又おもしろい。

七日の若菜を、人が、六日に持ちまはり取り散したりする時分に、見た事もない草を子供が持つて来たので、清、是は何といふ草?とときいても、すぐに返事もせず、「さあ」など、皆なで顔を見合せて、中に、「耳無草と申ます」といふ子があるので、清、道理こそ、聞えな顔をして居る」など、笑ふと、又愛らしげな菊の芽生へを持つて来たので、清、つめどなほ耳無草こそつれなけれ。あまたしあれば菊もまじれり。」(つめつても耳無草は平氣できかない顔をして居る、けれども大勢の中には

七日の若菜を、人の六日に持つて騒ぎ、取り散しなどするに、見も知ぬ草を、子們的持つて来たを、清、何とか是をば言ふ」と言ど、頓にも言ず、子「卒」など此彼見合せて、○耳無草となん言ふ」と、言ふ者のあれば、清、宜なりけり。聞ぬ顔なるは」など笑に、又愛しげなる菊の生たるを持つて来たれば、清、つめど仍耳無草こそ平然けれ、數多しあればさくも雜れり。」と言ま欲けれど、聞き入るべくもあらず。

耳無草 冬より原野に叢生す、莖、地につきて延ぶ、葉の形、鼠の耳に似て對生す莖葉にして葉と莖に微毛あり、春の末に莖を出す、高さ二三寸、白花を開く、はこべに似たり○菊のおひたる 野菊の芽生にて嫁菜なるべし○つめど「摘めど」に「抓めど」をかけたたり、抓めるは俗につれる事、小兒など叱るにせしと見ゆ。

きくのもまじつて居る」と言ひたいけれども、分りさうもない(から、だまつて居た)。

二月に、官(太政)のつかさ(役)で定考といふ事をするのは、何の事だらう。釋奠もどんな事をするのだらう、きつと孔子の像などをかけ申してするのだらう。聰明といつて、上様(帝)にも、宮様(子)にも、つまらない物などを、土器に盛つて、さし上げる。(んだもの)。

「頭の辨さんの處から」と言つて、主殿司が、繪のやうな物を、白い色紙に包んで、梅の花のいつばい咲いたのに附けて、持つて來た。繪でもあらう

二月、官廳に、定考といふ事するは、何事にかあらん。釋奠も如何ならん。孔子などを掛け奉りて、爲る事なるべし。聰明とて、帝(條)にも宮(子)にも、賤き物など、土器に盛て參するを。

官のつかさ 太政官廳なり○二月 定考は八月十一日にあり、二月十一日は列見といふ、こゝは次の行なる、釋奠の傍註に「二月」とありしが、誤寫されしなるべし
○定考 六位以下の官吏の、藝能、格勳の勝れたるを選出して、官爵を定むる行事をいふ○釋奠 二月八日の上丁の日に、大學寮にて孔子とその弟子の十哲(顔回、冉有、仲弓、冉伯牛、閔子騫、季路、宰我、子貢、子游、子夏)を祭る。サクテン、セキテンなどいふ○あやしきもの 釋尊に供へたる供物を、聖朝、天皇、皇后に上るなり、聰明は胙(乾肉)、梁飯、餅、栗、栗等の供物。梁の飯を殊に指して、あやしといへるなるべし)

頭辨(成)の御許よりとて、主殿司、繪など如なる物を、白き色紙に裹て、梅の花の甚く咲いたるに付て、持つて來たる。繪にやあらんと、急ぎ取り入て見れば、餅餠といふ物を、二個並て裹たるなり

と、急いで取り入れて見ると、餅餠といふものを、二つ並べて包んだのだつた。つけた豎文に、解文のやうに書いて、「進上餅餠一包、例によりて進上如件、少納言殿」として月日を書いて、「美麻那成行」として、奥に、「此のものを、自ら參らむとするを、晝は容貌醜しとて參らぬなり」(自分で參らうと存じましたが、晝は、きりやうが見ともなさに、參りません)と、非常にしやれて書いてある。御前に參つて、お眼にかけると、宮「何とまあ、きれいに書いた事。おもしろい」などお譽めになつて、御文はお取りになつた。清返事はどうするのだらう。この餅餠を持つて來た者には、何かやるのか知らん。知つて居る人があるといふが」といふ

けり。添たる豎文に、解文の如に書て、「進上餅餠一包、例に依て進上如件。少納言殿に」とて、「月日書て、「美麻那成行」とて、奥に、行「此の男は、自身參んとするを、晝は容貌醜しとて參らぬなり」と悪く興し氣に書き給たり。御前に參りて、御覽せざされば、宮「愛たくも書れたるかな。興うしたり」など譽させ給て、御文は取せ給つ。清返事は如何すべからん、此の餅餠持つて來るには、物などや與すらん。知たる人もがな」と言を聞き召て、宮「惟仲が聲しつる。呼て問へ」と宣すれば、端に出て、清「左大辨に物聞ん」と、侍して言すれば、甚全く正装うして來たり。清「否す。私事なり。若し辨、少納言などの許に、斯る物持つて來たる僕などには、爲る事やある」と問ば、惟「然る事も侍す。唯留て食ひ侍る。何しに問せ給ふ。若し政官の中にて、得させ給るか」と言ば、清「如何は」と答ふ。只返事を、甚う紅き薄様に、清「自身持つて參で來ぬ下部は、甚冷淡なりとなん見る」とて、愛たき紅梅に

のをお聞きに成て、清、惟仲の聲がして居る。呼んでお聞き」と被仰るから、端に出て、清「左大辨さんに、一寸お咄があります」と、侍に言はせると、大さう改まつた支度で来た、清「いえ、私事で御坐います。此の辨や、私位の者の處に、斯ういふ、餅饅のやうなものを持つて来た下部などには、祿でもやるので御坐いませうか」ときくと、惟「いえ別に、たゞ取つて置いて、食べますだけ。なぜそんな事をお尋ねになります。もし政官からでもくれしましたか」といふ、清「いえ、そんな事」と答へる。何もやらずに、返事を真紅の薄様に、「自身持つて来ない下部は、非常に冷淡に見える」と書いて、美しい紅梅につけて上げたら、直ぐお出

付て奉るを、即ち在して、行「下部侍ふ」と宣ば、出たるに行「然様の物ぞ、詠歌して遣せ給ると思つるに、美々しくも言たりつるかな。女少し我はと思たるは、歌人がましくぞある。然ぬこそ語ひ好けれ。鷹などに然る事言ん人は、却て無心ならんかし」と宣ふ。則光、成康など笑て止にし事を、殿(隆)の前に人々甚多りけるに、語り申し給ければ、道「甚巧く言たる」となん、宣せしと、人の話し。是こそ見苦き自慢どもなりかし。

頭辨 藏人頭兼左中辨藤原行成なり○白きしき紙に 白き色紙に包みたるものを、白き梅の花の咲きたるにつけたるなり、いつも、付くるものと花の色は同じ○餅だん 餅の中に煮たる鶯鴨等の子、並びに雑菜を入れ四角に載る。二月の列見、八月の定考にも、上卿以下諸臣に三獻の後、賜はる○けもん 諸司又は國橋より諸省へ書き上ぐる文書なり、端に目録を挙げ、さて依例進如件など書き、次の行に年月日、その下に署名するなり○みまなのなりゆき 常時の姓は藤、源、平、橋の順にて顯官につき、任那王の後裔などは、はやくに徹藤し居たれば故らに言ひ、なりゆきは「ゆきなり」を逆に言ひたるなり○かたちわろくて 葛城の神、役の行者の命をうけて、久米路の橋を造るに、晝は容貌醜して夜のみなせしをいふ○これ仲 左大辨なれば、列見の事を掌りたる當事者にもあり、辨官になるほどの人は有識にも

になつて、行「下部が参りました」と被仰るから、出たらば、行「あゝいふ物を上げたら、きつと歌をよんでおよこしになると思つたのに、えらい事を被仰つたものだ。女が少し高慢になると、ちきに歌よみらしく、するものだが、さうでない點が、つき合ひよい。鷹などに詠みかけたりするのは、却つて心なした」と被仰る。(その後)「則光や、成康などが、(清少が、この時に、歌を詠まなかつた事を)笑つたと、殿(隆)の御前で、多勢の中で(頭辨が)お咄しになつたら、道「うまく返事をしたものと被仰つた」と人が咄した。こんな事を書くのこそ、見ともない自慢だらう。

あるなり○辨 辨官の近親なる女房にて、清少の朋輩○しもべ 任那成行など、しもべにありける名になしある故に、さやうの際には、いかゞすべき物ぞといふなり○政官 太政官の官人(おもに外記、史等)をいふ、太政官廳にて列見あり、杯酌、舞曲など夜に入るまであり、その翌朝の贈り物なるべければ、太政官の(しもべとあるによりて)外記もしくは、史よりの贈りものかとなり○れいたん 一本「れいたう」とあり、さらば「戻道」にて、失敬の意味かと思へど、あとに「美々しくも」など行成が賞美せるを見れば、一説の如く、れいたん(冷淡)にて「餅饅」を、もじり洒落たるなるべし○則光、成康 その座に居合せたる人の名。いつも清少に歌よみかけられて困ぜし人々なるべし、清少がこの時、歌よまさりしを笑へるなり○みぐるしき 卑下の詞なれども、清少が例の自慢なり、行成ほどの才人にほめられたるだにあるを、又關白にほめられたるなり、子供らしき處ある清少の喜悅思ふべし。

女房「何だつて、新任の六位の笏を、職の御曹司の辰巳(南)の隅の板で造つたんだらう。(何も辰巳には限らない)西東のも使へばよい。又(何も六位だ

などてつかさ得はじめたる

女房「何て爵得初たる六位の笏に、職の御曹司の巽の隅の築地の板を爲しぞ。更に西東をも爲よかし。又五位も爲よかし」など言ふ事を言ひ出て、女房「味氣なき事どもを。衣などに漫なる名どもを

なごてつかま得はじめたる

けには限らない。五位のもそれで造るがよい」といふ事を言ひ出して、女房(一たし)つまらない事だ。着物などに、やたらと變な名を付けて、細長はまあ、さう言つてもよいけれども、何だつて汗衫といふんだらう。男の子が着た時と同じに、尻長といふがよい。唐衣は、又一「短き衣」でよかりさうなものだ。けれどもあれは唐土の人が着るものだから、唐衣かしらん。うへの衣、うへの袴はい。下襲もい。又大口は長さよりは口が廣いから(それもよい)。袴といふ名は誠におもしろみがない。指貫も變だ。足衣とか、そんな物は惣別、足袋とでも言ふ方がよい」など、いろ／＼の事を、がやがや言ふので、清あゝやかましい、もう

二八四

命けん。甚奇し。衣の名に細長をば、然も言つべし。何故汗衫は、尻長と言かし。男童の着るやうに。何故唐衣は、短き衣とこそ言め。然ど其は、唐土の人の着るものなれば。表の袴、然言べし。下襲も好し。又大口、長さよりは口廣ければ。袴甚味氣なし。指貫も何故、足衣、若は然様の物は足袋なども言かし」など、万の事を言ひ騒るを、清率、噫、喧し。今は言じ。寝給ね」と言ふ答に、夜居の僧の、曾甚惡からむ。夜一夜こそ仍宣め」と、憎しと思たる聲さまにて、言ひ出たりしこそ、興しかりしに添て、驚れにしか。

つかさ得初めたる 官職に新任せられたる六位〇つつみ 方角の辰巳の隅にて東南隅〇ついで板 頑破したる職の御曹司は築土も破れ居たるべし、權勢ある大臣(の)の後の事なれども、御堂岡白道長が、諸國に課して費用を吝まず、たとひ公事は緩うすとも、此の役を助くるを忘る勿れ」とまで督勵して、輪奐の美を極めたる法性寺を造りたりし如き)は自家の豪華の爲に貢賦を徵集するに急なれども、由來仁慈に富ませらるゝ皇室は、いつも財寶に窮乏せられさまは、早く桓武天皇、平安に造宮の時にも「營造未だ成らず、黎民弊あり」云々の論旨出でたるほどにて、この

やめ。お休みなさいよ」と言つたら、夜居の僧が、曾それはおいやでせう。夜中お咄しなされ」と、さも憎らしさうな聲つきで、横から口を出したのは、をかしくもあり、びつくりした。

故殿(隆)の御爲に、毎月十日には、御經や、佛の御供養をなさつたが、九月十日に、職の御曹司でなさつた。上達部や殿上人が、大層多勢だつた。清範が講師で、お説法が、誠に身にしみるので、格別物のあはれを感じさうもない若い人まで、皆な泣いたらしい。すんでから酒のみ、詩を誦じたりする

故殿の御爲に

故殿(隆)の御爲に、月毎の十日、御經佛供養せさせ給しを、九月十日、職の御曹司にて爲させ給ふ。上達部、殿上人甚多り。清範、講師にて、説く事ども甚哀しければ、殊に物の哀深かるまじき若き人も、皆泣めり。終て酒飲み、詩誦じなどするに、頭中將齊信の君、「月秋と期して、身何處にか」と言ふ事を打ち出し給りしかば、甚う愛たし。如何でかは思ひ出で給けん。在す所に

二八五

頃は内裏には費用の點にて住まはれず、里内裏として天皇は臣下の邸に、中宮は又中宮職の御曹司などに住ませらるゝ事多かりしなり、さてその破れて壁の落ちたる築土の骨組の板をとりて、笏にせるなるべし〇味氣なき事どもを「たは余情を含めたる、てにははにて」よ」と同じ意味〇細長、これに二種あり一つは細長の袍といふべきにて、童裝束なり、一つは女の服にて小袿の上に着るものにて、小袿の如くおほくびのなきものなり〇かさみ 後布、長さ故、尻長といへの意〇しりなが 尻長の指貫といふものを、童の着たる事、臺記に見ゆ〇大口 大口袴の略。東帯の時表袴の上に穿くものにて生絹、平絹などにてつくる。裾の口大きく開きあり〇はかま 穿装の袴か、もとは禪の用なりしを衣の上に穿くやうになり、さま／＼の制出で來れり〇指貫 衣冠、直衣、狩衣の時に用ゐ、裾を糸にて指し貫きて足に括りつく。

時、頭中將齊信さんが「月、秋と期して、身何處にか」といふ詩を吟じなされたのが、堪らなくよかつた。どうして、そんなうまい句を、お思ひ出しになつたのだらう。宮様の御坐に、人をかき分けて参らうとすると、お出ましになつて「宮、何といふよい句だらう。まるで今日の爲に言つてあるやうな」と被仰るから、清「それを申し上げたさに、物も見さして参りました。やつぱり、ほんとお思ひつきがお上手で御座います」と申上げると、「まして、余計に感心するだらうねえ」と被仰る。わざ／＼呼び出したり、でなくともひよいと出くはすと齊「なぜ、もつと、私と親密になさらない。さすがに、憎くも思つて居ないらしいのに、不思議

分け参る程に、立ち出させ給て、宮「愛たしな。甚う今日の料に、言たる事にこそあれ」と、宣はすれば、清「それを啓しにとて、物も見止て参り侍りつるなり。仍甚愛たくこそ思ひ侍れ」と聞きすれば、宮「況て、然覺らん」と仰らるゝ。特と呼も出で、自然逢ふ所にては、齊「何か臆を、正に近くは語ひ給ぬ。有繋に憎しなど思たる體にはあらずと知たるを、甚奇くなん。然ばかり年來になりぬる得意の、疎くて止は無し。殿上などに明暮無き折もあらば、何事をか思ひ出にせん」と宣へば、清「然なり。難かるべき事にあらぬを、然もあらん後には、得譽め奉ざらんが口惜きなり。帝の御前などにて、役と集りて褒め聞るに、如何でか。只思せかし。片腹痛く、心の鬼出で来て、言ひ難く侍なんものを」と言はば、笑て、齊「何ど、然る人しも、他目より外に、譽る類多り」と宣ふ。清「其が憎からずばこそあらめ。男も女も、氣近き人を、方引き思ふ人の、些「悪き事を言はば、腹立などするが、佗しう覺るな

り」と言はば、宮「頼しげな事や」と宣ふも可笑し。

十日 前關白道隆は、長徳元年四月（二月改元）三日關白をやめ六日出立、十日薨去なり、（四十三才）○御經佛供養 經を書寫して、その爲に供養し、又佛像を彫刻圖畫して、その爲に供養するなり○なが月 長徳元年の九月なり、中週の忌日なれば、例月のよりは鄭重に擧げられたるべし○清はん 前に言へる説教上手の僧なり○月秋と期して 一條攝政伊尹が、父母を追善せる時の願文の句なり、「月與秋期 而身何去」○明暮なき折 今は齊信は藏人頭にて、常に宮中に在るなり。

だ。これ程永く懇意にしながら、他人のまゝで居るといふ事はない。朝暮殿上に出仕しなくなつたら、何を思出にするんだ」と被仰るから、清「いえ、夫婦關係を結ぶなんぞ、何でもありませんけれども、いつも宮様の御前などで、私は、それを仕事に、皆など、あなたの事をお譽め申て居るのに、さうなつたら、どうしてお譽め申せませう。まあたゞ思つてだけ居させて下さい。心の鬼に極りがわるくて、ほめ憎くなりますから」といふと、笑つて、齊「なに、さういふ仲になつてこそは、他人より譽めるものだ」と被仰る。清「いやな事ですね。男でも、女でも、懇意な人のひのみきをして、人が一寸でも悪口をいふと、腹を立てたりするのは、馬鹿らしくて」といつたら、齊「頼もしげのない事だ」と、被仰るのも可笑い。

頭辨(成)が、職にお出になつて、お咄などなさる中に、ひどく夜が更けた。行「明日は、御物忌に籠るのだから、丑刻になつては」と、禁中にお出でになつた。翌る朝、藏人所の紙屋紙を二

頭の辨の職に

頭辨(成)の、職に参り給て物語など、爲給に、夜甚更ぬ。頭辨「明日御物忌なるに籠りければ、丑に成なば悪かりなん」とて参り給ぬ。翌旦藏人所の紙屋紙引き重て、行「後朝は、残多る心なんする。夜を通して昔物語も聞え明さんとせしを、鶏の聲に催さ

枚重ねて、頭「後の朝は心残りがある。夜通し昔咄もしたかつたが、鶏の聲に促されて(歸りました)」と、大層きれいに、裏表に一杯お書きになつたのが、とても美事だ。御返事に、清「あんな夜半に啼いた鶏の聲は、孟嘗君の偽の鶏の聲かも知れませんか」と申上げたら、すぐに、頭「孟嘗君の鶏は、函谷關を開きて、三千の客僅に去れり」とあるが、私のは、あなたに逢つたといふ逢阪の關の事です」とあつたから、清「夜をこめて、とりのそら昔ははかるとも、世に逢阪の關はゆるさじ」(夜中に鶏のそら啼をさせた處で、函谷關とちがつて、よもや男女が相逢ふ、逢阪の關はあけますまい)。しつかりした關守が居りませうから(駄目で御

れて」と、最甚う美麗げに、表裏に事多く書き給る、甚愛たし。御返事に、清「甚夜深く侍ける鶏の聲は、孟嘗君のにや」と聞たれば、立ち歸り、行「孟嘗君の鶏は、『函谷關を開て、三千の客、僅に去り』とあれども、これは逢阪の關の事なり」とあれば、清「夜を籠て鶏の空音は計るとも、世に逢阪の關は許さじ。心賢き關守侍るめり」と聞ゆ。立ち返り、行「あふ阪は人越やすき關なれば、鶏も啼ねどあけて待つとか」とありし文どもを、初のは僧都の君(圓隆)の、額をさへ突て取り給てき。後々ののは、御前に。然て行「逢阪の歌は、詠み壓されて、返歌も爲す成にたる、甚悪し」と笑せ給ふ。行「然て其の文は、殿上人皆見てしは」と宣ば、清「實に、思しけりとは是にてこそ知ぬれ。愛たき事など、人の言ひ傳ぬは、効なき事ぞかし。又、見苦しければ、御文は甚く隠て、人に露見せ侍ぬ。志の程を比るに、等うこそは」と言ば、斯う物思ひ知て言こそ、仍人々には似す

座いませう」と申上げたらずぐに、

行「あふ阪は人こえやすき關なれば、

とりも啼かねどあけて待つとか。」

(逢阪といふ關は、誰でもやたらに通る關だから、鶏がなかないでも、夜中開けつ放したといふことだ)

とあつたお手紙などを、初めのは、僧都(圓隆)さんが、ぺこぺこおじぎをしてまで取つておしまひになつた。あとのお歌のは宮様(中)が、おとりになつた。

さて行「逢阪の歌は、詠みまかされて、返歌もしないでしまつた。どうもいけない」とお笑ひになつた。行「おまけにあの文は、殿上人が皆な見てしまつた」と被仰るから、清「ほんとうに思つて下さるといふ事は、今度で、よく分りました。折角うまくした事を、誰も

思ど、『思ひ限なく悪うしたり』など、例の女の如に言んとこそ思つるに」とて、甚う笑ひ給ふ。清「此は何ぞ。謝辭をこそ聞め」など言ふ。行「鷹が文を隠し給ける、又仍嬉き事なり。如何に心憂く辛からまし。今よりも仍頼み聞ん」など宣ひて後に、經房中將が、經「頭辨(成)は、甚う褒め給とは知たりや。一日の文の序に、有し事など語り給ふ。思ふ人を譽らるゝは、甚く嬉しく」など懇に宣ふも興し。清「嬉き事も二にてこそ。彼の譽め給なるに、又思ふ人の中に侍けるを」など言ば、經「其は珍う、今の事の如にも悦び給かな」と宣ふ。

丑 午前一時二時をいふ○藏人所 禁中校書殿、(文殿とも納殿ともいひて、累代の書籍、装身具、器物、錢貨等を納むる處)の附屬の建物中にある藏人の詰所 ○紙屋紙 大内に紙屋ありて漉かせらる、紙の名。官用の紙はすべて是を用ひ、宣旨、繪旨もこれなれば、宣旨紙、繪旨紙ともいふ○うらうへ 反對の意。情事にて逢ひしにもあらぬに、それらしく書きあるをいふ○夜ふかく侍りけるとりの聲 鶏のなく頃にもあらぬを、なきし故と申さる、は、その鳥は孟嘗君の時の鶏と同じく、そらなき(早く歸られし遁辭)なるべしとなり、史記に齊の孟嘗君、秦國に使して

しらないのはつまりません。私は又、見ともないお文が、世間に廣がつてはいけないと思つて、一生懸命隠して、誰にも見せませんでした。志の深さは、同じ程度ですわね」と言ふと行「さう頭のよい處が、どうでも普通の女とはちがふ。いやですね、そんなに人に見せて」などと、普通に言ふだらうと思つたのに」と大笑ひなさる。清「飛でもない。お禮をいふべきですわ」など、言つた。行「私の手紙を隠しなかつたのは又いよ／＼嬉しい。見せ歩かれたら、どんなに情なからう。今までより好きな人になつた」などと被仰つてから、その後、經房の中將が、經、頭辨(行)が恐ろしく、あなたを褒めなさるのを、御存じですか。此の間、文の序に、その時の様子を咄しなかつた。自分の思ふ人がほめられるのは、堪らなく嬉しい」など

囚はれんとせしを、わづかにのがれ、函谷關に到りし時、關門いまだ開かず、追手はあとより迫り進退窮したるに、從者の中に鷄の聲を、眞似るに巧みなる者ありてまれたれば、夜明けたりと思ひ關守、門を開きしによりて、のがれて齊に歸る事を得たる故事を、例の清少の言へるなり〇三千の客わづかに去れり 史記に「孟嘗君時相、齊、封、万户於薛、其食客三千人、邑人不足三以奉、客」とはあれども、函谷關に夜半に到りし時は、その人々を従へたりしにはあらず、行成のあやまり言へるか、清少の誤り書せるかなり、「三千の客」だけ書くべきなり〇あふ阪の關 鷄のなきしは、遠き支那の事にはあらず、逢阪の關の出來事なりとて、清少と情事にて逢ひしやうに、なほいふなり〇夜をこめての歌 「深夜にてまだ鳴く時でないのに鷄をだまして、時をつくらせ、關守を欺して函谷關を越した故事はあるけれども、男女相逢ふ關は滅多とは許しすまい」にて男女相逢ふ事を近江なる逢阪關にかけていへり〇思ひぐまなく「くまは「限」なり、すみ／＼まで考へてくれないで、俗に「察しがなく」。このあたり、清少が官位高き男子を自在に親弄するさま、まご／＼見ゆ、こゝはまだ行成と清少との情事の成立たぬ以前の事なり、長徳四年三月以降には事實となりたり、その間きはの事なるべし、行成この時廿七歳、清少三十三四歳なり(中宮廿三歳、僧都十九才)道隆薨去より四年めなり、この頃は道長の權勢に憚り、皇后の御方には召しありても來る人なきにより、御弟の隆圓僧都と御母方の御叔父、清昭阿闍梨の二人のみ、夜居の僧として侍ひたりしなり。

と、一生懸命に被仰るのも、可笑しい。清「二重の嬉しさですわ。あの方が褒めて下さる上に、あなたも、私を思ひ人の中に入れて下さるとは」など、いつたら。經、そんな事を、今更らしく喜んで下さるのか」と被仰る。

五月頃の、月もない眞暗な晩に、「女房がお出になるか」と、大勢でいふので、宮、出て御覽。いつになく仰山にいふのは、誰だか」と被仰るから、出て清「一たいどなたです。喧しく大聲で被仰るのは」といふと、物も言はずに、御簾を持ち上げて、がさつとさし入れたのは、吳竹の枝だつた。清「あら、此の君なの」と言つたら「さあ、これを殿上へ往つて咄さなければ」と中將(未)新中將(定)六位達など、ありつたけ往つてしまつた。頭辨(行)は居残つて、頭「何だつて往つてしまふのだらう。御前の竹を折つて、歌を詠まうとした

五月ばかりに

二九一

五月ばかりに、月も無く甚闇き夜、「女房や侍ひ給ふ」と聲々して言ば、宮、出て見よ。例ならず言は誰ぞ」と仰らるれば、出て清「此は誰ぞ、仰山しう高聲なるは」と言に、物も言で御簾を擽げて、徐と差し入るは、吳竹の枝なりけり。清「應、此の君にこそ」と言たるを聞いて、「率や、是れ殿上に往て語ん」とて、中將(未)新中將(定)六位們などありけるは、去ぬ。頭辨(行)は止り給て、行「奇く去る者們かな。御前の竹を折て歌詠ん」としつるを、職に參りて、同くは女房など呼び出てをと言て來つるを、吳竹の名を甚疾く言れて、去るこそ可笑けれ。誰が教を知て、人の凡て知べくもあらぬ事をば言ぞ」など、宣ば、清「竹の名とも知ぬものを、生憎しとや思しつらん」と言ば、行「實ぞ得知し」など宣ふ。實事など言ひ

が、いつそ、職に往つて、女房でも呼
び出してからと来たんだのに、吳竹
の名を、すばしこく言はれて、驚いて
往つて了つたのがおもしろい。誰に教
はつて、普通、人の知らない事まで
いふのか」など、被仰る。清竹の名
とも知らずに言つたのですが、小僧
らしいと思ひでせう」といふと、行
あなたの事だから、なるほど知つては
居まい」と被仰る。まじめなお咄など
して居る處へ、殿上人が「この君と稱
ず」といふ詩を誦して、又寄つて来た
ので、行殿上で相談した事をやめて、
なぜ歸つてしまつたのだ。怪しから
ん」と被仰ると、殿上人「あゝいふ名言
に、とても返事は出来ません。下手な
事をいふと、しくじるから。殿上でも

合て居給るに、殿上人「此の君と稱ず」といふ詩を誦して、又集り
来れば、行殿上にて言ひ期しつる本意もなくしては、何故歸り給ぬ
るぞ。甚奇くこそありつれ」と宣ば、殿上人「然る事には何の答を
か爲む。甚却々ならん。殿上にも言ひ騒りつれば、帝(條)も聞
し召て興せさせ給つる」と語る。辨(成)諸共に返々同事を誦し
て、甚興しがれば、人々出て見る。交互に物ども言ひ交して歸る
とて、仍同事を諸聲に誦じて、左衛門陣に入まで開ゆ。翌旦甚疾
く少納言命婦といふが、御文參せたるに、此の事を啓したれば、
下なるを召て、宮「然る事や有し」と問せ給ば、清知す。何とも思
で言ひ出で侍しを、行成朝臣の修正たるにや侍ん」と申ば、宮「修
正とても」と、打ち笑せ給り。誰が事をも、殿上人譽けりと聞せ
給をば、然言るゝ人を悦せ給も興し。

くれたけ 初め吳國より渡れりといふ。淡竹の類。葉細く黄にて艶なり、長さ數尺
に過ぎず、庭前に植う、杖とし格子など、す〇この君 晋の王子猷、竹を種ふ「何

皆なで大評判してさわいなので、上様
(帝)のお耳に入つてお興じになつた」
と咄す。辨(成)さんと一しよに、幾度
も幾度も同じ事を誦しておもしろがる
ので、皆な(女房)が出て見る。めいめ
い勝手な事をしやべつて、歸りしなに、
又同じ事を一しよに吟じながら、左衛
門の陣に入るまで聞えて居た。翌日朝

可「一日無此君耶」と愛玩せしより竹の異名となりたり「夏となるうき世いと
はぬ竹なれば、皆この君とあふぐなりけり」〇呼び出で、を「は余情を含めた
る助辭「よび出で、詠まむ」といふほどの意をこめたり〇まことぞ得しらじ わざ
と相手のいふまゝに答ふる事、今もあり、清少が、此君といふ事を知らずに言ひし
とは思はれども、かく答ふるなり〇此君と稱ず、これは本朝文粹十一、藤原篤茂の
修竹冬青といふ詩の序に「晋騎兵參軍王子猷、種而稱此君」とある句をいふ
〇いひ返しつる 返歌を案じ置くと約束したるなるべし〇誰が事をも「おつきの
女房のだれの事にも」なり、后妃多ければ、互ひに優勢を競ふは自然の數なるべ
し。

早く、少納言の命婦といふのが、上様(帝)の御文を、宮様(中)に持參して、その事を申上げたので、局に居たのを
召しになつて、宮「ほんとうか」とお尋ねになるから、清「存じませぬ。何の氣もなく一寸申ましたのを、行成の朝臣さん
が、つくろつて申たので御座いませう」と申すと、宮「つくろふと言つたつても(跡方のない事は)」と笑つて居らつしや
る。誰の事でも、殿上人が譽めたとさへお聞きになれば、お喜びになるのもおもしろい。

圓融院の御一週忌の時、皆なが喪服を
脱いだりして哀れなので、御所を初
め、院の人も「花の衣に」と詠んだ昔の
事など思ひ出して居ると、雨がひどく

圓融院の御一周忌の年、皆人御服脱などして哀なる事を、朝廷よ
り初て院の人も、花の衣になど言けん世の御事など思ひ出るに、
雨甚く降る日、藤三位局に、蓑虫の如なる童の、大なる木の白き

降る日、藤三位のへやに、糞虫のやうな童が、大きく削つた木に、豎文をつけて、童「これを差上げます」と言ふから、取次「何處から？、今日と明日は御物忌だから、御部もあけないのだ」と言つて、下の方は閉めたまゝの葎の上から、受け取つて、さう取り次いだけれど藤三位「物忌だから見られない」と、長押の上に、枝のまゝ突き挿して、置いたのを、翌る朝早く手を洗ひ清めて、藤三位「昨日の巻敷を」と取らせて、伏拜んであけて見ると、胡桃色といふ色紙の厚ぼつたいのを、變に思ひながら、讀んでひろげてゆくと、老法師の哀れな手蹟で、

「これをだにかたみと思ふに都には、葉がへやしつる椎柴の袖。」

に、豎文を付て、童「これ奉ん」と言ければ、取次「何處よりぞ。今日明日御物忌なれば、御部も開ぬぞ」とて、下は立たる葎の上より取り入て、然なんとは聞せ奉れど。藤三位「物忌なれば得見す」とて、上に突刺て置たるを、翌旦手洗て其の巻敷と乞て、伏し拜て披たれば、胡桃色といふ色紙の厚肥たるを、奇しと見て披もて往ば、老法師の甚げなるが手にて、

「是をだに形身と思に都には、葉代やしつる椎柴の袖」と書たり。驚嘆く憾かりける事かな。誰が爲たるにかあらん仁和寺僧正のにやと思と、豈夫斯の事宣じ。仍誰ならん、藤大納言ぞ、彼の院の別當に在せしかば、其の爲給る事なんめり。是を帝(一)の御前、宮(子)などに疾う聞し召せばやと思に、甚待遠けれど、仍恐う言たる物忌を爲果んと念じ暮して、又翌旦、藤大納言の御供に、此の御返事をして差し置せば、即ち又返事して置せ給りけり。其を二ながら取て、急ぎ参りて、斯る事なん侍しと、

(喪服だけでも、せめて御かたみと思つて、山里では、まだそのまゝの姿で居るのに、都ではもうぬぎかへたのか)と書いてある。いやだ事。誰がしたんだらう。仁和寺の僧正かしらんと思ふが、まさか。ほんとは誰だらう。藤大納言があつた院の別當で居らしたつたら、あの方の、しわざにちがひない。上様や宮様に、早く申上げたいと氣がせくけれども、重い慎みと言ひ渡された物忌をすませてからと、辛抱して、翌る朝早く藤大納言さんの處に、その御返辭をして持たせてやつたら、すぐ又お返事をおよこしになつた。それを二つ(最初の歌と次の返事)とも持つて、急いで上つて(藤三位が)「斯様な事が御座りました」と、上様もお揃ひ

帝も在す御前にて、語り申し給を、宮(子)は甚平靜御覽じて、宮藤大納言の手蹟の如にはあらで、法師にこそあんめれ」と宣すれば、藤三位「然は、此は、誰が所爲にか。好事しき上達部僧綱などは、誰かはある。其にや彼にや」など不審き床しがり給に、帝(一)帝「此の邊に見しにこそは、甚酷く似たんめれ」と打ち微笑せ給て、今一通御厨子の許なりけるを取り出させ給れば、藤三位「率噫心憂。是れ仰せられよ。噫頭痛や、如何で聞き侍ん」と只責に責め申て、恨み聞え給に、辛う仰られ出で、帝「御使に往たりける鬼童は、臺盤所の刀白といふ者の供なりけるを、小兵衛が語ひ出したるにやありけん」など仰らるれば、宮(子)も笑せ給を、引き動し奉りて、藤三位「何故斯く欺せ在す。仍疑もななく、手を打ち洗て、伏し拜み侍し事よ」と、笑ひ憾がり居給る體も、甚得意に愛嬌付て興し。然て殿上の臺盤所にも笑ひ騒りて、局に下て、此の童尋ね出で、文取り入し人に見すれば、「其にこそ侍る

の御前でお咄し申上げなされるのを、宮様は、何も御存じない體で「宮藤大納言の筆つきではない、きつと法師だらう」と被仰ると、藤三位では、一たい、誰の仕業で御座いませう。しやれた上達部、僧綱などゝすると、誰で御座りませう。あの人が、この人か」と知りたがつて不審なされると、上様は、帝「こゝらにあつた手蹟に、まことによく似て居るやうだ」と、にこにと遊ばして、もう一通、御厨子の處にあつたのを、お出しになつたら、藤三位「あゝもういやで御座います。どなただか、仰せ聞け下さいまし。頭が痛くなりました。早く承りたい」とわいわい言つて、笑ひながら恨みなされるので、やつと仰せられ出して、帝「御使に往

めれ」と言ふ。「誰が文を、誰が與せしぞ」と言ば、痴々と打ち笑て、兎も角も言で、走にけり。藤大納言後に聞て、笑ひ興じ給けり。

圓融院の御はての年 正暦二年二月十二日崩御なれば、一年間の御諒闇の終りは、翌三年二月に當る、主上御十三歳、定子中宮十七歳、清少は廿七八歳なるべし。御服 喪服なり、藤衣ともいふ、喪中は東帯衣冠とも、椽、青鈍等の色を用ゐ、その濃淡により、喪の輕重を表はす、近親もしくは情の深きをあらはすには濃く染むるなり、されども又限度を超えぬ事は「限りあれば薄墨衣淺けれど、涙ぞ袖を潤となしぬる」などあるに見えたり。○あはれなる事を 服忌明けて、色の衣に復する時、故院の御名殘なくなるを思ひて哀むなり。○はなの衣に 仁明天皇の諒闇の御はてに、人々御服ぬぎて、叙爵に喜ぶ人もあるを見て、僧正遍正（皆人は花の衣になりぬなり、昔の袂よ乾きだにせよ」とよめる事なり、古今集哀傷の部に入りあり。○藤三位 藤原師輔の女繁子、四の君といふ、一條天皇の御乳母なり、はじあ藤原道兼の室となり、女尊子を生みしが、道兼の薨後、平惟仲の妻となりし人、尊子はこの時七歳、長徳四年十五歳にて一條天皇の宮に入り、長保二年女御となる。○みのむしのやう 養を着たる姿をいふ（養虫は諸木の若葉漸く延びたる時、老葉の巻けるもの、中に棲み、枯葉を食ひ糸を吐きて巢を作る、長さ一寸ばかり、赤黒くして節あり時々首を出して、若葉を食ふさま養を着たる翁の如ければこの名ありといふ。○御物いみ 藤三位の召使なれば敬語にていへり。○くるみいろ 表は香色、裏は白。いみじげなるが手、老いて、たど／＼しき筆つき。○しひ柴

つた鬼童は、台盤所の刀自といふ者の供だつたのを、小兵衛が頼み込んで遣つたのかも知れない」など、被仰るので、宮様もお笑ひになるのを、引き動かして、藤三位「何だつてそんなに、おかつぎになりましたので御座います。間ちがひなく巻敷だと存じまして、手水をいたして拜みましたのに」と、笑ひながら口惜しがつて居なされる様子も、思ひ上つた風に、愛嬌もあつておもしろい。さて清涼殿の台盤所でも、きやつくと笑つて、局に下りて、その童を尋ね出して手紙を受とつた女房に見せると、女「その子で御座います」といふ。清「一たい、誰の手紙を、誰が頼んだのか」といふと、恍けた顔で笑つて、何も言はずに、駈け出して往つ

もと椎の木のみら立ちたる處をいふなれども、喪服を染むる木故、喪服の事をいへり。「同じ諒闇なれども、四方山の椎柴残らじと見ゆるも哀なり」などいへり、喪服の鈍色は、椽（榎栗）の殻を染料とするなれども、同じものなれば、椎の木の色なども用ゐたるか、葉代は葉の替る事なればこの御諒闇あけに當代の御乳母なる此の人は定めて四位より三位に上りしならんの意をこめたり、この年六月、三位となる。○ねたかりける 俗に「小憎らしい」○仁和寺のそう正 仁和寺は山城花園の眞言宗の本山なり、この時の住持は寛朝僧正とて式部卿敦實親王（醍醐帝の御弟）の第三子、宇多天皇の御孫。○藤大納言 公卿補任に、正暦三年二月藤氏にて大納言たりしは朝光、濟時の二人、權大納言は道長一人なり、但し濟時は中宮大夫兼務なれば、道長が朝光の事なるべし。○つれなく 平然としてなり、もとより帝をはじめ中宮その他にて、藤三位を俗に「かつぎ」となれば、よく知りて居らるゝを俗にとほけて云はるゝなり、御十三才の一條天皇の御歌と御手蹟なるなり、天皇もとより聰明にはおはしたれども、儒者高階成忠の女貴子（女なれども、まことしき文者）を母とせる中宮は、この御歌にも御口添ありしなるべし。○そう綱 僧官の僧正、僧都、律師等の總稱。○今一すぢ 御下書なるべし。○鬼わらは 養虫の顔は恐しげなる故にいふ。○刀自 御厨子所、臺盤所、内侍所等にありて雜役を勤むる者。○小兵衛 雪の山の條にも出でたる女房。○ひきゆるがしまつりて 中宮の御衣をつかみ、引き動かす、打とけたる無遠慮のさまなり、名家の娘にて、帝の御乳母なる上、ほこりに愛嬌ある性格なりしなるべし。○わらひのしりて この下に「ありし」の意を含め、又「さて藤三位は」の字を加へて見るべし。

つれづれなるもの つれづれ慰むるもの

てしまつた。藤大納言があとできて、面白がつて笑ひなまつた事。

退屈なもの(は)、

余所でする物忌。双六の駒の動かさないの。除目に役につかない人の家。雨がびしよ／＼降つたりすると余計退屈だ。

氣が晴れるもの(は)、

物語。碁。双六。三つ四つ位の子供が、面白く物をいふの。又、赤子が、ここに語りなどするの。菓物。おどけて口まめにしやべる男は、物忌の時でも、室に通してしまふ。

徒然なるもの、

所避たる物忌。馬下ぬ双六。除目に官得ぬ人の家、雨打ち降たるは、況て徒然なり。

所ざりたる 山寺などにゆくなり〇め 馬にて駒のこと、賽の目出ですして駒を進ます事あたはぬなり。

徒然慰るもの、

物語。碁。双六。三四歳ばかりなる兒の、物興しう言ふ。又甚小き兒の物語したるが、笑などしたる。菓子。男の打ち猿樂ひ、物巧く言が來たるは、物忌なれど入つかし。

碁、双六 共に支那傳來の遊戯なり、村上天皇の天曆頃には寛運法師は碁聖と稱せられ、双六は又賭物をなす故、熱中せしさま諸書に見えたり、道長と伊周とにて、双六をなせし時のさま、大かゞみに「この御博奕は打ち立たせ給ひぬれば二所ながら、裸に腰からませ給ひて夜中曉まで遊ばす、いみじき御かけ物どもこそ侍りけ

れ、帥殿はふるき物どもの得も言はぬ、入道殿は新しきが興ある、をかしきさまにしなして、互みにとり交させ給ひけれど」云々と見えたり、婦人にても弄びしさまは、源氏物語の空蟬と軒端菰の碁、又同書に近江の君が双六の賽を乞ふに「明石の尼君」といへるなど多く見えたり〇くだもの 栗子、桃子、橘子、覆盆子、楊梅子、樺子、柑子、菓子、瓜など諸國よりも調進し、盛んに賞用せられ、酒の肴にも御くだもの、詞、諸處に見ゆ、されども恐らくは現代のものとは比較にならざる不味のものなるべし〇さるがひ 散樂を動詞にして、さるがはん、さるがひ、さるがふ、さるがへといふやうに四段に働かせし詞なり、戲言をいふ事。

取得のないもの(は)、

きりやうが悪くて、氣立もよくない人。御衣ひめの濡れたの。(取り得のないものなんて) 飛んでもない事を言つた、人が厭がるだらう。けれども言ひかけた事を止めもならない。又、後火の火箸といふもの。(不吉だから、書くまいと思つたけれども)、誰でも知つて居る事だから。ほんに、こんな事を書き出して、人が見る事ではないし、此の草紙を人が見るものと思はなかつたから、變な事でも、厭な事でも、思ふ

とり處なきもの

取處なきもの、

容貌醜氣に性悪き人。御衣編様の濡れたる。是れ甚う悪き事言たる、萬の人憎むなる事として、今止べきにもあらず。又送火の火箸といふ事、何てか世に無き事ならねば、皆人知たらん。實に書き出で、人の見べき事にはあらねど、此の草紙を見べきものと思さざりしかば、奇き事をも憎き事をも、只思ん事の限を書んとて、ありしなり。

みそひめのぬれたる 衣につくる、ひめのりの濡れたるは、布地を堅くする効なればなり〇これいみじう云々「取り處なきもの」など、わる口を云ひ出したる事なり〇あとびの火ばし この頃の談にて縁起のわるき事なるべし、あとびは魂祭の送り火、(迎へ火を前火といふ)それをばさむ火箸なれば、後には役立たぬなるべし。

事をすつかり書いてしまつた。

やつぱり勝れて結構なもの(は)、臨時の祭の、御前の儀式のいろ／＼だ。試樂も誠におもしろい。春は空の様子かのどかで、うら／＼かなのに、清涼殿の御前の座に掃除司が疊などを敷いて、使は北向に、舞人は御前の方に著座した。が、こんな事は思ひちがへかも知れない。所の衆たちが、衝重などを取つて、皆さん(公卿)の前にすうと据ゑ、陪従も、その日は、御前に入入りする。公卿や殿上人は、代る／＼盃をとつて、終ひには屋久貝といふもので飲んで、座をたつ。その時の取食といふものを、男などがしても、見ともないのを、御前に女が出て取るんだもの。人が居さうにもない火焼屋から飛び出して、

仍世に愛たきもの

臨時祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん。試樂も其興し。春は、空の氣色長閑にて、遅々とあるに、清涼殿の御前の庭に、掃除司の疊どもを敷て、使は、北面に、舞人は御前の方に、是等は僻事にもあらん。

所の衆ども、衝重ども取て、前毎に据ゑ渡し、陪従も、其の日は御前に入で入ぞかし。公卿、殿上人は、交互盃取て、終には屋久貝といふものして飲て立つ。即ち取食といふもの、男などの爲んだに憂てあるを、御前に女ぞ出て取る。思ひ懸す人や在んとも知ぬに、火焼屋より差し出で、多く取んと騒ぐ者は、却々打ち零して扱ふ程に、軽らかに偶と取りて、去ぬる者には遅れて、巧き納殿に、火焼屋をして取り入るこそ可笑けれ。掃除司の者們、疊取や遅きと、主殿司の官人們、手毎に箒取り、砂子均す。承香

澤山取らうと騒ぐ者は、却つて引くり返したりして、拾はうとする間に、手輕にひよいと取つて往つた者よりは、手間取れる。火焼屋を早速の納れ處にして、取り込むのが可笑い。掃除司の者たちが、疊を取るのを待ちかねて、主殿司の官人たちが、手ん手に箒を持つて、砂を平す。承香殿の前の處で、笛を吹き立て、拍子を打つて遊ぶのを、早く出て来ればよいと待つ處に、有度濱を唄つて、竹の籬の處に歩き出して、御琴を鳴した時など、とても堪らない。一の舞(の舞人)が、ひたと袖を合せて、二人走り出で、西に向いて立つた。順々出るのに、足踏を拍子に合せては、半臂の緒をなほし、冠や袍の領などなほして、あやもなきこ

殿の前の程に、笛を吹き立て、拍子拍て遊ぶを、疾く出で來なんと待に、有度濱歌で、竹の籬の許に歩み出で、御琴打たる程など、如何に爲んとぞ覺るや。一の舞の甚麗しく袖を合て、二人走り出で、西に向て立ぬ。次々出るに、足踏を拍子に合ては、半臂の緒繕ひ、冠、袍の領など修整で、「文も無き狛山」など歌で舞ひ立たるは、惣て甚く愛たし。大比禮など舞は、日一日見とも飽まじきを、果ぬるこそ甚く惜けれど、又有べしと思は頼しきに、御琴昇き返して、此の度は即て、竹の後より舞ひ出で、脱ぎ垂つる容どもの優雅さは、甚くこそあれ。操練の下襲など亂れ合て、此方彼方に渡りなどしたる、率、更に言は尋常なり。此の度は又もあるまじければにや、甚くこそ終なん事は口惜けれ。上達部なども、續て出で給ぬれば、甚く淋々しう口惜きに、賀茂の臨時祭は、還立の御神樂などにこそ、慰めらるれ。庭燎の烟の細う騰りたるに、神樂の笛の面白う戦き、細う吹き澄したるに、歌の聲も甚多

ま山」など、唄つて、舞ひ立つたのは、全く堪らなく結構だ。大比禮など舞ふのは、まる一日見ても飽きさうもないのに、終ひになるのが残念だけれども、又あとの舞があるからと思ふのは、頼もしい。その中に、御琴を昇き返して、今度はすぐに竹の後ろから舞ひ出して、脱ぎ垂れた様子などの優美さは、いひやうもない。搔練の下襲(裾)などが、もつれ合つて、あちこち入れ違ひ舞ふさまは、もう何とも、ほめやうがない。これが最後のせいか、おしまひになるのがひどく残り惜い。上達部なども、續いて退出なさるから、急に淋くなつて残り惜い。賀茂の臨時の祭の方は、還立の御神樂などで、慰められる。

感に、甚く興趣く、寒く冴え氷りて、打たる衣も甚冷う、扇持る手の冷るも覺す。才の男們召て飛び來るも、人長の快げさなどこそ甚じけれ。里なる時は、唯渡るを見るに飽ねば、御社まで往て見る折もあり。大なる木の下に車立たれば、松の烟揺曳て、火の影に半臂の緒、衣の光澤も、晝よりは此上なく勝りて見る。橋の板を踏み鳴しつゝ、聲合て舞ふ程も甚興しきに、水の流る音、笛の聲などの合たるは、實に神も嬉しと思し召らんかし。少將と言ける人の、年毎に舞人にて、愛たき者に思ひ染けるに、亡りて、上の御社の一の橋の許に在なるを聞ば、忌々しう、切に物思ひ入じと思ど、仍此の愛たき事をこそ、更に得思ひ捨まじけれ。女房「八幡の臨時祭の名残こそ、甚徒然なれ。何て還りて又舞ふ事を爲ざりけん。然ば興しからまし。祿を得て後方より罷出ること口惜けれ」など言を、帝(一)の御前に聞し召て、帝「明日還りたらん。召て舞せん」など仰らるゝ。女房實にや候ふらん。然ば如何

庭燎の煙が細く昇つて居るのに、神樂の笛が面白く振へて響き、細音に吹き澄して居るのに、歌の聲も誠に優雅で、たまらなく面白く、寒く冴え氷るので、打衣も、ひどく冷たく、扇を持つた手が冷えるなども一切夢中で、才の男などを呼ぶと、それが飛んで來るのも、人長の愉快さうなのも面白い。里に居る時は、たゞ通るだけを見たのでは飽き足りなくて、御社まで往つて見た事もある。大きな木の下に車を立て、置くと、松明の煙が棚引いて、火影に、半臂の緒や、衣の艶が、晝よりは引立つて見える。(社前の)橋の板を踏み鳴しながら、聲を合せて舞ふのも、たまらなく面白いのに水の流れる音、笛の聲などが合奏するのは、たしかに神様も

に愛たからん」など申す。嬉がりて、宮(定)の御前にも、女房仍其れ舞させ給へ」と集りて申し感しかば、其の度還て舞しかば、嬉かりしものかな。然しもやあらざらんと打ち油断つるに、舞人前に召を聞き付たる心地、物に當るばかり騒ぐも、甚物狂しく、下に在る人々惑ひ上る體こそ、人の從者、殿上人などの見るらんも知す。裳を頭に打ち被て上るを、笑も道理なり。

臨時祭 山城の賀茂の神は陰曆十一月下の酉の日、石清水の八幡宮は陰曆三月中の午の日〇御前ばかりの事 御前だけの意にて、御前の儀式をいふ、當日主上清涼殿に出御あり、まづ御饗あり、御贖物あり、御幣を拜せらる、庭座にて祭の敕使以下舞人陪從等に宴を賜ひ、舞御覽あり、畢りて使以下裝束を改め、列を正して社頭に参向するをいふ、敕使は近衛の中少將なり〇試樂 祭の一兩日前、社頭にてなす舞樂を御前にて試むるなり〇晝は 石清水の臨時祭をいふ〇掃部づかさ 薦、席、床、簀、簾、苫、ならびに鋪設、洒掃、等の事をすべて司る、宮内省の一察なり〇ひがおぼえ や、うる覺えなれば、ことわりたるなるべし、石清水の時は南面といへり〇所の衆 藏人所の人たちなり〇ついがさね 檜の白木にて作れる方形の折敷(盆)に臺を重ねたるもの、臺の傍に孔を穿つ、これをくりかたといふ、その三面に孔あるものを三方といひ四方にあるを四方といふ、盤上の四隅に飾あり〇階從 管絃の事に従ふ地下の樂人、この日は賜饗に預るなり〇やく貝 又夜光貝と

嬉しく御聞きにならうと思ふ。少將といつた人が、毎年舞人で、上手なのに感心して居たが、亡つて、上の御社の一の橋の處に、亡靈が今も出ると聞いたら、氣味が悪くて、余り物に執着はしましものと思ふけれども、この結構なお祭の歌や舞は、やつぱり忘れる事が出来ない。ある女房が「八幡の臨時の祭の終ひは、非常に物淋しい。なぜ還つて又舞ふ事をしないのだらう。さうしたらば、面白からうのに。祿を頂いて後の者から退るだけでは、つまらない」などいふのを、上様がお聞きになつて、帝「明日は、還る時に呼び返して、舞はせやう」などと、被仰る。女房、ほんとうで御座いますか。まあそれなら、どんなにかおよろしう御座いませ

もいふ、大隅屋久嶋の産にして、蝶の類なり、殻厚く外青し、磨きて蓋その他器とす〇とりばみ 雲霞の余りを庭に投げて下衆どもを怡ばしむるをいふ〇火たきや 内裏、東宮、后宮、齋院等であり、御庭の明りの爲に衛士の火を焚く小き小屋なり、床なくして地にて焚く〇たゞみとる 庭上に敷きたる疊を取り除く事なり〇承香殿の前 仁壽殿の北にて露臺、渡殿あり、この渡殿を舞人の座とするなり〇うど濱 東遊駿河舞の一節なる有渡濱の曲なり「有渡濱に駿河なる有渡濱に、打ちよする波は七くさの妹、ことこそよし」七くさの妹は、ことこそよし、逢へる時いさゝは寝なんや、七くさの妹ことこそよし」駿河の有渡濱に神女天下りて舞ひ遊びしに起原す〇竹のませ 清涼殿の庭上の東北、承香殿に寄りたる處にあり、江次第に「藏人所、雑色二人昇御琴、漸進出到、奥竹臺下」〇御琴うちたる和琴を彈するをいふ〇一の舞 江次第に「藏人頭承仰、奥竹台下定仰一舞、舞人進、舞、駿河舞」〇つきく 二の舞の次ぎて出づること〇あやもなきこま山「こま山」は他本「こまつ」又一本「こるも」駿河舞の「千鳥ゆゑに濱に出で遊ぶ、千鳥ゆゑに、あやもなき小松がうれ(上)に網な張りそ」とあるをいろく誤寫せるか、「あやもなき衣」といふ歌詞もありげにもあり〇大ひれ 駿河舞の時、舞人歌人ともに第二位の所に進み次に求子の歌初まれば、舞人は第三位に進み舞ひ終りて、又第二位の所に退き正面に向ひ立ち、次に大比禮を歌ひながら舞人歌方各第一位の所に退き終るをいふ〇ぬぎ盡れ 袍の袖を右だけ脱ぎて垂る、なり〇かもの臨時の祭 十一月下の西の日に行ふ、次第は石清水のと同じ、たゞ夜に入りて使等歸參の時、天皇清涼殿に又出御ありて酒饌を賜ひ、歌舞を御覽するを還立の御神樂といふ、石清水の方にも勅盃と祿を賜ふ事あり、路遠ければ還立は省かれたるなるべし〇打たる衣 打ちて疊を出したる衣。庭火に映りて冷たげに見ゆるなり〇には

う」と、皆なして大きわざをしたので、その時は、還つて舞ふ事になつたのは、ほんとうに嬉しかった。あゝは被仰つても、どうかと油断をして居たら、ほんとうに舞人を御前にお召しになるのを聞いた時のうれしさ。物に打つかつて馳け出し騒ぐのも、氣狂ひ染みるほどで、局に居た人たちのあわてゝ上る様子といつたら、人の従者や、殿上人が、見て居るのも知らずに、裳を頭に冠つて、あわてゝ来るのを、(その人たちが)笑ふのも無理はない。

び 神樂の時、禁中の庭上に金輪の中に薪を入れて焚く〇才の男 神樂の歌人の中にて頼才あり、諸請を弄する者らし、後世万歳につく才藏の起原なるべし〇人長 神樂の舞人の稱。巻纏、老繫、摺衣にて櫛をとる、六位の專官なれども當日は四位五位の舞人陪從等な心のまゝに指揮するなれば、誇らはしく心よげなるなり〇少將といひける人 故人となりし少將の某なり〇裳をかしらに 走り来るさま。摺りては疾く歩まれぬなり。

故殿(道)もお薨れになつて、世間に事が出来、物騒がしくなつて、宮様もお下りのまゝ參内もなされず、小二條といふ所に居らつしやるけれども、何だか不愉快で、暫らく里に居た。でもやつぱり御前わたりが氣になつて、じつともして居られない。そこへ左中將(名)さんが、お出でに成て、左、今、

故殿などおはしませ

故殿(道)などおはしませ、世間に事出で來、物騒くなりて、宮(中)又内裏にも入せ給す。小二條といふ所に在すに、何ともなく不快ありしかば、久う里に居たり。御前邊覺束なさにぞ、仍得斯てはあるまじかりける。左中將(不)在して物語し給ふ。「今日は宮(子)に參りたれば、甚く物こそ哀なりつれ。御簾の傍の明たるより見入つれば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、紫苑、萩など美しう居並たるかな。御前の草の甚高きを、左、何か是は茂

宮様へ上つたら、實にお氣の毒だつた。女房の装束や、裳や、唐衣などは、時節のものを、ちやんと感心に、着飾つては居て、御簾の傍のあいた所から覗いたら、黄朽葉の唐衣や、薄色(紫)の裳や、紫苑や萩などを着たのが、八九人ほど美しく並んで居た。庭の草がひどく延びて居たから、左「なぜこんなにしてお置きになる。刈らせませう」と申上げた。幸「露を置かせて御覽になるさうで、わざと」と、宰相さんの聲で返事をしたのが、風情があつた。女房「お里居は、ほんとにいやだ。かういふ所にお住居の時こそ、どんな障りがあつても、必ずついて来る人と思召した効もなく」など、多勢して言つて居た。私にお咄し申せのつもりでせ

て侍る。掃せてこそ」と言つれば、「露置せて御覽せんとて、殊更に」と、宰相君の聲にて答つるなり。興しくも覺つるかな。女房「御里居甚心憂し。斯る所に住居させ給ん程は、甚き事ありとも、必侍べき者に思し召れたる効も無く」など數多言つる。語り聞かせ奉れとなめりかし。参て見給へ、哀れ氣なる所の體かな。露臺の前に植られたりける牡丹の、唐向き美事」など宜ふ。清「否、人の憎しと思たりしかば、又憎く侍しかば」と答へ聞ゆ。左「寛裕にも」とて笑ひ給ふ。實に如何ならんと思ひ参する御氣色にはあらで、侍ふ人達の、左「大殿(道)の方の人、知る縁にであり」など、密語き、差し集て物など言に、下より参るを見ては言ひ止み、放ち立たる體に、見慣す憎ければ、参れなどある度の仰をも過して、實に久う成にける、宮の邊には、唯彼方々になして、虚言なども出で來べし。例ならず仰事などもなくて、日來になれば、心細くて打ち眺るに、長女文を持て來たり。長御前よ

う。上つて御覽なさい。風流な處です。露臺の前にお植ゑになつた牡丹が、唐めいて、よかつた事」など、被仰る。清「でも、人が私を憎むんですもの。私も憎らしくなつて、つい」とお返事したら、左「まあ、そんなに氣にしないで」とお笑ひになる。實際、宮様が、私に、御感情を害して居らつしやる御様子があるといふのではなく、お傍の人たちが、「左の大殿(道)の方の人と懇意だ」など、寄り合へば密語き、そこへ私が局からでも往くと、びたつと咄をやめてしまつたりして、除け者扱ひにするのが腹が立つので、「参れ」など、度々被仰つても聞き流して、全く久しく御無沙汰申上げたんで、おそばの人は、いよく私を、彼

り、左京の君して忍て賜せたりつる」と言て、此處にてさへ引き忍ぶも余なり、人傳の仰事にてあらぬなんめりと、胸潰れて披れば、紙には物を書せ給す、山吹の花瓣を、唯一片包せ給り。其に、宮言で思ぞ」と書せ給るを見るも、甚う、日頃の絶間思ひ歎れつる心も、愚て嬉きに、先づ知る體を、長女も打ち目成て、長御前には、如何に物の折毎に思し出で聞させ給なるものを」と言て、誰も「奇き御長居」とのみこそ侍めれ。何か参せ給ぬ」など言て、長「爰なる所にあからさまに罷て参ん」と言て去ぬる後に、御返事書て参せんとするに、此の歌の上句更に忘たり。清「甚奇し。同じ古歌と言ながら、知ぬ人やはある。爰許に覺ながら言ひ出られぬは、如何にぞや」など言を聞て、小き童の前に居たるが、童「下ゆく水のとこそ申せ」と言たる。何て斯く忘つるならん。是に教らるゝも可笑し。御返事参せて、少し程經て参りたり。如何と例よりは憚うて、御几帳に端隠れたるを、宮「彼は新参か」

方(道)方にしてしまつて、無實の罪でも被せたと見え、今までになく、お便りもなく、幾月かたつたんで、心細く屈托して居る處へ、長女が文を持参して、長御前から、左京さんの手で、こつそり、お渡しになりました」と、爰でまで内証らしくするのも、正直すぎる。御直筆だらうと、胸が、どきどきして披けたら、紙には何にもお書きになられずに、山吹の花びらを、たつた一つお包みになつてある。それに「宮言はで思ふぞ」と、お書きになつたのを見ると、もう堪らなくなつて、永い間、御沙汰のなかつた嘆かしさも、すつかり忘れて嬉しく、先立つ涙を長女は、ちつと見て、長宮様は、何につけても、どれほどか思ひ召し出されて

など笑せ給て。宮憎き歌なれど、彼の折は然も言つべかりけりとなん思を、見付では、暫時得こそ慰むまじけれ」など宣せて、異りたる御氣色も無し。童に教られし詞など啓すれば、甚く笑せ給て、宮然る事ぞ。餘り侮る古歌は、然も有ぬべし」など仰られて、序に、宮人の謎々合しける所に、頑固にはあらで、然様の事に薦々じかりけるが、巧者「左の一番は、己言ん。然思ひ給へ」など頼るに、然とも拙き事は言ひ出じと撰り定るに、「其の詞を聞ん。如何に」など問ふ。功者「唯、任せて在し給へ。然申て甚口惜うはあらじ」と言を、實にと推し量る。日甚近うなりぬれば、た「仍此の事宣へ。非常に興しき事もこそあれ」と言を、巧者「否知す。然ば勿頼れそ」など憤れば、覺束なしと思ながら、其の日に成て、皆方人の男女居分て、殿上人など貴き人々多く居並合するに、左の一番に、甚う用意して舉動したる體の、如何なる事をか言ひ出んと見たれば、彼方の人も、此方の人も、不安く

被居るのにと、皆さんが、あなたの御長逗留を、不思議がつて被居います。なぜお上りになりませぬか」など言つて、「一寸そこまで往つて参ります」と、出かけたあとで御返事を書かうとする處が、この(言はで思ふ)の歌の本を、すつかり忘れてしまつた。清何といふ事だらう。古い歌の中でも、こんな知れ切つたのを、胸忘れするとは」と言ふと、前に居た小さい童女が、「下ゆく水の」で御座いませう」と言つた。どうして思ひ出せなかつたのか、子供に教へられるのも可笑しい。御返事を差上げて、少し経つてから上つた。何だかいつもより氣が置けて、御几帳に半分隠れて居たら、宮様が「あれは新参か」など、お笑ひにな

故殿などおはしませ

打ち目成て、「謎々」と言ふ程甚待遠し。功者「天に張弓」と言ひ出たり。彼方の方(右)の人は、甚興ありと思たるに、此方の方(左)の人は、物も覺す憫しうなりて、甚憎く愛嬌なくて、彼方(右)に寄て、殊更に負させんと爲けるをなど、片時の程に思に、彼方(右)の人愚に思て、打ち笑て、右「や。更に知す」と口引き垂て、猿樂し掛るに、巧者「籌刺せ、籌刺せ」とて刺せつ。右「甚奇き事、是れ知ぬ者誰かあらん。更に籌刺すまじ」と論すれど、功者「知すと言ひ出んは、何てか負るにならざらん」とて、次々のも、此の人(者)に論じ勝せける。右「甚う人の知たる事なれど、覺ぬ事は然こそあれ。何しかは得知すと云し」と、後に恨られて、罪さりける」事を語り出させ給ば、御前なる限は、女房「然は思べし」。女房「口惜く思けん此方(右)の人の心地、」女房「打聞き初めたりけん、如何に憎かりけん」など笑ふ。是は忘たる事かは。皆人知たる事にや。

つて、宮「いやな歌だけれど、丁度あんな心持がしたので。居てくれないと、一寸の間でも気が鬱する」などと被仰つて、些とも變つた御様子がない。童に教へられた事など申上げると、大層お笑ひになつて、宮「そんなものだ。餘り知れすぎた故言は」などと被仰つて、ついでに宮「誰かど、なぞ／＼合せをした時に、さういふ事に功者なしやれ者が、功「左の一番は私がいふ。さうきめて置いて下さい」などと力むので、まさかに、つまらない事はいひ出すまいと、頼もしく嬉しがり、皆なして謎を作つて、いゝ悪いを選んで、きめてゆく時に、左の人が、左「何といふ歌か、ききたい」などと、きくと、功者が、「まあお任せなさい。決して下手な事はい

世の中に事出て來 道隆の病中、内大臣伊周に殿上及び百官執行の宣旨下りしかど、その薨後には道兼(兼家の三郎、道隆の弟)關白となり、(僅に七日にて薨去)次で道長(兼家の五男)關白となり、伊周は失意の人となりたり。折から、御心落居給はぬ花山院と隆家とのあらがひ事出て來て、隆家が花山院に向けたる矢の御衣の袖より通りたる罪科と、伊周が朝廷の外には爲すべからぬ太元法の呪咀をなし、道長を寵さるゝ女院詮子の御病癒あるなど、さまざまの事出て來て、伊周は播磨に、隆家は但馬に左遷となりし事なり、この頃中宮定子は入内後七年にして始めて妊娠あり、榮花物語にその頃の事を「宮(中宮)には盡きもせぬ事を思し歎くに、御腹も高くなりもていきて、唯あらぬ事のみ思し知らるゝにも悲しうなむ。播磨よりも但馬よりも打續き御使しきりて參る」又「この北方(道隆の妻貴子)は沈み入り給ひて、いと頼もしげなくなり増らせ給ふ」などあり、道隆道長はもとより不和なるに、かかる不祥の事出て來て、道隆の遺族が道長に壓倒されゆく中に、特にあはれなりしはこの中宮なり○小二條 正暦三年十一月に中宮の里第として落成し、同月移御せられし處にて、國史にはたゞ「二條第」とあり○青朽葉 表裏とも朽葉の黄の勝ちたる色○しをん 表蘇芳、裏前黄○萩 表蘇芳、裏青○あなた方 道長の一味の者と見なしてなり○山吹の花びらま 花の山桐色なればか、古今集「山吹の花いろ衣ぬしやたれ、問へど答へず口なしにして」などあり○言はて思ふぞ 六帖「心には下ゆく水のわき返り、言はて思ふぞ言ふにまされる」とある、四の句だけを書かれたるなり、母貴子、妹の三の御方など、かはり優婉に賢きさま何處にも見えたり○先づ知るさま 古今集「うれしきもうちらきも告げなくに、先づ知るものは涙なりけり」とあるなとりて、清少自身の涙ぐめるさまなり○お前にはいかで云々 中宮の御前なる女房たちの噂を長女の語るなり○あからさま 假初なり○かたくなに

はない」といふので、頼もしく思つて居る。段々日が近づくので、左の人が左「まあ、あなたの考へを言つて御覽なさい。非常に面白いのも、あるんですから」といふと功者「さあ、どうだか。そんなに、さしづするなら、もうお断りだ」などと怒るので、心配ながら待つて居ると、その日になり、兩方の男女の席を分けて、殿上人など、立派な人が澤山並んで、合はせた處が、左の一番が、恐ろしく、勿たいらしく力んで居るので、どんな事を言ひ出したらうと、兩組の人が片唾を飲んで見つめて、「謎々」と言ひ出すまでも待遠しい。その中に、巧者が「天にはり弓」といひ出した。右方の人はこんな、やさしい題と喜んで居るが、左方の人は、惘れて腹を立て、これは、彼方側になつて、わざと此方を負かす心算なのだ、一寸の間に邪推をして居ると、右方の人は馬鹿らしがつて笑つて、「そんな事知るもんか。いゝ」などと、べそ口をして戲かけると、(功者が)「籌させく」とさゝせる。右の人「あらいけない。餘り知れ切つた事だから返事をしなかつたのだ。かすはさゝない」とあらがつたけれども、(功者は)「知らないと言つたら最期、負けたのだから」と、耳にも入れずに、次々の謎も、この巧者に勝たれてしまつた。(右方の人が)「人の知り過ぎた事にしろ、全く知らない事なら據ど

はあらで 俗に「通り者で」なり○左の一番 右の方に向けて出す謎の題なり、何事も左が上位なるを、この人は自信ありて左の一番の座をとりたるなり○天に張ゆみ この頃は子の字を六つ書きたる題を出せば「れこの子小猫」と解く如き智巧を弄したるに、これは醍醐天皇が凡河内躬恒に「月を弓張といふは何の意ぞ、その由仕うまつれ」と仰せける時「照る月を弓張といふ事は、山邊をさしていればなりけり」と答へまつりし事にて、余りに誰も知りたる題を出せしなり○かなたによりて 余りに容易き題を出すは、敵方に味方して勝たせん心なるべしと、邪推せるなり○やゝ 呼びかけの詞なり、俗に「もしく」なり「もしく」そんな事は知りませんよ」の意○口ひき盡れ べそ口をして「いゝ」などいふ、相手を嘲弄するさまなり○かずさせ 勝ちたるしるしに數取のしるしものをその容器にさすなり○罪ざりける 功者が、あやまつた事なり「罪避る」にて、あやまりて罪を避くる事○事を此の「を」の字一つの爲に、「人の謎々合せしける處に」よりの御物語は地の文の如く見ゆれども解し易き爲に「」を「」をつけたり

ころないが、知つて居ながら、何故知らないと言つたと、あとで、味方に恨まれて謝まつた」とお咄しになつたら、御前に居た女房たちが、「さう思ふ筈で御座います」「残念で御座いますせう」「(でも)右方の人が、最初の謎をきいた時、(餘り馬鹿々々しくして)どんなに腹が立ちましてせう」など、笑つた。それは私のやうに、忘れて失敗つたのではなく、誰も知つて居る事に、返事が出来なかつたのだから、おもしろい。

正月十日、空が眞暗で、雲も厚いけれども、さすがに、太陽はあざやかに照つて居る時、下賤の家の後のあら土の、でくぼくの處に、若々しい桃の木が、下枝を一杯持つて居る。半分は青く半分は、濃い艶々しい蘇枋色をして居るのに、細そりした童が、狩衣を後方にまくり上げて、髪はふさ／＼ときれいなのが上つて居ると、もう一人紅梅の着物や白い狩衣などを、たくし上げて、半靴を穿いた男の子が、木の下に立つて、「好い枝を切つてよ」など、

正月十日、空甚闇う、雲も厚く見ながら、有繫に日は甚隙に照たるに、賤者の家の後、荒島などいふものゝ、土も完しう直からぬに、桃の木若立て、甚栝勝にさし出たる、片つ方は青く、今片つ方は濃く艶やかにて、蘇枋の如に見たるに、細やかなる童の、狩衣は掛け遣などして、髪は美しきが上りたれば、又紅梅の衣、白きなど、引きはこえたる男兒、半靴穿たる、木の許に立て、「我に良き木切て、率」など乞に、又髪美しげなる童の、袖ども綻び勝にて、袴は萎たれど色など佳きを打ち着たる三四人、「卵槌の木」の可らんを切て下せ。爰に召ぞ」などいひて下したれば、走り交ひ、取り分き、「我に多く」など言こそ興しけれ。黒き袴着たる

頼むと、又もう一人髪のをきれいな、袖などに澤山綻びをきらし、くしやく／＼になつては居るが色の美しい袴をはいた三四人の童女が、「卵槌の木によさ／＼うなのを切つてよ。御前(主)で召すから」など、いつて、上から切つて落すのを、馳け交ひ抱へ込んで、「私に澤山」など争ふのがおもしろい。黒い袴を穿いた男が、飛んで来て、「私にも」といふと、

男、走り来て乞に、「待て」など言ば、木の許に寄て、引き動すに、危がりて、猿の如に掻いて居るも可笑し。梅などの實たる折も、然様にぞあるかし。

かけやり 懸け破りにて物にひきかけ破り(かぎざき)たるやうにも見ゆれど、肩にかけ後方にやりたるなるべし○半靴 深靴の頭の短きもの○うづち 正月上の卯の日に兵衛所より奉る、五寸ばかりの木の枝に五色の糸を巻きて飾りたるものなり。源氏などにも手づくりするさま見えなれば、その料に木に上りて枝を折るなるべし。この處、繪のやうなり。

「お待ち」などと、直にも切つてよさないので、木の根元に寄つてゆすぶると、危ながつて、猿のやうに木に抱き着いて居るのも可笑い。梅などの實つた時も、さういふ事をする。

綺麗な男が、双六を一日中打つて、まだ飽きないと見えて、短い燈臺に火を明く燈し、相手の賽を呪ひ祈つて居て、

清げなる男の、雙六を日一日打て、仍飽ぬにや、短き燈臺に燈を明く搔上て、敵の賽を乞ひ促て、疾にも入ねば、筒を盤の上に立

すぐにも筒に入れないから、相手の人は自分の筒を盤の上に立て、待つて居る。狩衣の領が顔にかゝるのを、片手で押込んで、餘り硬くない切地の烏帽子を振りあふのいて、どんなに呪つたつて打ち外すもんかと、待遠しさうに、相手の手を見つめて居るのが、得意さうだ。

身分の尊い人が、碁を打つのに、直衣の紐をほどき、しどけない體で、石を掴んでは盤に置くと、身分の低いお相手が、行儀よく堅く坐つて、碁盤よりは少し離れて、及び腰に、邪魔になる袖の下を、片手(左)で退けくしながら、打つて居るのが、おもしろい。

て待つ。狩衣の領の顔に被れば、片手して押し入て、甚強からぬ烏帽子を振り遣て、然は甚う呪とも打ち外してんやと、待遠げに打ち目成たるこそ、傲然に見れ。

碁を貴き人の打とて、紐打ち解き、蔑なる氣色に拾ひ置に、劣たる人の、坐容も畏りたる氣色に、碁盤よりは些遠くて、及つ、袖の下今片手にて引き遣つ、打たるも興し。

すこ六 盤に各十二の格あり、各馬十二並べ黑白にて分ち、二つの采を竹の筒に入れて代るくふり出し、出でたる數ほど格を數へて馬を送り、早く敵の格中に送り了りたる方を勝とするもの○短き燈臺 雙六盤を照すよかるべし○こひせめて「どうか相手に、よい賽の目の出ないやうに」と呪ひ祈るなり○かり衣のくびの云々盤を見るに、かどむ故、かり衣のえりの顔にかゝるなり、生地硬く新衣なるさま見ゆ○ふりやりて、下を向き居れば烏帽子も額に垂れかゝるを、顔をふりあふのきて上にやるは、しなやかなる烏帽子なるべし、いづれもあざやかに摸し出したり○碁 二人相對し碁盤の線の上に互に黑白の碁石を並べ相かみ相闘はせて勝負をなすもの○袖の下 他の碁石に袖のふれぬやう片手にて袖をひきのくるなり。

無氣味なもの(は)、

椽(ぐり)の殻。火事のあと。水路。菱。髪の毛の多い男が、頭を洗つて乾かして居る(の)。栗のいが。

清らかに見えるもの(は)、
土器。新しい金鏡。疊にする薦。水をいれ物に注ぐ時の、日に透く影。新しい細櫃。

恐きもの、

椽の殻。焼たる所。灰。菱。髪多る男の頭洗て干す間。栗の毬棠。

つるばみのかさ 染料となすため宮中の女房も見知るなるべし、無氣味といふほどのものにもあらず○みづぶき 水中にありて葉、露の如きもの。鬼蓮ともいふ○菱 葉の意にて刺の鋭きよりいへるかといふ、水草にて葉は厚く光り、莖は脹れて蛙の股の如し、實の形三角、堅き刺あり。

清しと見るもの、

土器。新しい鏡。疊に刺す薦。水を物に入る透影。新しい細櫃。
かはらけ 今のわり箸と同じく一度より使はぬものなれば清きなり○かなまり 長く使用に堪ふるものなれば、大方古き物なれども、造り立ては極めて清げなるべし、金屬にてつくりたる椀なり○すきかけ 水を器に入るゝ時、器に入るゝまでの間、物のうつりて美きないふ○細びつ これも長く用うる家具なれば、新きはことに眼に立ち、美しく見ゆるなり。

きたなげなるもの いやしげなるもの

汚らしいもの(は)、

鼠の巢。朝早く念入りに手を洗ふ男。白い痰。垂れた鼻をすよりながら歩く子。油の入れ物。雀の子。暑い時分に永らく浴しないの。着物のくたくけになつたのなど、どれもく汚らしい中に、練色の着物は格別汚い。

下品なもの(は)、

式部丞のさく。黒い毛髪の筋の太いの。布屏風の新しいの。古くて黒ずんだのは、もとくつまらない物だから却て氣にもならない。なまじ新しくしらへて、櫻の花をうんと書かせ、胡粉

汚げなるもの、

鼠の住處。早朝手徐く洗ふ人。白き痰。吸鼻汁し歩く兒。油入る器。雀の子。暑き程に久く浴みぬ。衣の萎たるは、靴も靴も汚げなる中に、練色の衣こそ汚げなれ。

すばなしありくちご 一本「鼻す、り上ぐるちご」○雀の子 また羽毛の生えそろはぬをいふなるべし○久しく浴みぬ 僧侶などは修行に身を淨むる爲、屢入浴したるらしけれども、平人は浴みする事まれなり、九條殿(師輔)遺誡に「擇日沐浴、五箇日一度」とあり、婦人など障る事あれば、十余日も浴みぬ事ありしなるべし○ねり色 ねりぬきは地色のまゝにて艶あれば、汚れ目立ちて汚きなり。

卑賤氣なるもの、

式部丞のさく。黒き髪の筋太き。布屏風の新き。舊り黒みたるは、然る言ふ効なき物にて、却々何とも見えず。新しく仕立て、櫻の花多く咲せて、胡粉、朱砂など彩りたる繪書たる。遣戸、厨子、何も田舎具は卑きなり。菴張の車。檢非違使の袴。伊豫藤の

筋太き。醜き法師の肥満たる。眞の出雲菴の疊。

や朱砂で彩色をしたの。遣戸でも、厨子でも、すべて田舎のは下品だ。菴張の車。檢非違使の袴。伊豫藤の筋の太いの。不容貌の法師の、肥つたの。ほんとうの出雲菴の疊。

な 一本「梅の花」とあり○胡粉 介類を焼きて製したる粉。白く塗るに用う○すざ 丹砂のこと、あかくぬる繪の具○やりど 引戸に同じ、敷居、鴨柄の溝にはめて左右へ引き交へて開閉すべく作れる戸○厨子 もと厨にて食物を載する物なりしが、箱の如くなりたるに棚あり舞戸などありて調度書畫などをす○むしろばりのくるまのおそひ まはりな筵にて張りたる、綱代よりは一段卑き車に打かくる上おほひは一段と卑しきなるべし、一本「のおそひ」の四字なし○袴 檢非違使は今の警視總監なれば副職の爲、袴の汚れ損ざるなるべし、白き布袴なれば垢も眼立つべし、一本には「袴の裾」とあり、その方もつとも聞ゆれども、さまでなくともと流布本のまゝにす○伊豫藤の筋太き 藤は篠の太きは賤しく見ゆるなり○にくき法しの 流布本には「人の子に法師子のふとりたる」とあり、一本の方をとる○まことのいづも筵 他國にて同じ名の筵を出し、その方品よくて、まことの出雲筵は賤しげなりしなるべし。

胸がどきくするもの(は)、

競馬を見る時。元結をよる時。親などが氣分がわるくて、何だかいつもとちがふ様子(の時)。まして流行病など

胸つぶるもの

胸潰るもの、

競馬見る。元結繕る。親などの心地悪して、例ならぬ氣色なる。況て世間など騒しき頃は、万、覺えず。又、物言ぬ兒の、泣き入

のある時は、気が氣でない。又まだ物の言へない子供が、啼き入つて乳も飲まず、乳母が抱いても止まずに、いつまでも啼いて居るの。往きつけない處で、よくは分らないが、それらしい聲を聞いた時は、勿論(びつくりする)。そばの者が誰さんの聲だなど、言つたりすると、胸がどきつとする。ひどく嫌ひな人が来たのも、同じ心持がするものだ。昨夜来た人の後朝の文が中々来ないの。傍(そば)で書いても、胸がどきどきする。戀しく思ふ人の手紙を差し出されたのも、やつぱり、どきつとする。

可愛らしいもの(は)、

瓜に書いた兒の顔。雀の子が、人が鼠啼して呼ぶと、躍つて寄つて来るの。又糸でつないで置くと、親雀が、虫な

て乳も飲ず、甚く乳母の抱くにも止で、久う啼たる。例ならぬ所にて、殊に著からぬ人の聲聞き付たるは道理、人などの其の聲など言に、先こそ潰るれ。甚く憎き人の來たるも、甚くこそあれ。昨夜來たる人の今朝の文遅き、聞く人さへ潰る。思ふ人の文取て差し出たるも、又潰る。

元結よる 細く長く紙にてよるなれば、切る、かと心配にて胸のどきくするなり 貴人の仕へ人縫り、さらぬは皆自身にて縫りしなり○世の中のさわがしき頃 疫病などのはやる頃なり○れいならぬ處 流布本「例の所ならぬ所にて、ことに又」とあり、一本の方をとる○今朝の文 後朝には必ず男の方より文をおこす風習にて、心に入らば文もおそく、或は無きなり。

愛きもの、

瓜に書たる乳兒の顔。雀の子の、鼠啼するに躍り来る。又緻に着て居たれば、親雀の虫など持て来て啼るも、甚可愛し。二歳ばかりなる兒の急で這ひ来る道に、甚小き塵などのありけるを、眼敏に見付て、甚可愛げなる小指に捉て、大人などに見せたる、甚愛し。尼に削たる兒の、眼に髪を被たるを、搔は遣で、打ち傾きて物など見る、甚愛し。襷掛に結たる腰の上の、白う可愛氣なるも、見るに愛し。大にはあらぬ殿上童の、装束き立られて歩くも、愛し。可愛氣なる兒の苟且に抱て愛む程に、搔い着て寝入たる、も可愛し。雛の調度、蓮の浮葉の甚小きを、池より取り上て見る。葵の小さも、甚愛し。何も何も小き物は、甚愛し。甚う肥たる兒の二歳ばかりなるが、白う愛しきが、二藍の羅など、衣長くて襷き上たるが、這ひ出で来るも、甚愛し。八、九、十歳ばかりなる男の、聲幼げにて書讀たる、甚愛し。鶏の雛の、足高に白う愛しげに、衣短なる體して、ひよくと喧しく啼て、人の後に立て歩くも、又親の許に連れ立ち歩く、見るも愛し。鳴の卵。舍利の壺。瞿麥の花。

ど持つて来て啼るのが、誠に可愛らしい。二歳ぐらゐの子が、急いで這つて来る道に、小々な塵などのあるのを、眼敏く見付けて、可愛らしげな指で、つまんで、大人などに見せたのは、誠に愛らしい。尼削にしてある子供が、眼に髪を被さるのを拂ひのけず、首を傾げて何かを見る様子が、可愛らしい。襷がけに結んだ腰の上の方が、白く雅致のあるのも、見た眼が美しい。大きくはない殿上童が、着飾らせられて歩くのも、愛らしい。可愛らしい幼児が、一寸抱いて可愛がつて居る中に、抱き着いて寝入つたのも、可愛らしい。雛の道具も。蓮の浮葉の極小さいのを、池から取り上げて見るのも。葵の小さいのも、誠に可愛らしい。何で

人ばえするもの

も小さい物は、誠に可愛らしい。非常に肥つた、二歳位の色白の可愛らしい兒が、二藍の羅など、引摺る着物を擽き上げてあるのが、這ひ出して來るのも誠に可愛い。八歳、九歳、十歳ばかりの男の子が、幼稚な聲で、書を讀んで居るのも、誠に可愛い。鶏の雛が、足長で、白く可愛らしく、着物の短いやうな格好をして、ひよくと喧しく啼て、人のあとからついて來るのも、又親のわきについて歩くのを見るのも、可愛い。鴨の子。舍利の壺。瞿麥の花(も)。

ふざけて見えるもの(は)、

格別よい所もない子供が、可愛がられ過ぎて居るの。咳、極りのわるい人に物を申上げやうとする時にも、先づ出

瓜 「猫のわたりの瓜作り」など歌にもある如く山城の猫は瓜の名所なり、この頃も盛んに嗜み食したるらし、それに子供の顔をかくなり〇ねずなき 犬猫など呼ぶ時に今もする、舌を上あごにつけて「つ」と呼ぶこと〇へ 鳥を結びつくる長緒をいふ「綜」たる緒なり、足踏〇ふたつ 流布本「三歳」とあり三歳にては這はず立ちて歩す、一本の方をとる〇見せたる 一本「見せて、あみたる」とあり、美きものをひろひたるなられば、あみでもあみたるべし、流布本のまゝとす〇尼にそぎ切髪の子の如く削ぎたるをいふ俗に「おかつげ」〇たすぎがけ この頃の貴人の風俗幼兒には、たすぎがけの袴にて袖をか、げたるなり、「白うは、たすぎにする腰ひもの白なるべし〇殿上童 播磨の子弟の元服以前に殿上に奉仕するをいふ〇衣短なるさま 形容おもしろし、今の洋服姿の子にも似たり〇さりのつぼ 舍利は佛骨をいひ、又、普通火葬の骨をいふ、それを入る、壺は、瑠璃、玉、玻璃などにて作る。

人ばえするもの、

殊なる事なき人の子の、可愛く爲慣されたる。咳、憚りき人に物言んとするにも、先づ先に立つ。彼方此方に住む人の子供の、

るのが變なものだ。彼方此方に通ふ男の、四五歳の子供が、(一方に來て)いたづらをして、何か引出して、こはしたりするのを、いつもは、いけないと取り上げられたりするのだけれども、母親が來たので、よい氣に成て、見たい物を「あれ見せてよ。母ちゃん」など母を引き動かすけれども、大人同志咄して居て耳に入れないと、自分で探し出して見るのが誠に憎らしい。それを「そんな事を」といふだけで、取り上げもしないで「およし、破すから」とだけ、笑ひながら言ふ母も憎い。叱りたいのをこらへて見て居るのも、氣が氣でない。

名(の)恐(し)もの(は)、

名恐(し)もの

名恐(し)もの、

四五歳なるが、生憎立て、物など取り散して損ふを、常は引き奪ひなど制せられて、心の随にも得あらぬが、母の來たるに所得て、欲見かりける物を、「彼れ見せよや、母」など引き動すに、大人など物言とて、偶とも聞き入ねば、手づから引き搜し出て見るこそ、甚憎けれ。其を「正な」とばかり打ち言て、取り隠で「然な爲そ。損ふな」とばかり、笑て言ふ親も憎し。我、得露骨くも言で見こそ、不安けれ。

人ばえ 他本にも斯くあれども 人そばえの「そ」の字落ちたるなるべし、さらば「戲え」にて「ふざけた」といふ意〇噫 これも無遠慮に見ゆるものなり〇かなたこなたに住む子供 彼方此方に通ふ男の子どもなり、住むは女の家に通ふ事〇あやにくだちて 俗に「いたづらをして」なり〇ひきうばひ 「それをいぢつてはいけないと引たくる」なり流布本「引はられなど」とあり、さらば手を引つ張り、とゞむること、なる、いづれにても意味は大差なけれど、奪ひの方おだやかなれば一本に従ふ。

青淵。谷の洞。鰭板。鐵。土塊。雷。は名ばかりでなく、ひどく恐い。暴風。不祥雲。彗星。狼。牛。海蟹。牢。牢の長。錨。それも名だけでなく、見る眼も恐しい。繩筵。強盜これも皆な恐しい。眩笠雨。蛇莓。生靈。鬼野老。鬼蕨。荆棘。枳殼。炒炭。牡丹。牛鬼。

唐きこと七八寸、左右に各一つの刺あり、色赤黒くして白き點あり肉の味美〇ろうのをさ一本「ろうそう大方うとまし」とありさば「緑移の名がうとまし」の意か。牢のなまならば「らう」の假字なり、(概して古書には假字のあやまり多く、一本(前田家本)なども假字には實に無關心なり)〇なはむしろ 繩をあみて蕭とせるもの。最下等なり、見る眼もよからぬ上、繩は罪人を縛るに用うれば聯想の恐しきなるべし、さて次に強盜を言へり〇ひぢかさ雨 俄雨をいふ、袖を被きて凌ぐなり、雨具の間にはあはぬさま〇くちなはいちご 蛇を朽繩といふ、形の似たればなるべし、さればこれは「へびいちご」なり〇鬼ところ 山野に多し、蔓、葉ともに「やまのいも」に似たれども、根苦くして食用とならず〇鬼わらび 深山の陰地に生ず、葉細長く鋸齒の状をなし、一莖に叢り生ず〇うばら「いばら」に同じ刺のある小木。山野にあるを「野ばら」といひ花小さく實は藥用となる、家に植うるは花を賞す〇からたち 唐橘の略。樹に刺多ければ生簾など、す、葉は秋に似て小さく厚く光る、春の末五瓣の小花を開く、大さすばかり、實は秋熟す、黄にして肌濃かなり〇いりずみ 炙りて濕氣を去り、火の移り易くなしある炭〇うし鬼 佛説の牛頭馬頭にて地獄に居る牛馬の頭したる獸卒なり。

青淵。谷の洞。鰭板。鐵。土塊。雷。は名のみならず、甚う怖し。暴風。不祥雲。彗星。牛。狼。かさめ。牢。ろうの長。錨。其も名のみならず、見るも恐しい。繩筵。強盜。又方に恐しい。眩笠雨。蛇莓。生靈。鬼野老。鬼蕨。荆棘。枳殼。炒炭。牡丹。牛鬼。

見た眼に格別な事もなくて、字に書くと仰山なもの(は)、
覆盆子。鴨跖草。芡。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。いたどりはまして、虎の杖と書てあるとか、杖がなくても、よさうな顔つきだのに。

見た眼に殊なる事なきもの、文字に書て夸大しきもの、
覆盆子。鴨跖草。芡。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。いたどりは況て、虎の杖と書たるとか、杖なくともありぬべき顔貌を。

字にて見ればことごとくしと、こゝにも侮り言へるなり〇權大夫 長官を大夫といひ、その次官なれども、字に書く時はこの方、ものものしきをいふなるべし〇やまも 暖國に自生するものにて高大となる。葉は細長く、あらし鋸齒あり、深緑にして冬凋ます、春、葉の間に黄白色の花をつく、長さ六七分、實は紫赤色にて味甘し、皮は藥用とし又染料とす〇いたどり 根を藥用とし「うちみ」などを醫すれば「疼取」の義にていへるか。莖の高き丈余、まはり二三寸、中空しくして節あり、竹の如くにして杖とすべし、葉の間に小花、穂をなして開き、實は三角にて薄き翅の如きものあり。

汚らしいもの(は)、

刺繡の裏。猫の耳の裡。鼠のまだ毛も生へないのを、巢の中から澤山轉がし

刺繡物の裏。猫の耳の中。鼠の未ば毛も生ぬを、巢の中より數多轉し出でたる。裏未だ付ぬ裏の縫目。殊に清げならぬ所の間

見るに殊なる事なきもの むづかしげなるもの

出したの。裏をまだつけない皮衣の縫目。格別汚い處の、暗いの。美くない女が、小さい子供など多勢持つて、世話をして居るの。餘り愛しても居ない女が、永煩ひで寝て居るのも、夫の心の中には、汚らしく思ふだらう。

詰らない者が、巾を利かせる場合(は)。

正年一日の大根。行幸の時の姫大夫。六月と十二月の晦の節折の藏人(女)。季の御讀經の威儀師。赤袈裟を着て、僧の名などを四角張つて讀み上げたのは、誠にえらさうだ。御讀經、御佛名などの御装束の所の衆。春日祭の舍人達。大饗の所の歩み。正月三ヶ日の薬子。卯杖の法師。五節の御髪上。節會

き。殊なる事なき人の、小き子供など數多持て扱ひたる。甚深しも志なき女の、心地悪うして久く惱たるも、男の心の中には穢しげなるべし。

賤物の所得る折、

正月一日の大根。行幸の折の姫大夫。六月十二月の晦日の節折の藏人。季御讀經の威儀師。赤袈裟を着て、僧の名どもことごとくしう讀み上たる、甚薦々じ。御讀經、佛名などの御装束の所の衆。春日祭の舍人們。大饗の所の歩み。元正の薬子。卯杖の法師。五節の御髪上。節會の御まかなひの采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡海する折の櫛取。

の御給仕をする采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降りの日の市女笠。渡航する時の櫛取。

ちきみ 轉じて「姫松」ともいひ又「東堅子」とも呼ぶ。内侍司の被官にて天皇行幸の時供奉する女官なり、必ず五位を賜ふ、昔より同じ名乗を相傳して「河内宿禰友成、もしくは紀朝臣季明」といふ〇よまりの藏人よなりは六月十二月の大根の夜、女藏人、竹をもちて主上の御身長などを、はかり奉り、其の長さに竹を折る。竹の節を折る義にて名付く。藏人は女藏人の略。命婦より下薦の女房にて内侍の職をなす、江家次第に「孫廂南西北方立御屏風、其北御屏風前鋪小蓮、爲節折藏人座」とあり〇季の御讀經 江家次第に「季、御讀經、春秋二季、請百僧於南殿讀、大般若經、其内定御前僧廿口於御殿讀、仁王經」〇威儀師 法會の時、衆僧の進退作法を整ふる指揮僧なり〇僧の名ども、これも流布本には「僧の文ども讀み上げた」とあり、「文」は役々の爵名を記したる文と見てもよけれど一本の解し易きに從ふ〇御さうぞくの所の衆 式場の飾りつけをする藏人所の衆なり〇とねり 春祭の奉幣使(近衛の中少將)に隨行する近衛舍人の所得顔なるなり〇大さやう 大臣に任せられし人、その翌年の春、親王、公卿を招宴するをいふ〇所のあゆみ 諸本にかくあれど意通せず、もしくは勸學院の學生參入する時の練(緩歩)をいふか。勸學院は藤氏の建てしものなれば、こゝは藤氏の大饗をいへるなるべし〇元正 流布本「正月」とあり三ヶ日ないふなれば一本の「元正」とあるに從ふ〇くすりこ これは一本「くすり」とのみあり、流布本に從ふ。薬子は少女の未だ嫁せざるを避みて、主上に奉る居蘇を先づ嘗めしめ童女の長き前途にあやからせて寶算を祝ふ意のよし、公事根源に見ゆ〇うづゑの法師 眞言天臺の験者より奉るなれば、その使の法師の所うるさまなるべし〇五節のみぐし上げ 流布本「五節の試みのみぐし上げ」とあり、試みは「帳臺の試み」なれども、その時のみならず、みぐし上げの所得るさまなるべし〇節會の御まかなひ 流布本「御陪膳」とあれども一本に從ふ、元日、白馬、踏歌等すべて節會の御膳は采女が御給仕を勤むるなり〇史生 「シャウ」とよむ、太政官の書記にて左右大少史のもとに左右各十人あり、大饗の時は杯を賜はり、祿を賜はる、一本には「大饗の日の史生」の七字なし〇ふ月のすまひ 七月諸國の相撲人を宮庭に召して、勝負を天覽あるなり〇雨ふる日の市女笠 一本「簑笠」とあり、市女笠は婦人の用うる中高の塗笠。もと市井の女子の用

えせもの、所得る折

あしものなれども、貴女も徒歩の時は被たり。簑笠ならば簑と笠なり。宮中に在る清少の所感なれば市女笠をいへるか○かんどり海を渡る折は、かちとりに増す權威はなかるべきなり。

苦しうなもの(は)、

夜泣する乳呑兒の乳母。愛人を二人持つて、彼方からも此方からも恨みこづかれる男。強情な怨靈の調伏を頼まれた驗者、早く驗さへあればよいのだけれども、さうも往かないのを、さすがに人に笑はれまいと、一生懸命で拜み抜くのは、誠に苦しうだ。やたらと邪推して嫉妬する男に、深く思はれる女。攝政關白などの上ない位で、時めく人も、榮ではあるまいけれども、それはよからう。氣短にいら〜する人。

苦し氣なるもの、

夜泣といふものする兒の乳母。思ふ人二人持て、此方彼方に恨み妬られたる男。強き靈氣預りたる驗者、験だに疾くば好るべきを、然もなきを、有繋に胡盧にあらじと念する、甚苦し氣なり。理なく嫉妬する男に、甚う思れたる女。一の要職に時めく人も、得易くはあらねど、其は可んめり。焦躁したる人。

念する 一心に佛を念するなり○いみじう思はれたる この下の「女」の字、なくとも解するに難かられど一本のある方としたり○一の所 攝政、關白などをいふ。職原抄に「執柄必聚ニ一座宣旨、故稱ニ一人」又云ニ一所ことあり ○時めく人 一の所となりて時めく人、即、攝政關白をいふ、その家の家司と解しある説はいかゞ○それはよかんなり 俗に「苦勞は多くとも權勢あり榮華をする故、これはまあよい」の意○心いられたるひと 氣短くいら立ち居る神經過敏の人は、見るめも苦しく、當人も苦しからんとなり。

美しいもの(は)、

經など習つて、ひどく未熟で、よく忘れて、幾度も同じ所を読むのに、法師は勿論、男も女も、くる〜と樂に読むのが、何時になつたら、あゝいふ風に讀めるのだらうと、思はれる。病氣で寝て居る時に、きやつ〜と笑つて咄したり、樂々と出歩く人が、堪らなく美しい。思ひ立つて稻荷へ參詣したら、中の御社の邊で、堪らなく苦しいのを、辛抱して上つて居ると、樂々と後から來たのが、さつさと追ひ越してお詣りをするのが、誠に美しい。二月の午の日の曉方、いそいで出たけれども、坂の半分位歩いたら、巳の時(午前)になつた。段々暑くはなる、非常に苦しんで、こんな思ひまでして、何しに來

美しいもの、

經など習つて、甚う迪々しく、忘れ勝にて、返々同所を讀むに、法師は勿論、男も女もくる〜と安易に讀たるこそ、彼が如何時の世にならんと覺れ。心地など煩て臥たるに、打ち笑ひ物言ひ、思ふ事なげにて歩み行く人こそ、甚く美しけれ。稻荷に思ひ起して參たるに、中の御社の程、理なく苦きを念じて上る程に、些苦し氣もなく後れて來と見つける者どもの、早く先き立て詣る、甚美し。二月午の日の曉に、急しかど、坂の半途ばかり歩しかば、巳の時ばかりに成にき。漸う暑くさへなりて、實に困難しう、斯らぬ人も世にあらんものを、何しに詣つらんとまで、涙も落るまで覺ゆれば休に、三十歳余ばかりなる女の、壺裝束などにはあらで、只引きはこへたるが、女、磨は七度詣し侍ぞ。三度は詣ぬ。四度は事にもあらず。未には下向しぬべし」と途に逢たる人に打ち言て下り往しこそ、只なる所にては眼も留るまじき

たのだらうと、涙が出て休んで居ると、三十越した位の女が、壺装束などの支度もしず、ちよいと裾をはしよつて居るのが、「私は、七度詣りをします。もう、三度お詣りしたから、あと四度は何でもない。未(午後二時)には、下向しますわ」と道で逢つた人に言つて、下りて往つたのは、普通の處ならば、眼もとまりさうもない事が、(その時ばかりは)あの女に一寸なりたいたいと思つた。男でも、女でも、法師でも、よい子を持つた人は、美しい。髪が長くて、垂れた端が美事な人も。貴い人が、多勢にかしづかれて居らつしやるのも、誠に美しい。字を上手に書き、歌を巧く詠で、何かの時には、一番がけに選み出される人(も)。高貴の方の御前で、女房が多勢

事の、彼が身に即時成ばやと覺しか。男も、女も、法師も、好き持たる人甚う美し。髪長く麗う、下端など愛たき人。貴き人の、衆に冊れ給も、甚美し。手巧う書き、歌巧う詠で、物の折にも先づ取り出らるる人。貴き人の御前に女房甚多侍ふをおきて、尊き方へ遣すべき仰書などを、誰も、鳥の跡などの如には何かはあらん。然ど局などに在を特と召て、御視下して書せ給ふ、美し。然様の事は、所の首などに成ぬれば、實に難波邊の遠からぬも、事に随て書を、是は然にはあらで、上達部の許、又始て參んなど申する人の女などには、格別に、封皮より始て粧せ給るを、集りて、戯に、憾がり言めり。琴笛習に、然こそは未熟き程は、彼が如に、疾と覺めれ。主上東宮の御乳母。上の女房の御方々許れたる。三昧堂建て、宵曉に祈れたる人。双六打に、敵手の骰子利たる。眞正に世を思ひ捨たる聖僧。

居るのに、御氣の置ける處へおやりになる仰書などを、誰だつて、鳥の足跡のやうな下手な字を書きはしないのに、局に、居たのを、わざと「お召しになり、御視を下して、お書かせになるのが、美しい。さういふ事は、そのの老女にでもなれば、余り上手ではなくても、その場合々々で書くけれども、これはそれとはちがつて、上達部の處とか、又初めて宮仕に上らうなど、

くるくと流布本「すら」と〇いなり山城藤の森にあり、拾遺集に「いなり山、社の數を人とはど、つれなき人をみつと答へん」とある如く昔は山上三つが業に上中下の三社あり、下社大宮女命、中社宇賀魂、命、上社猿田彦命を祭る。まことは宮城の地を献ぜし秦氏が食貨の靈を祀りしものといふ〇はやく流布本「ただゆきに先立ちて」とあり、さらば俗に「すた」と先へ行くなり、「一本はやく」とだけある方よければとる〇七度まうて一日に七日ぶり詣る、にて、七度上下するなり、宮女と異り平人の足の達者なるさまなり〇手ようかき流布本には「手ようかき、歌よくよみ」とあり、すべて一本の方、女らしくと、のひたる文章なり〇おろして「お貸し下げになつて」なり〇難波わたりの邊からぬ手習の初めに習ふ歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」後世の「いろは」といふに同じ、それに遠からぬなれば字の拙きないふなり〇いのられたる人滅罪生善を祈らせて居る人。

傳手を以て申上げたよその娘などに、格別、封じ紙まで御選みになつたお文なので、皆なが、ちよいと、美しがつてさわぐらしい。琴や笛を習ふのにも、下手な中は、いつ、あの人のやうになれるかと、焦れつたい。主上や、東宮の御乳母や、主上方の女房で、后方にお眼通りを許されたのも(美しい)。三昧堂を建て、宵にも曉にも(罪障消滅を)祈らせて居る人。双六を打つのに、敵手の賽の目が、此方の思ひ通りのが出たの。ほんとうに、浮世の絆を思ひ捨てた聖僧(も美し)。

疾く、見たり聞いたりしたいもの(は)。

巻染、叢濃、括り物などを染めたの。人が子を産んだのは、男か、女か、聞きたい。貴い人の勿論、さしてもない人のでも、下賤のでも。除目の翌早朝、知人が、きつと叙任されたらうと思ふ時も、聞きたい。思ふ人のよこした文(は早く見たい)。

待遠いものは、人の處に、急ぎの縫物を頼んで、待つ間。祭見に飛出して、もう来るか〜と出つ入りつして、向うを見つめて居る心持。懐妊した人が、月が満ちても、生みさうもないの。遠方から、思ふ人の手紙がついた時、固

く封じた續飯など、はなしてあける焦れつたさ。おぐれて見物に出かけた時、そろそろお歸りになると、警固の武士の白い杖などが見えて来るので、車が傍まで往く間も、もどかしくて、下りて馳け出したい氣がする。(自分の居る事を)知られたくない人が居るので、(自分の)前に居る人に教へて、挨拶させて居る心持。やつと儲けた兒の、五十日百日位になつたのは、成人の日が待遠しい。急ぎの物を縫ふのに、暗くなつてから、糸を針に通すの。けれども自分の通らないのは、まだよい、針のある處をおさへて居て、人に通せると、やつぱりあわてると見えて中々通らないから、「ま、もう宜しいわ」と言つても、さすがに、通らない事はない

疾くゆかしきもの、

巻染。村濃。括物など染たる。人の子産たる、男女疾く聞ま欲し。貴き人は勿論なり中間者、下種の際だに聞ま欲し。除目の未だ早旦、必ず知る人の叙べき折も聞ま欲し。思ふ人の越せたる文。

まき染、むら濃、くより物、いづれも絞り染にて、この頃も素人の好みで染めたるらし。絞りにてめたるを、干て後、くよりの糸をときて仕上を見るが樂みにて急がる、なり〇えせ者、あとに「げす」といふ詞あれば、「よい、かげんの身分のもの」位なるべし〇必ず知るひとの、知る人の必ず叙任さるべき時なり。必ず叙任につゞく意の詞。

待遠きもの、

人の許に、頼の物縫に遣て待つ程。物見に急ぎ出て、今や今やと苦う居入つ、彼方を目成たる心地。子産べき人の、程過るまで然る氣色の無き。遠き所より、思ふ人の文を得て、堅く封じたる續飯など放ち披るほど。物見に遅く出て、「事成にけり」とて、

白き筈など見付たるに、近く遣り寄る程、焦躁う、下ても往ぬべき心地こそすれ。知れじと思ふ人のあるに、前なる人に教て物言せたる。疾と待ち出たる兒の、五十日、百日などの程に成たる行末、甚待遠し。疾の物縫に、暗き折、針に糸付る。然ど、我は然るものにて、有ぬべき處を捉て、人にさするに、其も急ばにやあらん、頼にも得差し入ぬを、「率唯、な着そ」と言ど、有繫に何てかはと思ひ顔に、得去ぬは、憎さ、へ添ぬ。何事にもあれ、急て他へ往く折、先づ我が然べき所へ往とて、只今越せんとして去ぬる車、待つ程こそ、いと待遠けれ。大路往けるを、然なりと喜たれば、他方へ往たる、甚口惜し。況て物見に出んとてあるに、「事は成ぬらん」などいふを聞こそ侘しけれ。子産ける人の、後の産久き。物見にや、又御寺詣などに、諸共にあるべき人を乗に往たるを、車差し寄せ立るが、疾にも乗で待するも、甚待遠く、打ち捨て往ぬべき心地する。疾にて炒炭熾す、甚久し。人の

と思ふのか退かないのは、腹が立つて来る。何かの用で、急いで出かけやうとして居る時、「一寸、私が先へ、どこそこへ往つてから」として「今すぐ返してよこします」と、出て往た車を、待つ間が、待ち遠い。大路を通る車の音を、それだと喜んで待つと、外へ往つてしまつたのは、誠に残念だ。まして物見に出やうとして待つて居る時に、「もうすんでしまつたらしい」などいふのを聞くと、情なくなる。お産をした人の後産の手間どれるの。物見やお寺詣りなどに連れ立つ人を、迎へに往つて、車をさし寄せて立て、居るのに、容易に乗らないで待たせるのも、堪らなく焦れたく、すつぽかして往つてしまひたい。急な時に炒炭を熾すのも、ぢれ

歌の返歌、疾く爲べきを、得詠み得ぬ程、甚焦躁し。懸想人などのは、然しも急ぐまじけれど、自然又然べき折もあり。又況て、女も男も、空に言ひ交す程は、時のみこそはと思ふ程に、敢なく僻事も出で来るぞかし。又、心地悪う、物恐き程の夜の明る待こそ、甚う焦躁けれ。また、齒黒めの干る程も焦躁し。

そくひ 飯粒をれりて物をつくるに用う。○おそく出て、流布本「いそぎいで」とあり、それならば「あわて、出て」にて、それにも聞ゆれども、前にも「いそぎ出で、」ありて重複にもあれば一本の方をとる。○白きしもと 祭には檢非違使の官人、赤狩衣、白衣、布袴を着て白杖を持ち警固の爲、前驅をなす、「看督長」といふ。「しもと」は杖なり。○物言はせたる この下に、「早く、すませてくれよ」の意。こもりたり。○我はさるものにて「自分のするのは、それとしておいて」なり。○ありぬべき 一本「然るものにてあり、縫ふべき處」とあり「ありぬべき」が「あり、縫ふべき」となりたるらし、流布本のまゝにてよろしがるべし、「ありぬべき」は針の糸を通すべき「めど」を指していへるなり、後に「さし入れぬ」とあり。○なすげそ 「勿すげそ」にて、「すげないでくれ、もうよい」なり。○いきけるを 一本「往ける車」とあり、その意味なり。○あへなく 「つい」なり「おしきつて正しくは出來ず」なり。○齒黒め 鏡嚢をつくること。

つたい。人の歌の返しを疾くしやうと思ふのに、詠めないのが焦れつたい。懸想人などへのは、さう急がないでもよいけれども、でも、やつぱり、その機がある。又、まして、女でも男でも、たゞ歌のやりとり位の時は、疾くとばかり急ぐ爲に、失錯も出来るものだ。又気分がわるく、何となく氣味のわるい時に、夜明を待つのが、堪らなく待遠い。又齒黒めの干く間も、(待ち遠い。)

故殿(隆)の御一周忌時分、六月晦日の御穢といふ事に、お出かけになるのに、職の御曹司からでは、方角が悪いといふので、官の廳の朝所にお出でになつた。ひどく暑苦しい眞暗な晩で、何だか、めちやくちやに窮屈な思ひで明した。翌る朝早く見ると、家のつくりはごく低い平べつたい瓦葺で、唐風に、一寸かはつて居る。普通の家のやうに、格子などもなく、只ぐるりに御簾がかけてある。却て珍しくてしやれて居る。女房が、庭に下りたりして遊ぶ。裁込

故殿(隆)の御服の頃、六月三十日の御穢といふ事に出させ給べきを、職の御曹司は方悪とて、官の廳の朝所に渡せ給り。其の夜は然ばかり暑く、理なき闇にて、何とも覺ず、狭う覺束なくて明しつ。翌旦見れば、屋の體甚平に短く、瓦葺にて體殊なり。例の如に格子などもなく、唯遠て御簾ばかりをぞ掛たる、却々珍う興し。女房庭に下などして遊ぶ。前裁には萱草といふ草を、架垣結て、甚多く植たりける。花際やかに重りて咲たる、公儀しき所の前裁には好し。漏刻司などは、唯傍にて、鍾の音も例には似ず聞るを、可懐がりて若き人々二十余人ばかり、其方に往て走り寄り、高き屋に上りたるを、是より瞰れば、薄鈍の裳、唐衣、同